

茨城県教育財団文化財調査報告第25集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 9

仲根台 B 遺跡

町田 遺跡

昭和 59 年 3 月

住宅・都市整備公団 茨城開発局
財團法人 茨城県教育財団



茨城県教育財團文化財調査報告第25集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書9

なかねだい
仲根台 B 遺跡

まちだ い 遺 跡

昭和59年3月

住宅・都市整備公団 茨城開発局
財團法人 茨城県教育財團

序

住宅・都市整備公団により、龍ヶ崎北部台地上に竜ヶ崎ニュータウン建設が進められておりますが、その予定地内には数多くの文化遺産が存在しております。

財団法人茨城県教育財団は、住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び、昭和52年度以降埋蔵文化財発掘調査を実施し、調査の成果につきましては逐次報告書を刊行してまいりました。

文化財は、地域の歴史・文化等を正しく理解するために欠くことのできないものであり、且つ将来の文化の向上・発展の基礎となるものであります。

この度、昭和56・57年度に発掘調査を実施致しました仲根台B遺跡と町田遺跡の調査成果を収録した報告書を刊行するはこびとなりました。本書が学術的な資料としてはもとより、地域住民さらには県民の文化財保護思想の育成に広く活用されることを希望いたします。

なお、調査・整理を進めるにあたり、住宅・都市整備公団、茨城県教育委員会、龍ヶ崎市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から種々御指導・御協力をいただいたことに、衷心より謝意を表します。

昭和59年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 竹内藤男

例　　言

- 1 本書は、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財團が昭和56・57年度に発掘調査を実施した茨城県龍ヶ崎市に所在する仲根台B遺跡、町田遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 仲根台B遺跡、町田遺跡の調査・整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理　事　長	竹内　謙　男 大　金　新　一	～昭和56年11月、昭和58年12月～ 昭和56年12月～58年11月
副　理　事　長	古橋　靖　堵 川　又　友三郎	～昭和58年7月 昭和58年7月～
常　務　理　事	川野辺　四郎 綿　引　一　大	～昭和57年3月 昭和57年4月～
事　務　局　長	小林　義　久 小林　洋	～昭和58年3月 昭和58年4月～
調　査　集　長	寺　内　寛	
企　画　管　理　班	班　長　坪　秀　雄	～昭和57年5月
	今　村　信　夫	昭和57年6月～
	加　藤　雅　美	昭和57年4月～
	玲　木　三　郎	
	海　老　沢　一　夫	昭和57年4月～
	綿　引　良　人	～昭和58年3月
調　査　第　二　班	大曾根　徹	昭和58年4月～
	班　長　菅　野　莞　爾	昭和56年度
	主任調査員　石　井　毅	昭和56年度　仲根台B・町田遺跡調査　昭和57年度班長
	渡　辺　千　秋	昭和56年度　仲根台B・町田遺跡調査
	山　本　静　男	昭和57年度　町田遺跡調査
	瓦　吹　堅	昭和57年度　町田遺跡調査
整　理　班	青　木　義　夫	昭和58年度
	山　本　靜　男	昭和58年度　仲根台B・町田遺跡整理・執筆

- 3 本書は、発掘担当者の協力を得て、山本静男が執筆・編集を担当した。
- 4 本書の作成にあたり、埼玉大学教養部助教授生物学教室小池裕子氏に歯骨・魚骨の同定を依頼し、御指導を得た。また、石器の材質鑑定は、茨城県立教育研修センター・蜂須紀夫氏の御指導を得た。
- 5 本書に使用した記号等については、第3章第1節2の項を参照されたい。
- 6 発掘調査及び出土遺物の整理等に際し、御指導・御協力を賜った関係各機関及び各位に対し、感謝の意を表したい。

目 次

序	
例 言	
本文目次	
挿図目次	
写真図版目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法	2
1 地区設定	2
2 層序の検討	3
3 遺構確認	3
4 遺構調査	4
第3節 調査経過	4
第2章 位置と環境	10
第1節 地理的環境	10
第2節 歴史的環境	11
第3章 仲根台B遺跡	15
第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法	16
1 遺跡の概要	16
2 遺構・遺物の記載方法	16
第2節 坪穴住居跡	20
第3節 土壙	67
第4節 清	96
第5節 遺構出土の上器	102
第4章 町田遺跡	115
第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法	117
1 遺跡の概要	117
2 遺構・遺物の記載方法	117
第2節 坪穴住居跡及び坪穴遺構	117
第3節 土壙	133

第4節 溝	176
第5節 堀	186
第6節 遠縄外出土の土器	188
第5章 まとめ	195
第1節 仲根台B遺跡	195
1 遺構	195
(1) 竪穴住居跡について	195
(2) 上塙について	199
(3) 溝について	204
2 遺物	205
(1) 土器について	205
(2) 石器について	211
(3) 動物遺体について	224
(4) 土製品について	232
第2節 町田遺跡	242
1 遺構	242
(1) 竪穴住居跡及び竪穴遺構について	242
(2) 上塙について	243
(3) 溝について	248
(4) 堀について	248
2 遺物	248
(1) 土器について	248
(2) 石器について	249
(3) その他	253
終章 むすび	255

挿図目次

第1章 調査 経緯

- 第1図 調査区名稱図 2
第2図 町田遺跡の地層模式図 3

第2章 位置と環境

- 第3図 仲根台B遺跡地形図 8
第4図 町田遺跡地形図 9
第5図 仲根台B・町田遺跡周辺の地形
及び遺跡目 12

第3章 仲根台B遺跡

- 第6図 仲根台B遺跡遺構配置図 15
第7図 第1・2・4号住居跡関連図 20
第8図 第1号住居跡実測図 21
第9図 第1号住居跡出土土器拓影図 21
第10図 第2号住居跡実測図 22
第11図 第2号住居跡出土土器実測図 23
第12図 第3号住居跡実測図 24
第13図 第3号住居跡出土土器実測図 26
第14図 第3号住居跡出土土器拓影図(1) 27
第15図 第3号住居跡出土土器拓影図(2) 28
第16図 第4号住居跡実測図 29
第17図 第4号住居跡出土土器拓影図 29
第18図 第5号住居跡実測図 30
第19図 第5号住居跡出土土器実測図 32
第20図 第5号住居跡出土土器拓影図 33
第21図 第6号住居跡実測図 34
第22図 第6号住居跡出土土器拓影図 35
第23図 第7号住居跡実測図 36
第24図 第7号住居跡出土土器実測図 37
第25図 第7号住居跡出土土器拓影図(1) 39
第26図 第7号住居跡出土土器拓影図(2) 40
第27図 第8号住居跡実測図 41
第28図 第8号住居跡出土土器拓影図 42
第29図 第9号住居跡実測図 42

- 第30図 第9号住居跡出土土器実測図 43
第31図 第9号住居跡出土土器拓影図 43
第32図 第10号住居跡実測図 44
第33図 第10号住居跡出土土器実測図 44
第34図 第10号住居跡出土土器拓影図 45
第35図 第11号住居跡実測図 46
第36図 第11号住居跡出土土器実測図 47
第37図 第11号住居跡出土土器拓影図 47
第38図 第12号住居跡実測図 48
第39図 第12号住居跡出土土器実測図 49
第40図 第12号住居跡出土土器拓影図 50
第41図 第14号住居跡実測図 51
第42図 第14号住居跡出土土器拓影図 52
第43図 第15号住居跡実測図 53
第44図 第15号住居跡出土土器拓影図 54
第45図 第6・8~12・15号住居跡関連図 55
第46図 第16号住居跡実測図 56
第47図 第16号住居跡出土土器実測図(1) 59
第48図 第16号住居跡出土土器実測図(2) 60
第49図 第16号住居跡出土土器拓影図(1) 61
第50図 第16号住居跡出土土器拓影図(2) 62
第51図 第16号住居跡出土土器拓影図(3) 63
第52図 第17号住居跡実測図 64
第53図 第17号住居跡出土土器実測図 65
第54図 第17号住居跡出土土器拓影図 66
第55図 第18号住居跡実測図 67
第56図 第18号住居跡カマド実測図 67
第57図 土壙実測図(1) 72
第58図 土壙実測図(2) 73
第59図 土壙実測図(3) 74
第60図 土壙実測図(4) 75
第61図 土壙実測図(5) 76
第62図 土壙実測図(6) 77
第63図 土壙実測図(7) 78
第64図 土壙実測図(8) 79
第65図 土壙実測図(9) 80

第 66 図 土壌実測図⑧	81	第103図 第 6 号住居跡実測図	125
第 67 図 土壌実測図⑨	82	第104図 第 6 号住居跡出上土器拓影図	125
第 68 図 土壌出土土器実測図①	84	第105図 第 7 号住居跡実測図	126
第 69 図 土壌出土土器実測図②	85	第106図 第 7 号住居跡出土土器拓影図①	128
第 70 図 土壌出土土器拓影図①	86	第107図 第 7 号住居跡出上土器拓影図②	129
第 71 図 土壌出土土器拓影図②	87	第108図 第 8 号住居跡実測図	129
第 72 図 土壌出土土器拓影図③	88	第109図 第 9 号住居跡実測図	130
第 73 図 土壌出土土器拓影図④	89	第110図 第 9 号住居跡出土土器拓影図	130
第 74 図 土壌出土土器拓影図⑤	90	第111図 第 11 号住居跡実測図	131
第 75 図 土壌出土土器拓影図⑥	91	第112図 第 11 号住居跡出土土器拓影図	132
第 76 図 土壌出土土器拓影図⑦	92	第113図 第 12 号住居跡実測図	132
第 77 図 土壌出土土器拓影図⑧	93	第114図 第 12 号住居跡出上土器拓影図	133
第 78 図 土壌出上土器拓影図⑨	94	第115図 土壌実測図①	141
第 79 図 土壌出土土器拓影図⑩	95	第116図 土壌実測図②	142
第 80 図 第 1 号溝実測図	96	第117図 土壌実測図③	143
第 81 図 第 2 号溝実測図	98	第118図 土壌実測図④	144
第 82 図 第 3 号溝実測図	99	第119図 土壌実測図⑤	145
第 83 図 第 4 号溝実測図	101	第120図 土壌実測図⑥	146
第 84 図 造構外出上土器拓影図①	107	第121図 土壌実測図⑦	147
第 85 図 造構外出上土器拓影図②	108	第122図 土壌実測図⑧	148
第 86 図 造構外出土土器拓影図③	109	第123図 土壌実測図⑨	149
第 87 図 造構外出土土器拓影図④	110	第124図 土壌実測図⑩	150
第 88 図 造構外出土土器拓影図⑤	111	第125図 土壌実測図⑪	151
第 89 図 造構外出上土器拓影図⑥	112	第126図 土壌実測図⑫	152
第 90 図 造構外出土土器拓影図⑦	113	第127図 土壌実測図⑬	153
第 91 図 造構外出土土器拓影図⑧	114	第128図 土壌実測図⑭	154
第4章 町田遺跡		第129図 土壌実測図⑮	155
第 92 図 司出道路造構配置図	115	第130図 土壌実測図⑯	156
第 93 図 第 1 号住居跡実測図	118	第131図 土壌実測図⑰	157
第 94 図 第 1 号住居跡出土土器拓影図	118	第132図 土壌実測図⑱	158
第 95 図 第 2 号住居跡実測図	119	第133図 土壌実測図⑲	159
第 96 図 第 2 号住居跡出上十器拓影図	120	第134図 土壌実測図⑳	160
第 97 図 第 3 号住居跡実測図	121	第135図 土壌実測図㉑	161
第 98 国 第 3 号住居跡出土土器拓影図	122	第136図 土壌実測図㉒	162
第 99 国 第 4 号住居跡実測図	123	第137図 土壌実測図㉓	163
第100図 第 4 号住居跡出土土器拓影図	123	第138図 土壌実測図㉔	164
第101図 第 5 号住居跡実測図	124	第139図 土壌実測図㉕	165
第102図 第 5 号住居跡出土土器拓影図	124	第140図 土壌実測図㉖	166
		第141図 土壌出土土器拓影図㉗	167

第142図	土壤出土土器拓影図(2).....	168	第178図	石器実測図(6).....	218
第143図	土壤出土土器拓影図(3).....	169	第179図	石器実測図(7).....	219
第144図	土壤出土土器拓影図(4).....	170	第180図	石器実測図(8).....	220
第145図	土壤出土土器拓影図(5).....	171	第181図	石器実測図(9).....	221
第146図	土壤出土土器拓影図(6).....	172	第182図	石器実測図(10).....	222
第147図	土壤出土土器拓影図(7).....	173	第183図	石器の種類と出土点数.....	223
第148図	土壤出土土器拓影図(8).....	174	第184図	石器分布図.....	223
第149図	土壤出土土器拓影図(9).....	175	第185図	石材による分類.....	224
第150図	第1号溝実測図.....	177	第186図	貝層採取地点の平面分布図.....	225
第151図	第2号溝実測図.....	178	第187図	第3号住居跡出土ハマグリの 殻高分布図.....	227
第152図	第2号溝出土遺物実測図.....	179	第188図	第7号住居跡出土ハマグリの 殻高分布図.....	227
第153図	第3号溝実測図.....	180	第189図	第16号住居跡出土完存ハマグ リ・サルボウの殻高分布図.....	228
第154図	第4号溝実測図.....	181	第190図	土器片鍾実測図(1).....	234
第155図	第5号溝実測図.....	182	第191図	土器片鍾実測図(2).....	235
第156図	第5号溝出土遺物実測図.....	183	第192図	土器片鍾実測図(3).....	236
第157図	第6号溝実測図.....	184	第193図	土器片利用部位.....	236
第158図	第7号溝実測図.....	185	第194図	土器片鍾形状.....	236
第159図	第1号掘削実測図.....	187	第195図	土器片鍾重量.....	237
第160図	第1号出土土器実測図.....	188	第196図	土器片鍾完存品の挟り間の距離.....	237
第161図	遺構外出土土器拓影図(1).....	191	第197図	土器片鍾の重量と挟り間の距離.....	237
第162図	遺構外出土土器拓影図(2).....	192	第198図	上製円板・有孔円板実測図.....	239
第163図	遺構外出土土器拓影図(3).....	193	第199図	第3号住居跡出土土製品実測図.....	240
第164図	遺構外出土土器拓影図(4).....	194	第200図	土製品実測図.....	241

第5章 ま と め

第1節 伸根台B遺跡

第165図	土壤形態規模分類.....	201	第201図	土壤形態規模分類.....	245
第166図	土壤の長径と深さの関係.....	202	第202図	土壤の平面形からみた分類.....	246
第167図	土壤の平面形からみた分類.....	203	第203図	土壤の長径と深さの関係.....	247
第168図	柱口・把手実測図(1).....	207	第204図	把手実測図.....	249
第169図	把手実測図(2).....	208	第205図	石器実測図(1).....	250
第170図	把手実測図(3).....	209	第206図	石器実測図(2).....	251
第171図	把手実測図(4).....	210	第207図	石器実測図(3).....	252
第172図	把手実測図(5).....	211	第208図	石器の種類と出土点数.....	253
第173図	石器実測図(1).....	213	第209図	石材による分類.....	253
第174図	石器実測図(2).....	214	第210図	上製品実測図.....	254
第175図	石器実測図(3).....	215			
第176図	石器実測図(4).....	216			
第177図	石器実測図(5).....	217			

第2節 町田遺跡

写真図版目次

仲根台B遺跡

- P L 1 調査前全景・調査風景
P L 2 調査後全景・住居跡全景 (SI 1)
P L 3 住居跡全景・遺物出土状況 (SI 2·
3)
P L 4 住居跡全景・遺物出土状況 (SI 5)
P L 5 住居跡全景 (SI 6·7·8·9·10·
11·12·15)
P L 6 土壇全景 (SK 1·2·3·4·5·6·
7·9)
P L 7 土壇全景 (SK 10·15·16·20·23·
25·46·54)
P L 8 土壇全景 (SK 58·69·71·75·76·
77·91·92)
P L 9 上礎全景・溝全景 (SK 103·105·
108·109 SD 3)
P L 10 住居跡出土土器(1)
P L 11 住居跡出土土器(2)
P L 12 住居跡出土土器(3)
P L 13 土壇出土土器
P L 14 注口土器・把手部(1)
P L 15 把手部(2)
P L 16 石器(1)
P L 17 石器(2)
P L 18 石器(3)
P L 19 石器(4)
- P L 20 石器(5)
P L 21 上器片鍾(1)
P L 22 下器片鍾(2)
P L 23 上製円板・有孔円板
P L 24 上玉・手控上器
P L 25 魚類遺体
P L 26 鳥類・哺乳類遺体
- 町田遺跡
- P L 27 調査前全景・調査風景
P L 28 住居跡全景 (SI 1·7·8)
P L 29 住居跡全景 (SI 9·11·12)
P L 30 土壇全景 (SK 4·7·8·9·10·20·
21·22·28·43·46·47·50)
P L 31 土壇全景 (SK 52·64·68·72·75·
77·78·88)
P L 32 土壇全景 (SK 99·101·115·122·
124·125·127·129)
P L 33 土壇全景 (SK 130·132·133·140·
155·158·165·166)
P L 34 土壇全景 (SK 197·198·200·203·
206·217·220)
P L 35 上礎全景 (SK 222·229·236·238)·
堀全景・調査後全景
P L 36 溝・堀出土土器
P L 37 石器 (石鎌)
P L 38 石器・土製品・把手部

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

住宅・都市整備公団は、龍ヶ崎市街地の北部台地上に、既成の市街地や周辺地域と有機的に結合し、自然の保全に留意した潤いのある生活環境を創出する目的でニュータウン建設を進めている。この計画は、首都圏の住宅用地の供給と同時に、地域内に就業の場を設定して居住者の地元定着をも計画している。

昭和46年、当時の日本住宅公団は「龍ヶ崎牛久都市計画事業」として市街地開発事業に関するニュータウン建設都市計画を策定した。事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整備事業」と称した。昭和51年1月に宅地開発公団茨城開発局が設立され、日本住宅公団から引き継いで事業を実施することになった。なお、宅地開発公団は昭和56年10月1日付けをもって日本住宅公団と統合し、新たに「住宅・都市整備公団」として発足した。これに伴い、従来の契約によって生じた権利・義務はそのまま新公団に承継され、現在に至っている。

土地区画整備事業の施行地区は、北竜台では龍ヶ崎市小堀新田町、稲田町の全域と龍ヶ崎市若柴町、稲荷新田町、朝馬町、南中島町、別所町の各一部、龍ヶ岡では貞原塙町、羽原町、八代町、長峰町の各一部で、事業面積は671.5haに及んでいる。

北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整備事業地内の埋蔵文化財包蔵地の状況については、昭和45年に茨城県教育委員会と龍ヶ崎市教育委員会が分布調査を実施し、22遺跡について文化財保護の立場から必要な措置を講ずるための協議を重ねた、その後、茨城県教育委員会は昭和51年7月に再度分布調査を兼ねた確認調査を実施して新たに7遺跡、さらに昭和57年までに5遺跡を追加した。この分布調査の結果に基づき、茨城県教育委員会、龍ヶ崎市教育委員会及び宅地開発公団が北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整備事業地内の埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて再度協議を重ね、34遺跡（北竜台17遺跡、龍ヶ岡17遺跡）のうち31遺跡について現状保存が困難なため、記録保存の措置を講ずることになった。

昭和52年1月、茨城県教育財團は当時の宅地開発公団と、北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整備事業地区内に存在する埋蔵文化財包蔵地に係わる発掘調査業務についての委託契約を締結し、調査第二班を配備して北竜台の松葉遺跡、龍ヶ岡の外八代遺跡の発掘調査を実施した。

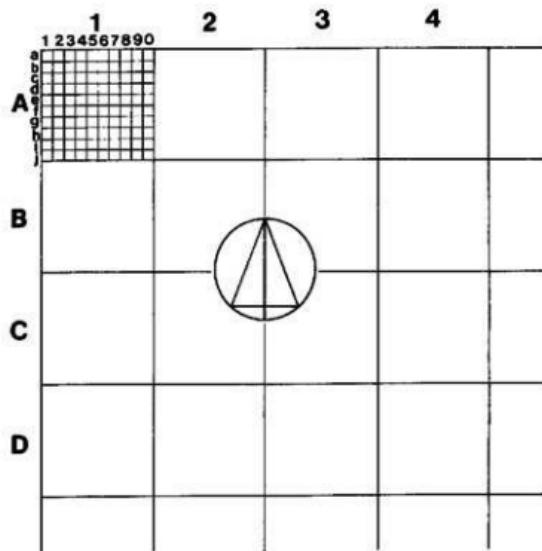
その後も各遺跡の発掘調査を継続して実施し、昭和56年度は、北竜台地区の仲根台B遺跡・仲根台冢群（3号塚・4号塚）・平台遺跡、龍ヶ岡地区で町田冢群（般若塚）・篠谷古墳・稲荷峰古墳・町田遺跡及び南三島遺跡（1区・2区）、昭和57年度は、前年度から継続して町田遺跡と南三島遺跡（2区・6区）の発掘調査を実施した。

第2節 調査方法

1 地区設定

当遺跡の地区設定は、昭和55年度に当教育財團が発掘調査を実施した廻り地A遺跡の基準杭を南へ280m、東へ480m平行移動した点を基準杭とした。つまり、平面直角座標系第Ⅱ座標X軸8,340m、Y軸3,118mの交点である。この交点を基準にして南北線上にX軸、東西線上にY軸をとり、40m四方の大調査区を設定した。その大調査区内を4m四方の小調査区（グリッドと呼称する）に分割した。すなわち、40m四方の1大調査区に100小調査区を設定したわけである。また、必要に応じて4m四方を1m四方に分割して16区画の小区画を設けた。

本調査ではグリッド方式を採用し、大調査区の名称は、北から南へ「A」・「B」・「C」……、西から東へ「1」・「2」・「3」……とし、A1区・B2区等のように表記した。小調査区は北から南へ小文字で「a」・「b」・「c」……、「i」・「j」、西から東へ「1」・「2」・「3」……、「9」・「0」とし、小調査区の名称は「A1a1」・「B2d7」・「C3h9」のように表記した。（第1図）



第1図 調査区名称図

2 層序の検討

仲根台B遺跡の基本的層序は、1層が暗褐色土（耕作上）で、25~35cmほどの厚さを有し、2層は褐色土層で、10cm前後の厚さを有しローム層への漸移層と考えられる。3層はローム層で、遺構はほとんどがローム層まで掘り込まれている。

町田遺跡の地層については、ロータリー式ボーリングの資料を得ることができたので、次に記載して、当遺跡の基本的層序にかえる。（第2図）

I (3cm)				
II (90cm)				
III (110cm)	I 表土	茶褐色	草根混入	含水少位
IV (90cm)	II ローム	茶灰色	腐植物混合	粘性有り 含水少位
V (210cm)	III 粘土	乳灰色	粘着力大きい	含水中位
	IV 砂混り粘土	乳灰色	粘着力大きい	含水中位
	V 粘土質砂	乳茶灰色	雲母片混入	
	VI 砂質粘土	黄灰色	砂多量に混入	
	VII 細砂	茶褐色	粒子一定せず 雲母片混入 調の変化有り	
VI (200cm)				
VII				

第2図 町田遺跡の地層模式図

3 遺構確認

仲根台B遺跡は調査対象区域8%の試掘の結果、遺構が濃密で遺物も多く、遺構確認面までが比較的浅いことが判明したので、手掘りによる全面の表土除去を実施した。表土除去後は、検出面を清掃し遺構の確認を行い、この時点で住居跡13軒、土壙110基、溝4条を確認し、その配置状況を記録して調査の進め方を検討した。また、表面採集や表土除去・遺構確認の際に出土した遺物は、各グリッドごとに出土位置や層位等を記録して取り上げた。

町田遺跡は調査対象区域の8%試掘の結果、約30cmの表土の下はソフトロームで、この面での遺構の確認が難しかったので、さらに約10cmほど掘り下げ遺構の確認を行い、土壙や溝等を検出

した。遺構があることを確認した後重機導入の方法を検討のうえ、重機を導入して表土除去を実施した。検出面を清掃して遺構の確認を行い、住居跡状遺構12軒、土塙230基、溝7条を検出し、その配置状況や新旧の状況等を検討し、遺構調査の計画をたてた。

4 遺構調査

遺構の掘り込みは、分層発掘で行った。堅穴住居跡については、上層観察用ベルトを十字に残した四分割法で調査を行い、重複している場合は切り合いか把握できるような位置を考慮してベルトを設置した。

上層については、長軸で二分する二分割法で実施したが、人形のものは堅穴住居跡の調査法に準じて実施した。小貝塚については土塙に準じて調査した。

溝や堀については、5m間隔に上層観察用ベルトを残して掘り込みを実施した。

土層観察は、色相、含有物、混入物の種類や量及び粘性、吸水性、締まり具合を観察し、分類の基準とした。色相の判定は「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社）を使用して行った。

遺構や遺物の平面実測は、水糸方眼地張り測量で行った。土層断面や遺構断面の実測は、遺跡内の水準点からレペルを用いて水糸を水平にセットし、水糸を基準線として行った。縮尺は $\frac{1}{100}$ を基本にして、部分的な微細部は $\frac{1}{50}$ の縮尺で作成した。

遺物出土状況の実測は、原位置を保って記録し、遺物出土状況計測表を利用して遺物を取り上げた。遺物の取り上げは、地点とレベルを記入した後、カードと遺物台帳に併記した。

記録の過程は、土層断面写真撮影→上層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成（計測表も使用）→平面写真撮影→断面図作成→平面図作成を基本とした。図面や写真等に記録できない事項に関しては、調査日誌、カード類や台帳類に記録し、ほかに見取図も作成した。

(1)住宅・都市整備公団の一等多角点から社団法人茨城県建設コンサルタントが測量した。

第3節 調査経過

仲根台B遺跡は調査対象面積3,200m²で、昭和56年4月13日に発掘調査を開始し、同年7月29日に調査を完了した。

町田遺跡は調査対象面積12,698m²で、これを2期に分けて調査を実施した。第1次調査は昭和56年7月30日～57年1月14日、第2次調査は昭和57年4月16日～同年6月30日まで実施し、当遺跡の調査を完了した。

以下、発掘調査の経過について、遺跡ごとに15日単位で記述する。

1 仲根台B遺跡

昭和56年度

- 4月前半 13日から当遺跡の発掘準備を開始し、調査区域の確認、器材置場の設置、器材の搬入、テント設営、大調査区設定などを実施した。調査区域内の大調査区は、A1・A2・B1・B2区の4区画である。
- 後半 17日に小調査区設定の杭打ちを行い、A1・B1区の表土除去と遺構確認のためのグリッド発掘作業を中心に行なった。遺物はA1区に比べてB1区からの出土が少なかった。22日には、当該年度発掘予定の3遺跡（仲根台B遺跡・南三島遺跡・平台遺跡）合同の歓迎式を当遺跡で実施した。
- 5月前半 A2・B2区のグリッド発掘作業を進めた。遺跡南側部の台地縁辺部からは縄文土器片が多量に出土した。14・15日にB1・B2区の遺構確認作業を行い、住居跡、土壙、溝等を検出した。
- 後半 A1区調査区に焼上の分布がみられたが、開墾時における焚き火の跡と判断された。また、A1区の掘り下げを実施中、多量の縄文土器片とハマグリを半とする貝の出土がみられた。21日にはA1・A2区の遺構確認作業を実施し、住居跡や土壙を検出したが、住居跡は重複が激しく、遺構プランは判然としなかった。22日から遺構調査を開始し、12号土壙からはほぼ完形の縄文土器の浅鉢形土器が出土した。
- 6月前半 遺構調査を実施した。住居跡10軒、土壙98基の調査を行ったが、住居跡は重複が激しくプランが判然としないため、炉跡を中心に調査を進めた。
- 後半 住居跡は16号まで、土壙は113号までの遺構調査を進め、さらに地点貝塚の調査も並行して実施した。5号住居跡は壁際に焼土や炭化材が散在し、床面も赤く焼けており、火災に遭遇したものと思われる。この時期は雨天の日が多く、遺物の洗浄や図面・写真の整理を併せて進めた。
- 7月前半 前月に引き続いて遺構調査を進め、住居跡は17号まで、上塙は120号まで、溝は4号までの調査を実施した。12号住居跡の炉付近から土壙が10個以上まとめて出土した。9～12号、15号住居跡の5軒の住居跡は幾重にも重複しており、プランを想定するのに困難をきたした。
- 後半 連日の猛暑の中で遺構調査を進め、住居跡17軒、土壙124基、溝5条、地点貝塚の調査を終了した。27・28日は次の調査遺跡である町田遺跡への移転準備を行い、29日に一部の発掘器材を町田遺跡へ搬出した。また、29日に発掘終了後の遺構全景写真を撮影して、仲根台B遺跡の発掘調査を完了した。

2 町田遺跡

昭和56年度

- 7月30日 当遺跡の発掘調査を開始し、器材置場の設置、テントの設営、発掘器材の搬入などを実施した。
- 8月前半 調査区域内西側部から雑木等の伐開作業を開始した。雑草や雑木が背丈ほど伸びており、また、猛暑や峰のため作業に困難をきたした。地表面には上器の散布がほとんどみられなかった。8日から測量を実施し、大調査区の基準杭を打った。調査区域内の大調査区は、A5・B2・B3・B4・B5・B6・C2・C3・C4・C5・C6・D4・D5区の13区画である。
- 後半 伐開作業後の雑草、雑木の焼却作業を中心とし、18日からは並行して小調査区設定の杭打ち作業も実施した。月末から遺構確認のためのグリッド発掘作業を開始した。
- 9月前半 A5・B2・B3・C2・C3・C4・D5区のグリッド発掘作業を実施し、ローム面まで30~35cm、一部では40~50cm掘り下げた。根の根が深く入り込んでいるため、作業に困難をきたした。遺構は住居跡遺構、土壙、溝が検出されたが、A5・D5区には検出されなかった。遺物はB2・B3区から縄文七器片が多く出土したが、他の大調査区からはほとんど出土しなかった。
- 後半 農繁期のため作業員の人数は日ごとに減り、作業がはかどらなかった。遺跡北西部のB2・C2区のグリッド発掘作業を実施し、住居跡遺構や土壙を確認した。
- 10月前半 前月に引き続いてB2・C3区のグリッド発掘作業を進め、約30cmの掘り下げを実施した。雨の日には、遺物の洗浄作業を行った。
- 後半 遺構調査を開始し、住居跡遺構2軒、土壙85基を調査した。23日にはC2区の遺構再確認作業を実施し、住居跡遺構や土壙を確認した。
- 11月前半 B2・C2区の遺構調査を実施し、前月から調査している遺構と新たに住居跡遺構4軒、土壙30基、溝1条を調査した。C2区の遺構の中には、覆土中から10円硬貨やボタン等が縄文土器片に混入して出土している遺構もみられ、耕作による搅乱のあとがうかがえた。土壙の中には芋穴と思われるものもあった。12日からは遺跡東部の草刈り作業や焼却作業も遺構調査と並行して行った。
- 後半 B2・C2区の遺構調査と新たにB3区の遺構調査を実施した。また、遺跡東部の草刈り作業と焼却作業が終了した後、A5・B5・B6・C5・C6区の杭打ち作業を行って小調査区を設定した。24日からは重機導入を検討するためB3・B4・B5・C2・C3・C4・C5区のグリッド試掘を行い、住居跡遺構、土壙、溝を確認したが、B5・C5

区は他の大調査区に比べると遺構や遺物の出土は少なかった。

11月末現在、調査対象面積12,698m²のうち、調査終了面積は1,000m²であった。

12月前半 1日目に重機を導入して表土除去を行うことを決定し、3日からその準備を進め、並行して遺物の洗浄作業も実施した。11日から重機を導入してC2・C3区の表土除去を開始し、その後の残土除去作業と遺構確認作業を進めた。

後半 重機によるB4・B5・B6・C4・C5・C6・D2・D3区とC2・C3区縁辺部の表土除去と、その後の残土除去、遺構確認作業を継続して実施した。遺構の分布は希薄で、遺物の量も少なかった。

1月前半 7日から発掘調査を再開した。B4・B5・B6・C6区の残土除去、遺構確認作業を実施し、土城や溝を確認した。14日をもって当遺跡の第1次発掘調査を終了し、16日から平台遺跡の調査に合流することになった。

第1次発掘調査の結果、調査終了した遺構は住居跡（住居跡状遺構を含む）6軒、土壙215基、溝1条であった。

昭和57年度

4月後半 年度が改まり、新体制のもとで16日から第2次発掘調査を開始した。3か月間の調査中断のため、遺構確認面に上砂が約5cmほど堆積しており、プランの確認ができないかったのでB3・B4・C2・C3・C4・C5・D4・D5区の遺構確認作業を進めた。C4・D4区は築や葛などの根が深くはっており、作業の進行を遅らせた。遺物は織文土器の細片がにとんどで、B2・B3・C2・C3区からの出土が多かった。A5区ではまだ掘り足りない部分があったので、更に10~15cmにとどめられた。

5月前半 前月に引き続いてB5・B6・C5・C6区の遺構確認作業を実施した。C6区に塗が1条確認された。全体的に遺構や遺物の出土は少なかった。11日の午前中で遺構確認作業を終了し、午後から遺構調査を開始した。農繁期に入ってきたため作業員が日ごとに減少し、作業の進行が遅れがちになった。

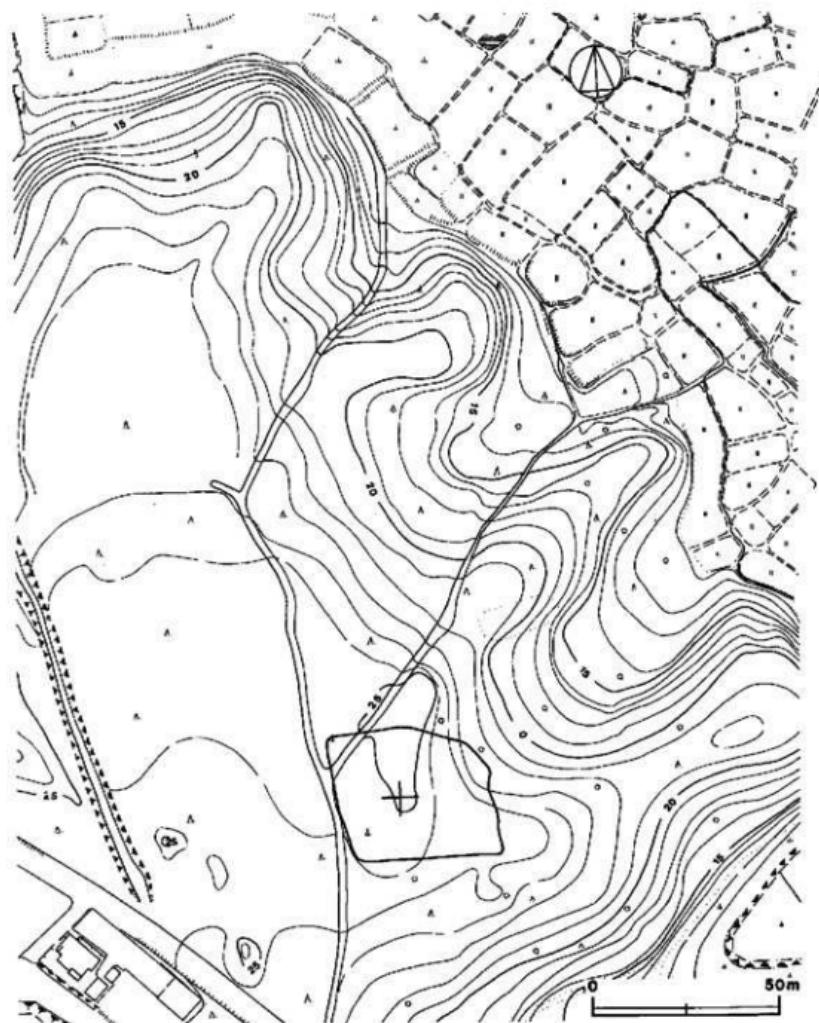
後半 B3・B4・C2・C3・C4区の遺構調査を実施した。上塙の中には芋穴と思われるものもあったが、222号土壙は調査の結果、井戸跡と考えられた。24日には牛久第二中学校の郷上クラブ員10名が、顧問教師に引率されて遺跡見学をした。

6月前半 5月末から6月初旬にかけて雨の日が多く、作業のできる日は減少したが、住居跡状遺構、上塙、溝、塗の調査を実施した。12号住居跡からは炉跡も検出されたので住居跡と認めた。238号土壙は222号土壙と同じように井戸跡と考えられる。堀から燈明皿が1点出土した。

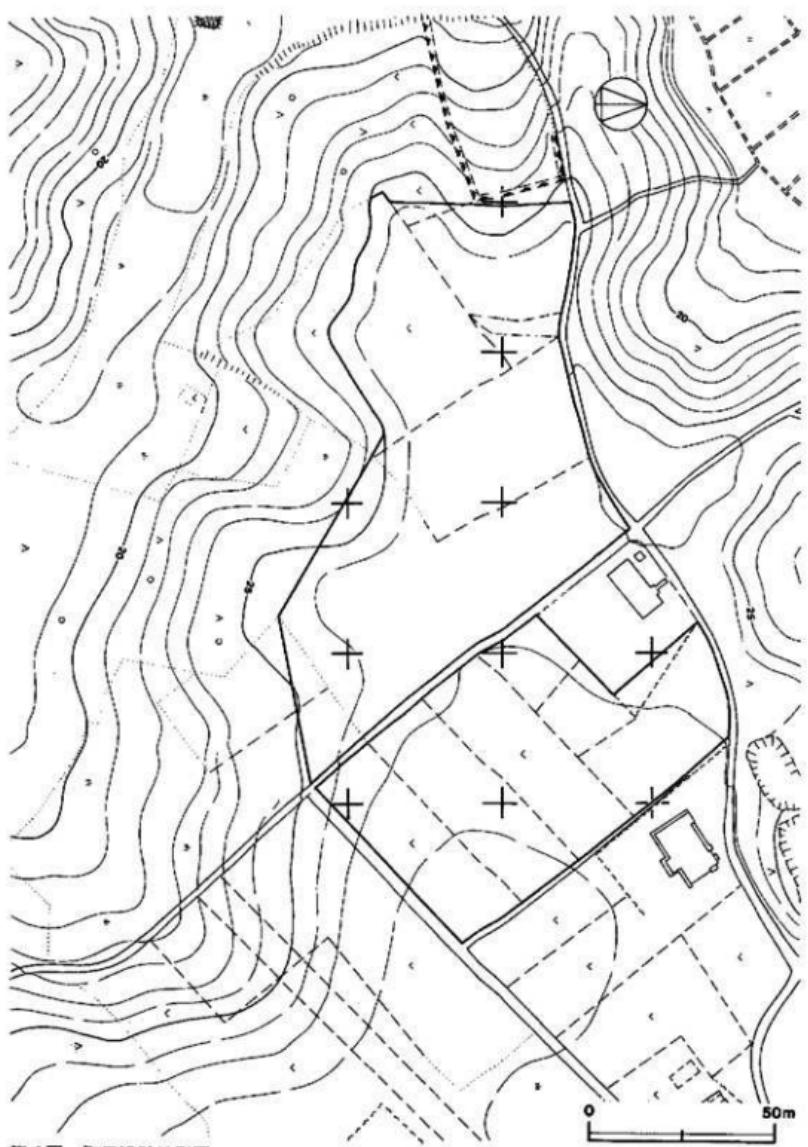
後半 遺構調査を継続して実施し、遺構調査終了後に遺構全景写真を撮影した。30日をも

って、町山遺跡の発掘調査を完了した。

第2次発掘調査で、住居跡（住居跡状遺構を含む）5軒、土壙134基（井戸跡2基を含む）、溝6条、堀1条を調査した。



第3図 仲根台B遺跡地形図



第4図 町田遺跡地形図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

仲根台B・町田両遺跡のある龍ヶ崎市は茨城県の南端部に位置し、1954年に龍ヶ崎町と結樂、八原、長戸、笠宮、川原代、北文間の1町6村が合併して市制を施行し、翌年高須村の一部が分村合併して確定した都市である。常磐線佐貫駅から東に関東鉄道竜ヶ崎線(4.5km)が延び、その終点からは東西2kmにわたる細長い商店街が龍ヶ崎市の中心市街地である。最近は東京との関連が深まり、衛星都市的発展がみられるようになった。

当市は東西約12km、南北約9km、面積約75km²、人口約45,000人を有し、北は牛久町、東は新利根村、南は利根町、河内村、西は藤代町に接しており、常磐線と国道6号線が市北西部を通っている。南部は鬼怒川と小貝川によって形成された沖積低地で、北部は関東ローム層による台地を形成している。この台地は稻敷台地と呼ばれ、北西方の新治台地へと続いている。

稻敷台地の南端にあたる北竜台及び龍ヶ岡地区一帯は平坦な洪積台地で、これに南又は南東に走るいくつかの谷が樹枝状に入り込む地形を呈している。台地は成川層群(洪積層、砂質未固結)を基盤とし、その上に約1mの灰白色の常緑粘土層と呼ばれる粘土層があり、さらにその上を厚さ約3.5mの火山灰層(ローム)が覆っている。本地域に分布する主要土壤は火山灰土である。

仲根台B遺跡は、龍ヶ崎市駒馬町仲根台5090番地ほかに所在し、北竜台地区にある遺跡である。北竜台地区的立地環境は、(1)標高20~25mのローム台地、(2)その間に樹枝状に入りこむ低地(標高10~15mの谷津田)、(3)両者の境目をなす台地斜面に大別できる。台地の南端は利根川下流の氾濫原に向して急傾斜をなすが、他の斜面は大部分が緩傾斜である。土地利用状況は山林原野が多く、全面積の約70%を占めており、台地上及びその縁辺部に分布している。林地は針葉樹林が大部分である。台地上の平坦地や平たく浅い谷の部分には畑が分布しており、その中に農家が点在している。水田は地区南部及び東部の台地に入りこんだ大正堀水系、江川水系の谷津に分布しており、泥炭土質の歎別地盤の溼田である。

当遺跡は龍ヶ崎市の中心街から北西へ約2.8kmの地点に所在し、現況は山林で、標高24.5m、南東方向に舌状に延びる台地上に位置し、北東面は緩かな傾斜をつけて低地まで下っている。県道土浦・龍ヶ崎線を挟んで北西方500mのところに縄文時代後期の大集落「廻り地A遺跡」が存在している。(第3図)

町田遺跡は龍ヶ崎市貝原塚町町田1795番地の2ほかに所在し、龍ヶ岡地区にある遺跡である。龍ヶ岡地区は北竜台地区の東方に位置し、利根川の氾濫原を南に望み、東南東の方向へ半島状に延びた関東ローム層からなる大部分が低平な標高20~25mの台地であり、その中央を縦断するよ

うに深く谷が入りこんでいる。水系をみると、その流域は江川、大正川及び破竹川の三つに分かれ、いずれも新利根川を経て霞ヶ浦へ流下している。本地区も山林原野が約50%を占めており、台地上及び台地縁辺の斜面部に分布している。台地上の平坦部分には畑が広がっており、その面積も比較的大きい。地区南部をほぼ東西に貫いた破竹川水系の谷を中心に水田が分布し、さらに地区北東縁部には薄倉川水系の水田が入りこんでいる。いずれも泥炭土質の軟弱な谷津田の形態をなしており、休耕状態のものも多い。

当遺跡は龍ヶ崎市の中心街から北北東へ約3.8kmの地点に存在し、現況は畠地で、標高約25.5m、台地縁辺部に位置しており、西側と南側は緩かな傾斜をなしている。南東には、県道木原・龍ヶ崎線に沿って貝原塚町の集落が形成されている。また、同一台地上北東300mのところに中世の貝原塚城跡がある。(第4図)

第2節 歴史的環境

霞ヶ浦周辺から龍ヶ崎市にかけての地域は遺跡の密度が高く、⁽¹⁾ 薩平貝塚、⁽²⁾ 舞津貝塚、⁽³⁾ 広畠貝塚等の著名な遺跡も多い。

稲敷台地の南端、龍ヶ崎市の北部台地上に位置する仲根古B遺跡や町田遺跡周辺には多数の遺跡が分布しているが、仲根古B遺跡がそうであるように、近年の開発によって明らかとなった遺跡が大部分で、従来ほとんど知られていなかった。

まず、この地域で最も古い遺跡は、昭和53年度に当財団が発掘調査を実施した沖縄遺跡⁽⁴⁾である。舟底形石器や削器などが出土し、県南地方の先土器時代解明への第一歩がしるされたものである。沖縄遺跡と同一台地上の松葉遺跡や赤松遺跡⁽⁵⁾からも先土器時代の遺物とみられる石器⁽⁶⁾が発見され、この地に古くから古代人の生活が営まれていたことがうかがえる。

本報告書では縄文時代前・中・後期、古墳時代、中世の遺構や遺物が中心となるので、ここでは同時期の周辺遺跡について述べることにする。

洪積世から沖積世にうつり縄文時代に入ると、支谷の奥部や台地縁辺部付近に多くの遺跡の存在がみられる。縄文時代前期に編年される遺跡としては、浅川小支谷にのぞむ台地上緩面に開山式・黒浜式土器が出た⁽⁷⁾宮ノ脇貝塚、別所町の⁽⁸⁾堂の下貝塚等が存在する。中・後期の遺跡としては蛇沼からの沖積地を挟んだ若柴側の舌状台地上には赤松遺跡があり、には環状に分布する住居跡群と袋状土壙群が検出されている。昭和56・57年度に当財団が発掘調査を実施した南三島遺跡からは、加曾利E式土器を作った住居跡群が検出されている。別所谷開辺には、加曾利F式土器や壇之内式土器が出土した⁽⁹⁾別所貝塚、昭和43年11月に西村正衛氏によって発掘調査された向地貝塚⁽¹⁰⁾が点在している。また、廻り地A遺跡は中期末から後期初頭に編年される大集落跡で、地点貝



第5図 仲根合日・町田遺跡周辺の地形及び遺跡目

遺跡一覧表

番号	遺跡名	種類	時代	先史器 磁器	生産地	占領地	その他の	遺跡名		神社	墓	出土物	種類	遺跡の時代	古墳	その他	
								古	新								
R.1	長崎城跡	城	備	時代	新	○	○	R.28-A	幹板台原野	塚原(3・4号)	○	○	○	○	○	○	○
R.2	長崎古墳群	古	時代	新	新	○	○	R.25-B	幹板台原野	塚原	○	○	○	○	○	○	○
R.3	十三坂原群	坂	新	時代	新	○	○	R.29	見り地古墳	塚原	○	○	○	○	○	○	○
R.4	尾井戸道跡	坂	新	時代	新	○	○	R.30	白浜古墳	塚原	○	○	○	○	○	○	○
R.5	外人代遺跡	集落	新	時代	新	○	○	R.31	渕合古墳	塚原	○	○	○	○	○	○	○
R.6	A.尾代A遺跡	城	備	城跡・墓落跡	新	○	○	R.32	湯西峰古墳	塚原	○	○	○	○	○	○	○
R.6	B.尾代城跡	城	備	城跡・墓落跡	新	○	○	R.33	山王台古墳	塚原	○	○	○	○	○	○	○
R.7	柳原塚古墳群	古	時代	新	新	○	○	1	木塚古墳	塚原	○	○	○	○	○	○	○
R.8	東云島遺跡	島	新	時代	新	○	○	2	林浦古墳	塚原	○	○	○	○	○	○	○
R.9	アノゴ城	城	新	時代	新	○	○	3	石空古墳	塚原	○	○	○	○	○	○	○
R.10	町田塚古墳	坂	新	時代	新	○	○	4	宝烟古墳	塚原	○	○	○	○	○	○	○
R.11	かみ塚	坂	新	時代	新	○	○	5	船山古墳	塚原	○	○	○	○	○	○	○
R.12	高井戸下城跡	城跡・守防跡	新	時代	新	○	○	6	大山溜遺跡	塚原	○	○	○	○	○	○	○
R.13	前浦水道跡	水道跡	新	時代	新	○	○	7	心臓古墳	塚原	○	○	○	○	○	○	○
R.14	猿下遺跡	坂	新	時代	新	○	○	8	奈戸町古墳群	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.15	町用塚	坂	新	時代	新	○	○	9	笠ノ下貝塚	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.16	行部内遺跡	坂	新	時代	新	○	○	10	網馬城跡	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.17	大羽谷溜遺跡	水道跡	新	時代	新	○	○	11	金刀削古墳群	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.18	越り地A遺跡	坂	新	時代	新	○	○	12	金刀削古墳群	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.19	平吉遺跡	坂	新	時代	新	○	○	13	西花輪古墳群	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.20	成沢遺跡	坂	新	時代	新	○	○	14	貝原塚古墳群	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.21	松葉遺跡	坂	新	時代	新	○	○	15	向井溜遺跡	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.22	庚山溜遺跡	坂	新	時代	新	○	○	16	西平溜	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.23	岸解遺跡	坂	新	時代	新	○	○	17	黒崎古墳群	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.24	赤松遺跡	坂	新	時代	新	○	○	18	要谷山城跡	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.25	打越A遺跡	坂	新	時代	新	○	○	19	半日遺跡	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.26	打越C遺跡	坂	新	時代	新	○	○	20	登城山城跡	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.27	ワツア遺跡	坂	新	時代	新	○	○	21	向原古墳群	吉野村	○	○	○	○	○	○	○
R.28	仲根古塚群	古	時代	新	新	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

塚や多くの上塚群を伴っている。

古墳時代になると新しい社会制度が生みだされ、衣食住にも変化がもたらされた。^豪若柴山古墳からは、公園建設中に馬形埴輪・人物埴輪等が出土した。若柴町の宿内には前期の集落跡である^古猪畠遺跡があり、昭和52年に手穴の発掘の際に完形の台付豪形土器等が出土した。駒馬町の西方台地上の北方へゆるやかに張り出した小舌状台地の縁辺部近くには成沢遺跡^古があり、低湿地に面して集落が形成されていた。その南東側に所在する^古平台遺跡^古もほぼ同時期の集落跡である。昭和54・55年度に当財団が発掘調査を実施した屋代A遺跡は八代町の北側、標高23mの舌状台地上に位置し、和泉・鬼高・国分期に比定される上師式土器が出上した。

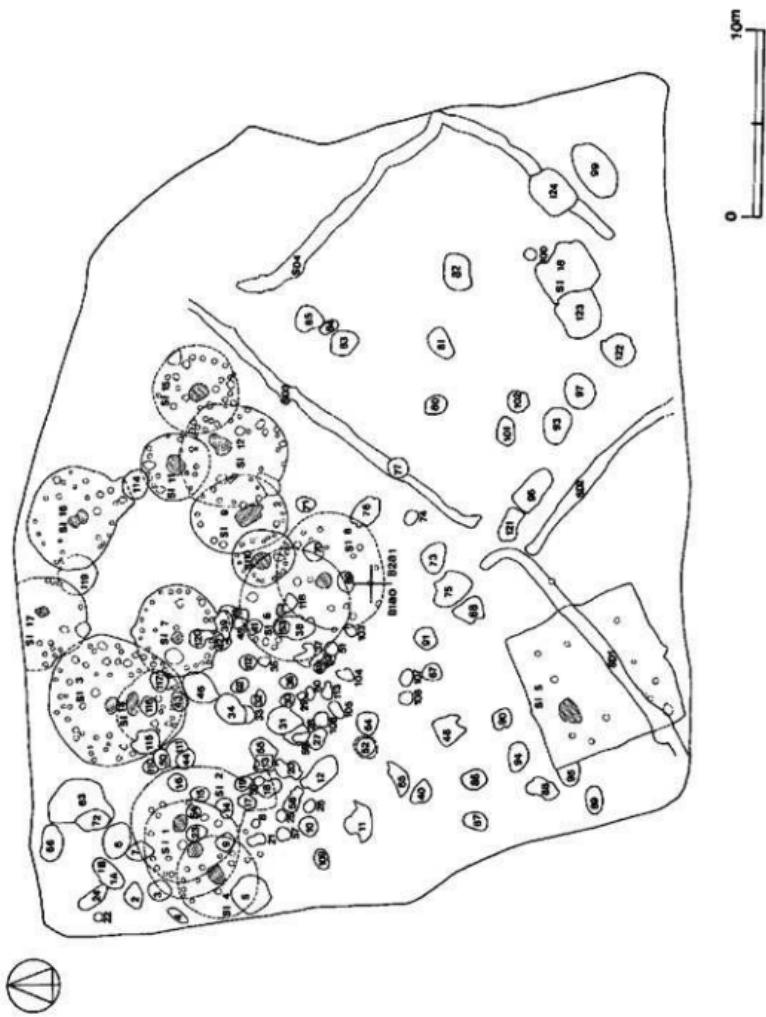
町田遺跡の北東方約300mのところには貝原城^古がある。小田氏直築城といわれる貝原城は別名高井城とも呼ばれ、「東西100間、南北150間、高さ35尺、面積15,000坪を有す。此方は南朝方で、興国2年9月(1341年)武家方の屋代信経等に攻められ落城、その後又其子孫の貝原将監氏胤の居城となり、長様の頃(1459年~)江戸崎土岐氏に滅ぼされた」と伝わる。現況は山林・畑地である。

北竜台地区と龍ヶ崎地区にはその他にも数多くの遺跡が各時代にわたって点在しており、地域の歴史解明や研究の場として最も適した地域のひとつということができよう。(第5回)

文献

- (1)「茨城県資料 考古資料編 先土器・縄文時代 監修 茨城県史編集委員会
- (2) *II* *II* *II*
- (3) *II* *II* *II*
- (4) 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査報告書3」沖耕遺跡 茨城県教育財團 昭和56年
- (5) 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査報告書1」松葉遺跡 *II* 昭和55年
- (6) 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査報告書4」赤松遺跡 *II* 昭和56年
- (7) 「茨城県資料 考古資料編 先土器・縄文時代 監修 茨城県史編集委員会
- (8) 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査報告書7」廻り地A遺跡 茨城県教育財團 昭和57年
- (9) 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査報告書6」成沢・屋代A遺跡 *II* *II* 昭和58年
- (10) 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査報告書8」平台遺跡 *II* 昭和58年
- (11) 「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査報告書5」成沢・屋代A遺跡 *II* *II* 昭和57年
- (12) 野口如月「稲敷郡誌」茨城新聞竜ヶ崎出張所 大正12年

第3章 仲根台B遺跡



第6図 仲根台B遺跡遺構配置図

第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

1 遺跡の概要

仲根台B遺跡は、昭和55年の羽原川防災調節池造成工事中に発見された遺跡で、仲根台A遺跡、仲根台塚群と隣接している。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡と土壙、古墳時代の竪穴住居跡、歴史時代の竪穴住居跡、溝（時期不明）が検出された。

縄文時代の遺構としては、中期から後期にかけての竪穴住居跡15軒、土壙116基が検出されたが、住居跡は重複が激しく、個々のプランは不明確な部分が多い。また、4軒の住居跡の中に小貝層ブロックが形成されていた。住居跡及び土壙から出土した縄文土器は、大半が加曾利E式、称名寺式、堀之内式、加曾利B式に比定されるもので、最も多く出土しているものは堀之内I式土器である。12号住居跡からは多数の土器片鱗が出土している。石器の出土数は少ないが、その中では石斧や磨石の出土が多い。石器は、主として住居跡や表土中から出土している。

古墳時代の遺構としては、和泉期の竪穴住居跡1軒、歴史時代の遺構としては、国分期の竪穴住居跡1軒がそれぞれ検出された。住居跡からは、土師器の高环や塔等が出土している。

時期不明の遺構としては、溝が4条検出された。南西から北東に走るものと南東から北西に走るものとに大別される。溝に伴うと思われる遺物は出土していない。

2 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、下記の要領で統一し記載した。

(1) 使用記号

名 称	溝・堀	住居跡	土 壙	炉 跡	ピット
記 号	S D	S I	S K	F	P

(2) 住居跡実測図中の表示

炉跡 = [] 焼土 = [] カマド = [] 貝 = []

(3) 土層の分類

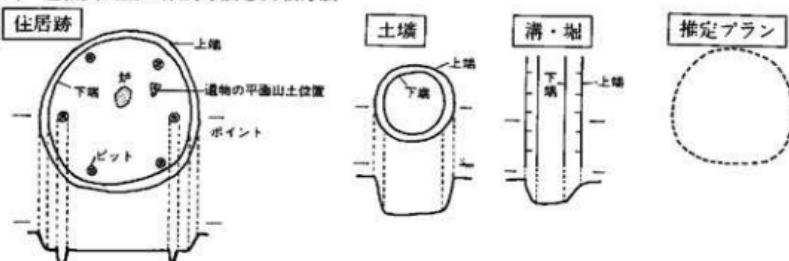
当遺跡から検出された遺構の土層色調は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用し、下記のように土色名を分類した。さらに土層断面中の含有物も分類し、掲図中の土層はすべて番号と記号で表示した。

なお、擾乱をうけている土層は土層断面図中に「擾乱」と記した。

番号	土色名	JIS notation	記号	含有物
1	暗褐色	Hue7.5YR	% a	ローム粒子を含む
2	"	"	% a'	ローム粒子を多量含む
3	褐色	"	% a''	ローム粒子を少量含む
4	"	"	% b	ローム(小)ブロックを含む
5	"	"	% b'	ローム(小)ブロックを多量含む
6	極暗褐色	"	% b''	ローム(小)ブロックを少量含む
7	黒褐色	"	% c	焼土粒子を含む
8	"	"	% c'	焼土粒子を多量含む
9	明褐色	"	% c''	焼上粒子を少量含む
10	"	"	% d	炭化粒子を含む
11	にぶい褐色	"	% d'	炭化粒子を多量含む
12	暗赤褐色	Hue5YR	% d''	炭化粒子を少量含む
13	"	"	% e	炭化物(材)を含む
14	"	"	% e'	炭化物(材)を多量含む
15	極暗赤褐色	"	% e''	炭化物(材)を少量含む
16	赤褐色	"	% f	焼上(ブロック)を含む
17	"	"	% f'	焼土(ブロック)を多量含む
18	にぶい赤褐色	"	% f''	焼土(ブロック)を少量含む
19	"	"	% g	ローム質土・ソフトロームを含む
20	"	"	% h	粘土を含む
21	灰色	"	% i	灰を含む
22	暗赤褐色	Hue2.5YR	% j	腐植土を含む
23	赤褐色	"	% k	砂を含む

* 上層断面における含有物の占める面積割合が40%以上を多量、10%以下を少量とした。

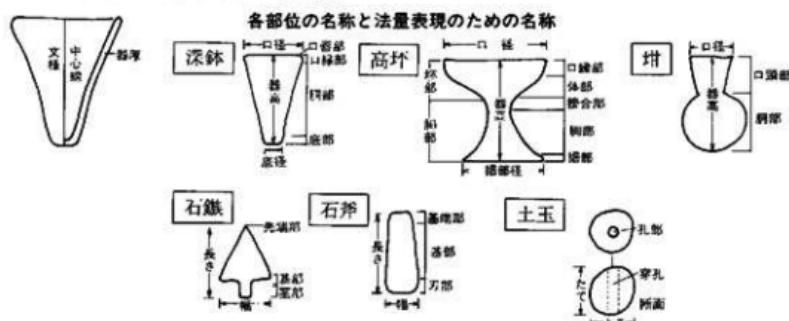
(4) 遺構実測図の作成方法と掲載方法



- ・遺構の版組みは、すべて北を基準に行った。
- ・竪穴住居跡は縮尺1%の原図を使用し、版組みはさらに縮尺1%を基本とした。
- ・土壤は縮尺1%の原図を使用し、版組みはさらに縮尺1%を基本とした。
- ・溝と堀は縮尺1%と1%の原図を使用し、版組みはさらに縮尺1%・1%を用いた。

- ・レベルの掲載については、同一レベルの場合は一つの記載をもって表し、単位はmである。
- ・遺構実測図の掲載については、できるだけ遺構番号順にした。

(5) 遺物実測図の作成方法と掲載方法



- ・土器の実測方法は4分割法を用い、中心線を挟んで左側半分に外面、右側半分に内面及び断面を記録した。
- ・土器拓影図は、断面を右側に掲載した。
- ・土器の色調は、土層と同じ色帖を用いて判別した。
- ・土器片鱗の実測図は、抉りを上下にして掲載した。
- ・遺物の縮尺は版組み表示を基本とし、石器と土製品は版組み表示とした。

(6) 表の見方について

住居跡一覧表											
住居跡番号	位置	長径方向	平面形	長径×短径	壁高	炉・カマド	柱穴数	覆土	出土遺物	時期	備考

- ・住居跡番号は、発掘現場で付した番号を使用した。
- ・位置は、小網査区（グリッド）名を表した。
- ・長径方向は、座標北と長径のなす角度で示し、平面形が円形を呈するものは空欄とした。
- ・平面形は、現存している形状の上端面で判断して表した。
- ・規模の長径×短径は、平面形の上端面の計測値で、壁高は残存壁高の計測値である。
- ・炉・カマドは、炉の種類を表し、炉やカマドを持たないものは空欄とした。
- ・柱穴数は、その住居跡に伴うと考えられる住居跡内外に存在する柱穴数を表した。
- ・覆土は、自然堆積の場合N、人為的堆積の場合A、攪乱の場合Kと記号で表した。
- ・出土遺物は、最も多く出土した遺物の種類とその出上点数、それに代表的な遺物名を表した。
- ・時期は、時代名と土器型式を表し、不明のものは空欄とした。

- 備考は、重複関係や性格等を表した。

土壤一覧表

土壤番号	位 置	地形方向	平面形	傾 斜 長軸×短軸の 比率	概 面 積 m ²	傾 面 度 度 数	底 面 形 状	出 土 遺 物	備 考
------	--------	------	-----	------------------------	-------------------------------	-----------------------	------------------	------------------	--------

・規模の欄の深さは、開口部から底面の最も深いところまでの計測値である。(ピットは除く)

・壁面は、底面からの立ち上がりの状態によって、次のとおりに表した。



・底面は、次のとおりに分類して表した。



・P数は、その土壤内に存在する大小のピット数を表した。

*その他の項目については、住居跡一覧表の見方に準ずる。

出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様(手法の特徴)	胎土 焼成 色調	備考
----	----	--------	------------------	----------	----

・番号は、実測図中の番号である。

・器種は、繩文土器の場合に深鉢形土器というように、……形土器と表した。

・法量は、A-口径 B-器高 C-底径を示し、単位はcmである。なお、A・Cの()は推計値であり、Bの()は残存高である。

・器形の特徴及び文様は、縄文土器の場合最初に器形を述べ、次に文様について述べた。上部器の場合はこの欄を器形の特徴と手法の特徴と二つの欄に分けた。

・胎土 焼成 色調は、上段に胎土、二段目に焼成の具合、下段に色調を表した。上器の内面と外面で色調が異なる場合は、内……色 外……色と分けて表した。

・備考は、土器の完存率や付着物等を表した。

石器一覧表

番号	類別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	備考
----	----	------	-------	-------	-------	-------	----	----

・類別は、同一器種別にまとめて掲載した。

・出土地点は、その石器が出土した遺構や小調査区(グリッド)名で表した。

・大きさや重量の()内数値は、欠損石器の残存値である。

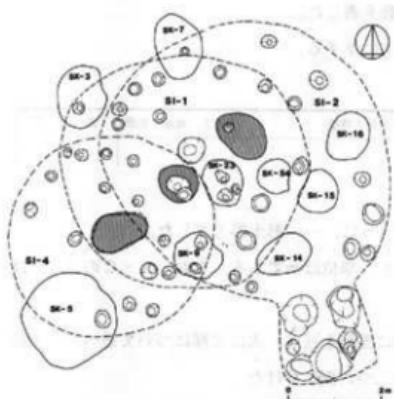
・石材は、その石器の原材岩質名を表した。

・備考は、類別を細分類した名称や特徴等を表した。

第2節 積穴住居跡

仲根台B遺跡は羽原川防災調節池造成工事中に発見された遺跡で、既に周囲は削除され、遺跡内にも北東側と北西側から中央に向かって重機による表土削除の痕跡がみられた。また、個々の積穴住居跡のロームへの掘り込みも全体的に浅い。これらのために、積穴住居跡群の中には既に壁を消失してしまったものもあった。

縄文時代の積穴住居跡は遺跡の中央から北側にかけて検出され、古墳・歴史時代の積穴住居跡は遺跡の南側に検出された。遺物は縄文土器、土師器、石器、動物遺体等出土したが、個々の住居跡の出土遺物説明では、特に量的に多い土器について述べ、他の遺物については別項で一括して取り扱うこととした。



第7図 第1・2・4号住居跡間連図

第1号住居跡（第8図）

遺跡の北西端に重複する3軒の住居跡(1・2・4号)を検出し、本跡はその中央に位置している。本跡は最初炉だけの存在が確認されたが、炉の周辺を精査したところ床面と柱穴を検出し、住居跡であることが判明した。壁を検出できなかったため平面形の確定はできなかったが、柱穴と思われるピットの配列から考えると、直径5mほどの円形を呈するものと推定される。

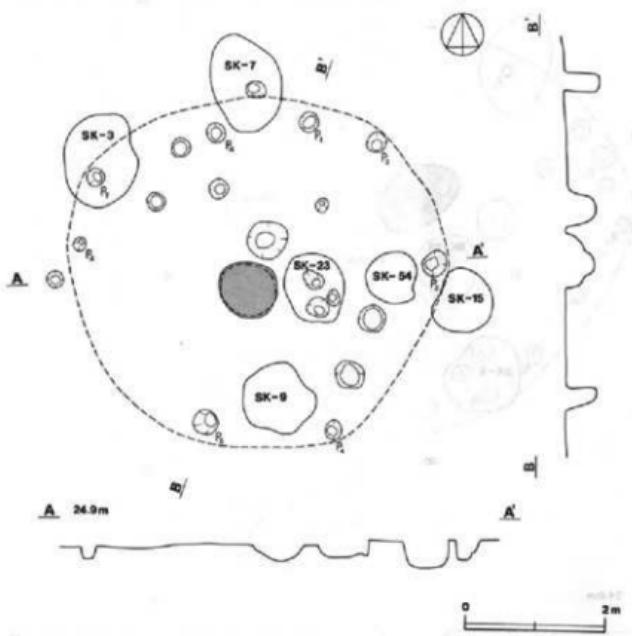
床面は全体的に軟弱で、東側から西側に向かって若干傾斜している。炉は住居の平面プランの推定からすると、住居跡のはば中央に位置する。形状は長径0.89m、短径0.8mの長円形を呈し、断面は深さ30cm前後の播種状を呈している。炉内には焼土が充満していた。柱穴と考えるP₁～P₈は直径19～35cm、深さ27～51cmで、ピットの下端は長円形状のものが多い。柱穴の間隔は一定していない。

遺物は縄文土器片が81点出土したが細片が多く、器形を推測できるものは検出されなかった。土器片の大半は堀之内式である。

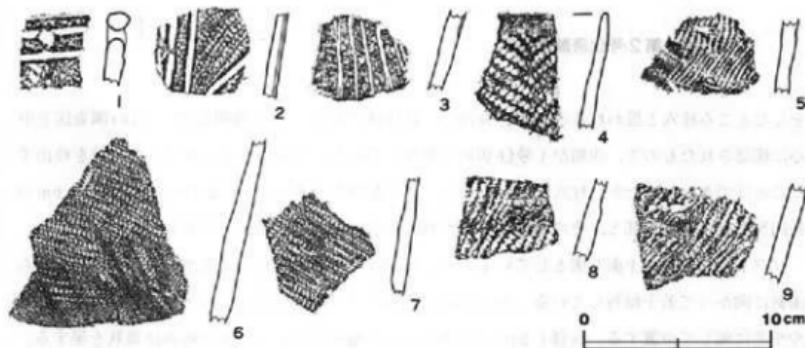
出土土器（第9図）

第9図は1号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部に2本の沈線を横位に施し、胴部には縄文を施している。両面からの穿孔を1個有している。2・3は縄文を地文とし、その上に沈線を施している。4～9は器表面に縄文のみを施したもので、4の口縁部には

幅の狭い無文帶を巡らし、口唇部に向かって器厚を減じている。



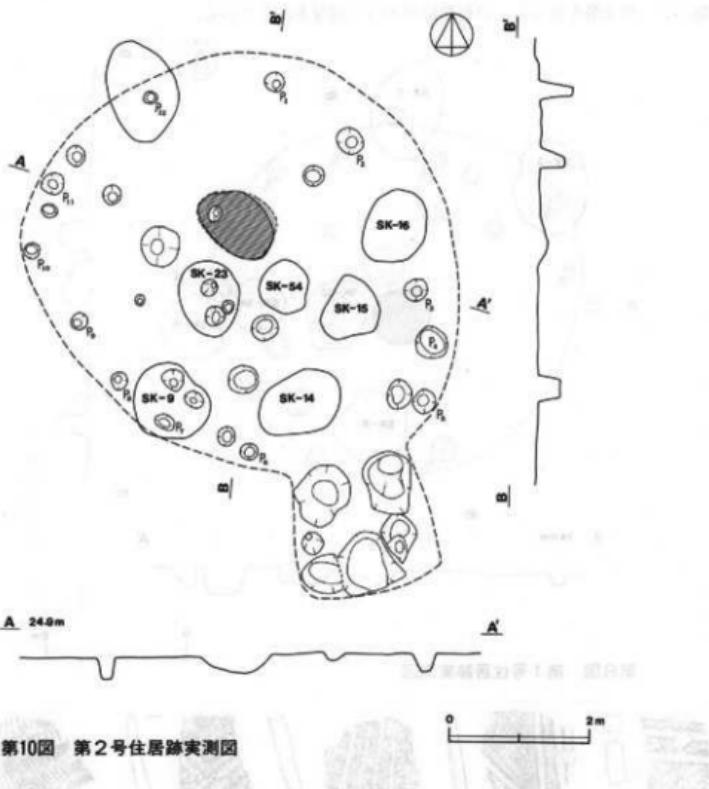
第8図 第1号住居跡実測図



第9図 第1号住居跡出土土器拓影図

第2号住居跡（第10図）

本跡はローム層上面まで露呈していたので、炉だけの存在が確認されていたが、炉周辺の精査



第10図 第2号住居跡実測図

をしたところ柱穴と思われるビットを検出し、住居跡であることが判明した。Alh調査区を中心確認されたもので、西側が1号住居跡と重複している。本跡は、はっきりとした壁を検出することはできなかったが、柱穴と思われるビットの配列から考えると、長径6.3m、短径5.6mの長円形を呈する主体部と、その南側に柄部が付帯する「柄鏡形住居跡」である。

ソフトローム層の上面を床としているため、床面は炉の周辺を除いて全体に軟弱で、北側から南側に向かって若干傾斜している。炉は住居の平面プランの推定からすると、主体部の中央からやや北に偏して位置する。長径1.2m、短径0.85mの楕円形を呈し、その断面は皿状を呈する。床面を20cm前後掘りくぼめた地床炉で、炉内に焼土ブロックを含み、炉床は硬く焼けている。柱穴と考えるP₁～P_nは直径25～35cm、深さ31～50cmのものが多く、柱穴の間隔は一定していない。主体部南側には南北に二列に並ぶ深さ45～55cmのビット群と、その南端に位置する長径1.3m、

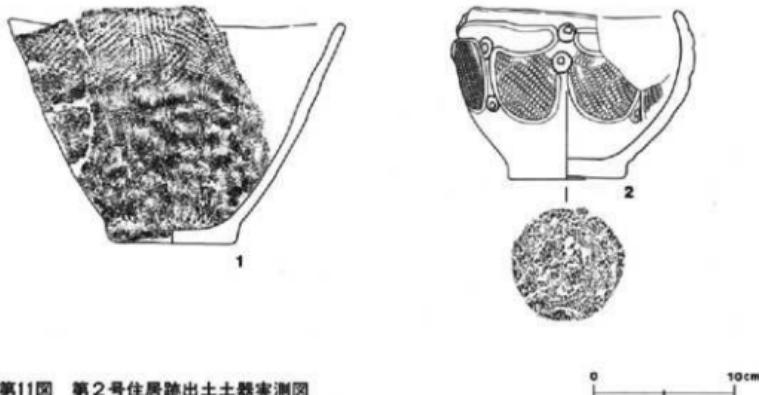
短径1.0m、深さ60cmの大形ピットから成る柄部が付帯している。この二列のピット群の間は硬い。主体部と柄部の床面に段差はなく、ほぼ平坦に接続している。

遺物は東側の覆土中から、縄文土器の鉢形土器と深鉢形土器が出土した。特に、鉢形土器は深鉢形土器の口縁部が欠損したものを二次的に利用したものである。

出土土器（第11図）

出土土器観察表（第11図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土 地成 色調	備考
1	鉢形土器	A(24.0) B 15.5 C 8.8	底部から1cmほど垂直に立ち上がり、そこから直線的に大きく開いて口縁部に至る。口縁は緩やかな波状を呈している。 口縁部は縄文が施され、底部から下は無文である。	砂 絆 軟 弱 内一に赤い褐色 外一灰黄褐色	50% 破損した深鉢形土器を再利用し、破損部を研磨して口縁部としている。
2	浅鉢形土器	A 14.5 B 12.3 C 8.1	底部は直線的に立ち上がり、肩部は膨らみ、口縁部は大きく内側する。口縁部はやや丸味を持つ。 口縁部から側部に太い沈線を施し、区画内に縄文を充填。沈線の間に幅に2個単位の刺突による環状貼付文を施す。底部にせんいの散物質。	砂 - スコリア 普通 内一褐色 外一に赤い褐色	80%



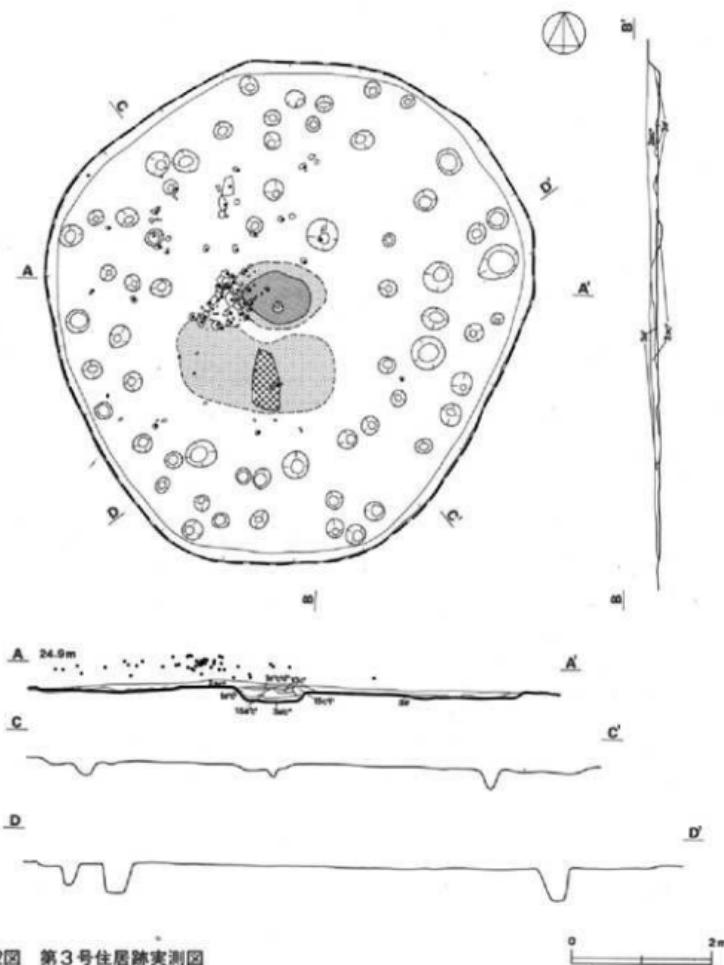
第11図 第2号住居跡出土土器実測図

0 10cm

第3号住居跡（第12図）

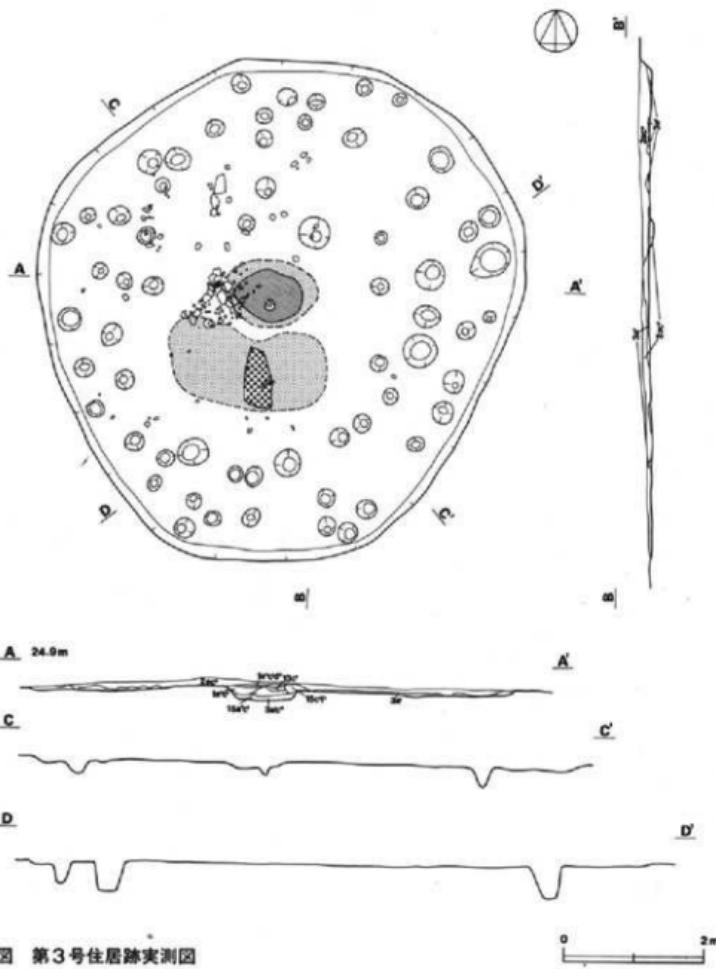
本跡はA1g調査区を中心に確認されたもので、遺跡の北西側に位置し、南東側で7号住居跡と、南側で14号住居跡とそれぞれ重複している。その新旧関係は、最も古いと考えられるものが7号住居跡で、最も新しいものが14号住居跡である。平面形は長径7.14m、短径6.95mのほぼ円形を呈し、当遺跡最大の住居跡である。

残存壁高は5~8cmで、壁面は緩やかに外傾して立ち上がっている。床面は軟弱で、ほぼ平坦



第12図 第3号住居跡実測図

である。炉はほぼ中央に位置し、長径1.38m、短径0.95mの梢円形を呈する。床面を15cm前後掘りくぼめた地床炉で、炉内には焼土ブロックや焼土粒子が充満していた。炉床は硬く焼けている。柱穴と考えるピットはおおむね二重に巡っており、同心円状に住居跡を拡張したものであろう。これらの柱穴は直径25~35cm、深さ20~40cmのものが多く、相互の間隔は一定していない。覆土



第12図 第3号住居跡実測図

である。炉はほぼ中央に位置し、長径1.38m、短径0.95mの梢円形を呈する。床面を15cm前後掘りくぼめた地床炉で、炉内には焼土ブロックや焼土粒子が充満していた。炉床は硬く焼けている。柱穴と考えるピットはおおむね二重に巡っており、同心円状に住居跡を拡張したものであろう。これらの柱穴は直径25~35cm、深さ20~40cmのものが多く、相互の間隔は一定していない。覆土

の堆積状況は上層に暗褐色土、下層に褐色土が自然堆積している。

遺物は縄文土器片が1,112点、土器片錠が2点出土し、土器片の主体は壺之内式である。これらの二器の分布状況は偏り、がの周辺に散在している。このうち器形の推測できる土器は3個体である。また、これらの土器片の垂直分布状況をみると、床面付近から出土しているものは少ない。その他に、がの西側腹土中から土製品が集中して出土したが、これは首飾りと思われる。

また、がの南側にハマグリを主とする貝の堆積がみられた。

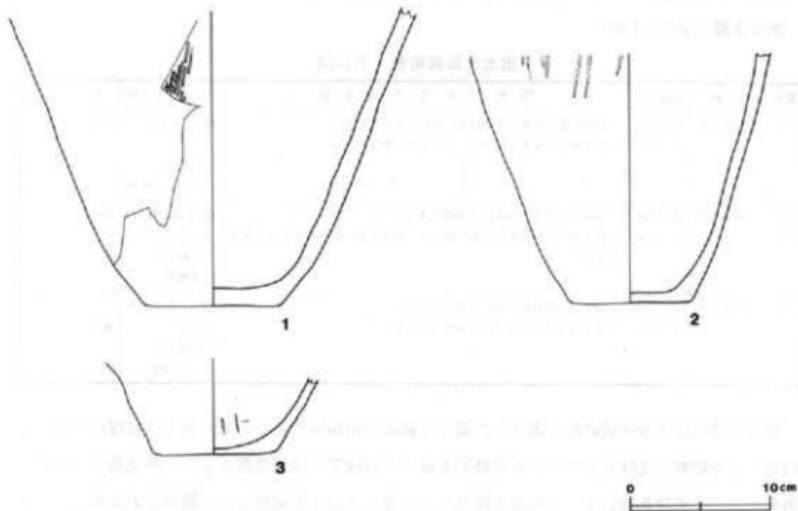
出土土器（第13～15図）

出土土器観察表（第13図）

番号	器種	法算(cm)	器形の特徴及び文様	新しく発見された文様	参考
1	深鉢形土器	B: 20.7 C: 8.8	肩部に浅かなめら込みを持ち、腹部が若干膨らむ。 無文地に豪華な模様が附す。胴下半部は無文である。	移転・移設 模様 丸い模様 外へ広がる模様	25%
2	深鉢形土器	B: 17.8 C: 8.8	底部から直線的に傾いて肩部が狭まる。 胴下半部は平行する花崗岩が剥離し、胴下半部はヘラ模様による無文を呈している。	移転・移設・模 様・スコリア やや模様 明るい模様	23%
3	深鉢形土器	B: 5.8 C: 8.7	底部から直線的に傾いて立ち上がる。 胴下半部はへりなどによる無文である。	新規・移設・ス コリア やや模様 に沿った模様	底部100%

第14・15図は3号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第14図1は口縁が内野し、口唇がやや延摩し丸味をおびている深鉢形土器で、口縁部には無文帯が巡り、無文帯下は断面三角形を呈する微隆起部によって胴部と区分している。2も1と同様な文様構成であるが、1よりは器厚も厚く口縁の内野も深い。3・4は沈線と刺突文を組み合わせて文様を構成している。5～7は沈線で文様を構成し、8は浅い荷先状の沈線が横位に施されている。9～11は沈線間に刺突が施されている。12は2本の沈線が垂下している。13は口唇部に向かって起厚を増し、1条の沈線を横位に施している。14は深鉢形土器の胴部で、無文地の上に半截竹管具による波状文を垂下させている。15・16は胴部に斜行する沈線で格子目文を構成する深鉢形土器である。第15図1～8は櫛齒状条線文を継位、斜行、曲線的に施したもので、1～3の口縁部には無文帯が巡り、1条の沈線によって胴部と区分している。1の器表面には櫛齒状工具による刺突文が加えられている。2は波状口縁を呈す。9は口唇直下に沈線を施し、口縁部には無文帯が巡り、胴部と沈線によって区分している。10も口縁部に無文帯が巡り、太い沈線を1条施し、胴部の繩文上にも沈線を施している。11・12は縄文を施している深鉢形土器で、11の口辺部には太い沈線を巡らし、その上に3単位の円形刺突文を加えている。12は口縁部に無文帯が巡り、隆帶により胴部と区分している。13・14は隆帶上に山形の突起を持つ。13の隆帶上に押圧、14の隆帶上に刺突が加えら

れ、胴部文様は沈線で構成されている。15・17は縄文の地文上に沈線を施しているもので、15の微隆部上に刻みが施されている。18も縄文の地文上にヘラ状工具によって沈線を施している深鉢形土器の胴部である。逆「の」字状を呈する沈線施文の下から縦位に施している沈線間は磨り消している。19・20は器表面に縄文だけを施している。

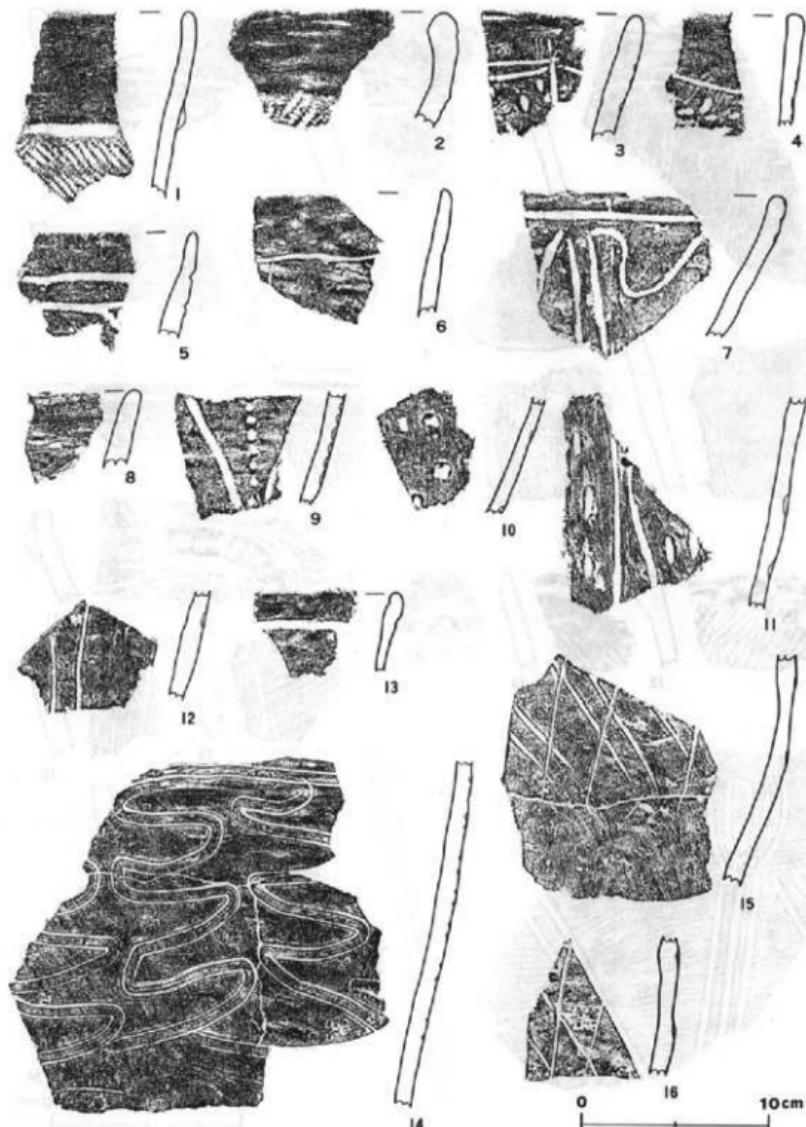


第13図 第3号住居跡出土土器実測図

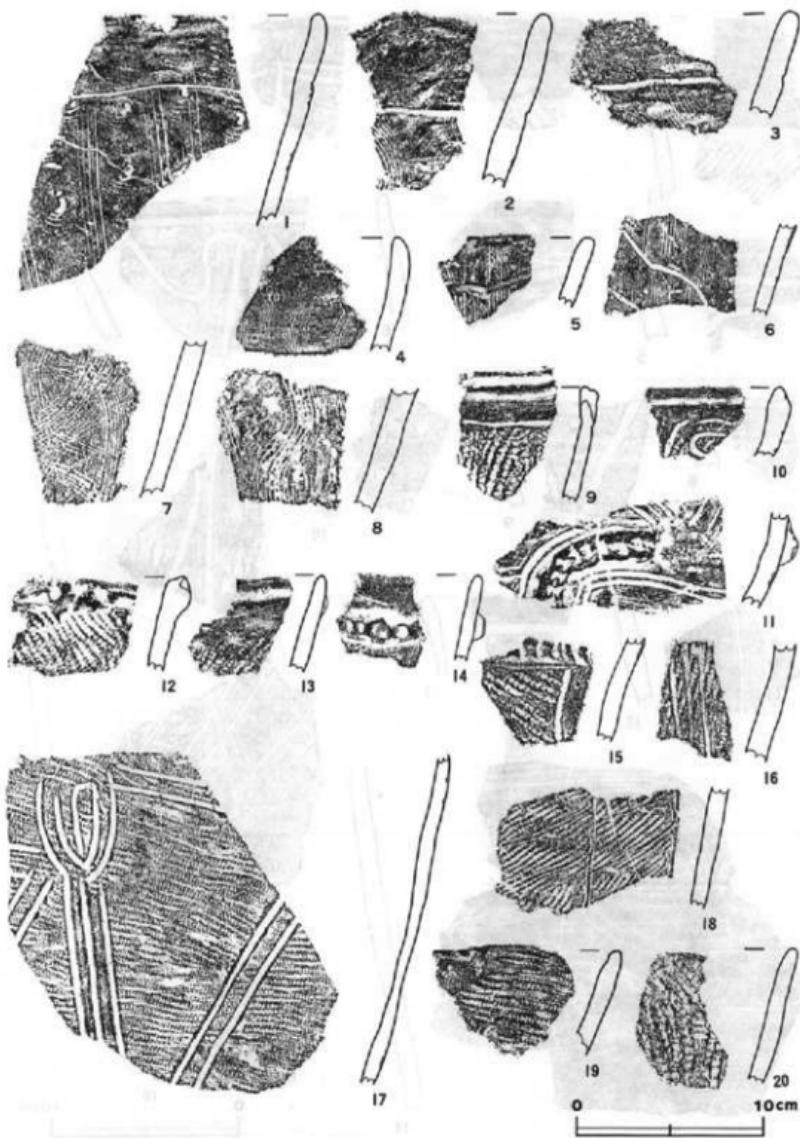
第4号住居跡（第16図）

1号住居跡の炉周辺を精査中、この炉から南西へ約1.5mのところに長径1.25m、短径0.8mの楕円形を呈する炉を新たに確認した。この新しく確認された炉を中心にさらに精査を進めたところ柱穴を検出し、住居跡であることが判明した。グリッド発掘時にローム層上面まで掘り下げていたので、ソフトローム層の上面を床としている本跡は壁の検出はできず、また、床面も露呈していただため詳細は不明である。そこで、炉と柱穴と考えられるピットの配列を手懸りとして、直径約4.3mの円形を呈するものと推定した。

炉は住居の平面プランの推定からすると、住居跡のはば中央に位置する。床面を17cm前後掘りくぼめた地床炉で、炉内に多量のローム粒子と焼土小ブロックを含み、炉床は硬く焼けている。



第14図 第3号住居跡出土土器拓影図(1)



第15図 第3号住居跡出土土器拓影(2)

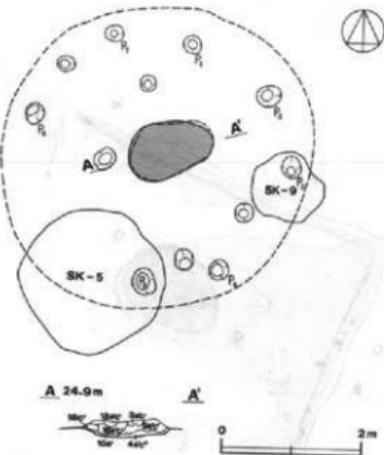
（昭和28年土器出発前）

柱穴と考える $P_1 \sim P_7$ は直径25~35cm、深さ23~50cmのものが多く、その間隔は一定していない。

遺物は縄文土器片が76点出土したが、大半が細片である。炉内から加曾利BI式に比定される土器片が出土したが、器種は不明である。

出土土器（第17図）

第17図は4号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は粗い縄文が施され、3は縄文を施文後、数条の沈線を巡らして縄文帯を表出し、さらに沈線文間に短い沈線文を輻位に施している。



第16図 第4号住居跡実測図

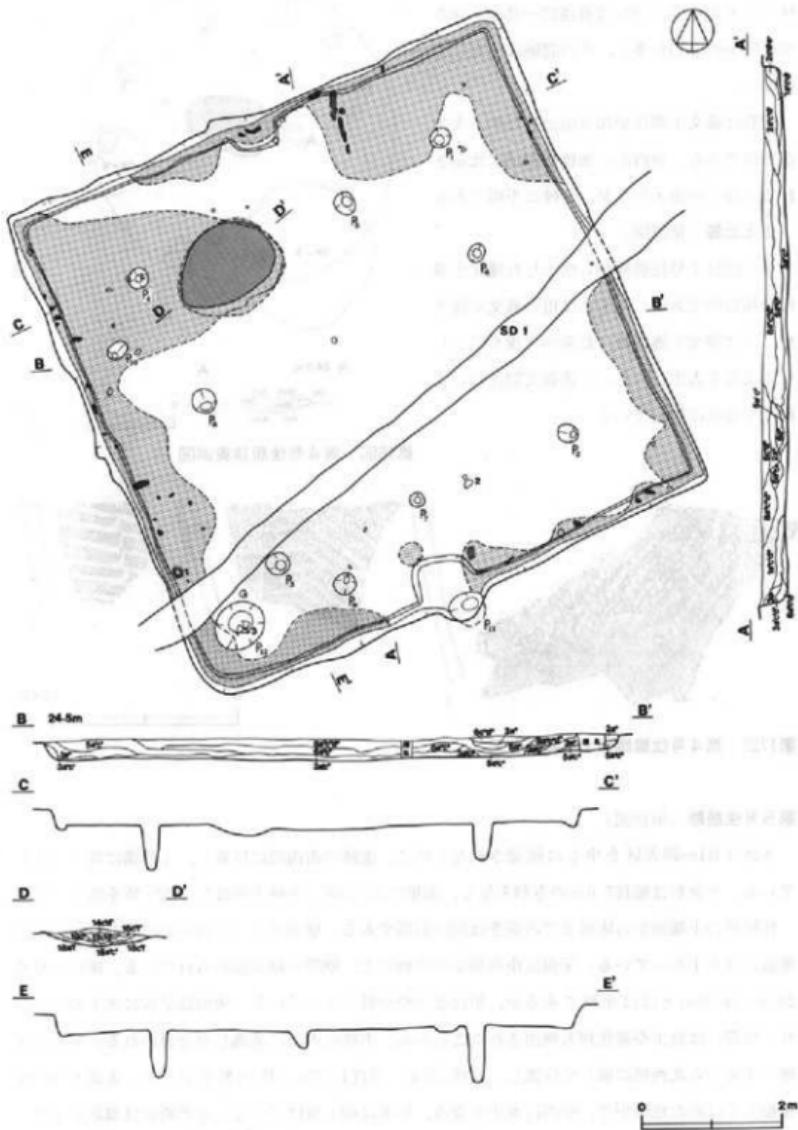


第17図 第4号住居跡出土土器拓影図

第5号住居跡（第18図）

本跡はB1c調査区を中心に確認されたもので、遺跡の南西端に位置し、1号溝に切り込まれている。平面形は軸長7.6mの方形を呈し、面積は56.63m²、主軸方向はN-22°-Wを指している。

住居跡の上端面から床面までの深さは30cm前後である。壁面はソフトロームで軟らかく、ほぼ垂直に立ち上がっている。床面は中央部がやや軟弱で、壁際が踏み固められている。床面は標高23.9~24.06mとほぼ平坦であるが、炉付近がやや低くなっている。床面は全体に赤く焼けており、壁際には焼土や炭化材も検出されたことから、本跡は火災に遭遇したと思われる。炉は住居跡の中央から北西側に偏して位置し、長径1.5m、短径1.07mの楕円形を呈する。床面を20cm前後掘りくぼめた地床炉で、炉内に焼土を含み、炉床は硬く焼けている。その断面は皿状を呈する。壁溝は全周しており、上幅10~20cm、深さ5~12cmで、南壁下中央部だけが深さ20cmと最も深く



第18図 第5号住居跡実測図

なっている。また、北壁下と南壁下のそれぞれ中央部が内側に大きく張り出している。柱穴は11か所検出され、 $P_1 \sim P_4$ は主柱穴、 $P_5 \sim P_8$ は間柱穴、 P_9 と P_{10} は補柱穴、 P_{11} は中軸上のビットと考えられる。 P_1 は北壁から1.4m、東壁から1.4m、 P_2 は東壁から1.5m、南壁から1.4m、 P_3 は南壁から1.5m、西壁から1.6m、 P_4 は西壁から1.45m、北壁から1.5mそれぞれ内側に位置している。主柱穴 $P_1 \sim P_4$ の断面はいずれも円筒形を呈している。 P_{12} は貯蔵穴で、南壁から0.9m、西壁から0.8mの南北隅に位置する。規模は上端0.75m×0.65m、下端0.37m×0.3mの長円形を呈し、その断面は深さ40cmの「一」字形を呈している。覆土の地質状況は自然堆積で、大きく4層に区分される。上層に縦まりがない黒褐色土、中間層に緑暗褐色土、下層にローム粒子や焼土粒子を含む褐色土、それに壁際には焼土粒子や炭化粒子を含む暗褐色土が堆積している。

住居跡柱穴計測表(cm)

	上端		下端		深さ	上端		下端		深さ	
	先端	後端	左側	右側		先端	後端	左側	右側		
P_1	33	27	15	14	58	P_7	20	19	12	9	22
P_2	30	25	11	9	62	P_8	35	33	18	13	26
P_3	34	32	16	14	86	P_9	21	25	12	9	28
P_4	30	28	11	9	68	P_{10}	31	22	9	8	48
P_5	33	26	16	14	18	P_{11}	50	43	23	18	30
P_6	28	22	14	12	25						

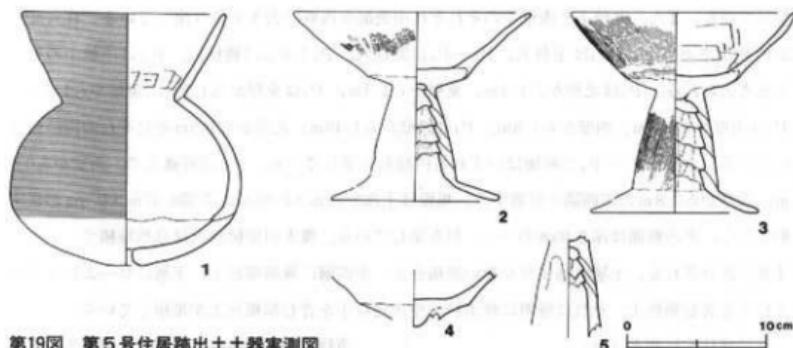
遺物は繩文土器、土師器、土製品等が出た。床面から完形の皿(1)、倒れた状態では(2)は完形の高杯(3)、貯蔵穴内からほぼ完形の高杯(4)、覆土中から繩文土器片1,179点、土師器の高杯、甕、壺等の破片、土器片鱗、土下、磨石等が出土した。

本跡は、古墳時代の和泉期に比定される遺構と思われる。

出土土器(第19・20図)

出土土器観察表(第19図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土	焼成色調	備考
1	甕	A 14.7	脚部下位に最大径をもち、腹部は「く」の字形を呈し、拘束部から外方へ直線的に併せて口縁部に至る。	ヘラなし。	砂粒・砂塵 青透 浅黄棕	90%	
		B 18.1			砂粒	70%	底部に孔を有する。
		C 2.5			砂粒	70%	
2	高杯	A 16.0	外縁は緩やかに外反し、口縁部は若干内傾する。接合部近くに枝を持つ。脚部は緩やかに開いているが、脚部に至り急に広がる。	剥け目調整。	砂粒	70%	
		B 14.4		环内面と口縁部の一部はなで替形。	砂粒 やや軟弱 にぶい黄棕		
		C 12.1			砂粒	70%	
3	高杯	A 17.0	外縁は外反し、接合部近くに枝を持つ。脚部は緩やかに開いているが、脚部に至り急に広がる。	环内面はなでて、环外面と脚部は剥け目調整。	砂粒・砂塵 やや軟弱 灰白	70%	
		B 13.5			砂粒	20%	
		C 12.0			良好		
4	高杯	B (3.6)	外縁と脚部の接合部で、脚部は接合部より大きな角度を持って傾斜し、枝を持つ。	内曲はヘラなし。	内-灰黄 外-黄灰		
		C (3.6)			砂粒	20%	
		D (3.6)			良好		
5	高杯	B (6.5)	脚部の一部分で、緩やかに開いている。	外丸はヘラなし。	内-灰黄 外-黄灰	50%	
		C (6.5)			砂粒・青透 やや軟弱 浅黄棕		
		D (6.5)			良好		



第19図 第5号住居跡出土土器実測図

第20図は5号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。縄文時代後期前半の堀之内式に比定される土器が大半である。縄文時代晩期に比定される土器(25)も1片出土している。

第6号住居跡（第21図）

本跡はA10調査区を中心に確認されたもので、遺跡のはば中央に位置し、東側が10号住居跡と、南東側が8号住居跡とそれぞれ重複している。また、中央部で重複している118号土壤は本跡より古い。ロームへの掘り込みが浅いため壁の検出ができず、平面形の確定はできなかった。柱穴と思われるピットの配列から考えて、長径6m、短径5.8mの円形を呈するものと推定した。

床面は炉のある中央部がややくぼむ皿状を呈し、炉の周辺は踏み固められている。炉は住居の平面プランの推定からすると、住居跡の中央からやや北側に偏して位置する。直径0.65mほどの不整円形を呈し、その断面は深さ15cm前後の皿状を呈する。炉内には焼土ブロックが堆積し、炉床は硬く焼けている。柱穴と考えるP₁～P₁₁は直径20～50cm、深さ20～55cmで、その間隔は一定していない。

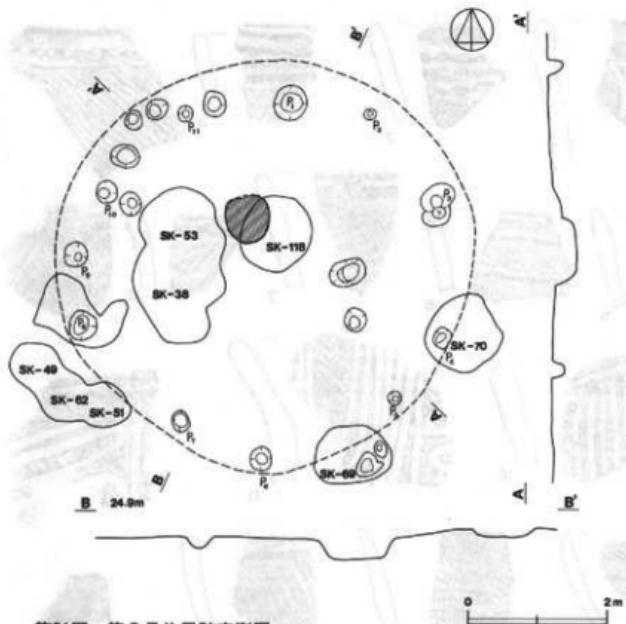
遺物は縄文土器片が673点出土したが、ほとんど覆土中からの出土で、しかも器形を推測できる土器はなかった。土器の大半は堀之内I式である。

出土土器（第22図）

第22図は6号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は縄文の地文上に横位の直線的な沈線を施している深鉢形土器で、口唇直下に深い沈線を1条配している。2は半截竹管による平行沈線を縦位に施している。3・4は無文地の上に沈線を渦巻状に施しているもので、4の口縁は大きく内傾する。5～14は縄文の地文上に沈線を施しているもので、5・6の口縁部には1条、7の口縁部には2条の沈線を横位に配し、8は口唇部に1条、口縁部に2条の沈線を横



第20図 第5号住居跡出土土器拓影図



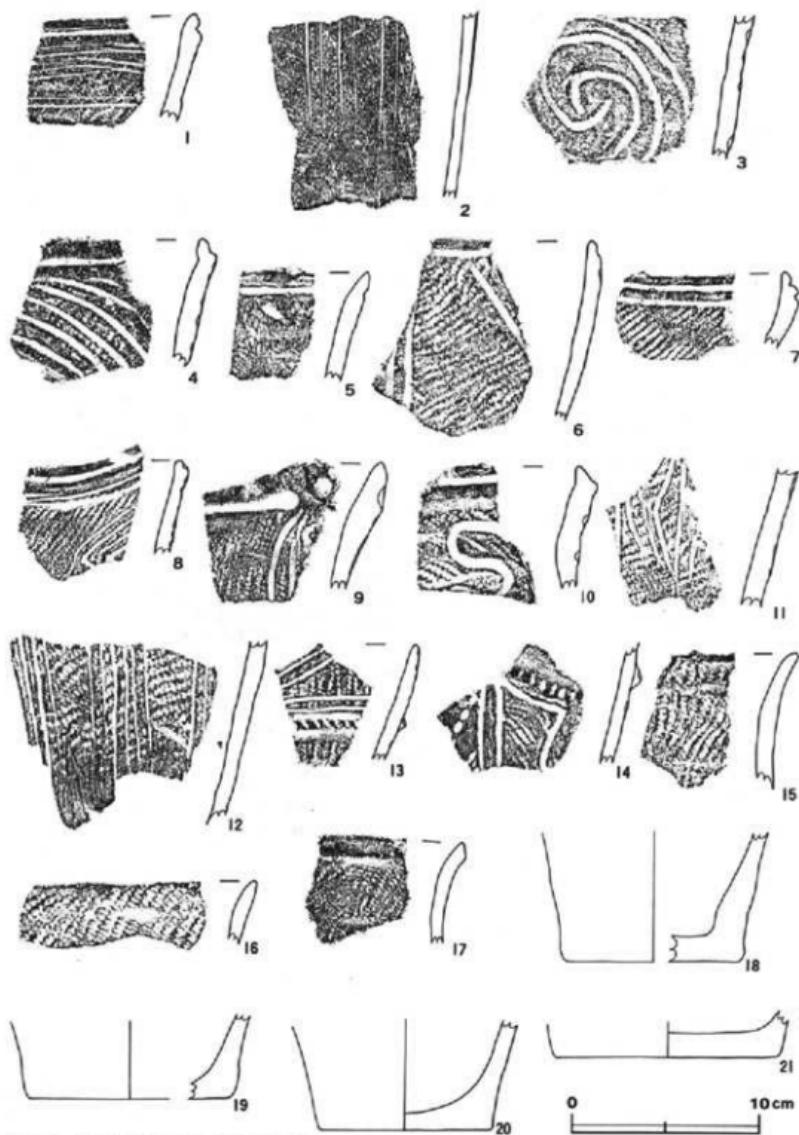
第21図 第6号住居跡実測図

位に配している。9は波状口縁を呈する深鉢形土器である。10は口唇に1条の沈線が施され、繩文の地文上にワラビ手状沈線が施されている。11は沈線を曲線的に、12は沈線を斜めから縦位に施している。13は波状口縁を呈し、口唇部は器厚が薄くなる。隆帯状に刺みを加え、隆帯の上部には2条の沈線を施している。14は隆帯上に刺突を加え、隆帯の横には沈線が施され、胴部文様を区画している。沈線間は磨り消している。15～17は器表面に繩文を施しているもので、15の口縁は外反する。16の口唇は平坦で、口縁はやや外反する。17の口縁は外反し、微隆起線をもつ。18～21は底部で、いずれも平底を呈している。

第7号住居跡（第23図）

本跡はA1he調査区を中心に確認されたもので、遺跡中央部からやや北側に位置し、北西側で3号住居跡に切り込まれている。長径4.8m、短径4.4mの長円形を呈する主体部と、その南側に付帯する柄部から成る「柄鏡形住居跡」である。

壁高は北側が25cm、東と南側が20cm、西側が10cmで、壁面は硬くほぼ垂直に立ち上がっている。床面は踏み固められて硬くほぼ平坦であるが、炉の周辺が若干低くなっている。炉は住居跡のほ

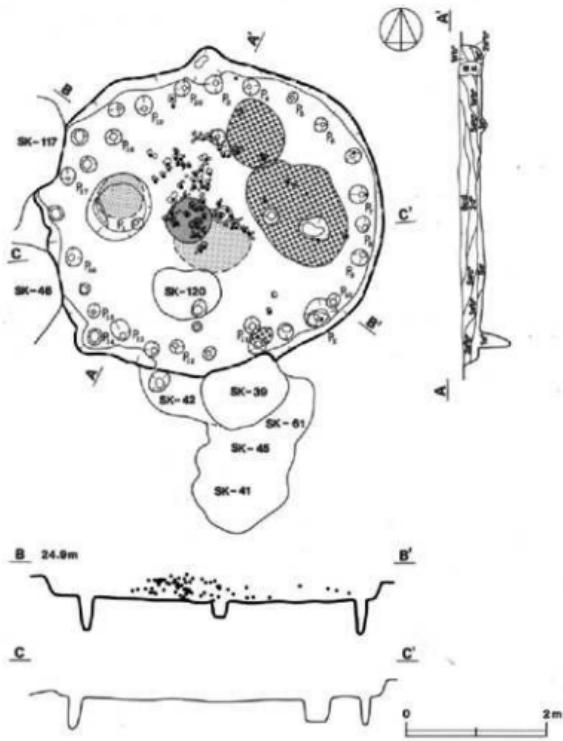


第22図 第6号住居跡出土土器拓影図

は中央に位置する。直径0.65mほどの円形を呈し、その断面は深さ20cm前後の擂鉢状を呈する。炉内に多量の焼土、焼土粒子、灰を含み、炉床は硬く焼けている。柱穴と考えるP₃～P₂₀は壁に沿ってほぼ円形に巡り、直径20cm前後、深さ35～62cmのものが多い。他の住居跡より柱穴の数は比較的多く、柱穴の規模や柱穴相互の間隔も一定している。P₁は直径90cmほどの円形を呈し、床面からの深さ45cmほどの規模を有する土壇と思われる。覆土はローム粒子、焼土粒子、ハードローム小ブロックを含む暗褐色土と褐色土が堆積している。主体部南側には長径2.1m、短径0.9mの柄部が付帯しているが、39号土壇に切り込まれて不明な部分がある。柄部からやや内側の2か所のピットは45cm、65cmと深い。主体部と柄部の床面に段差はない、平坦に接続している。住居跡の覆土は大きく3層に分けられ、上層に黒褐色土、下層に褐色土、壁際に暗褐色土が堆積している。

遺物は多量の縄文土器片2,840点と石器3点が出土し、土器片の大半は縄文時代後期のものである。この土器の散布状況は、炉の北側に分布が偏りながら、器形を推測できる土器は3個体である。

また、垂直的に土器の出土状況をみると、床面からの出土はほとんどない。P₂中からほぼ完形の深鉢形土器が斜立の状態で出土した。埋襲と考えられる。この掘り込み面は長径47cm、短径38cm、深さ34cmである。また、P₁付近の床面から30cmほど浮いて、口縁部を下にした状態で完形の浅鉢が出土した。石器は、炉の北側の覆土中から打製石斧が1点、北東側の覆土中から局部磨製石斧が1点、P₁₈付近の床面から

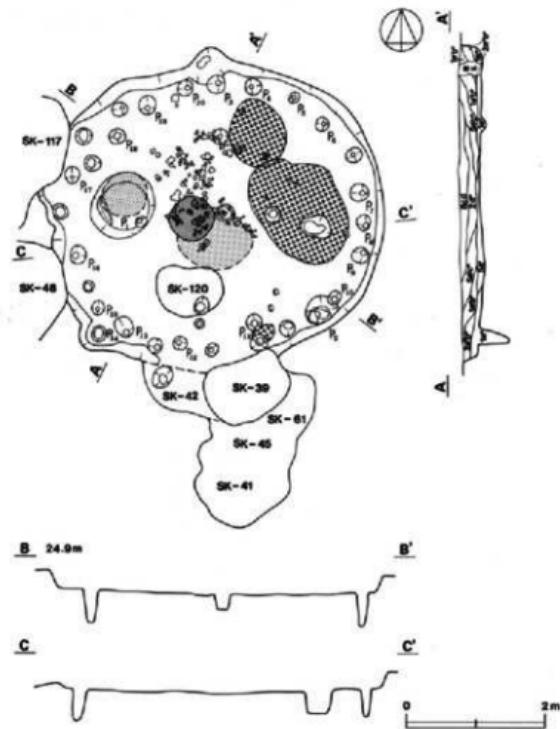


第23図 第7号住居跡実測図

は中央に位置する。直径0.65mほどの円形を呈し、その断面は深さ20cm前後の播鉢状を呈する。炉内に多量の焼土、焼土粒子、灰を含み、炉床は硬く焼けている。柱穴と考えるP₃～P₂₀は壁に沿ってほぼ円形に巡り、直径20cm前後、深さ35～62cmのものが多い。他の住居跡より柱穴の数は比較的多く、柱穴の規模や柱穴相互の間隔も一定している。P₁は直径90cmほどの円形を呈し、床面からの深さ45cmほどの規模を有する土壇と思われる。覆土はローム粒子、焼土粒子、ハードローム小ブロックを含む暗褐色土と褐色土が堆積している。主体部南側には長径2.1m、短径0.9mの柄部が付帯しているが、39号土壇に切り込まれて不明な部分がある。柄部からやや内側の2か所のピットは45cm、65cmと深い。主体部と柄部の床面に段差はなく、平坦に接続している。住居跡の覆土は大きく3層に分けられ、上層に黒褐色土、下層に褐色土、壁際には暗褐色土が堆積している。

遺物は多量の縄文土器片2,840点と石器3点が出土し、土器片の大半は縄文時代後期のものである。この土器の散布状

況は、炉の北側に分布が偏りがちで、器形を推測できる土器は3個体である。また、垂直的に土器の出土状況をみると、床面からの出土はほとんどない。P₂中からはほぼ完形の深鉢形土器が斜立の状態で出土した。埋甕と考えられる。この掘り込み面は長径47cm、短径38cm、深さ34cmである。また、P₁付近の床面から30cmほど浮いて、口縁部を下にした状態で完形の浅鉢が出土した。石器は、炉の北側の覆土中から打製石斧が1点、北東側の覆土中から局部磨製石斧が1点、P₁付近の床面から



6cmほど浮いて石皿片が 第23図 第7号住居跡実測図

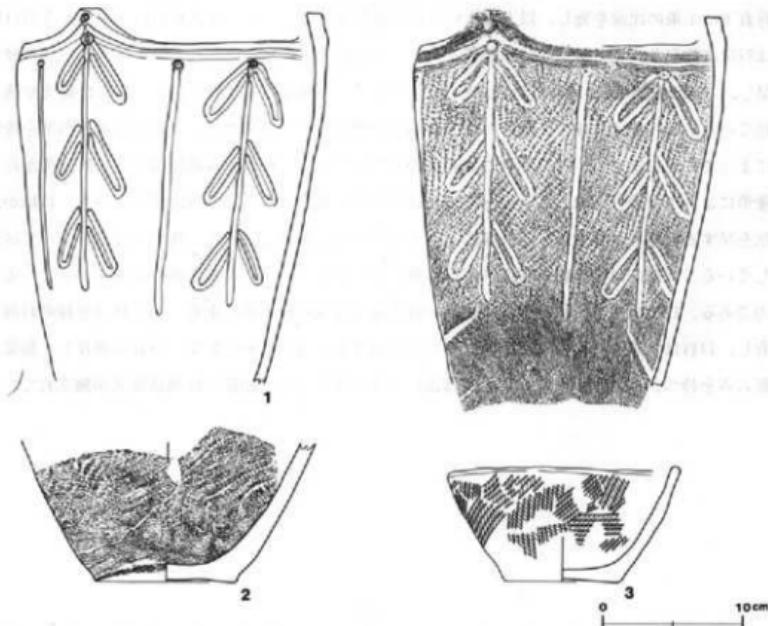
1点出土した。

貝の堆積ブロックが北東側と東側の2か所にみられた。貝の散布が床面に達しているところもあるので、本跡の廃絶後間もなく投棄されたものと思われる。

出土土器 (第24~26図)

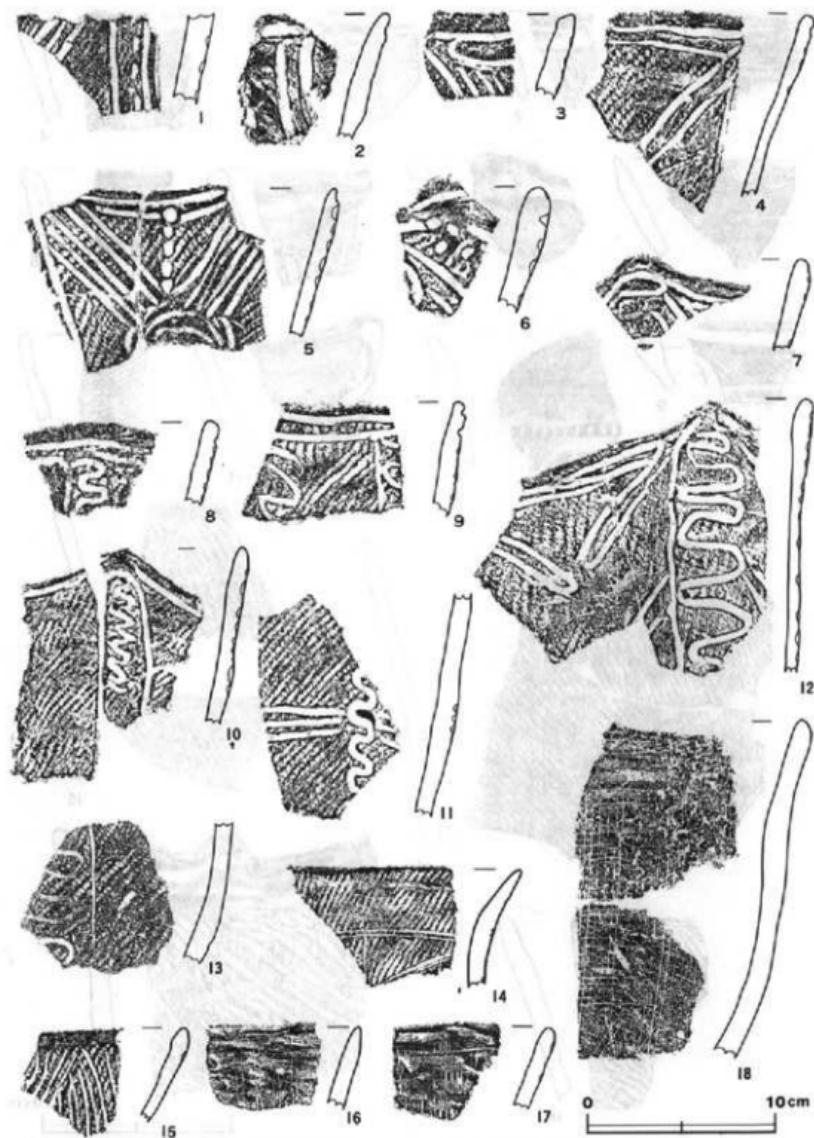
出土土器観察表 (第24図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土	成色	備考
1	圓錐形土器	A 21.1 B(26.3)	底部からほぼ垂直な立ち上がりを示し、口縁部はやや内側する。口部は平坦で、小突起を3単位有する。 口縁に沿って太い沈線を1条施して無文面を作出し、その下は縦文地 上に山形の沈線文を3段に施している。さらに瓶底の太い沈線を1条ずつ 施下させ、その上端部に円形の刺突文を加え、突起部口刃部にも同じ 刺突文を加えている。	砂粒・長石 普通 内-にほい黄橙色 外-赤褐色	85% 底部欠損 埋蔵	
2	錐形土器	B(10.0) C(10.0)	瓶部から大きく開いて立ち上がる。 胴部に斜縞文を施し、下半分はなで整形による無文である。	砂粒・長石・黒雲母 普通 内-橙色 外-にほい橙色	底部60%	
3	浅杯形土器	A 16.4 B 8.4 C 8.2	平底から若干内寄しながら口縁部に至る。口縁は緩やかな波状を呈し、 口部は丸味を持つ。 器表面に縦文を回転施文している。	砂粒 普通 褐灰色	80% 口縁部半欠	

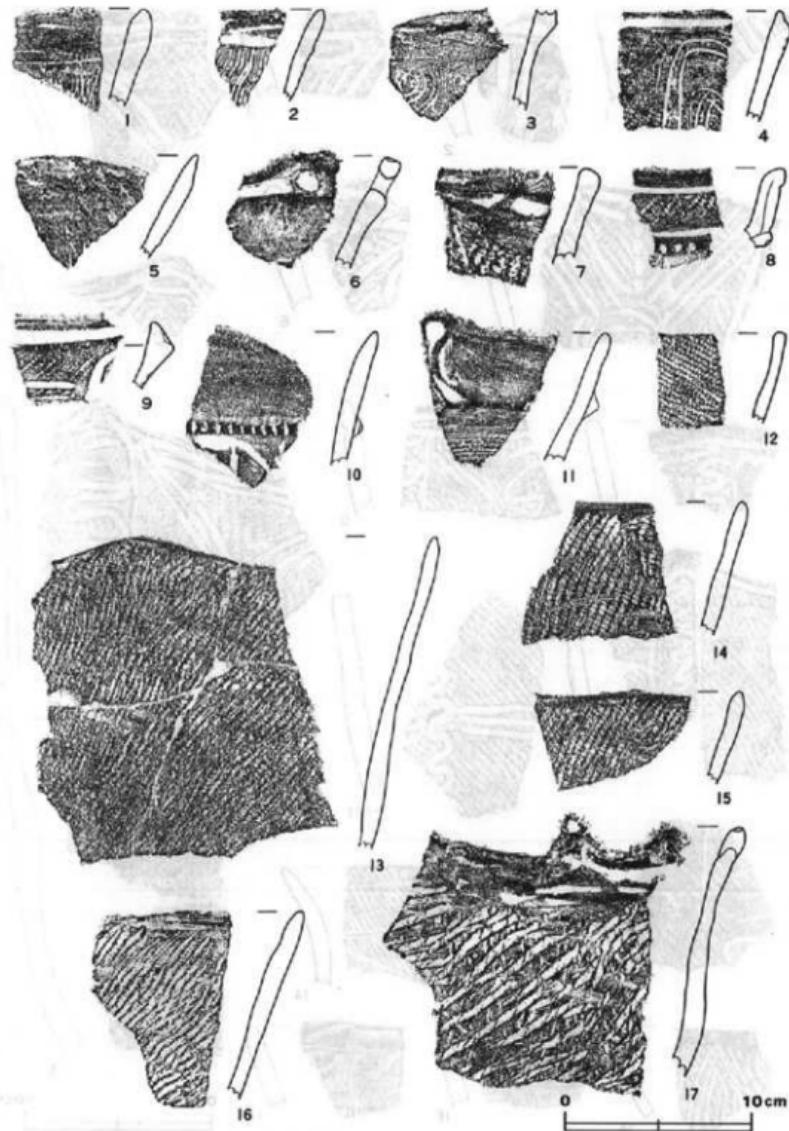


第24図 第7号住居跡出土土器実測図

第25・26図は7号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第25図1は縄文の地文上に沈線を施し、沈線間に刺突を加えている土器で、壺之内I式の古手に属する。2~4は粗製土器で、縄文の地文上に沈線を施している。5~14も縄文の地文上に沈線を施しているもので、5は波状口縁を呈し、口唇は器厚を減じている。口唇直下に1条の沈線を巡らし、ヘラ状工具によって沈線を縱位、新めに施している。さらに同一工具による刺突を縱位に施し、その頂に円形の刺突を加えている。6~11も波状口縁を呈する深鉢形土器である。6の口縁部には円形の刺突を斜めから加え、8~13は沈線を波状に垂下させている。14は口縁が外反し、口唇は丸味を持つ。頸部に平行沈線を巡らし、口縁部と胴部を区分している。15の口縁は肥厚し、口唇は尖っている。縄文の地文上に密な沈線を斜行させている。16~18と第26図1~3は齒突状条線文を有するもので、16は縦位に、17は断続的に縦位にそれぞれ施している。18は波状口縁を呈し、口縁はやや外反し、胴部は緩やかに膨らむ深鉢形土器である。口縁部には条線を横位に、胴部には直線的な条線を交差させている。第26図1は口縁部にヘラ状工具によって整形された無文帯を持ち、条線を斜位、縱位に施している。2は条線を波状に落とし、口縁部に棒状工具による横位の沈線を施している。3は口縁部に無文帯を持ち、口縁部と胴部が隆帯によって区分されている。4は口唇直下に1条の沈線を施し、以下弧状の沈線を施している。5~6は波状口縁を呈し、5の口唇は斜位に整形されている。6は隆起帯を有し、小突起の下に孔が穿たれている。7も波状口縁を呈し、口縁は肥厚し、口唇は斜位に整形されている。口縁部に無文帯が巡り、胴部に縄文が施されている。8~9は沈線で区画された中に縄文を充填しているもので、8は口縁部と胴部を隆帯によって区分している。その隆帯には刺突が施されている。10は口縁部に幅の広い無文帯が巡り、隆帯によって胴部と区分している。隆帯上には刻みが施されている。11は把手を持ち、口縁が波状を呈する深鉢形土器である。口縁部に無文帯が巡り、胴部とは断面三角形の隆帯によって区分している。胴部には齒突状条線文が横位に施されている。12~17は器表面に縄文を施しているものである。12は薄手の土器で、13は波状口縁を呈する深鉢形土器である。14~16は平縁の口縁を有し、口唇は丸味を持つ。17は2個一对の小突起を有する深鉢形土器で、口縁は外反し、胴部は膨らみを持つ。口唇は平坦であり、口縁部には無文帯が巡り、胴部には無節縄文が施されている。



第25図 第7号住居跡出土土器拓影図(1)



第26图 第7号住居跡出土土器拓影図(2)

江口遺跡出土由鶴源の多下原 1975年

第8号住居跡（第27図）

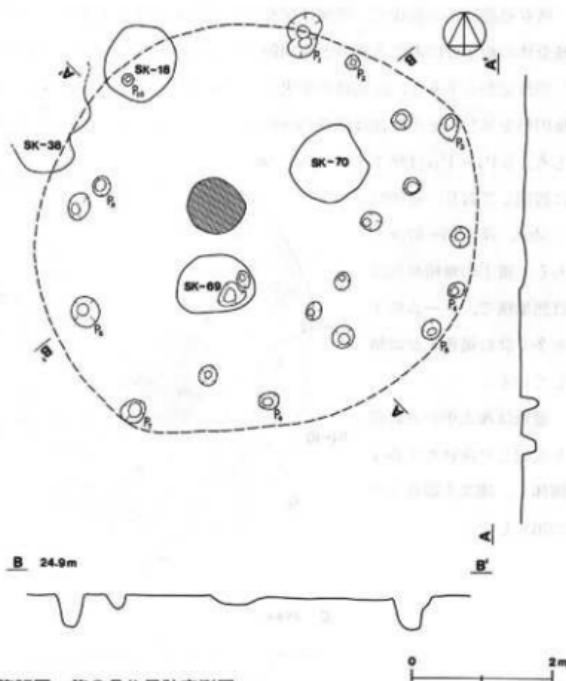
本跡はグリッド発掘で炉だけが確認され、炉の周辺を精査したところ柱穴を検出し、住居跡であることが判明した。北側で10号住居跡と、北西側で6号住居跡とそれぞれ重複している。壁を検出できなかったため柱穴と思われるピットの配列から考えて、長径6.5m、短径6mの長円形を呈するものと推定した。

床面は平坦で、堅緻である。炉は住居の平面プランの推定からすると、住居跡の中央からやや西側に偏して位置し、長径0.8m、短径0.75mのはば円形を呈する。床面を12cm前後掘りくぼめた地床炉で、炉内に焼土ブロックを含み、炉床は焼けている。炉を中心にして、直径1.1mの同心円状に焼土が散布していた。柱穴と考えるP₁～P₁₀は直径18～42cm、深さ20～45cmで、その間隔は一定していない。

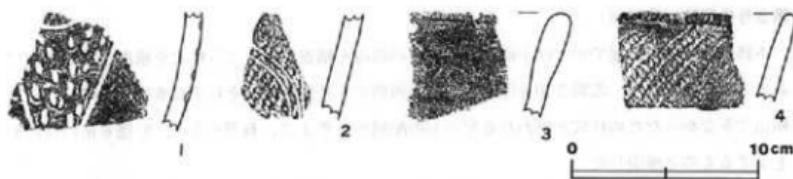
遺物は縄文土器片が44点出土したが、覆土中からのもので、しかも細片が多い。土器片の大半は縄文時代後期初頭に比定されるものである。

出土土器（第28図）

第28図は8号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は沈線で区画された中に刺突が施されている。2は縄文の地面上に半截竹管具によって平行沈線を弧状に施している。3は無文の深鉢形土器で、口縁は肥厚する。4は器表面に斜縄文を施している。口唇は平坦である。



第27図 第8号住居跡実測図



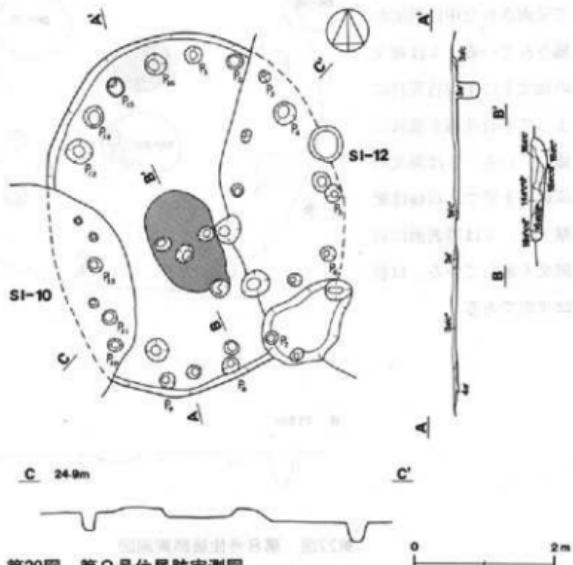
第28図 第8号住居跡出土土器拓影図

第9号住居跡（第29図）

本跡はA2ii調査区を中心に確認されたもので、東側で12号住居跡、南西側で10号住居跡を切り込んでいる。10・12号住居跡との重複部分では壁を検出できなかつたため平面プランの確定はできなかつたが、北側と南側の残存壁と柱穴と考えられるピットの配列から、長径5.2m、短径4.2mの橢円形を呈し、長径方向はN-22-Wを指すものと推定される。

残存壁高は7cm前後で、壁面は緩やかに外傾して立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、住居跡全体の約半分にあたる東側と南西側を除いた部分しか検出できなかつた。炉は住居の平面プランの推定からすると、住居跡の中央からやや南側に偏して位置する。長径1.5m、短径0.95mの橢円形を呈し、その断面は深さ13cm前後の「～」形を呈している。炉床は硬く焼けている。柱穴と考えるP₁～P₁₆は壁下に周回しており、直径17～34cm、深さ16～57cmである。覆土の堆積状況は自然堆積で、ローム粒子を多く含む褐色土が堆積している。

遺物は覆土中から底部を欠損した深鉢形土器1個体と、縄文土器片4点が出土した。



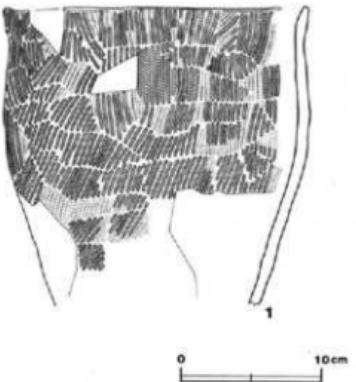
第29図 第9号住居跡実測図

出土土器 (第30・31図)

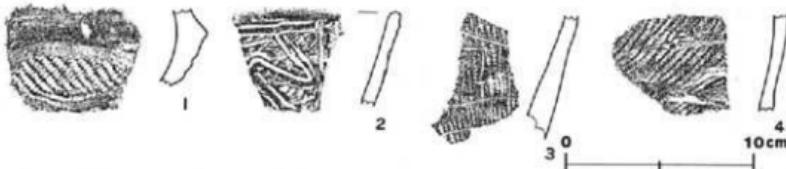
出土土器観察表 (第30図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土	焼成	色調	備考
1	筒形土器	A 21.9 B(21.2)	胸部上部にやや膨らみを持ち、腹部がやや括れ、口縁部は若干外傾する。 器表面に縦文を施している。	砂粒・長石・スコリア 普通 褐色	25%	一部黒味	

第31図は9号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部に無文帯が巡り、胸部には縦文を施している。口縁部と胸部は両側からなぞった断面三角形の隆筋によって区分し、口縁は内脣する。2は縄文の地文上に平行する2本の沈線でモチーフを描いたものである。3も2と同様の施文方法であるが、平行する2本の沈線を直線的に施している。4の胸部には単節斜縄文を施している。2~4は堀之内式に比定される。



第30図 第9号住居跡出土土器実測図



第31図 第9号住居跡出土土器拓影図

第10号住居跡 (第32図)

本跡はA2ii調査区を中心に確認されたもので、遺跡のはば中央に位置し、東側で9号住居跡、南側で8号住居跡、西側で6号住居跡にそれぞれ切り込まれている。平面形は長径3.3m、短径3mの長円形を呈する。

残存壁高は10cm前後で、壁面は緩やかに外傾して立ち上がっている。床面はほぼ平坦であるが、炉の周辺が踏み固められて若干低くなっている。本跡の床面は、12号住居跡の床面より7cmほど低い。床の色は黄褐色土で、床面全体にわたって少量の炭化粒子が散布している。炉は住居跡の中央から若干西側に偏して位置し、長径0.95m、短径0.82mの楕円形を呈する。床面を10cm前後

掘りくぼめた地床炉で、炉床は凸凹している。主柱穴と考えるP₁～P₄は、直徑14～24cm、深さ28～50cmで、壁下から10～25cm内側に離れて長円形状に巡っている。柱穴相互の間隔は50～100cmの範囲内である。また、主柱穴と考えるピット間に、深さ30cm前後の柱穴がやはり長円形状に巡っている。覆土の堆積状況は自然堆積で、上層に黒褐色土、下層にローム粒子を多く含む暗褐色土、西側から北側にかけての壁際には極暗褐色土が堆積している。

遺物は縄文土器片1,123点、石器1点 第32図 第10号住居跡実測図
が出土し、土器片の大半は加曾利E式

と塙之内式の古手である。この土器の散布状況は、炉付近と炉の西側と北側の3か所に偏っており、器形を推測できる土器は2個体である。垂直的に土器の出土状況をみると、床面に近い土器片は少ない。炉の上面から胴上部を欠いた深鉢形土器が出土した。石器は磨製石斧の基端部が、覆土中から出土した。

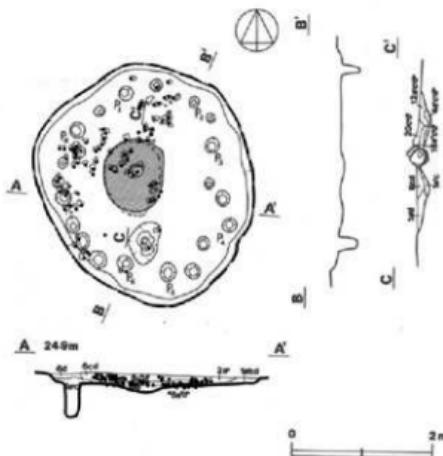
出土土器（第33・34図）

出土土器観察表（第33図）

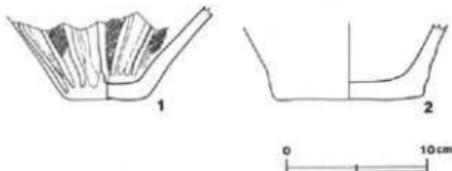
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土	焼成	色調	備考
1	鉢形土器	B (6.0) C 6.0	底部から直線的に開いて立ち上がる。 胴部は底の沈線により、無文帯と縄文帯を交互に作り出している。	砂粒・長石 良好	内・黒褐色 外・暗赤褐色	底部90%	
2	深鉢形土器	B (5.2) C 10.6	底部からやや外反ぎみに立ち上がる。 胴下半部外面はヘナでの無文を呈している。	砂粒 軟弱	内・灰褐色 外・青い褐色	底部100%	

第34図は10号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は沈線文を有するもので、1は密な沈線を横位に、2は沈線を綫位に施している。

3は口縁部に無文帯が巡り、隆帶によ
つて胴部と区分している。胴部は沈線



第32図 第10号住居跡実測図



第33図 第10号住居跡出土土器実測図

掘りくぼめた地床炉で、炉床は凸凹している。主柱穴と考えるP₁～P₄は、直径14～24cm、深さ28～50cmで、壁下から10～25cm内側に離れて長円形状に巡っている。柱穴相互の間隔は50～100cmの範囲内である。また、主柱穴と考えるピット間に、深さ30cm前後の柱穴がやはり長円形状に巡っている。覆土の堆積状況は自然堆積で、上層に黒褐色土、下層にローム粒子を多く含む暗褐色土、西側から北側にかけての壁際には極暗褐色土が堆積している。

遺物は縄文土器片1,123点、石器1点
が出土し、土器片の大半は加曾利E式

と塙之内式の古手である。この土器の散布状況は、炉付近と炉の西側と北側の3か所に偏っており、器形を推測できる土器は2個体である。垂直的に土器の出土状況をみると、床面に近い土器片は少ない。炉の上面から胴上部を欠いた深鉢形土器が出土した。石器は磨製石斧の基礎部が、覆土中から出土した。

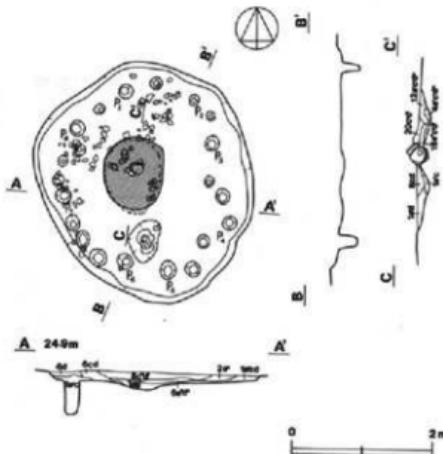
出土土器（第33・34図）

出土土器観察表（第33図）

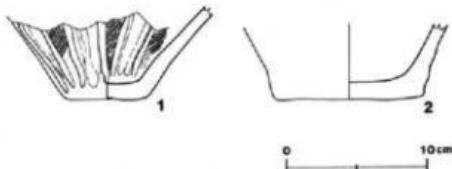
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土	焼成	色調	備考
1	鉢形土器	B(6.0) C 6.0	底部から直線的に開いて立ち上がる。 胴部は概位の沈線により、無文帯と縄文帯を交互に作り出している。	砂粒・長石 良好	底部90%	内・黒褐色 外・暗赤褐色	
2	深鉢形土器	B(5.2) C 10.6	底部からやや外反ぎみに立ち上がる。 胴下半部外面はヘラなどの無文を呈している。	砂粒 砂質	底部100%	内・灰褐色 外・よい橙色	

第34図は10号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は沈線文を有するもので、1は密な沈線を横位に、2は沈線を綫位に施している。

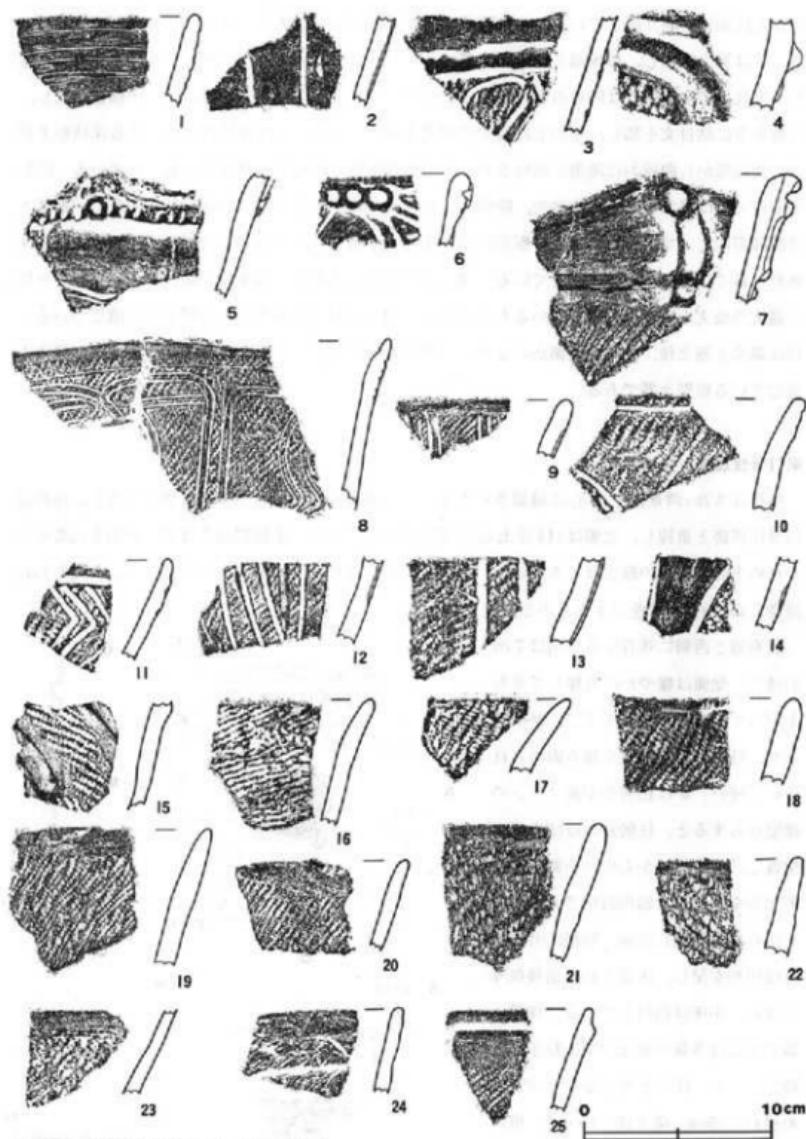
3は口縁部に無文帯が巡り、隆背によ
って胴部と区分している。胴部は沈線



第32図 第10号住居跡実測図



第33図 第10号住居跡出土土器実測図



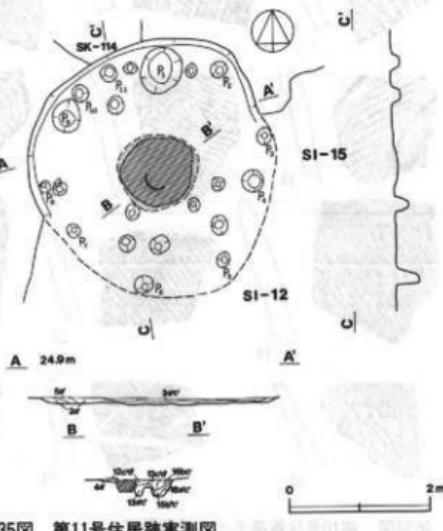
第34図 第10号住居跡出土土器拓影図

による区画外を磨り消している。4は隆帯によって区画文を構成し、区画内に縄文を充填している。5は無文を呈し、口縁部と胴部は隆帯によって区分し、隆帯上にヘラ状工具による刻みを施し、突起下の隆帯上には円形の刺突がなされている。6は無文の上に沈線による文様を構成し、口唇直下に貼付文を施し、その上に円形の刺突を加えている。7は波状口縁を呈する深鉢形土器で、突起部から曲線的に隆帯が貼付され、その両端にさらに円形の貼付文が施されている。円形の貼付文には棒状工具による刺突、隆帯上には沈線が施されている。口縁部は無文帶で、胴部とは微隆帯によって区分している。胴部には無節縄文が施されている。8は口縁がやや外反する深鉢形土器で、口唇は器厚を減じている。縄文の地文上に沈線による文様を構成している。9～13も縄文の地文上に沈線を施しているものである。14は沈線で区画された外側を磨り消している。15は縄文を施文後、隆帯を両側からなぞって微隆起を作り出している。16～25は器表面に縄文を施している粗製土器である。

第11号住居跡（第35図）

本跡はA2h₂調査区を中心に確認されたもので、遺跡の中央からやや北東側に位置し、南側は12号住居跡と重複し、北側は114号土壤に切り込まれている。重複部分では壁が検出されなかつたため平面プランの確定はできないが、柱穴と思われるピットの配列から考えると、長径3.7m、短径3.4mの長円形を呈するものと推定した。

北東側と西側に残存する壁高は7cm前後で、壁面は緩やかに外傾して立ち上がっている。床面は平坦で、堅緻であり、特に炉周辺は良く踏み固められていて硬い。炉は住居の平面プランの推定からすると、住居跡のはば中央に位置し、炉の中心からやや南側に深鉢形土器を配する土器埋設炉である。掘り込み面は長径1.05m、短径0.97mのはば円形を呈し、床面を10cm前後掘りくぼめ、炉床は凸凹している。埋設土器の中には多量の焼土や焼土粒子が堆積していた。柱穴と考えるP₁～P₁₁は直径17～65cm、深さ15～40cmで、壁に沿って巡っている。覆土の堆積状況は



第35図 第11号住居跡実測図

自然堆積で、ローム粒子を多く含む褐色土が堆積している。

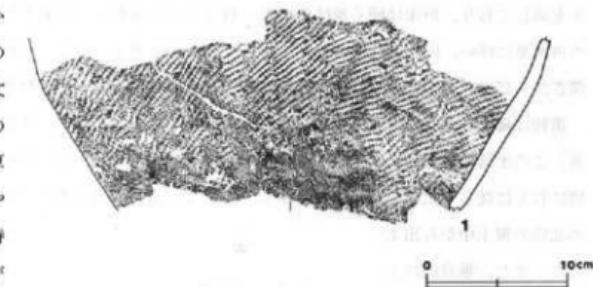
遺物は縄文土器片 9 点と石器 1 点が出土した。炉埋設土器は深鉢形土器の胴部を利用したものである。石器は打製石斧で、南西側の覆土中から出土した。

出土土器 (第36・37図)

出土土器観察表 (第36図)

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢形土器	B(12.3)	器厚は 1cmほどで、胴部は大きく開いている。 胴上半部は斜縄文を施し、下半部はヘラなどでによる磨り消しが行われている。	砂粒・長石 やや軟弱 内一によい黄褐色 外一によい褐色	25%	口縁部と底 部欠損	

第37図は11号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1 は縄文の地面上に断面三角形の隆帯を施している。器厚は厚い。2 は口縁がやや内反し、口唇は丸味を持つ。口縁部には無文帯があり、胴部には縄文を施している。口縁部と胴部は微隆起によって区分されている。3 は口縁が内凹し、器表面には縄文を施している。



第36図 第11号住居跡出土土器実測図



第37図 第11号住居跡出土土器拓影図

第12号住居跡 (第38図)

本跡は A2iz 調査区を中心に確認されたもので、北側で11号住居跡、北東側で15号住居跡、西側で9号住居跡とそれぞれ重複している。地形が東側に緩やかに傾斜しているところなので、それ

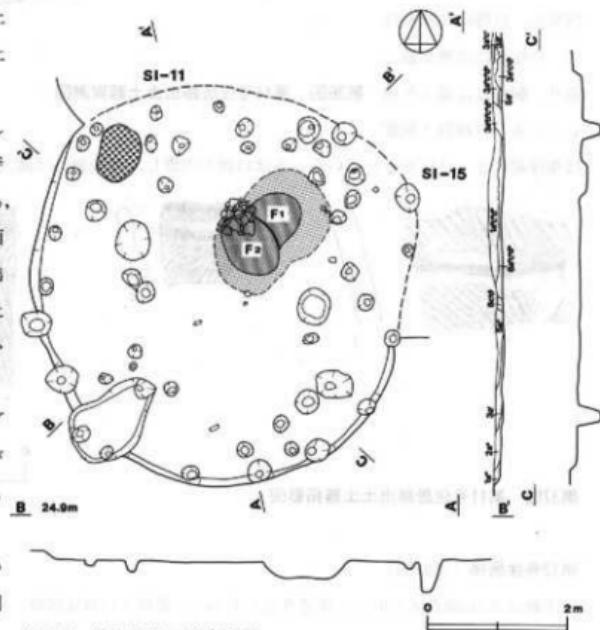
その遺構の覆土が流されており、その切り合ひ関係は判然としない。炉と柱穴と考えられるピットの配列を手懸りとして、本跡は長径5.7m、短径5.2mの長円形を呈するものと推定した。

南側に残存する壁高は12cmで、壁面は硬く、緩やかに外傾して立ち上がっている。床面は平坦で、堅緻である。本跡の床面は、9号住居跡の床面より10cmほど低く、15号住居跡の床面とはレベル差がない。炉は住居の平面プランの推定からすると、住居跡の中央からやや北東側に偏して位置する。F1は長径1m、短径0.72mの楕円形を呈し、床面を10cm前後掘りくぼめた地床炉である。F2は長径1m、短径0.7mの楕円形を呈し、床面を30cm前後掘りくぼめた地床炉である。最初にF1を使用し、途中からF1の南西部を切り込んでF2を構築している。どちらの炉内にも焼土が充満しており、炉床は硬く焼けている。柱穴と考えるピットはおむね二重に巡っており、炉の再構築に伴い、同心円状にプランを拡張したものと考えられる。これらの柱穴は直径20~30cm、深さ20~45cmのものが多く、その間隔は一定していない。覆土の堆積状況は自然堆積である。

遺物は縄文土器片676点、石器2点、土器片錐43点が出土した。土器の大半は加曾利E式である。この土器の散布状況は住居跡全体に満遍なく出土したが、特に炉付近からの出土が多く、南側に行くに従って土器の分布は幾分少なくなっている。器形を推測できる土器は1点だけで、炉の北側の覆土中から出土

した。また、垂直的に土器の出土状況をみると、床面からの出土はほとんどない。石器は打製石斧が南東側のピット中から、磨製石斧が南西側の床面からそれぞれ1点ずつ出土した。土器片錐は覆土中から37点、炉の上面から6点出土した。

また、北西隅にハマグリを主とする貝の堆積があり、床面直上にも貝が堆積しているので、本跡が廃絶して間もない時期に廃棄場所として利用されたものと思われる。



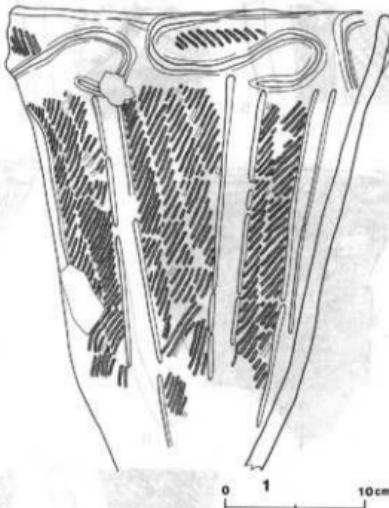
第38図 第12号住居跡実測図

出土土器（第39・40図）

出土土器観察表（第39図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢形土器	A 27.4 B(32.9)	胴下部にやや膨らみを持ち、口縁部は緩やかに彎曲している。口唇部は丸味を帯びている。 口縁部は横帶による格円文と消れた溝文が複合し、口近部に短い施文具による輪状回転溝文を施している。胴部は沈線により、無文帶と縦文施文帶とを交互に作り出している。	砂粒・長石 やや灰弱	内一にぶい黄褐色 外一黄灰色	80% 底部欠損	

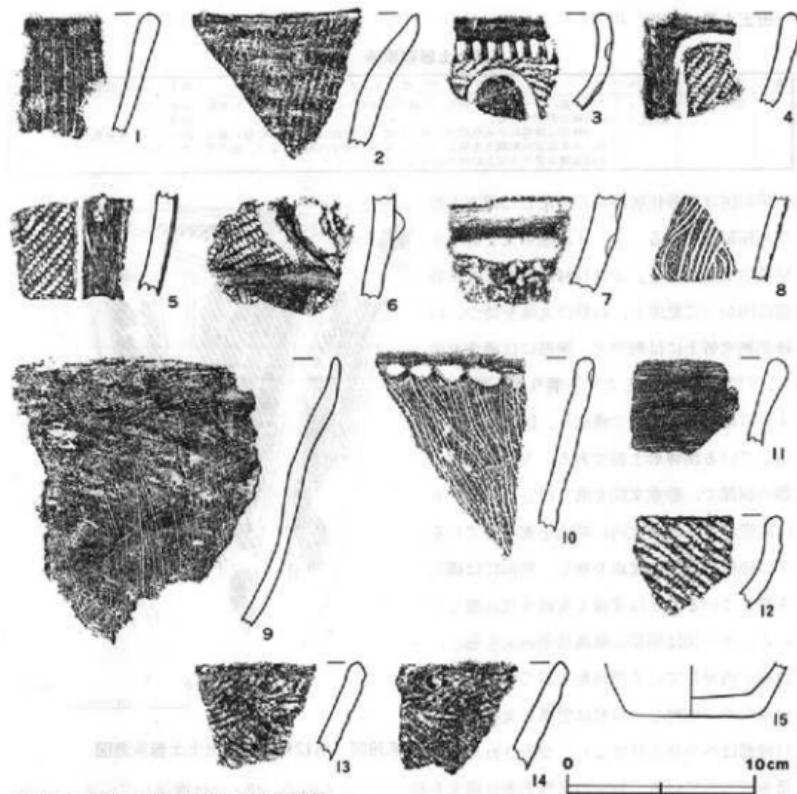
第40図は12号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は撚糸文を有する早期の土器である。3は口縁が内脣し、口唇部に向かって肥厚し、口唇は丸味を持つ。口縁部無文帶上には刺突文、胴部には縄文を施し、「U」形に区画した中を磨り消している。4は口縁部を区画文で構成し、区画外を磨り消している深鉢形土器である。5は深鉢形土器の胴部で、懸垂文間を磨り消している。6は隆帶による区画文内に縄文を充填している。7は隆帶の上下に沈線を施し、胴部には縄文を施している。8は沈線を条線文状に施している。9・10は胴部に横齒状条線文を施し、口縁がやや内脣し、口唇は肥厚し丸味を持つ。11は口縁部はヘラ状工具によって整形された無文帶を巡らしている。12～14は器表面に縄文を施しているもので、13・14は摩滅している。15は底部で、平底を呈している。



第39図 第12号住居跡出土土器実測図

第13号住居跡

12号住居跡の炉のあり方から、2軒の住居跡が重複していることを予測させたので、F1をもつ住居跡を12号、F2をもつ住居跡を13号とした。しかし、12号住居跡の調査を進めていくうちに、炉の再構築と共にプランの拡張が行われたものであると判断し、1軒の住居跡として取り扱い、13号住居跡を欠番とした。



第40図 第12号住居跡出土土器拓影図

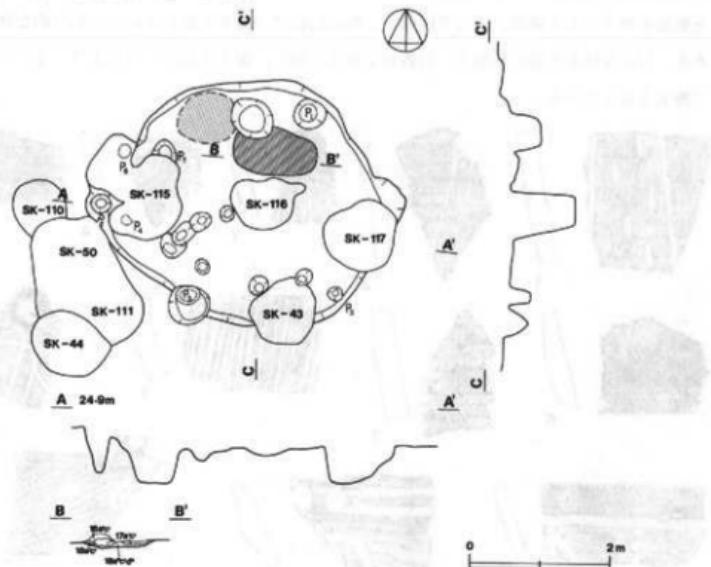
第14号住居跡（第41図）

3号住居跡を調査中、南側床面に暗褐色土の落ち込みが確認され、これを14号住居跡として調査を進めていった。東側が117号土壙、南側が43号土壙、西側が115号土壙に切り込まれており、中央部で116号土壙と重複している。平面形は長径4m、短径3.5mの長円形を呈している。

壁高は6~15cmで、南側が最も低い。壁面は緩やかに外傾して立ち上がっている。床面は踏み固められていて硬く、中央部がややくぼむ皿状を呈している。本跡の床面は、3号住居跡の床面より12cmほど低い。炉は住居跡の中央から北側に偏して位置し、長径1.2m、短径0.7mの楕円形を呈している。床面を11cm前後掘りくぼめた地床炉で、炉内に焼土を多く含み、炉床は硬く焼けている。柱穴と考えるP₁~P₇は直径21~43cm、深さ20~68cmで、P₄~P₇は出入口に関するビ

ットと思われる。覆土の堆積状況は自然堆積で、焼土粒子を多く含む暗褐色土が堆積している。

遺物は縄文土器片が483点ほど出土したが、全て覆土中からの出土で、しかも細片が多い。土器片の大半は縄文時代後期のものである。

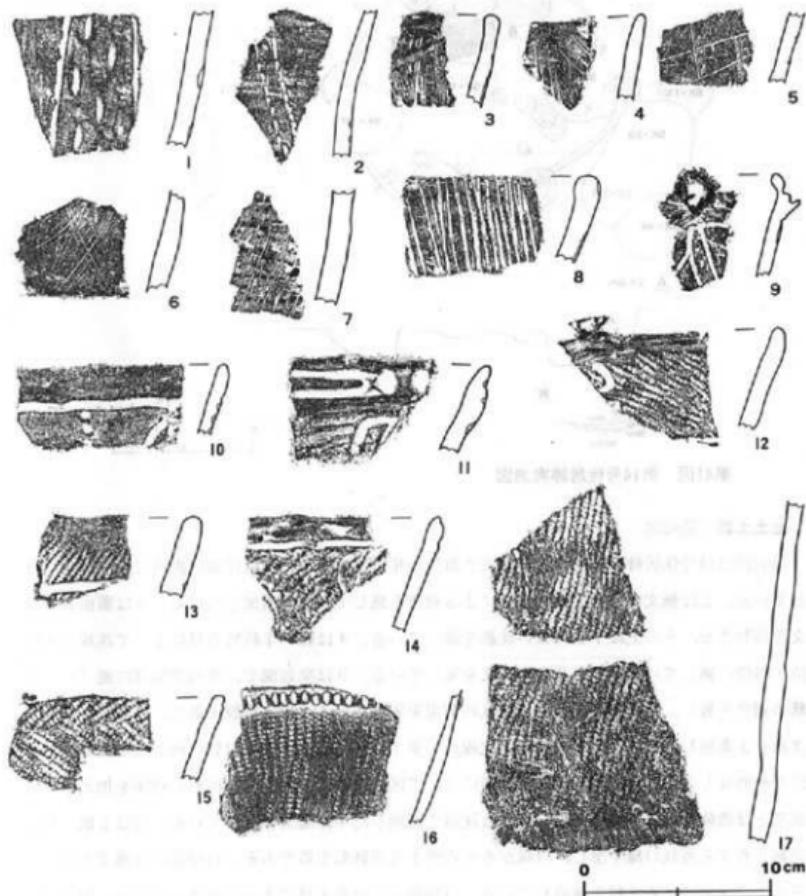


第41図 第14号住居跡実測図

出土土器（第42図）

第42図は14号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は沈線区画内に列点刺突を施している。2は無文の上を半截竹管具による刺突を施して文様を構成している。3は櫛歯状条線文を斜行させ、その上に1条の太い沈線を施している。4は細い半截竹管具によって沈線文を縱位・斜位に施している。5～8も沈線文を施している。9は突起部で、突起突端部に逆「C」字状の刺突を施し、沈線の区画内に列点状の刺突を施している。10は粗製土器で、口縁部に横位の沈線を1条施し、ヘラ状工具の刺突を沈線から垂下させている。11は口唇に向かって尖り、口縁はやや外反している。口縁部文様は沈線によって区画構成し、区画間に円形の押圧を加えている。胸部とは微隆帯によって区分し、胴部は沈線で区画した中に縄文を施している。12は2個一対の突起を有する波状口縁を呈し、口縁がやや内彎する深鉢形土器である。口縁部には縄文を施し、その上に沈線による文様を構成している。口唇部はヘラ状工具によってなぞっている。13は波状口縁を呈し、口唇は平坦である。地文に縄文を施し、口辺部は磨り消し無文帶となっている。胴

部とは太い沈線によって区分し、沈線上に円形竹管文を押圧している。14は1条の沈線によって口縁部無文帯を作り出し、以下に繩文を施し、その上を沈線による溝文を施している。15は器表面に羽状繩文を施している。内面はヘラ状工具によって整形し、口唇は平坦である。16は口縁部と胴部を刻みのある隆帯によって区分し、胴部に縱位の繩文を施している。部分的な磨り消しがある。17は深鉢形土器の胴部で、器表面に繩文を施し、胴下半部はヘラ状工具によって整形されて無文となっている。



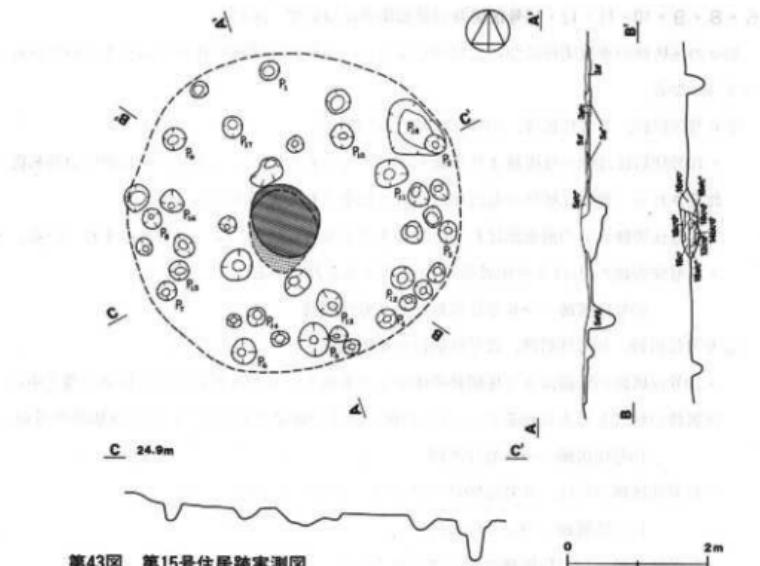
第42図 第14号住居跡出土土器拓影図

第15号住居跡（第43図）

東側に向かって緩やかに傾斜している遺跡中央部から北東側に、重複し合う7軒の住居跡（6・8・9・10・11・12・15号）を検出した。本跡はこのうち最も北東端に位置し、南西側が12号住居跡と重複している。緩斜面に構築されているためローム層への掘り込みはほとんどなく、しかもグリッド発掘でローム層上面まで掘り下げていたので、壁を検出できなかった。炉と柱穴と考えられるピットの配列を手懸りとして、直径4.5mほどの円形を呈するものと推定した。

床面は東に向かって傾斜しており、炉の周辺は硬くやや低くなっている。炉は住居の平面プランの推定からすると、住居跡の中央に位置する。長径1.1m、短径0.9mの楕円形を呈し、その断面は深さ20cm前後の階鉢状を呈している。炉内に焼土、焼土粒子、炭化粒子を含み、炉床は硬く焼けている。柱穴と考えるピットは、壁際に配列するP₁～P₉と壁下から40～90cm内側に離れて配列するP₁₀～P₁₇で、おおむね二重に巡っており、平面プランを同心円状に拡張したものと思われる。これらの柱穴は直径28～35cm、深さ30～55cmのものが多い。P₁₈は長径0.95m、短径0.7mの楕円形状を呈する土壙と考えられる。P₁₈の覆土は、ローム粒子を多く含む褐色土が堆積している。床面から壙底面までの深さは18cmほどであるが、本跡の柱穴と考えるP₂によって南東端が切り込まれているため、本跡よりもP₁₈の方が古いと思われる。

遺物は縄文土器片が34点、覆土中から出土しただけである。土器片の大半は縄文時代後期初頭

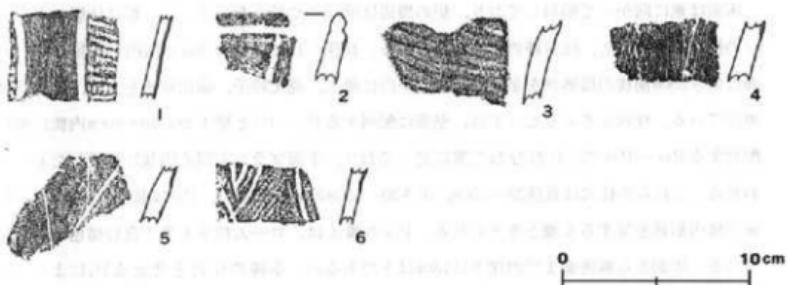


第43図 第15号住居跡実測図

のものである。

出土土器（第44図）

第44図は15号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は地文に縄文を施し、沈線間を磨り消している。2は口縁部に横位の沈線を施し、さらに斜行する沈線を施している。3には4本単位の櫛齒状条線文、4には斜行する条線文をそれぞれ施している。5は「Y」字状の沈線、6は縄文の地文上に沈線を施している。



第44図 第15号住居跡出土土器拓影図

6・8・9・10・11・12・15号住居跡の新旧関係について（第45図）

個々の住居跡の重複関係について整理しながら、7軒の住居跡の新旧関係をまとめてみると次のようになる。

① 6号住居跡、8号住居跡、10号住居跡の新旧関係

・10号住居跡は他の住居跡より床面も低く、しかも炉内から出土した土器が加曾利E III式に比定される。他の住居跡からは堀之内式に比定される土器が出土している。

・6号住居跡の炉の南東部はわずかではあるが8号住居跡によって切り込まれている。

・6号住居跡のP₃は8号住居跡のP₁に切り込まれている。

10号住居跡→6号住居跡→8号住居跡

② 9号住居跡、10号住居跡、12号住居跡の新旧関係

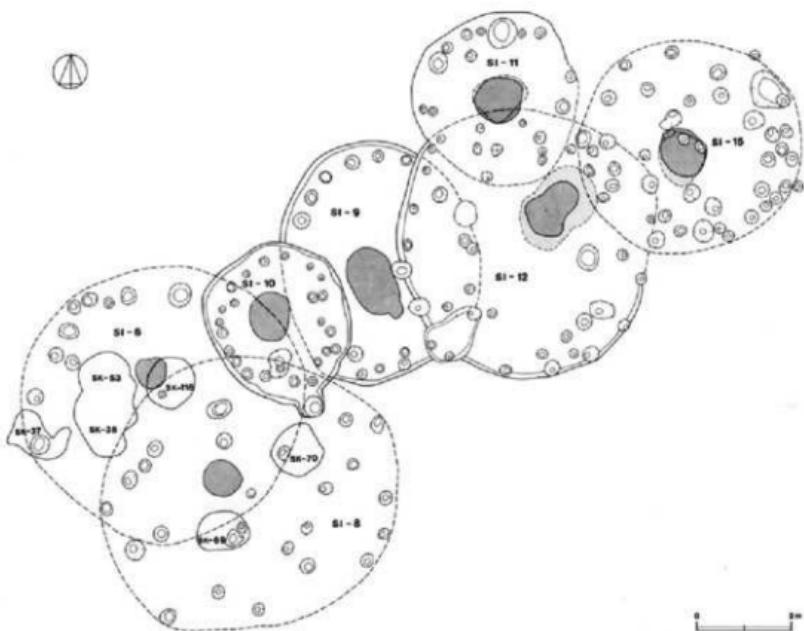
・10号住居跡の床面は9号住居跡の床面よりも低く、9号住居跡との重複部の覆土中に9号住居跡の柱穴と考えられるP₁₀～P₁₂の掘り込みが確認されたので、10号住居跡の方が古い。

10号住居跡→9号住居跡

・12号住居跡の炉は、9号住居跡のP₉によって切り込まれている。

12号住居跡→9号住居跡

・10号住居跡と12号住居跡の関係は不明である。



第45図 第6・8・9・10・11・12・15号住居跡関連図

③11号住居跡、12号住居跡、15号住居跡の新旧関係

・11号住居跡の炉埋設土器は加曾利E IV式に比定される土器で、12号住居跡からは加曾利E III式、15号住居跡からは堀之内式を主体とする後期前半の土器が出土している。

12号住居跡→11号住居跡→15号住居跡

これらと各住居跡からの出土遺物や土層断面に表れたものなどを総合してみると

10号住居跡 } → 11号住居跡 → 9号住居跡 → 6号住居跡 } → 8号住居跡となる。
12号住居跡 } 15号住居跡 }

10号住居跡と12号住居跡はいずれも中期末（加曾利E式期）、6号住居跡と15号住居跡はいずれも後期前半（堀之内式期）に属しており、同時存在か、あるいは近接した時間内に相前後して構築したものであろう。

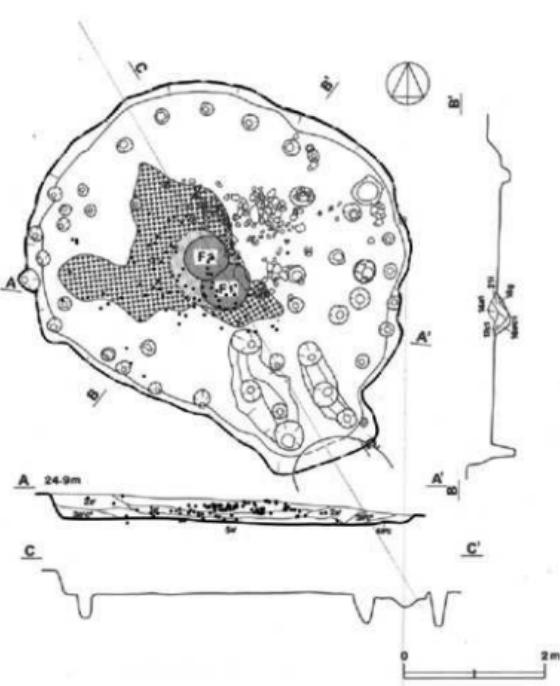
第16号住居跡（第46図）

本跡は A2g₁ 調査区を中心確認されたもので、遺跡の北側縁辺部に位置し、西側で119号土壇を切り込んでいる。長径5.5m、短径4.5mの楕円形を呈し、長径方向は N-35°-W を指す主体部と、その南東側に付帯する柄部から成る「柄鏡形住居跡」である。

壁高は10~30cmで、壁面は硬く、緩やかに外傾して立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、堅緻であるが、若干東側に向かって傾斜している。炉

の周辺は、特に良く踏み固められている。炉は主

体部のほぼ中央に2か所検出された。F2はF1の北西端を一部切り込んで構築しており、F1の方が古い。F1は直径0.7mの円形を呈し、その断面は深さ45cmの円筒状を呈している。F2は直径0.6mの円形を呈し、その断面は深さ20cmの擂鉢状を呈している。いずれも炉内に焼土、焼土粒子、灰を多く含み、炉床は硬く焼けている。F2には灰が環状に残り、さらに同レベルでF1の上面にも同じ灰ブロックが検出されている。これらの灰は灰汁抜きに使用されたものであろうか。柱穴と考えるビットは壁下と壁間に二重に巡っており、直径20cm前後、深さ20~55cmのものが多い。11・12号住居跡に比べて柱穴の数が多く、やや内側に傾斜しているものもみられる。柱穴の規模や柱穴相互の間隔は一定していない。主体部南東側には平行して並ぶ2列のビット群から成る柄部が付帯している。この2列のビット群の間の床面は平坦で、良く踏み固められている。主体部と柄部の床面は段差なく、平坦に接続している。本跡は炉が2か所検出されたことと、柱穴と考えるビットの数の多さや配列から、住居跡の拡張もしくは建て替えが行われたと思われるが、この柄部は拡張より以前にあったものか、それとも拡張の際に新たに構築されたものであるかは

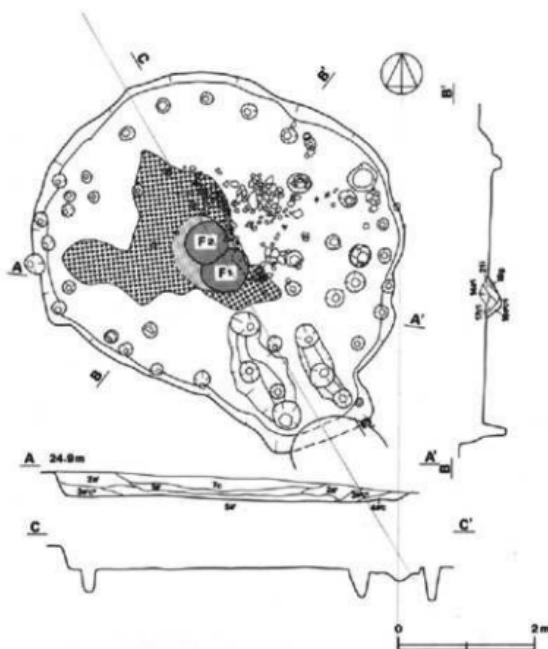


第46図 第16号住居跡実測図

第16号住居跡（第46図）

本跡はA2g₁調査区を中心確認されたもので、遺跡の北側縁辺部に位置し、西側で119号土壇を切り込んでいる。長径5.5m、短径4.5mの楕円形を呈し、長径方向はN-35°Wを指す主体部と、その南東側に付帯する柄部から成る「柄鏡形住居跡」である。

壁高は10-30cmで、壁面は硬く、緩やかに外傾して立ち上がっている。床面はほぼ平坦で、堅緻であるが、若干東側に向かって傾斜している。炉の周辺は、特に良く踏み固められている。炉は主



第46図 第16号住居跡実測図

体部のほぼ中央に2か所検出された。F2はF1の北西端を一部切り込んで構築しており、F1の方が古い。F1は直径0.7mの円形を呈し、その断面は深さ45cmの円筒状を呈している。F2は直径0.6mの円形を呈し、その断面は深さ20cmの擂鉢状を呈している。いずれも炉内に焼土、焼土粒子、灰を多く含み、炉床は硬く焼けている。F2には灰が環状に残り、さらに同レベルでF1の上面にも同じ灰ブロックが検出されている。これらの灰は灰汁抜きに使用されたものであろうか。柱穴と考えるピットは壁下と壁際に二重に巡っており、直径20cm前後、深さ20-55cmのものが多い。11・12号住居跡に比べて柱穴の数が多く、やや内側に傾斜しているものもみられる。柱穴の規模や柱穴相互の間隔は一定していない。主體部南東側には平行して並ぶ2列のピット群から成る柄部が付帯している。この2列のピット群の間の床面は平坦で、良く踏み固められている。主體部と柄部の床面は段差なく、平坦に接続している。本跡は炉が2か所検出されたこと、柱穴と考えるピットの数の多さや配列から、住居跡の拡張もしくは建て替えが行われたと思われるが、この柄部は拡張より以前にあったものか、それとも拡張の際に新たに構築されたものであるかは

不明である。覆土の地積状況は自然堆積で、上層は混土貝層で、底面にローム粒子を多く含む褐色土、壁際に暗褐色土が堆積している。

遺物は縄文土器片2,154点、土製品4点が出土し、土器片の大半は堀之内I式である。この土器の散布状況は、炉の周辺に分布が偏っており、器形を推測できる土器は7個体である。垂直的に上器の出土状況をみると、床面上からはわずかで、覆土上部から出土しているものが多い。土製品は土器片2点、土製円板1点、有孔円板1点で、いずれも覆土中からの出土である。

また、炉付近から西側にかけて貝の堆積がみられ、炉の内部や床面直上にまで堆積しているので、本跡が廃絶して間もない時期に廃棄場所として利用したものと思われる。

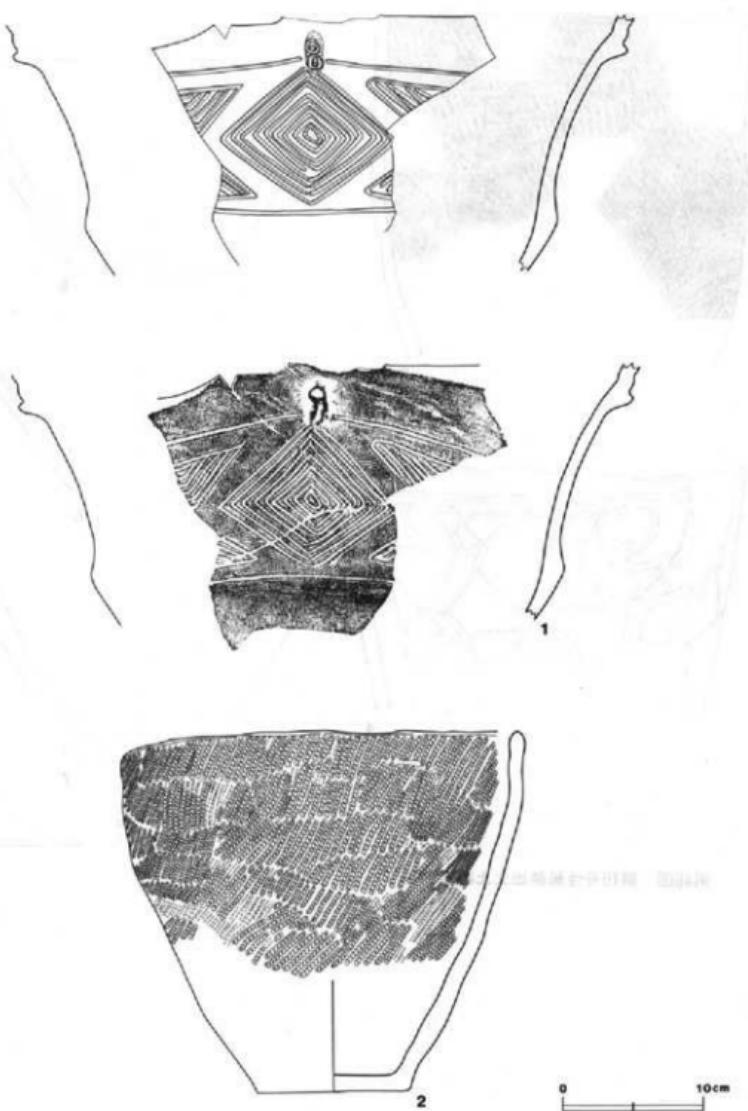
出土土器（第47～51図）

出土土器観察表（第47・48図）

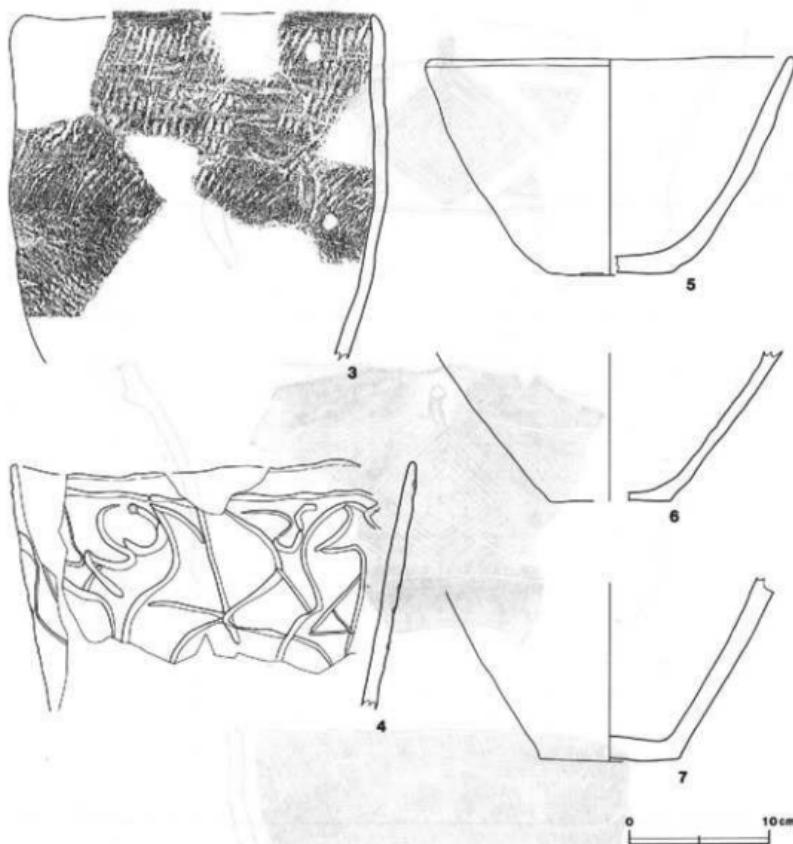
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土焼成色調	備考
1	深鉢形土器	B(18.0)	底部に膨らみを持ち、頸部から口縁部にかけて若干外反し、口唇部は内側に小さく突出して、内に棱を持つ。口唇上に突起を有するものと思われる。口縁部無文帯の下に1条の沈線を横位に施し、沈線による三角形、菱形文を頸部に施している。胴部との境に1条の横位の沈線を施して区分している。地文に縦文を充填、口縁部に8字状の貼付文が附加されている。	砂粒・長石・青母良内一橙色外にぶい赤褐色	口縁部20%
2	深鉢形土器	A 28.0 B 25.5 C 10.9	底部から若干の膨らみを持って立ち上がり、胴部中位がやや折れ、口縁部は直立する。 器表面に縦文のみを施し、胴下半部はていねいなでによる無文を呈している。	砂粒・スコリア・長石やや軟弱内一橙色外一褐色	98%
3	深鉢形土器	A(25.0) B 24.5	胴上部に僅かな括れを持ち、口縁部は内弯する。 器表面に反転の縦文が施され、口選部には無文帯が巡っている。口縁部の孔は貫通し、胴部には孔が穿たれているが、貫通していない。	砂粒やや軟弱内一灰青褐色外にぶい橙色	35%
4	深鉢形土器	A(29.2) B(17.7)	口縁部は僅かに外反し、口唇部は丸味をおびる。継やかな波状口縁を呈している。 無文地にヘラ描きによって口縁部に太い沈線を1条横位に施し、その下は太い沈線による幾何学的文様を構成している。	砂粒・雲母・長石やや軟弱内一にぶい黄橙色外一淡黄色	口縁部40%
5	鉢形土器	A(25.3)	底部から内反しつつ開いて立ち上がる	砂粒・長石	40%

	B 15.5 C (9.0)	り、口縁部は内側する。口唇部は丸味を持つ。 器表面はていねいななでによる無文を呈している。	普通 にぶい赤褐色	
6	体形土器 B (10.7) C (8.8)	底部から直線的に大きく開いて立ち上がる。 脛下部はヘラなでによる無文を呈している。	砂粒・長石・石英 軟弱 にぶい橙色	15%
7	深鉢形土器 B (12.2) C (10.0)	底部から直線的に開いて立ち上がる。 脣下部はヘラなでによる無文を呈している。	砂粒・長石・スコリア 良 にぶい赤褐色	底面60%

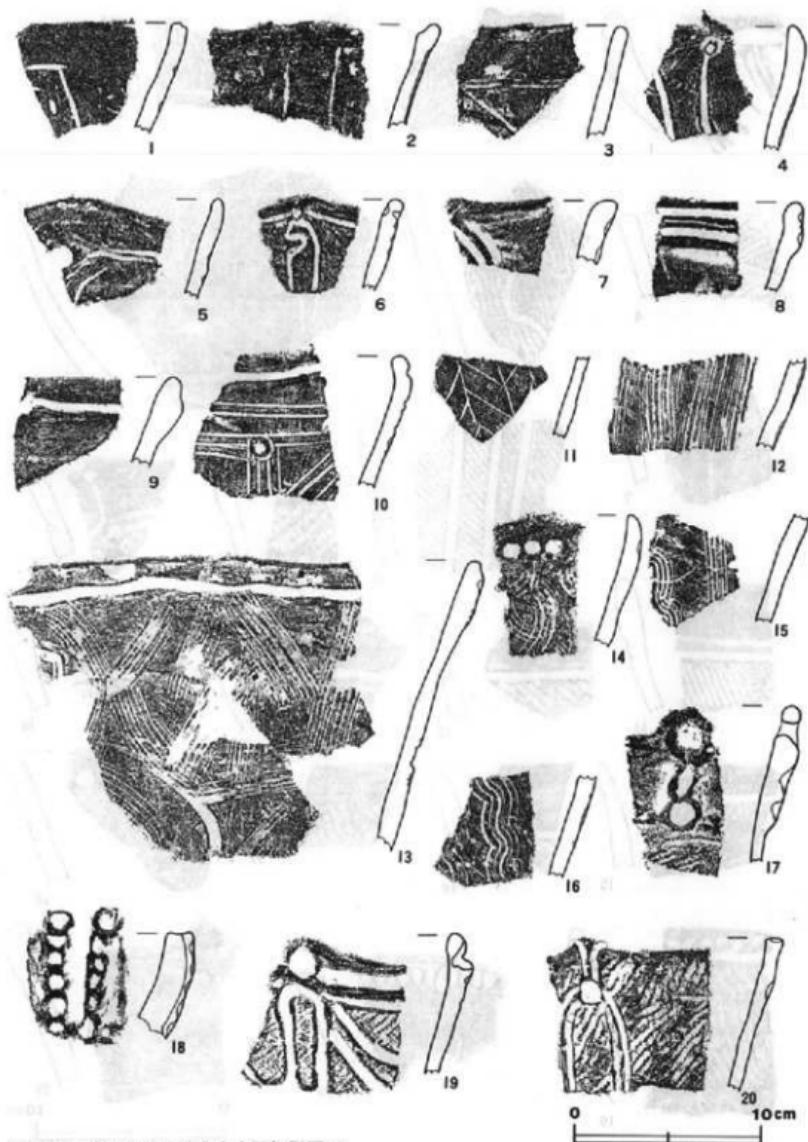
第49・50・51図は16号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。第49図1～16は無文の上に、沈線を横位、縱位、斜位、ワラビ手状、条線文状に施しているものである。17の突起部は口唇に対して垂直に孔の抜ける環状のもので、突起下には「8」字状の貼付文が施され、口縁部は幅の広い無文帯で、胴部とは隆帯によって区分している。18は2条の隆帯を垂下している突起で、口唇部に指頭圧、隆帯上に棒状工具による圧痕を加えている。19・20は波状口縁を呈し、縄文の地文上に沈線による文様を構成している。第50図1は口縁が内側する深鉢形土器で、縄文施文後、微降起によって区画文を構成している。2～8は縄文の地文上に沈線を施したもので、4は口唇に向かって肥厚し、口辺部に棒状工具による刺突を施した後に口唇を平坦に整形している。9は口縁部に無文帯が巡り、1条の沈線によって胴部と区分している。10は波状口縁を呈し、9～17は口縁部に無文帯が巡り、胴部に縄文を施しているものである。9と12～16は1条の沈線によって、10・11は2条の沈線によって口縁部と胴部を区分している。18は口縁部に円形状の押圧を加えている。19は口唇下に1条の沈線を施して輪の狭い無文帯を作り出し、無文帯上に棒状工具による刺突を横位に連ねている。沈線下には縄文を施している。20は隆帯上にヘラ状工具による刻みを加えている。21は山形状の小突起を有する深鉢形土器で、口縁部に無文帯を巡らし、以下縄文を施している。第51図1も前図21と同様のものである。2～13は器表面に縄文を施している粗製土器で、3と13は小突起を有している。4・5・9は口縁が外反する。10は口唇を研磨している。14は把手部に孔が穿たれ、無文上に隆帯を貼付し、隆帯上に棒状工具による刺突を加えている。口縁部は縄文施文後2条の沈線を巡らし、沈線外を磨り消して1条の縄文帯を表出している。15は2条の隆帯を施している。16は深い沈線を条線的に横位に施している。17～20は無文を呈し、17・19・20はていねいな整形がなされている。17・20の口縁は内翻し、18は外反している。21は平底を呈している。



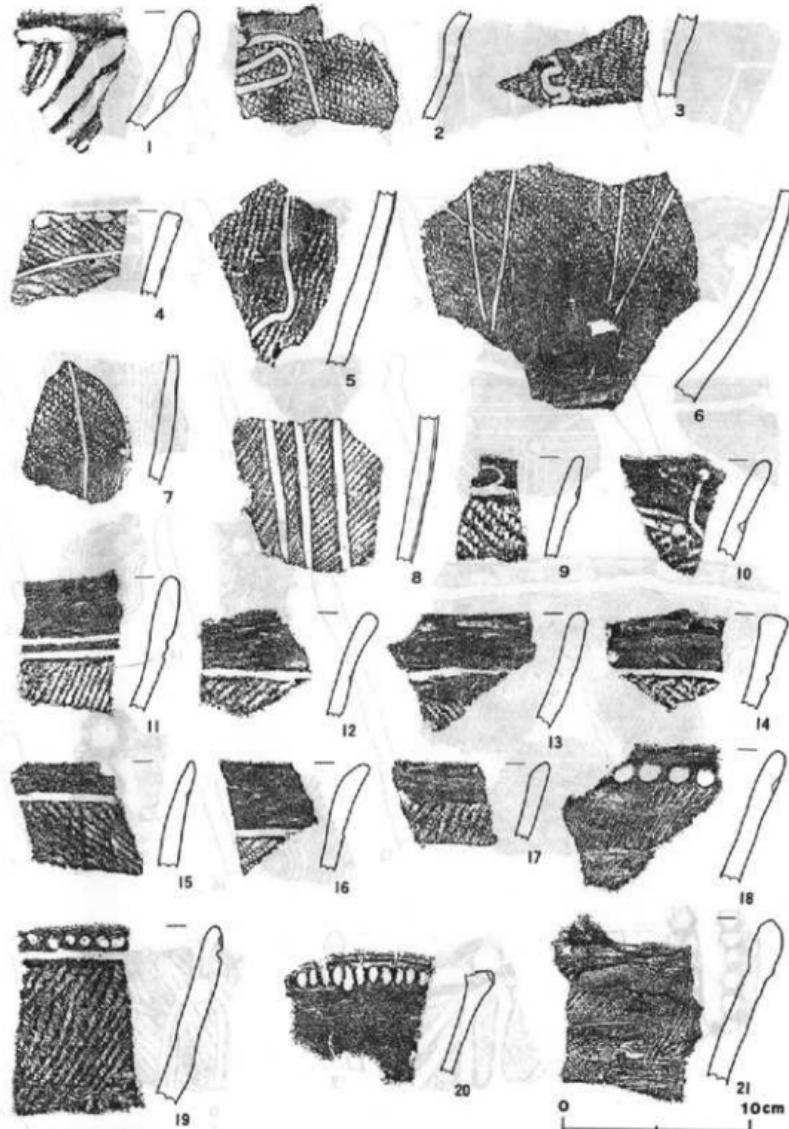
第47図 第16号住居跡出土土器実測図(1)



第48図 第16号住居跡出土土器実測図(2)

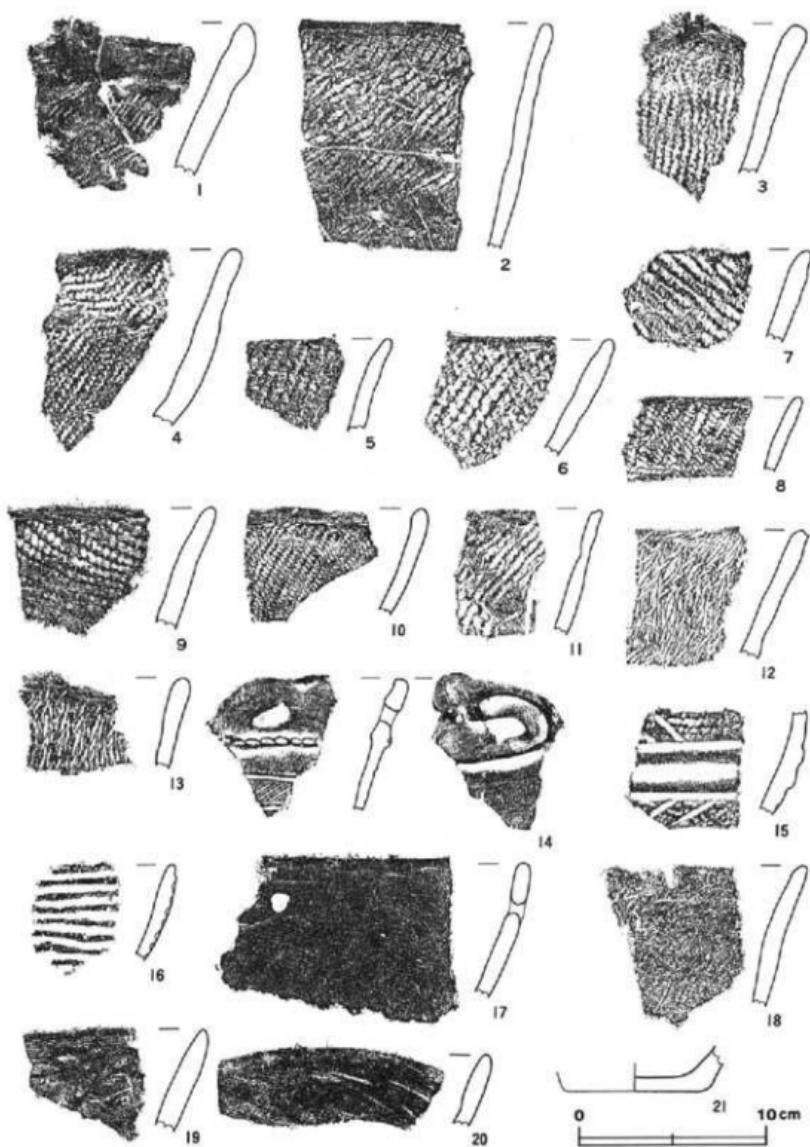


第49図 第16号住居跡出土土器拓影図(1)



第50図 第16号住居跡出土土器拓影図(2)

○ 漢代の土器とその他の遺物 ○



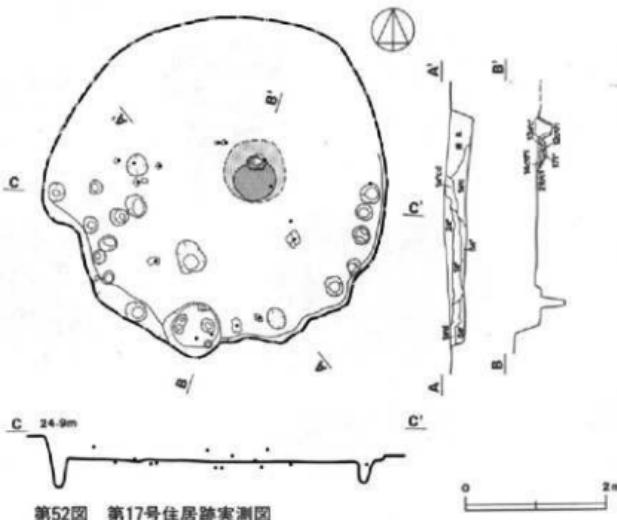
第51図 第16号住居跡出土土器拓影図(3)

第17号住居跡（第52図）

本跡は A1f_e調査区を中心に確認されたもので、遺跡の最北端に位置し、本跡の北側は羽原川防災調節池の造成工事中に削土されてしまい、住居跡全体の約%にあたる中央から南側を調査したものである。平面プランは既に北側が消失しているため確定はできないが、直径4.5mほどの円形を呈するものと推定される。

残存壁高は東側が10cm前後、南と西側が30cm前後で、壁面はハードロームで硬く、緩やかに外傾して立ち上がっている。床面は平坦で、堅緻である。特に炉の周辺は良く踏み固められている。炉は平面形の推定が正しいとすれば、住居跡の中央からやや東側に偏して位置する。炉の北端部に、胴下半部欠損の深鉢形土器を配した土器埋設炉である。掘り込み面は直径0.55mの円形を呈し、その断面は深さ20cmの播鉢状を呈している。埋設土器の中には灰が充満していた。炉埋設土器は約30度の傾きで斜立した状態で出土した。柱穴と考えるピットは直径20~30cm、深さ10~45cmで壁に沿って巡り、1か所あるいは2か所おきにやや深い柱穴を配している。なお、ピットの配列から南西側が出入りと考えられる。覆土の堆積状況は自然堆積で、上層に締まりがある暗褐色土、下層にローム粒子を少し含む褐色土が堆積している。

遺物は繩文土器片が174点出土し、土器片の大半は加曾利E式である。この土器の散布状況は散在的で、しかも出土数も比較的少ない。器形を推測できる土器は炉埋設土器1個体である。垂直的に土器の出土状況をみると、床面近くから出土しているものはわずかで、覆土上部からの出



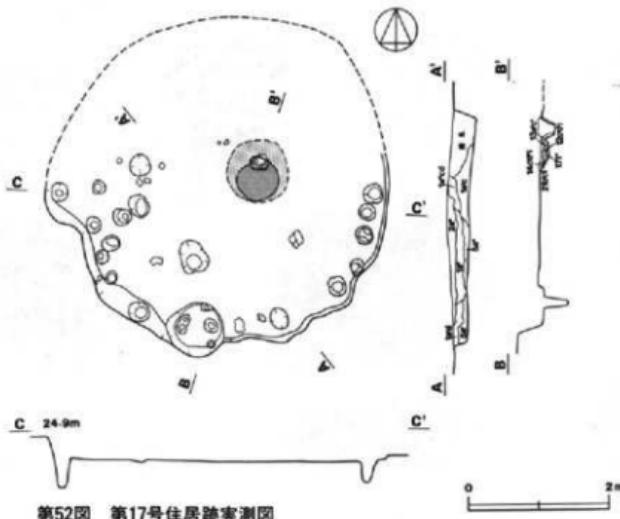
第52図 第17号住居跡実測図

第17号住居跡（第52図）

本跡は A1f_e調査区を中心に確認されたもので、遺跡の最北端に位置し、本跡の北側は羽原川防災調節池の造成工事中に削土されてしまい、住居跡全体の約8%にあたる中央から南側を調査したものである。平面プランは既に北側が消失しているため確定はできないが、直径4.5mほどの円形を呈するものと推定される。

残存壁高は東側が10cm前後、南と西側が30cm前後で、壁面はハードロームで硬く、緩やかに外傾して立ち上がっている。床面は平坦で、堅緻である。特に炉の周辺は良く踏み固められている。炉は平面形の推定が正しいとすれば、住居跡の中央からやや東側に偏して位置する。炉の北端部に、胴下半部欠損の深鉢形土器を配した土器埋設炉である。掘り込み面は直径0.55mの円形を呈し、その断面は深さ20cmの播鉢状を呈している。埋設土器の中には灰が充満していた。炉埋設土器は約30度の傾きで斜立した状態で出土した。柱穴と考えるピットは直径20~30cm、深さ10~45cmで壁に沿って巡り、1か所あるいは2か所おきにやや深い柱穴を配している。なお、ピットの配列から南西側が出入りと考えられる。覆土の堆積状況は自然堆積で、上層に締まりがある暗褐色土、下層にローム粒子を少し含む褐色土が堆積している。

遺物は繩文土器片が174点出土し、土器片の大半は加曾利E式である。この土器の散布状況は散在的で、しかも出土数も比較的少ない。器形を推測できる土器は炉埋設土器1個体である。垂直的に土器の出土状況をみると、床面近くから出土しているものはわずかで、覆土上部からの出



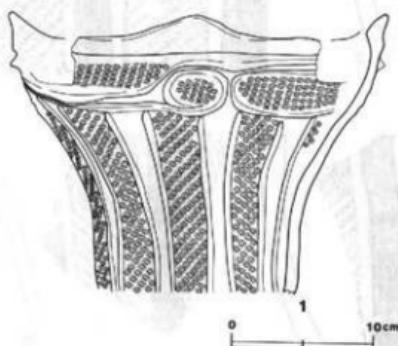
第52図 第17号住居跡実測図

土が多い。

出土土器（第53・54図）

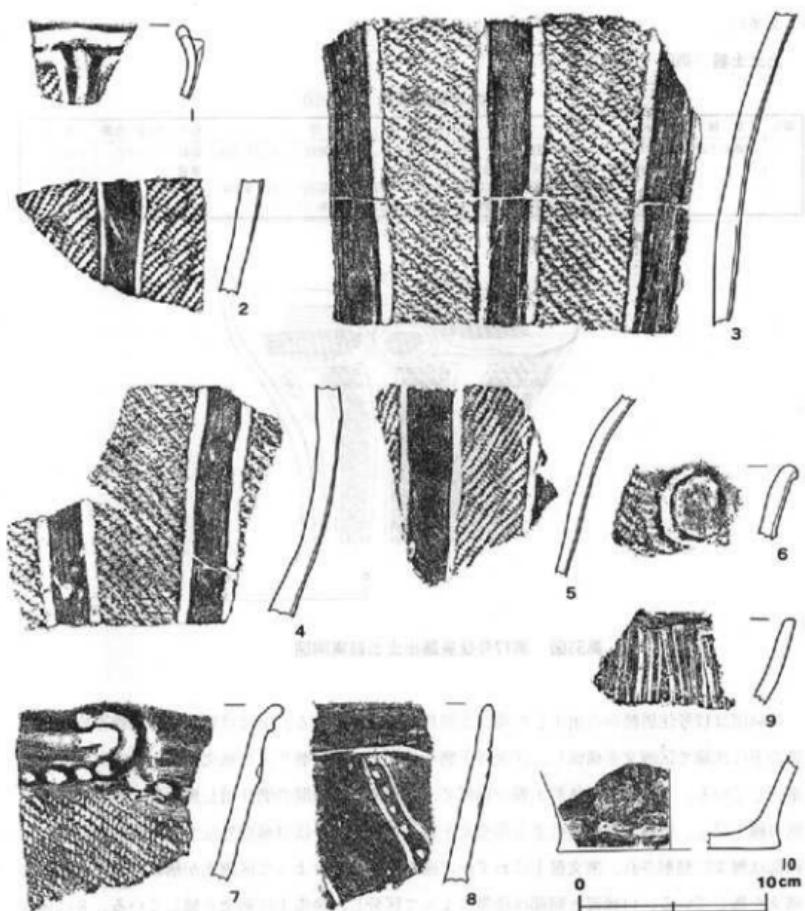
出土土器観察表（第53図）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土	焼成	色調	備考
1	深鉢形土器	A 27.0 B(19.8)	キャリバー形を呈し、口縁部は内凹する。口唇は肥厚し、斜位に整形されている。波状口縁を呈している。 口縁部は無文帯で、口縁部の文様帯が隣帶により区画化され、胴部に磨り消し縄文帯による懸垂文を持つ。地面上に縄文を施している。	砂粒・スコリア 普通	内一褐色 外一に山い褐色	口縁部70% 外面にスス付着	



第53図 第17号住居跡出土土器実測図

第54図は17号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口唇直下に沈線を施し、隣帶の下に沈線で区画文を構成し、区画外を磨り消している。磨り消し無文帯に1条の太い沈線が垂下している。2～5は深鉢形土器の胴部で、懸垂文は沈線間の磨り消し無文帯である。6は波状口縁を呈し、突起下に隆帯による円形文を施している。7は口縁が外反する深鉢形土器で、口縁部は無文に整形され、無文帯上にわずかに隆起する隆帯によって区画文が構成され、胴部には縄文を施している。口縁部と胴部は隆帯によって区分し、隆帯上に刺突を施している。8は口縁が若干内凹する深鉢形土器で、口唇に向かって尖る。無文の上に1条の沈線を横位に施し、その沈線から斜行する沈線区画内に刺突が施されている。9は縦位の沈線を条線文状に施している薄手の土器である。10は底部で、底端部は外側に張り出し、若干括れて外方へ立ち上がっている。

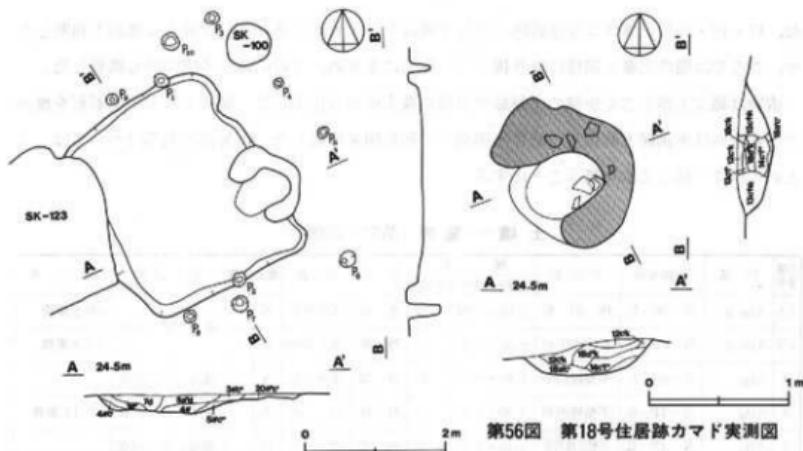


第54図 第17号住居跡出土土器拓影図

第18号住居跡（第55・56図）

本跡は規模が小さいので最初98号土壤として調査を進めていたが、東側からカマドが検出されたので住居跡であることが判明したのである。B2cs調査区を中心に確認され、遺跡の南東側の台地縁近くに位置し、西側は123号土壤と重複している。平面形は長軸3m、短軸2.5mの小形の隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-65°Eを指している。

壁高は10~15cmで、北西壁がやや低い。壁面は緩やかに外傾して立ち上がっている。床面は軟



第55図 第18号住居跡実測図

第56図 第18号住居跡カマド実測図

弱で、中央が若干くぼんでいる。

カマドは北東壁南側に検出されたが、天井部が崩れ落ちており、遺存状態は不良である。横幅1.15m、焚き口幅0.45mで、全長と煙道長は不明である。袖部は粘土と砂を

住居跡柱穴計測表 (cm)

	上 端				下 端				深さ	上 端				下 端				深さ
	長径	短径	長径	短径	長径	短径	長径	短径		長径	短径	長径	短径	長径	短径	長径	短径	
P ₁	23	17	9	8	39		P ₆	23	21	8							47	
P ₂	21	18	10	9	35		P ₇	23	22	12							35	
P ₃	20	17	11	9	36		P ₈	18		9							42	
P ₄	14		7		31		P ₉	17		7							25	
P ₅	18	15	9	8	43		P ₁₀	24	22	15	13						36	

使用しており、表面は焼けて変色している。火床には焼土が充満していた。柱穴と考えられるP₁～P₁₀は、いずれも屋外から検出された。壁のところに存在するP₁とP₂は主柱穴と思われるが、その他は不明である。覆土の堆積状況は自然堆積である。

遺物はカマドから土師器の蝶形土器片8点と、覆土中から須恵器片が1点出土しただけである。須恵器片の器種は不明で、高台が剥離した内面なで整形を施したものである。いずれも資料としては乏しい。

第3節 土 壤

当遺跡の土壤群は遺跡全体にわたって検出されたが、その中でも特に西側から多く検出されている。土壤番号は現場で付した番号をそのまま使用した。1号土壤は2基の土壤が重複していることが判明し、それぞれ1A号土壤、1B号土壤とし、78・79号土壤は調査中に3号溝、98号土壤は調査中に18号住居跡となり、47号土壤は調査の結果遺構と認められず、それぞれ欠番とした。ま

た、17・18・19号土壙は2号住居跡、42号土壙は7号住居跡にそれぞれ付帯する施設と判明したが、ここでは他の土壙と同様に取り扱って一覧表にまとめ、さらに個々の実測図も掲載した。

遺物は縄文土器とごく少量の土製品や石器が覆土中から出土した。縄文土器の中で器形を推測できるものは実測図と解説を、破片は選別して拓影図を掲載した。土製品と石器については、まとめの項で一括して取り扱うこととする。

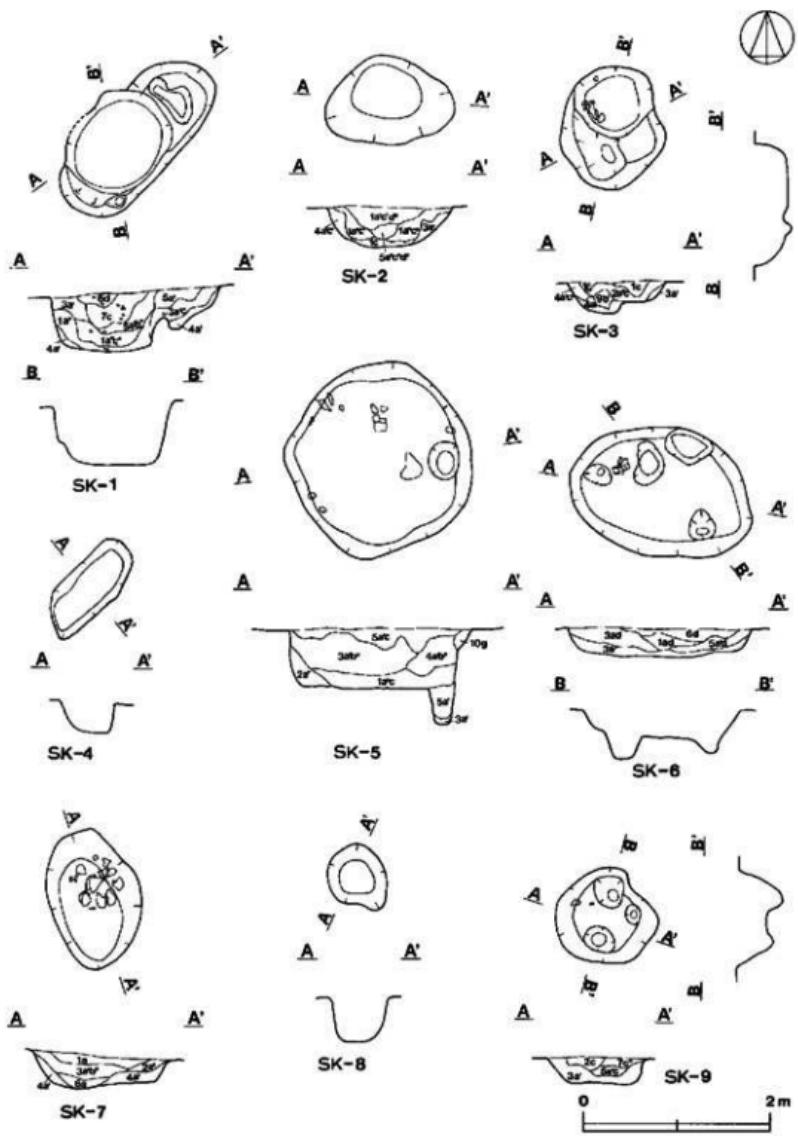
土壤一覧表(第57~79回)

二項 名	位置	傾斜方向	平面形 長径×短径(米) 深さ(米)	規模		壁面	底面	覆土	P数	出土遺物	備考
				長径	短径						
1 A	Alas-gr	N-35°-E	横 円 形 1.15×0.90	70	垂 直	水平平坦	N				SI-1と重複
1 B	Alas-gr	N-42°-E	長 横 円 形 2.00×0.90	28	外 傾	水平平坦	N	1		縄文土器片115点	SI-1と重複
2	Alas	N-89° E	不整横円形 1.40×0.95	44	外 傾	水平平坦	N			縄文土器片13点	
3	Alas	N-14°-E	不整横円形 1.30×1.10	37	外 傾	凸 凹	A			縄文土器片20点	SI-1と重複
4	Alas	N-43°-E	不整長横円形 1.10×0.80	30	外 傾	凹 状	N			縄文土器片14点	
5	Alas-gr		円 形 2.10	65	垂 直	水平平坦	N	1		縄文土器片10点	
6	Alas	N-71°-W	横 円 形 2.00×1.40	36	垂 倾	坂状平坦	K	4		縄文土器片40点	
7	Alas-gr	N-17°-W	横 円 形 1.45×0.98	35	傾 斜	坂状平坦	N			縄文土器片40点	SI-2と重複
8	Alas		不整円形 0.65	47	垂 直	凹 状				縄文土器片41点	SI-1と重複
9	Alas-gr		不整円形 1.05	30	傾 斜	水平平坦	N	3		縄文土器片36点	SI-1と重複
10	Alas		円 形 1.65	45	傾 斜	凹 状	N	1		縄文土器片28点	
11	Alas-Bias		不 定 形 2.00×1.50	105	袋 状	水平平坦	A			縄文土器片38点	
12	Alas	N-48° W	不整横円形 2.00×1.15	30	外 傾	水平平坦	N	2		土器片1個 縄文土器片55点 洗浄5点	
13	Alas		不 定 形 1.10	130	段 状	水平平坦	A			縄文土器片13点	SK55と重複
14	Alas-gr	N-66°-E	不整横円形 1.25×0.85	40	外 傾	凸 凹	N			縄文土器片51点	SI-2と重複
15	Alas		円 形 0.95×0.85	60	外 傾	凹 状	N			縄文土器片83点	
16	Alas	N-17°-E	横 円 形 1.10×0.85	80	外 傾	凹 状	K			縄文土器片10点	SI-2と重複
17	Alas		不整円形 0.95×0.78	54	傾 斜	凹 状	A			縄文土器片81点	SI-2: 付随するもの
18	Alas	N-26° W	不整横円形 1.30×0.95	45	外 傾	凹 状	A			縄文土器片16点	SI-2: 付随するもの
19	Alas	N-18°-W	不整横円形 0.90×0.60	30	傾 斜	水平平坦	N	1		縄文土器片1点	SI-2: 付随するもの
20	Alas-gr		不 定 形 1.23×0.75	70	垂 直	凸 凹	K	1		縄文土器片76点	
21	Alas	N-13° W	双 円 形 1.05×0.55	40	外 傾	水平平坦	N	1		縄文土器片27点	SI-1と重複
22	Alas		円 形 0.53×0.48	30	垂 直	凹 状				縄文土器片6点	
23	Alas	N-17° W	横 円 形 1.12×0.85	22	成 多	凹 状	N	3		縄文土器片13点	SI-1と重複
24	Alas	N-39° W	不整長横円形 1.95×0.75	25	傾 斜	凸 凹	A	3		土器片1点 縄文土器片6点	
25	Alas		円 形 0.70×0.60	45	外 傾	凹 状	N			縄文土器片62点	

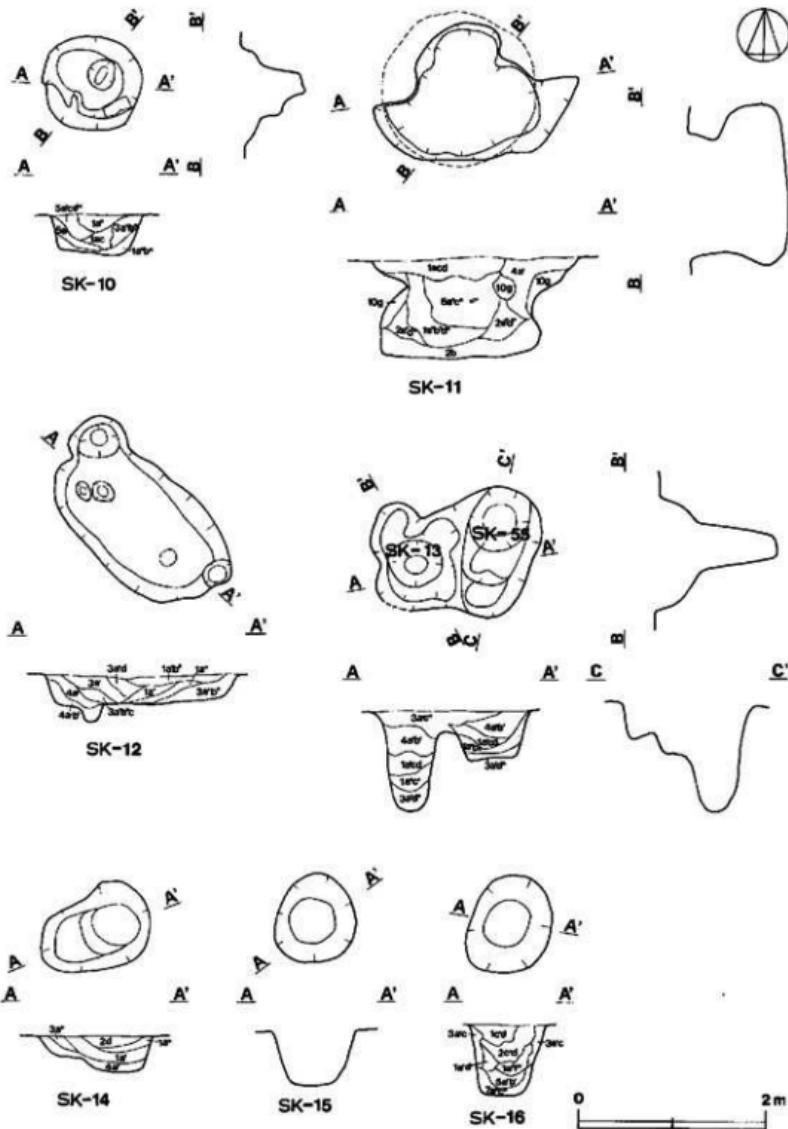
土器 番号	位 置	長径方向	平 面 形	底 盤		壁 面	底 面	電 土	P数	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(単位mm)	底盤厚(単位mm)						
26	Alj _s -js	N-61°-W	格 円 形	0.75×0.55	6.5	外傾	水平平坦	N	1	縄文土器片30点	
27	Alj _s -js		不 定 形	1.10×0.90	30	緩斜	水平平坦	A	5	石器1点 縄文土器片18点	
28	Alj _s -js	N-23°-W	格 円 形	1.35×1.15	30	外傾	皿 狹	A	2	縄文土器片94点 と重複	SK27-31・59
29	Alj _s		円 形	0.50×0.40	32	外傾	板状平坦	N		縄文土器片22点 ビット	
30	Alj _s		不整 円 形	0.75	25	緩斜	水平平坦	N	1	縄文土器片25点	
31	Alj _s -js		不 定 形	1.65×1.50	43	緩斜	水平平坦	N	2	縄文土器片37点	SK28と重複
32	Alj _s	K-81°-W	不整椭円形	1.02×0.70	25	緩斜	凸 凹	N		縄文土器片2点	
33	Alj _s	N-23° E	不整椭円形	1.10×0.75	25	緩斜	皿 狹	N	1	縄文土器片54点	SK34と重複
34	Alb _s -is	N-39°-E	不整椭円形	1.90×1.30	55	外傾	水平平坦	N	1	土製円板1点 縄文土器片45点	SK33と重複
35	Alj _s	N-5°-W	不整椭円形	0.67×0.50	40	外傾	水平平坦	A	1	縄文土器片126点	
36	Alj _s -js	N-7° W	不整椭円形	1.05×0.75	65	段状	皿 狹	A		縄文土器片34点	
37	Alj _s -js		不 定 形	1.22×0.65	15	緩斜	水平平坦	A	1	縄文土器片1点	
38	Alj _s -js		円 形	1.25	40	外傾	板状平坦	N	1	石器1点 縄文土器片30点	SI-6・SK53 と重複
39	Alb _s -is		不 定 形	1.50×0.85	40	段状	水平平坦	A		土製円板1点 縄文土器片65点	SI-7・SK45-61と重複
40	Blas	K-55°-W	不整椭円形	1.45×1.05	30	緩斜	凸 凹	K		縄文土器片53点	
41	Alj _s		不整椭円形	0.80×0.70	46	外傾	水平平坦	N	1	縄文土器片43点	SI-6と重複
42	Alb _s -is	N-55° W	格 円 形	0.95×0.78	20	緩斜	水平平坦	N	1	縄文土器片55点	SI-7に 付録するもの
43	Alb _s		不整 円 形	0.95×0.85	40	外傾	水平平坦	A		縄文土器片30点	SI-14と重複
44	Alb _s	N-55°-W	格 円 形	1.10×0.90	55	垂直	皿 狹	N		手づくね土器1点 縄文土器片30点	SK111と重複
45	Alj _s	N-22°-W	格 円 形	0.70×0.50	105	段状	水平平坦	N			SK39-61
46	Alb _s	N-40°-E	格 円 形	2.05×1.45	22	緩斜	皿 狹	N	5	縄文土器片428点	と重複
47											欠缺
48	Bl _{ba} ^{ba+bs} ba-bs		不 定 形	1.50×1.15	30	外傾	凸 凹	A	4	縄文土器片10点	
49	Alj _s		円 形	0.68	45	外傾	水平平坦	N		縄文土器片34点	SK62と重複
50	Alb _s	N-83°-E	格 円 形	1.10×0.80	70	垂直	水平平坦	N	1	縄文土器片32点	
51	Alj _s		円 形	0.65	53	外傾	板状平坦	N		縄文土器片4点	SK62と重複
52	Alj _s -Bla _s		円 形	1.15×1.03	90	袋状	水平平坦	N		縄文土器片35点	
53	Alj _s		不整 円 形	1.10	60	段状	水平平坦	A		縄文土器片90点	SI-6・SK38 と重複
54	Alb _s		円 形	0.75	40	垂直	凸 凹	N		縄文土器片45点	SI-2と重複
55	Alj _s	N-16° E	格 円 形	1.40×0.75	110	垂直	凸 凹	N		縄文土器片16点	SK13と重複
56	Alj _s		円 形	0.50	47	垂直	水平平坦	N	1	縄文土器片20点	SI-2に 付録するもの
57	Alj _s		不整 円 形	0.75×0.70	50	垂直	水平平坦	N		縄文土器片15点	
58	Alj _s -js		不整 円 形	0.60×0.55	40	外傾	板状平坦				

標 番 号	位 置	長 横 方 向	平 面 形	規 格		底 面	底 面	底 土 P 値	出 土 遺 物	備 考
				長 径 (m)	高 さ (m)					
39	Alis ₁ -js	N-25°-E	不整楕円形	1.00×0.55	43	外傾	凸 凹	N 2	縄文土器片9点	SK28と重複
60	Aljs	N-25°-E	不整楕円形	0.73×0.50	45	外傾	水平平坦	K		
61	Alis ₁ -js	N-14°-E	不整楕円形	1.60×(1.00)	15	緩斜	水平平坦	N		SK39-45と重複
62	Alis ₁ -js	N-51°-W	不整楕円形	(0.96)×0.70	30	緩斜	直 狀	N	縄文土器片79点	SK49-51と重複
63	Al ₁ ^f -js K ₁ ^f -js	N-25°-W	不整楕円形	3.30×(2.13)	15	緩斜	凸 凹	N 8	縄文土器片250点	SK72と重複
64	Aljs Bla ₁		不整円形	1.25×1.18	45	緩斜	直 狀	K	縄文土器片43点	
65	Bla ₁		不定形	1.95×0.80	20	緩斜	凸 凹	K 2	縄文土器片21点	
66	AlH ₁	N-85°-W	楕円形	1.95×1.10	30	緩斜	水平平坦	A 2	縄文土器片70点	
67	Bla ₁		円形	1.00	53	外傾	水平平坦	N		
68	Bla ₁		不定形	1.36×1.15	20	緩斜	凸 凹	A 2	縄文土器片30点	
69	Al ₁ ₂ ₃ A2a ₁ -js	N-78°-E	楕円形	1.15×0.80	20	緩斜	直 狀	A 3	縄文土器片38点	SI-8と重複
70	A2j ₁		円形	1.05×1.00	15	緩斜	圓 狀	A 2	縄文土器片16点	SI-8と重複
71	A2j ₁ -js		円形	0.95×0.83	33	外傾	水平平坦	N 1	縄文土器片12点	
72	Algr	N-12°-W	不整楕円形	1.83×1.16	72	外傾	水平平坦	1	縄文土器片30点	SK63と重複
73	B2a ₁	N-71°-W	不整楕円形	1.75×1.32	53	外傾	水平平坦	N	縄文土器片45点	
74	Bla ₁		円形	0.74×0.68	20	外傾	凸 凹	A 3	縄文土器片6点	
75	Bla ₁ -bs B2a ₁ -bs		不定形	1.98×1.85	30	緩斜	凸 凹	N 5	江戸土器 縄文土器片107点	
76	A2j ₁ -js B2a ₁ -bs	N-56°-W	楕円形	1.70×1.24	30	緩斜	凸 凹	K 3	縄文土器片8点	
77	B2a ₁		不整円形	1.10	18	緩斜	直状平坦	N		SD 3と重複
78										欠番
79										欠番
80	B2a ₁	N-22°-W	楕円形	1.25×1.00	10	緩斜	水平平坦	N 2	縄文土器片13点	
81	B2a ₁ -bs	N-45°-E	楕円形	1.70×1.10	15	外傾	水平平坦	N 3	縄文土器片9点	
82	B2a ₁ -bs B2a ₁ -bs	N-84°-E	不整楕円形	1.90×1.10	35	緩斜	水平平坦	N 3		
83	A2j ₁	N-19°-W	不整椭円形	1.50×1.30	35	緩斜	直 狀	A 2	縄文土器片53点	
84	A2j ₁	N-24°-W	不整椭円形	1.05×0.56	12	緩斜	水平平坦	N 1		
85	A2j ₁ -js		不定形	1.53×1.45	20	緩斜	凸 凹	A	縄文土器片21点	
86	Bla ₁		円形	1.15×1.00	32	緩斜	水平平坦	N 1	縄文土器片21点	
87	Bla ₁	N-20°-E	楕円形	1.17×0.97	20	外傾	直 狀	N 1	縄文土器片7点	
88	Bla ₁	N-42°-E	楕円形	1.55×0.95	45	外傾	凸 凹	K	縄文土器片15点	
89	H ₁ ^{C7} -Cs Bla ₁	N-82°-E	楕円形	1.45×0.90	40	緩斜	水平平坦	N 2	縄文土器片16点	
90	Bla ₁	N-60°-W	不整椭円形	1.25×0.95	40	緩斜	直 狀	K 1	縄文土器片43点	
91	Bla ₁		円形	1.18	33	外傾	水平平坦	N 1	深鉢 縄文土器片26点	

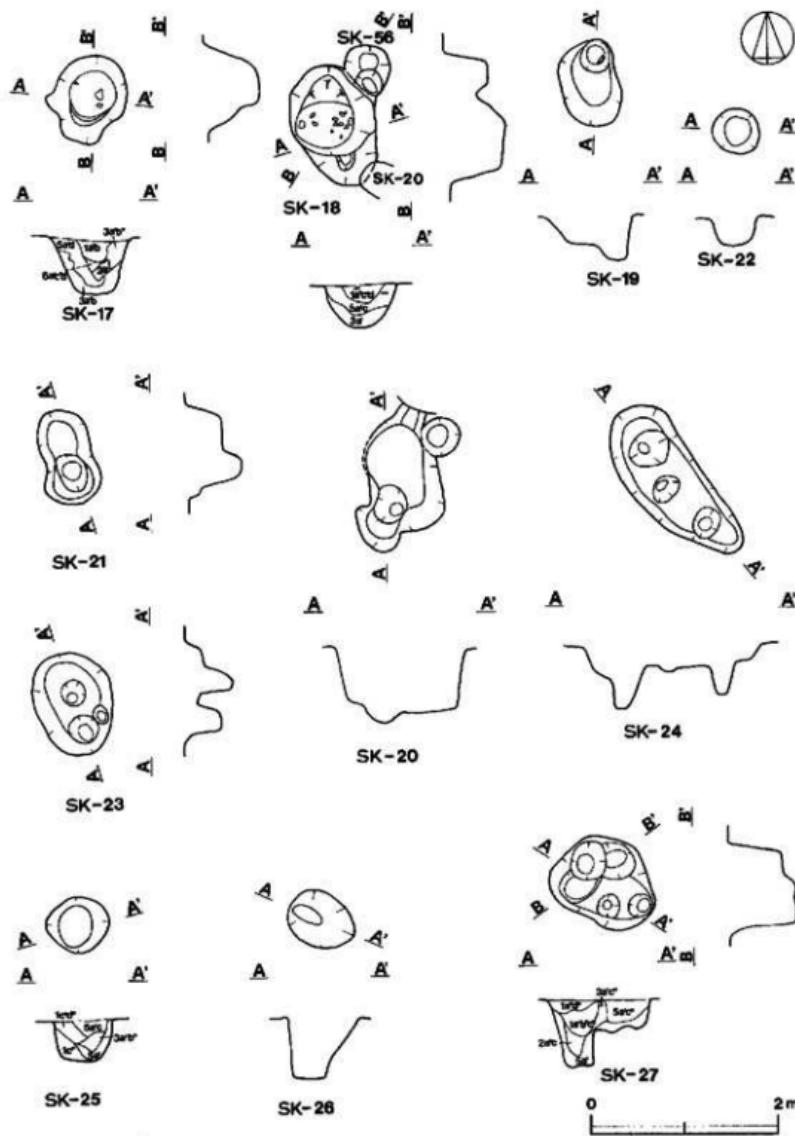
1番 番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		堅 底	底 底	底 土 P数	出 上 遺 物	備 考
				長径×短径(m)	高さ(m)					
92	Aljs	N-25° W	横 円 形	1.03×0.70	40	外 傾	水平平坦	N	縄文土器片273点	
93	B2ca-cs	N-83°-W	横 円 形	1.95×1.50	15	緩 斜	板状平坦	N	縄文土器片128点	
94	B1ba-cs	N-76°-W	横 円 形	1.53×1.05	35	緩 斜	板状平坦	N	縄文土器片34点	
95	B1cs	N-77° E	横 円 形	1.50×1.20	23	緩 斜	V字状	N	縄文土器片12点	S1-5と重複し、 切られている
96	B2b-cs	N-49°-W	丹 形	2.50×1.25	25	外 傾	水平平坦	K	6	縄文土器片12点
97	B2cs	N-66°-E	横 円 形	1.65×1.60	10	緩 斜	水平平坦	N	縄文土器片113点	
98										欠番
99	B2ca-ds	N-52°-E	横 円 形	3.25×1.85	30	緩 斜	水平平坦	N	5	縄文土器片61点
100	B2bs-cs		円 形	0.68×0.58	42	歩 街	凸 凹			縄文土器片3点
101	B2bs-bs	N 87° W	横 円 形	1.55×0.95	22	緩 斜	皿 状	K	1	縄文土器片26点
102	B2bs		円 形	1.12	18	緩 斜	水平平坦	N	1	縄文土器片2点
103	Aljs	N-49°-E	横 円 形	0.76×0.53	18	緩 斜	水平平坦	N	1	縄文土器片1点
104	Aljs	N-22°-E	不整横円形	1.00×0.50	28	外 傾	凸 凹	A	3	縄文土器片15点
105	Aljs	N-52°-E	横 円 形	1.03×0.60	45	緩 斜	皿 状	N	1	縄文土器片6点
106	Aljs		円 形	0.90	53	垂 直	水平平坦	N		縄文土器片99点
107	Blas	N 75° W	横 円 形	0.90×0.60	19	緩 斜	V字状	K		縄文土器片17点
108	Blas		円 形	0.73×0.66	25	外 傾	皿 状	N		縄文土器片9点
109	Aljs	N-70°-E	横 円 形	1.12×0.77	23	緩 斜	水平平坦	N	2	
110	Albs	N-27°-W	横 円 形	(0.90)×0.70	47	外 傾	皿 状	N		縄文土器片37点
111	Aljs	N 63° W	横 円 形	1.80×(1.20)	26	緩 斜	皿 状		1	縄文土器片55点
112	Aljs-i		円 形	0.88	130	垂 直	水平平坦	A		SK44・50と 重複
113	Aljs	N-82°-W	不整横円形	0.94×0.60	45	外 傾	凸 凹	A	1	縄文土器片21点
114	A2gs	N-60°-W	横 円 形	1.60×1.40	13	緩 斜	水平平坦	N	1	縄文土器片145点
115	Alga-hs		不 定 形	1.50×1.30	40	外 傾	凸 凹	K		S1-14と重複
116	Alga-hs		円 形	1.05×0.98	85	緩 斜	水平平坦	N		S1-14と重複
117	Alha		不整円形	1.09×0.90	55	緩 斜	水平平坦	K		S1-14と重複
118	Aljs	N-64°-W	半 円 形	0.95×0.65	26	外 傾	板状平坦	N	1	
119	Aljs-gs		円 形	(1.25)×(1.05)	19	緩 斜	水平平坦	2		S1-16・17と 重複
120	Alha		不 定 形	1.15×0.95	36	外 傾	凸 凹	A		S1-7と重複
121	B2b	N-61°-W	不整円形	1.90×0.95	13	緩 斜	凸 凹	K		縄文土器片17点
122	B2ca-ds		不整円形	1.70	20	緩 斜	水平平坦	N	1	縄文土器片101点
123	32c	N-61°-E	不整倒丸形	2.35×2.15	86	外 傾	水平平坦	A		上製陶板1点 縄文土器片156点
124	B2bs-cs	N-45°-E	隅丸長方形	2.53×1.95	60	外 傾	皿 状	N		SD 4と重複



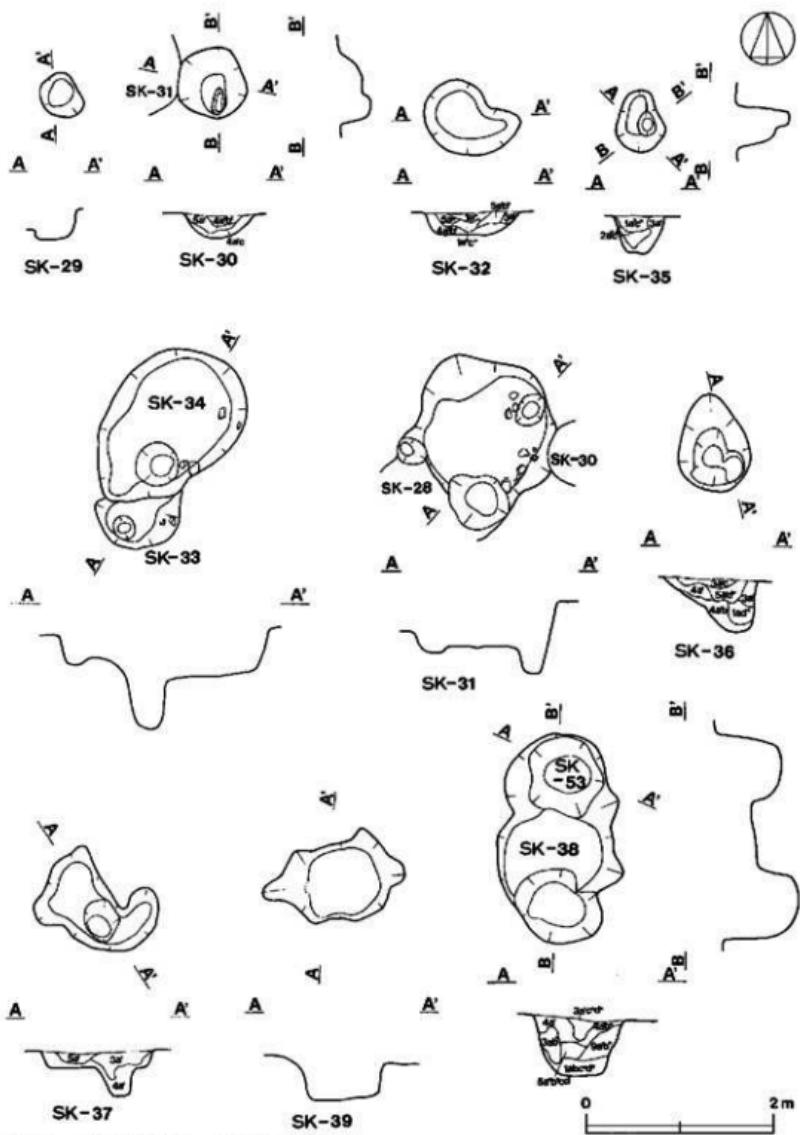
第57図 土壌実測図(1) ($L = 24.9\text{m}$)



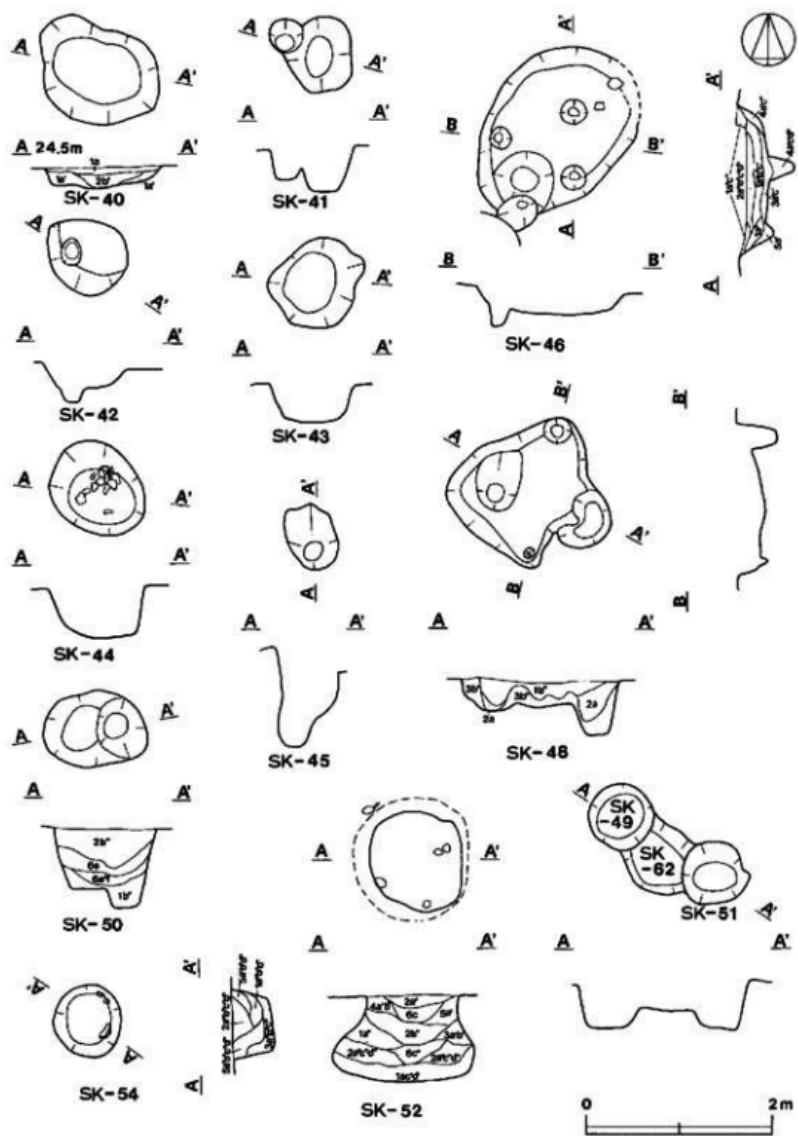
第58図 土壤実測図(2) (L = 24.9m)



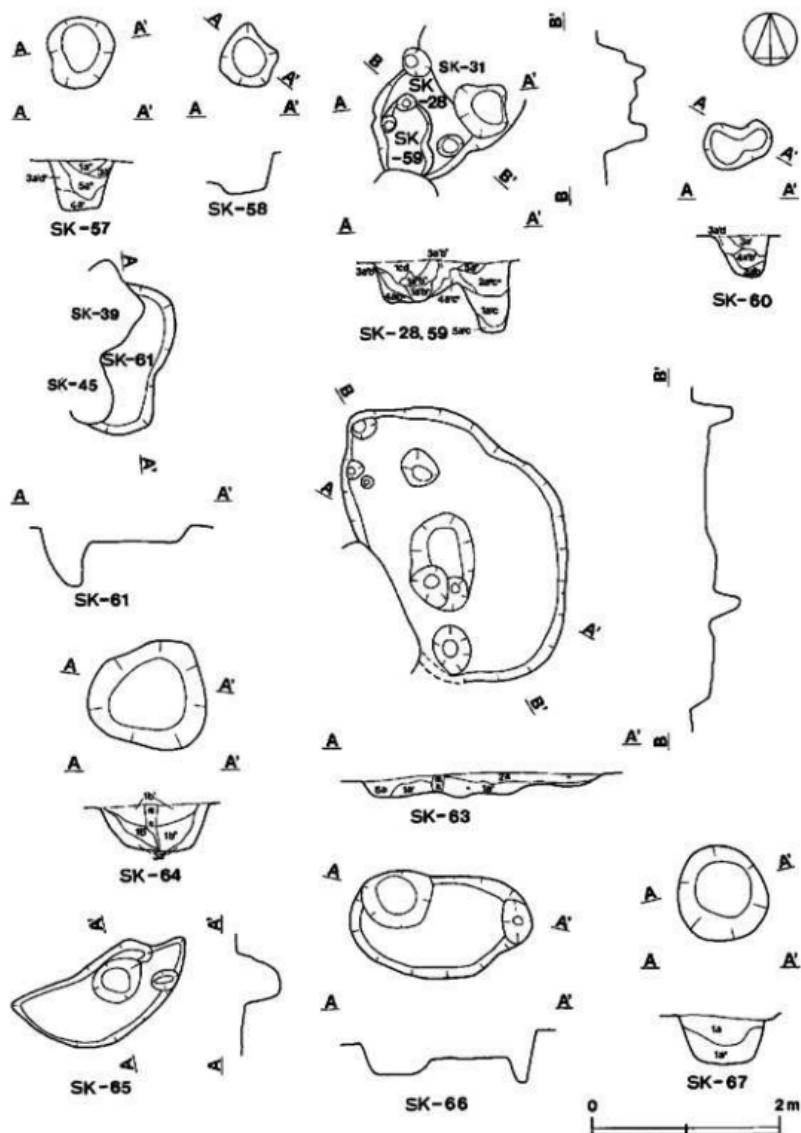
第59図 土壌実測図(3) ($L = 24.9\text{m}$)



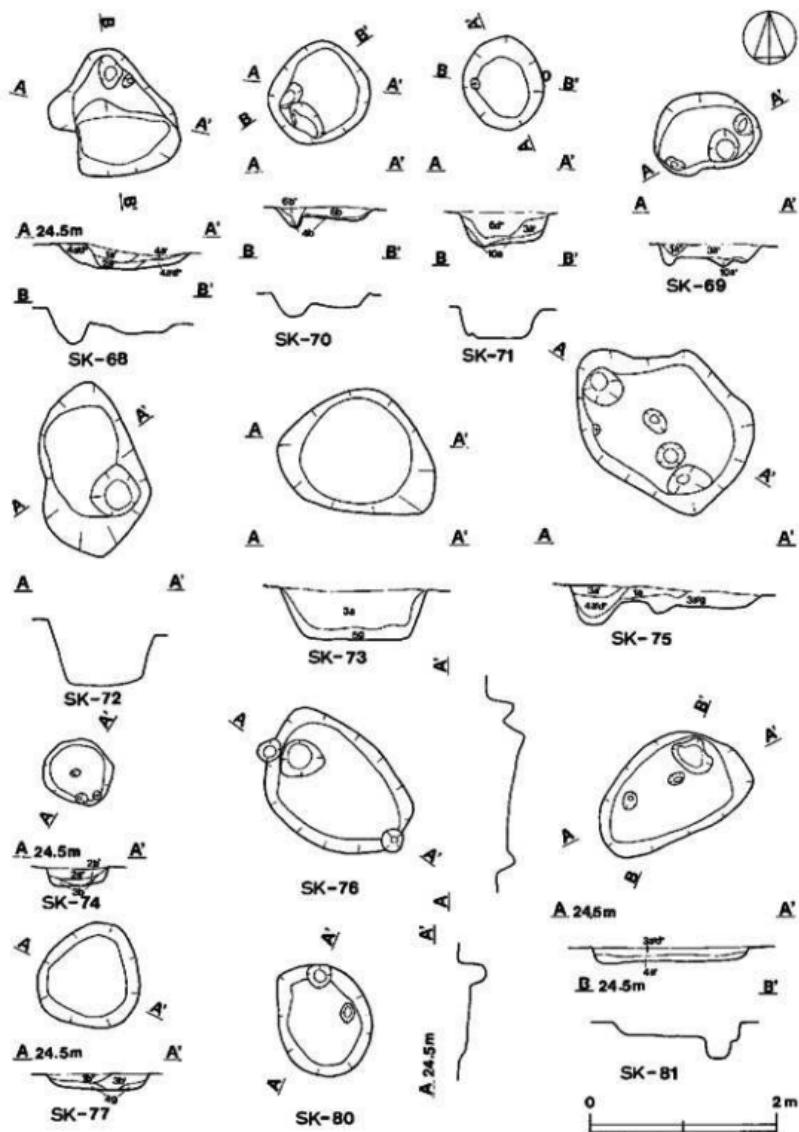
第60図 土壤実測図(4) (L=24.9m)



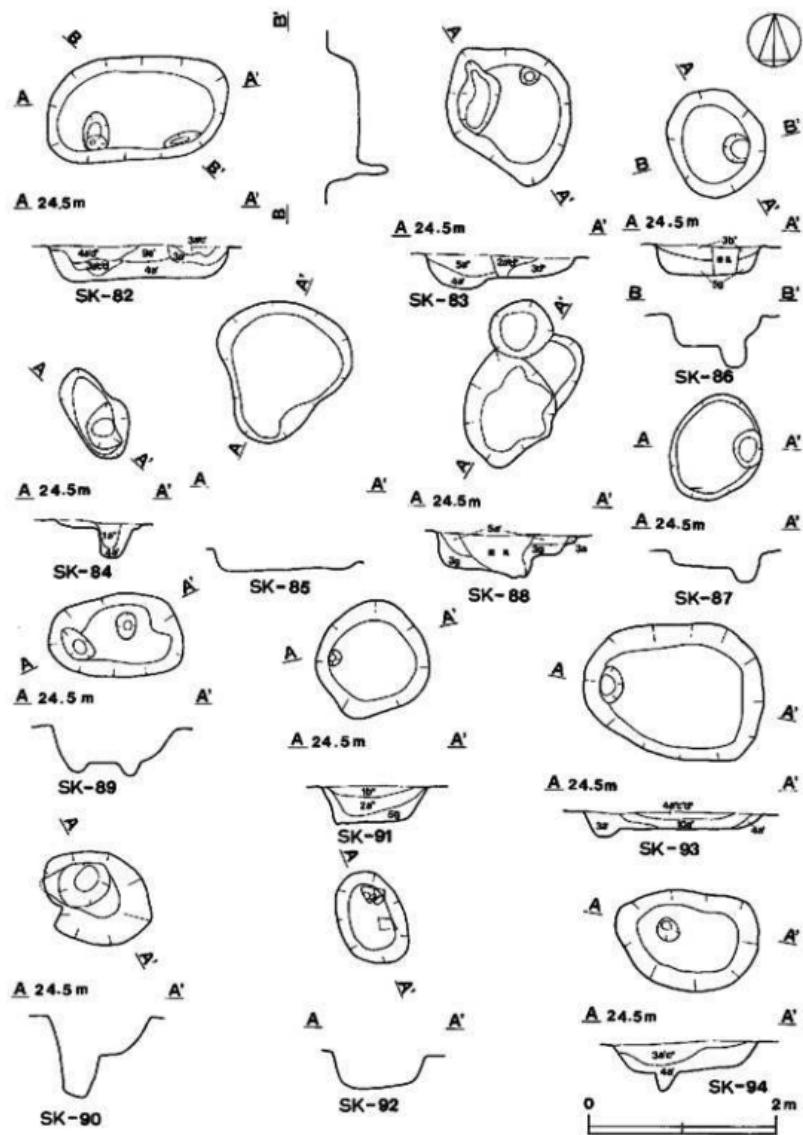
第61図 土壌実測図(5) (L = 24.9m)



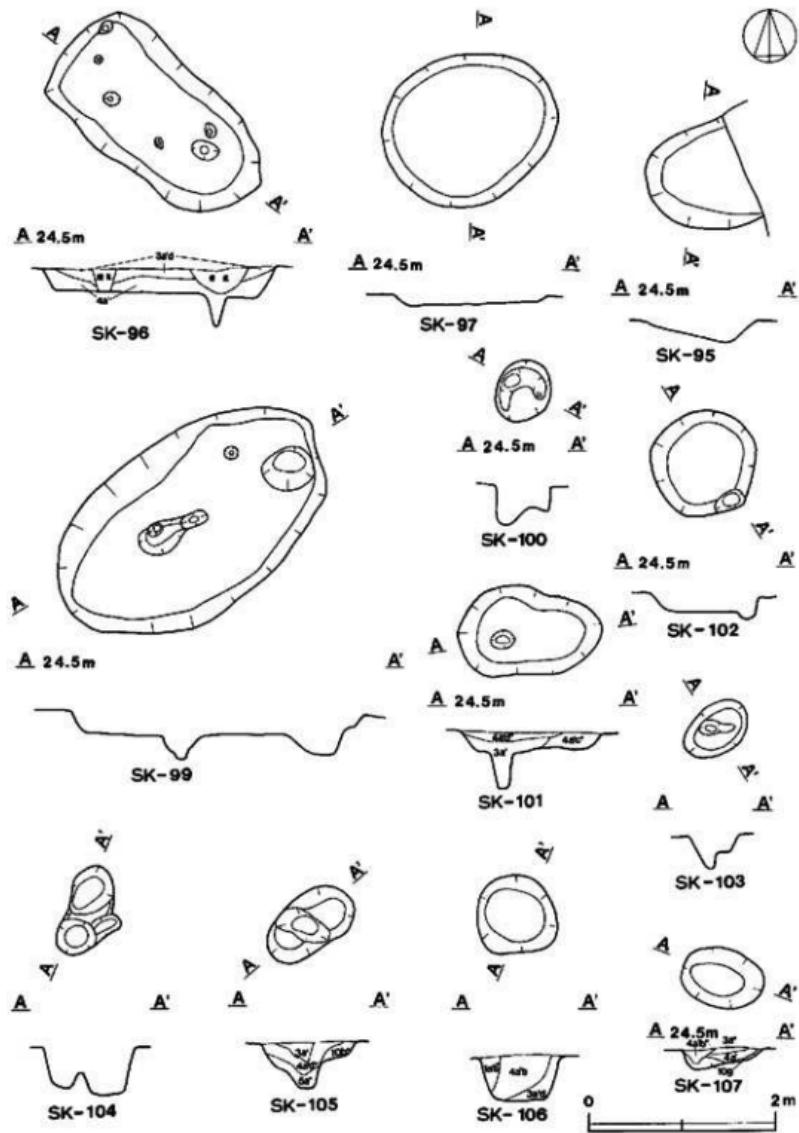
第62図 土壌実測図(6) (L=24.9m)



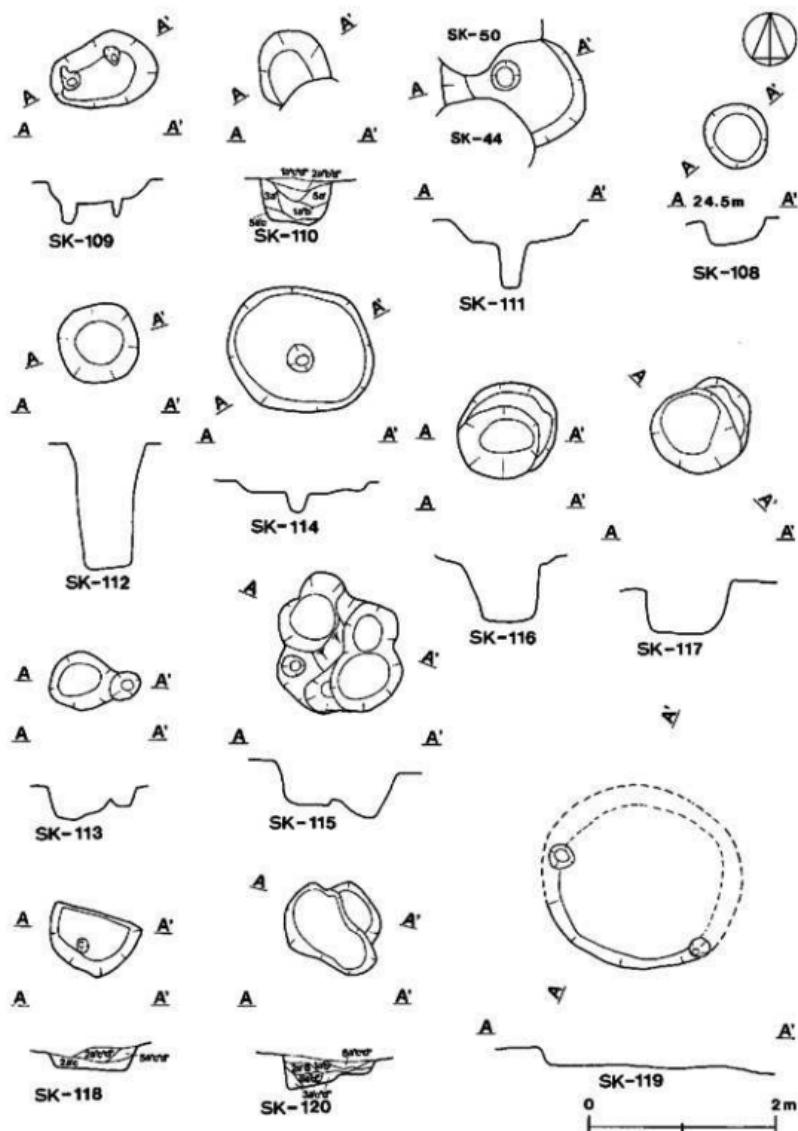
第63図 土壌実測図(7) (L = 24.9m)



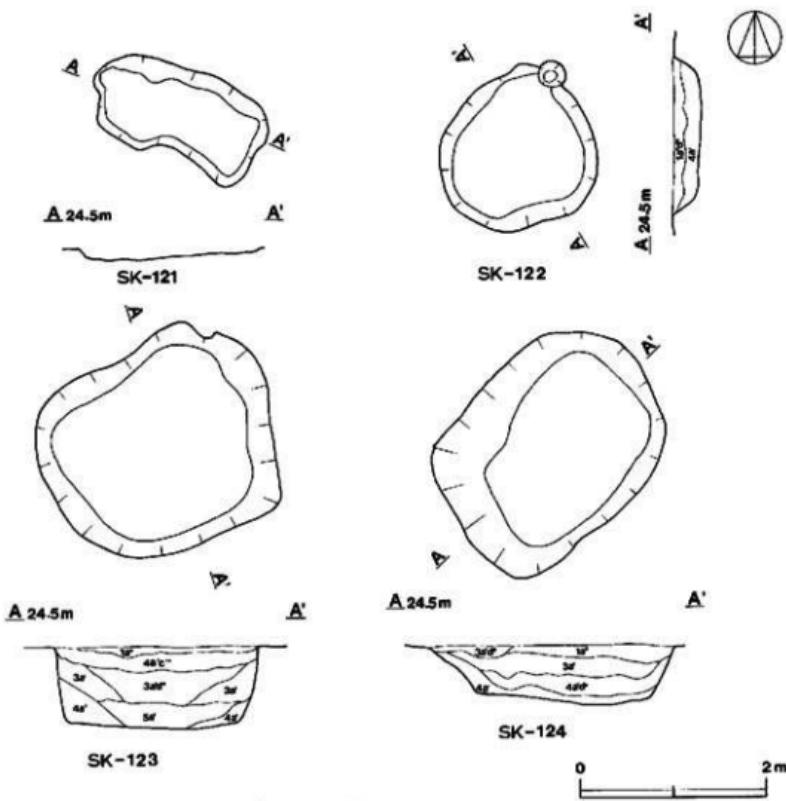
第64図 土壌実測図(8) (L = 24.9m)



第65図 土壌実測図(9) ($L = 24.9m$)



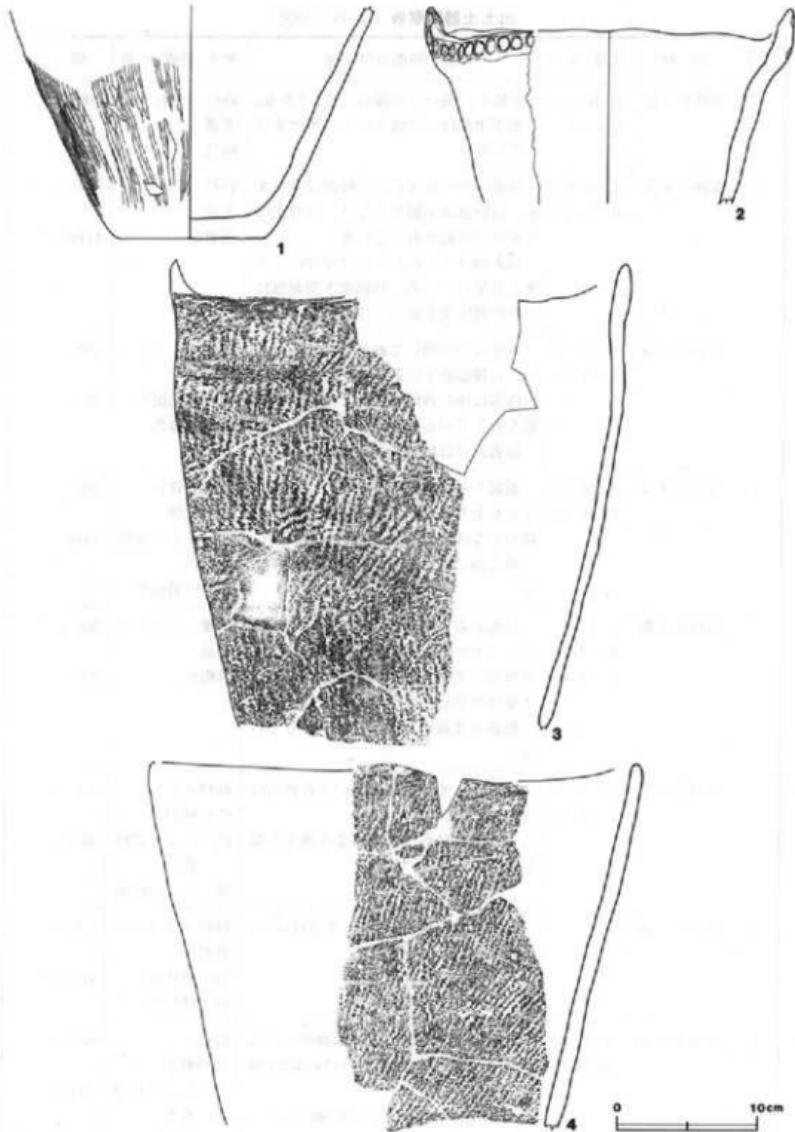
第66図 土壌実測図(10) (L = 24.9m)



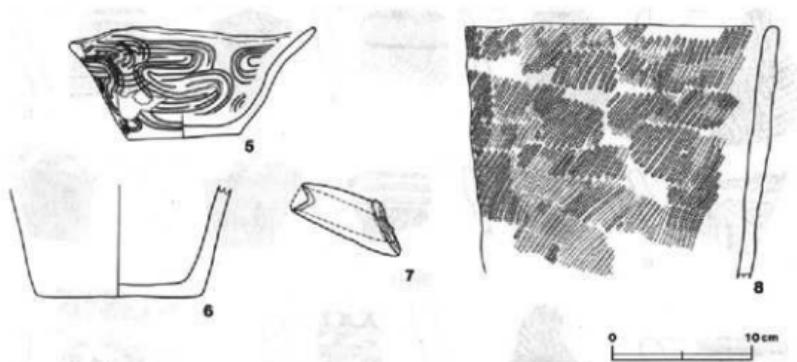
第67図 土壤実測図(1) (L = 24.9m)

出土土器観察表（第68・69回）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土 焼成 色調	備考
1	深鉢形土器	B(16.6) C 10.5	平底から開いて直線的に立ち上がる。胴下半部はヘラ削きによる無文を呈している。	砂粒・長石 普通 棕色	SK-5出土 底部90%
2	深鉢形土器	A(27.5) B(17.5)	頭部はやや外反し、口縁部は直立する。口唇部は先細りとなり、口唇上に2単位の突起を有している。 器表面はていねいなヘラなどによる無文を呈している。口縁部と突起部に円形の押圧文を残らしている。	砂粒 普通 浅黄色	SK-7出土 口縁部40%
3	深鉢形土器	A(32.5) B(34.2)	胴部はやや開いて直線的に立ち上がり、口縁部直下に若干の折れを持ち、口縁部は少し外傾する。2単位の小突起を有している。 器表面には粗雑な纏文を施している。	砂粒・スコリア 軟弱 内-明赤褐色 外-明褐色	SK-7出土 30%
4	深鉢形土器	A(34.9) B(26.0)	副部から口縁部へやや開いて直線的に立ち上がり、口唇部は丸味を持つ。継やかな波状口縁を呈している。 器表面には粗雑な纏文が施されている。	砂粒・長石 やや軟弱 内-にふい黄橙色 外-明黄褐色	SK-10出土 口縁部20%
5	浅鉢形土器	A 17.5 B 7.3 C 8.0	底部から若干の膨らみを持って外側に立ち上がり、さらに口縁部は外傾し、口唇部は丸味を持つ。波状口縁を呈し、3単位の突起を有している。 脚座状沈線文を波状に降下させている。	砂礫・スコリア 普通 黒褐色	SK-12出土 95%
6	深鉢形土器	B(7.7) C(11.6)	底部からやや外側へ開いて直線的に立ち上がる。 胴下半部はヘラなどによる無文を呈している。	砂粒・長石 やや軟弱 内-にふい黄橙色 外-にふい褐色	SK-45出土 底部45%
7	注口土器		注口部で、全長8.15cm、基部径は1.8cmである。	砂粒・スコリア 良好 内-黄灰色 外-褐灰色	SK-75出土 注口部95%
8	深鉢形土器	A(22.4) B(18.0)	副部から口縁部へは直線的に立ち上がる。平穂の口縁で、口唇部は平坦である。 器表面には斜纏文を回転約文している。	砂粒 やや軟弱 内-にふい褐色 外-褐色	SK-91出土 口縁部50%



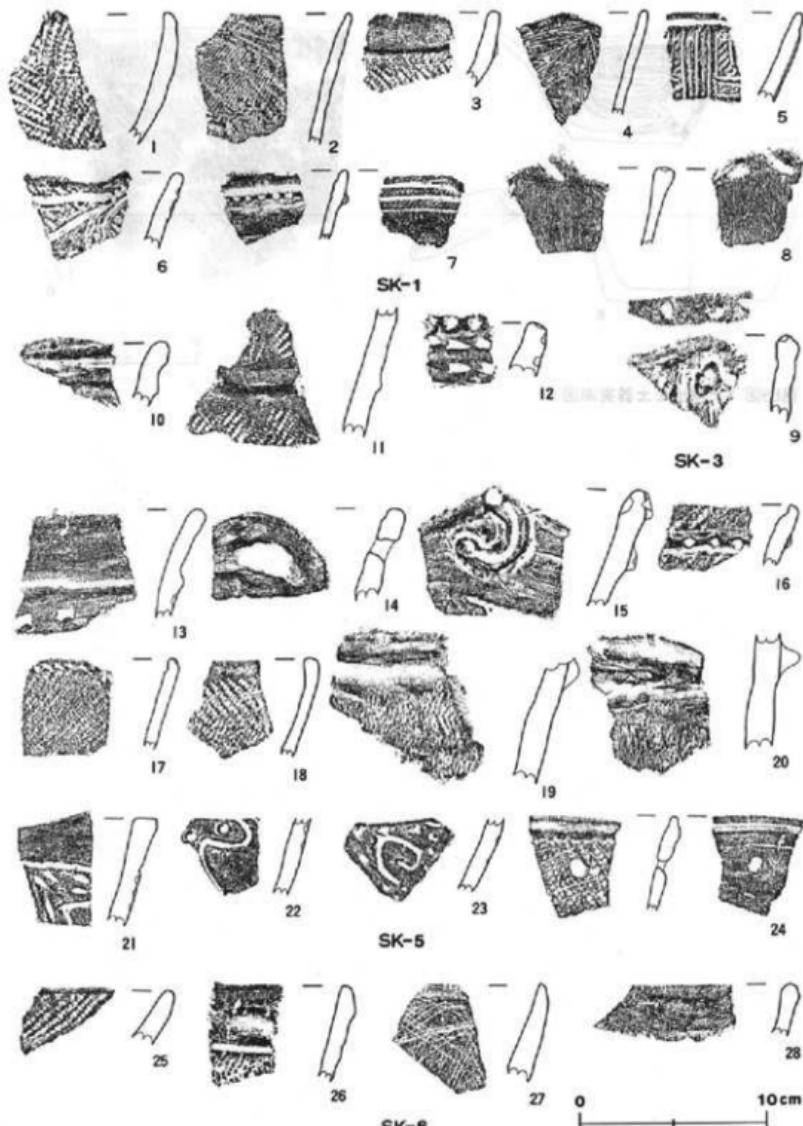
第68図 土壤出土土器実測図(1)



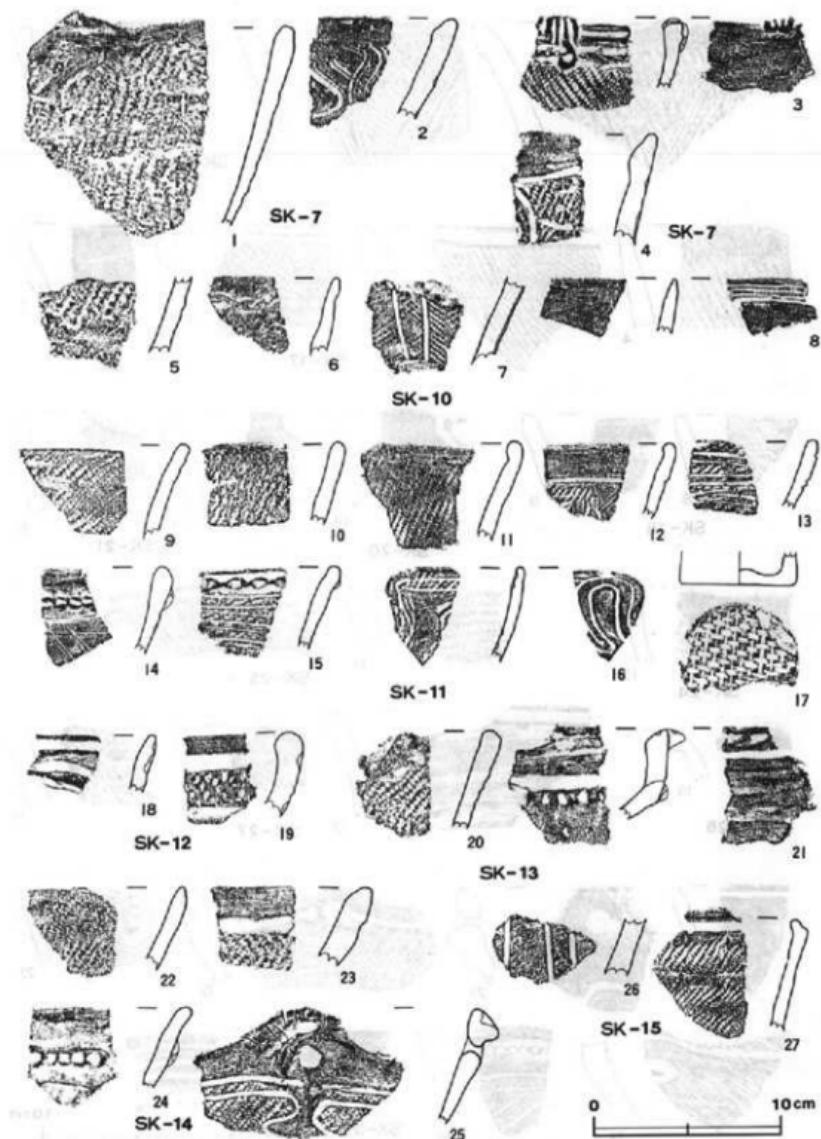
第69図 土壤出土土器実測図(2)



同前
同前

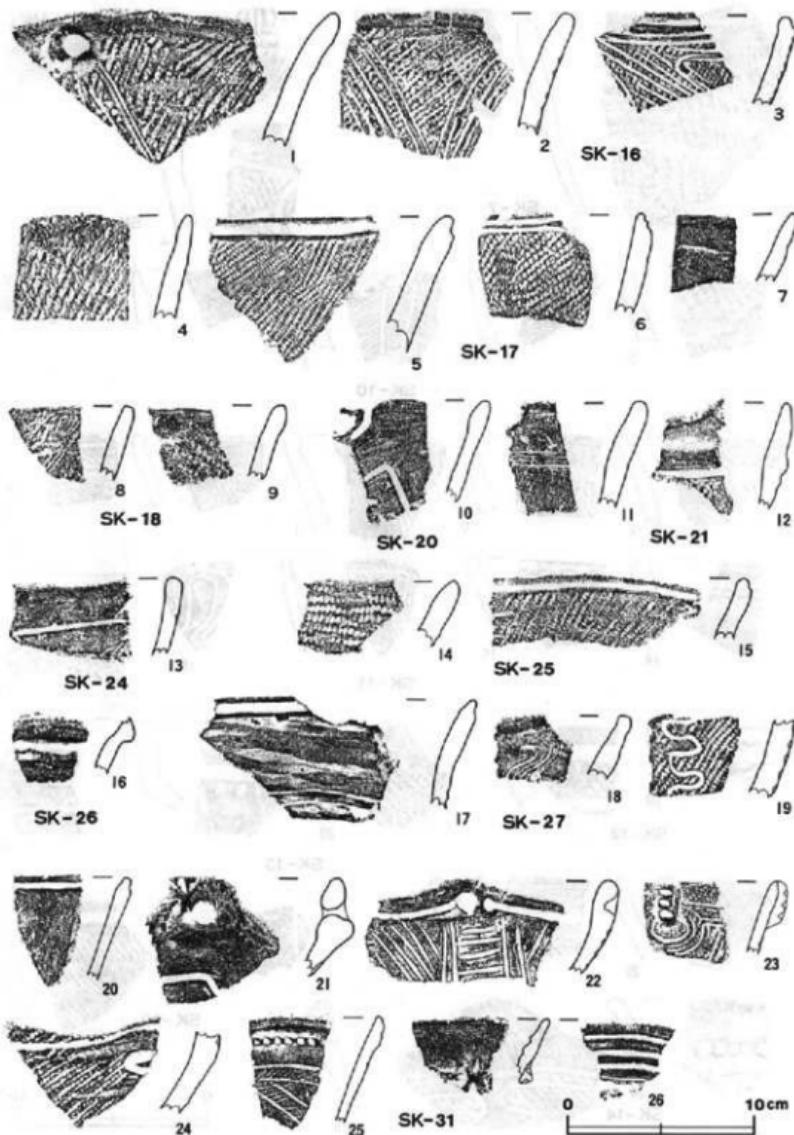


第70図 土壤出土土器拓影図(1)

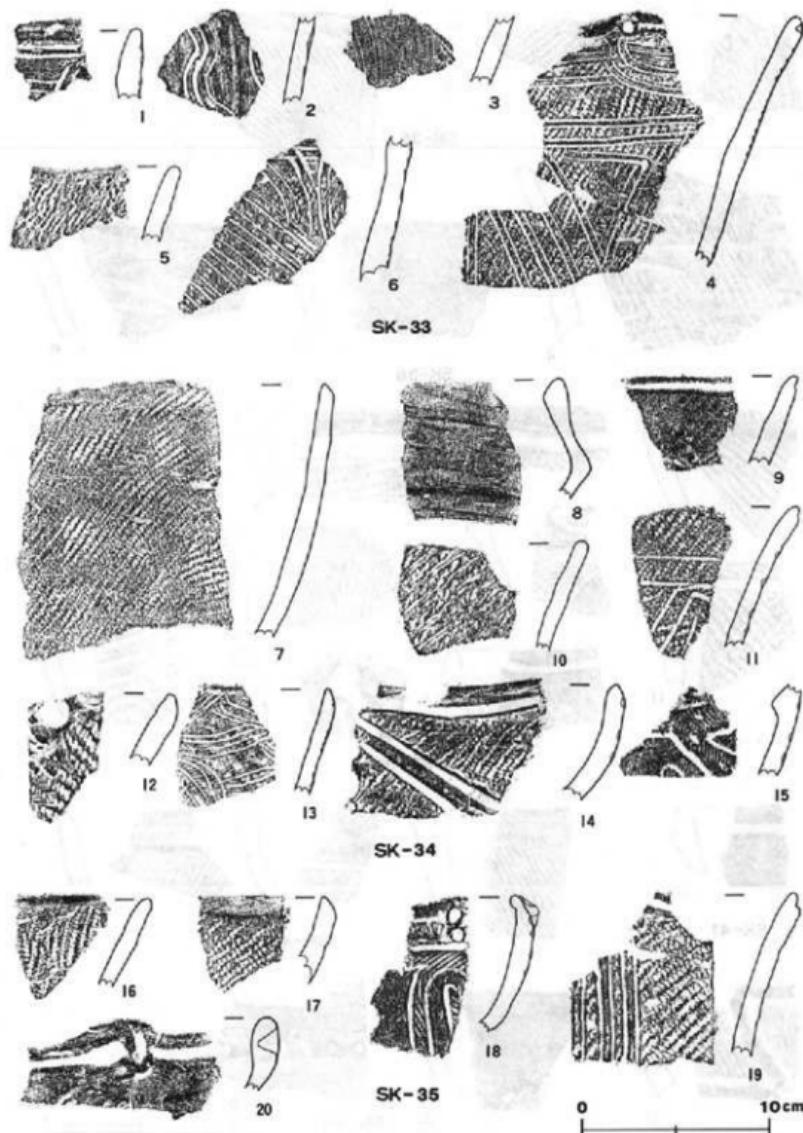


第71図 土壤出土土器拓影図(2)

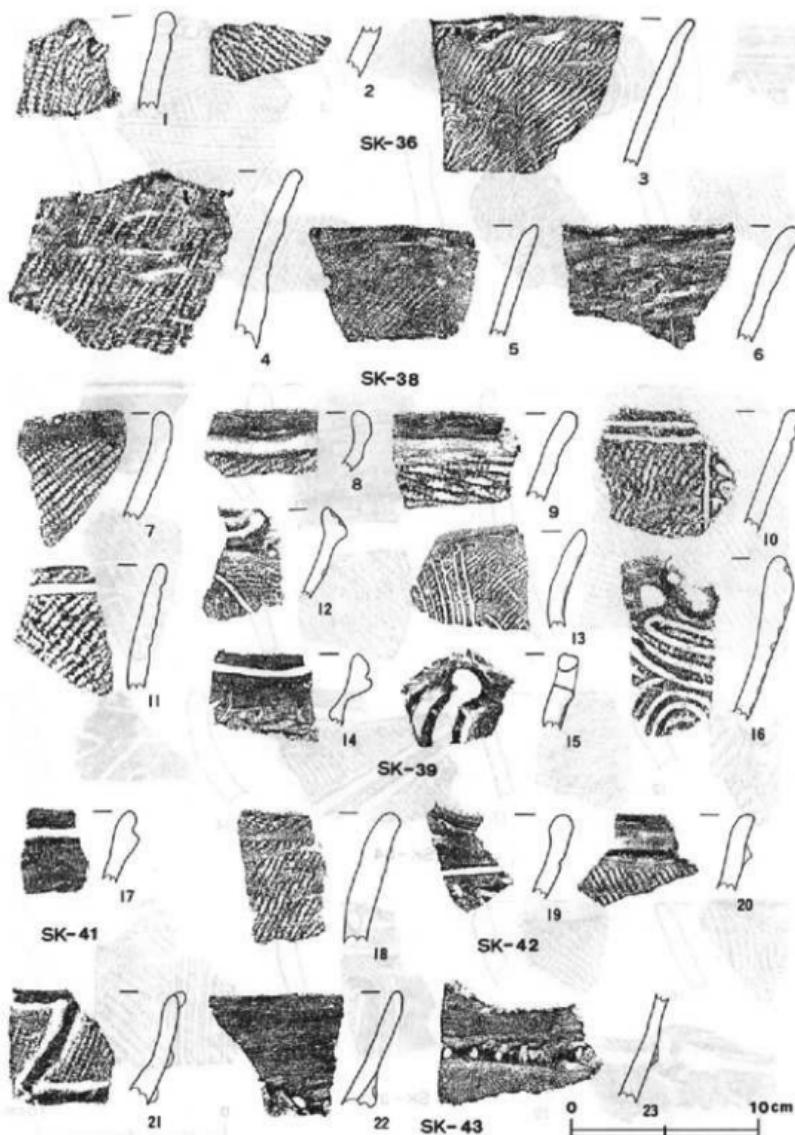
（昭和28年秋土壤出土土器）



第72図 土壤出土土器拓影図(3)

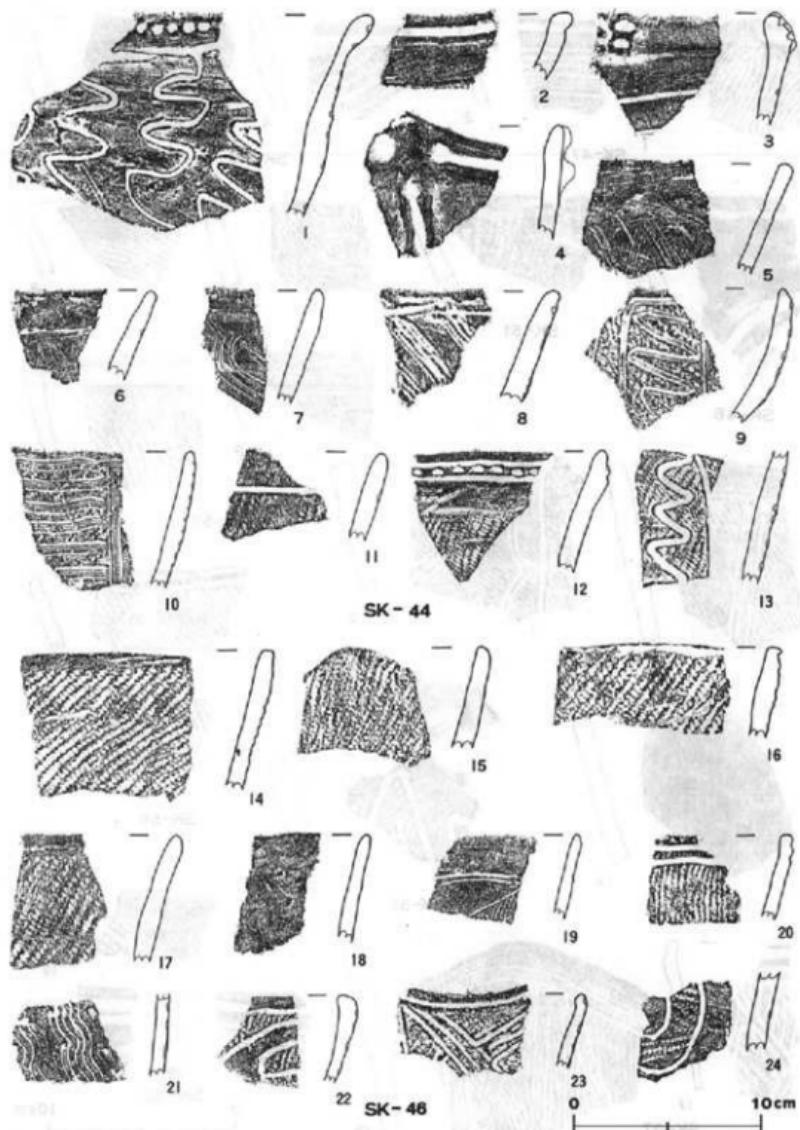


第73図 土壤出土土器拓影図(4)

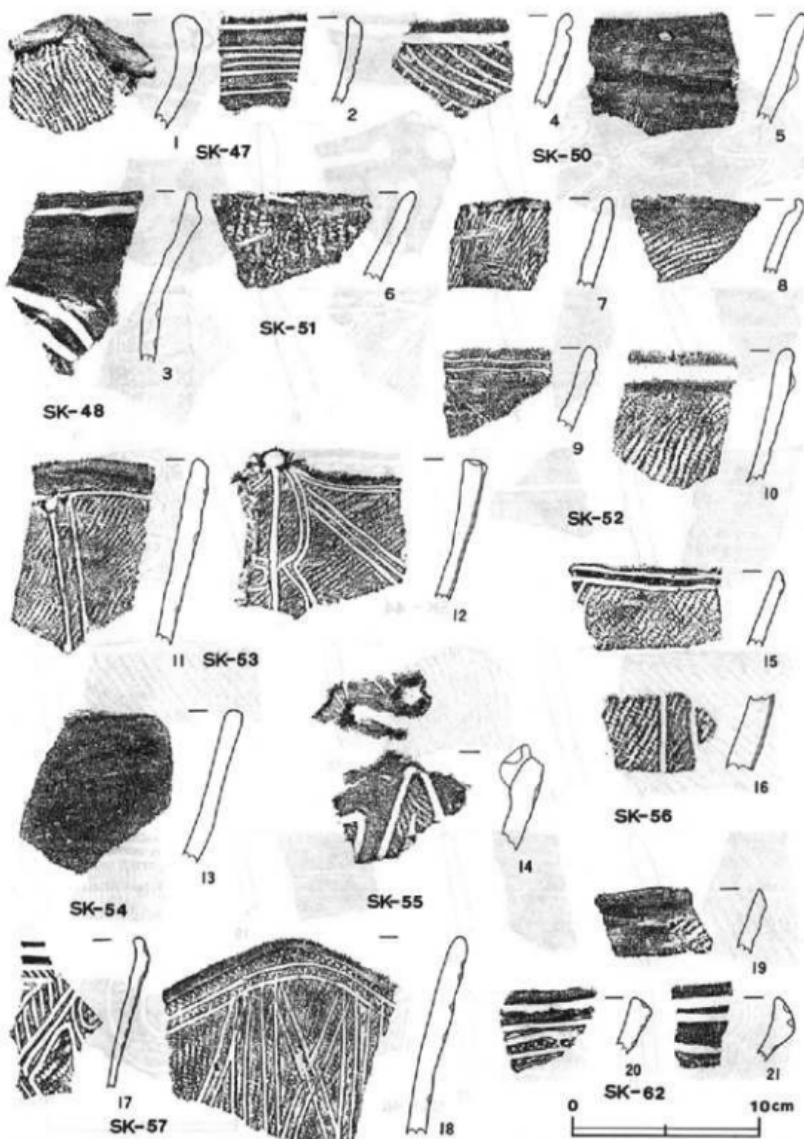


第74図 土壤出土土器拓影図(5)

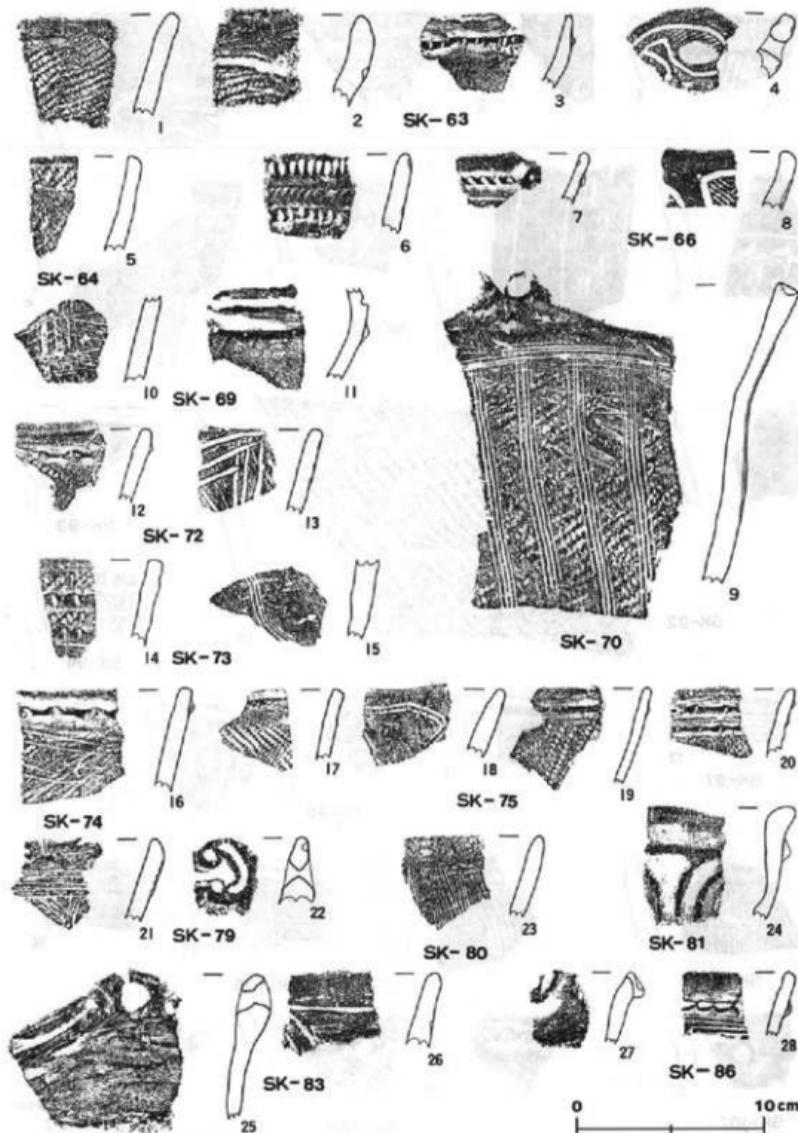
大河原貝塚出土土器拓影図(5)



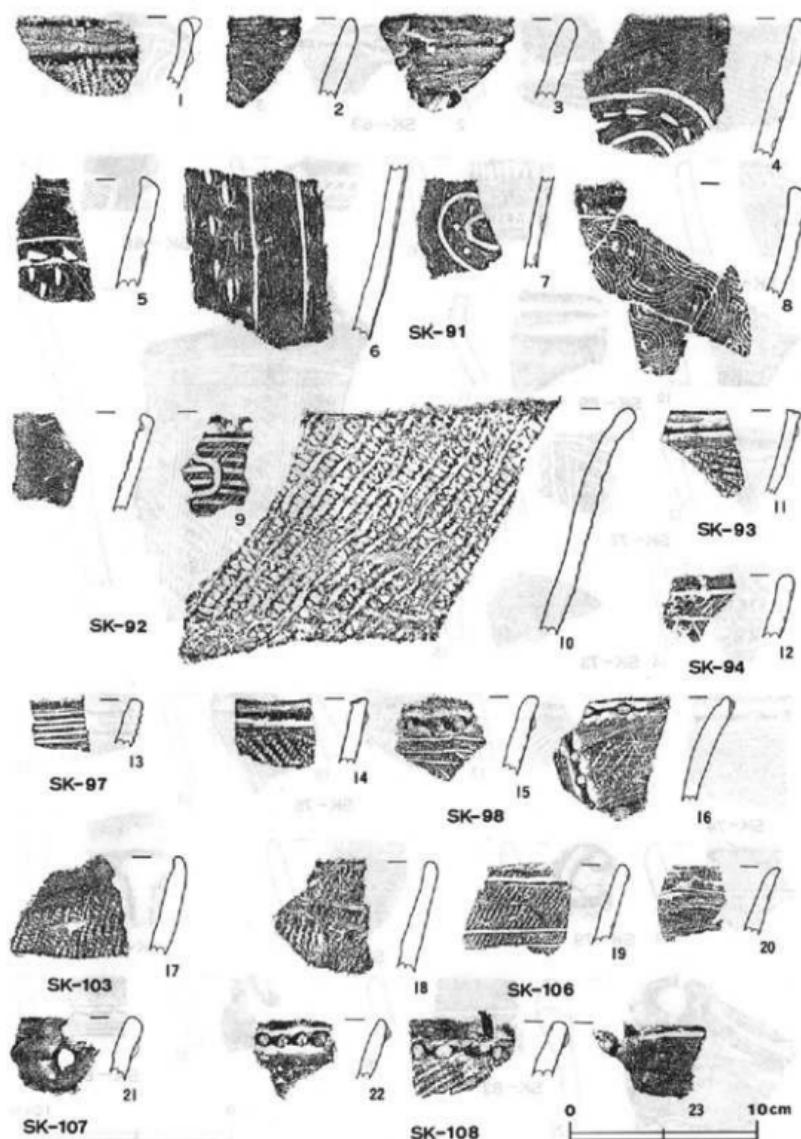
第75図 土壤出土土器拓影図(5)



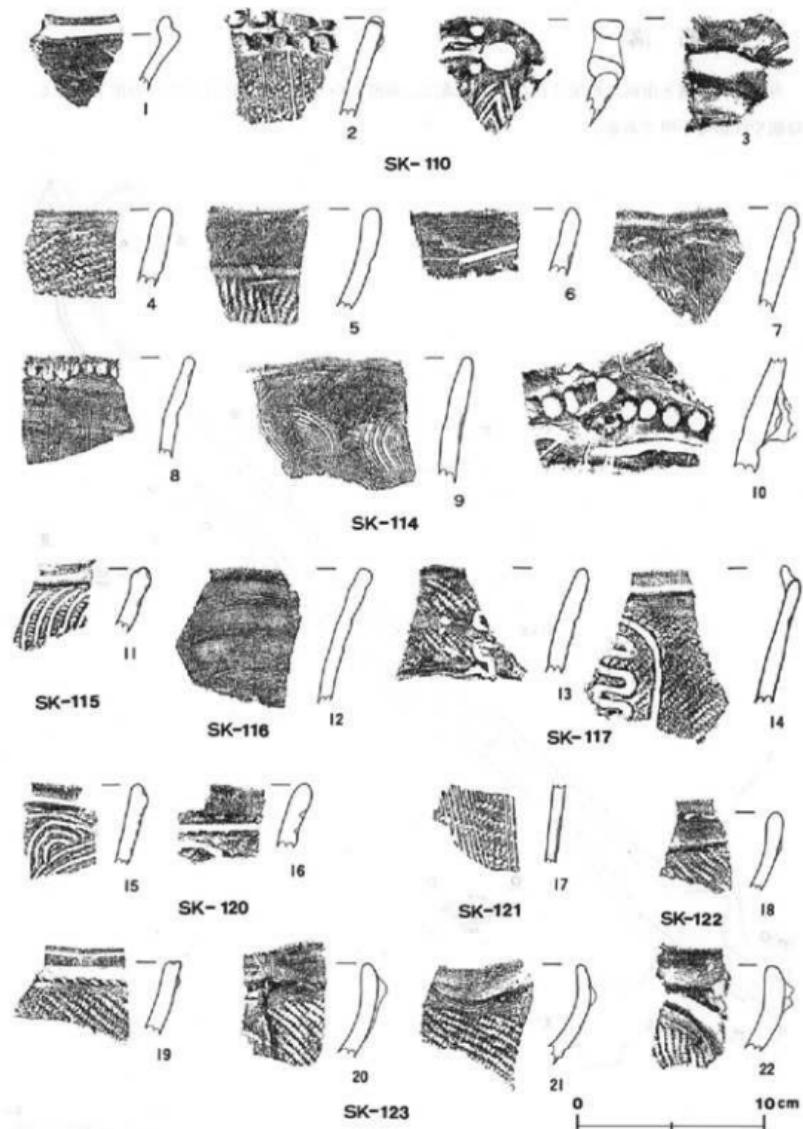
第76図 土壤出土土器拓影図(7)



第77圖 土壤出土土器拓影圖(8)



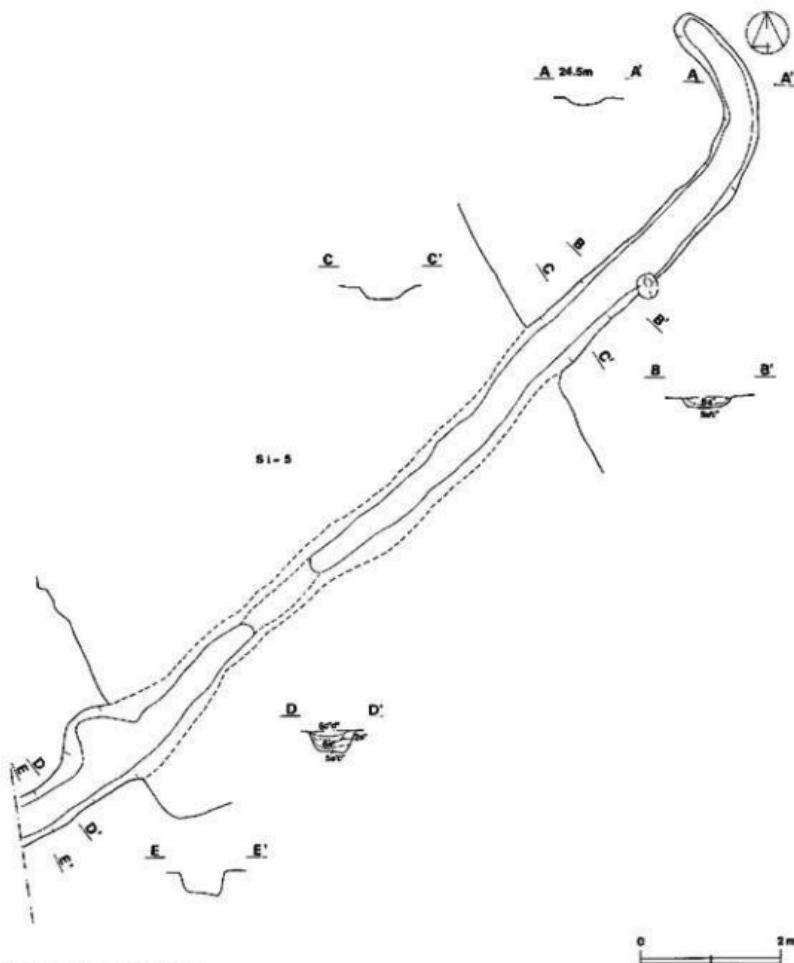
第78図 土壌出土土器拓影図(9)



第79図 土壤出土土器拓影図10

第4節 溝

当遺跡の東側と南側に検出された4条の溝は、規模も小さく、遺構に伴う遺物の出土もなく、時期や性格等不明である。



第80図 第1号溝実測図

第1号溝（第80図）

本跡は大調査区B1・B2調査区に曲子状に確認されたもので、遺跡の南西側に位置し、北東から南西方向へ延びてさらに区域外へ向かっている。

B2b: 調査区に検出された溝の北東端部の主軸方向はN-145°-Eを指し、南東方向へ彎曲しながら延び、端部から約1.8mのところでN-228°-Eと大きく向きを変えて南西方向へ直線的に延びている。検出した溝の全長は16.3mほどで、北東端部から4.5mの南東壁に小ピットが1か所確認されたが、このピットは溝に関連するものではない。6.1mから14.1mのところまで5号住居跡を切り込み、その内10.6mから11.8mの間は、溝底面が5号住居跡の床面と同レベルである。14.5m付近の北西壁が外側に膨らんでいる。

溝の上幅は50~75cmであるが、北東端部から14.5m付近の膨らみ部のところは115cmと広くなっている。遺構確認面から溝底面までの深さは、北東端部付近が10cmと最も浅く、南西端部が30cmと最も深い。断面はA-A'付近は「U」形、北東から南西にはほぼ直線的に延びているところは「V」形を呈している。溝底面のレベル差は15cmほどである。溝内の覆土堆積状況は自然堆積で、上層に締まりのある極暗褐色土、下層にローム粒子を多く含む褐色土が堆積している。

溝内からの出土遺物は縄文土器片67点が出土しただけで、本跡に関連する遺物の出土はなかった。

時期は不明だが、古墳時代中期に比定される5号住居跡を切り込んでいるので、それ以降の遺構といえよう。

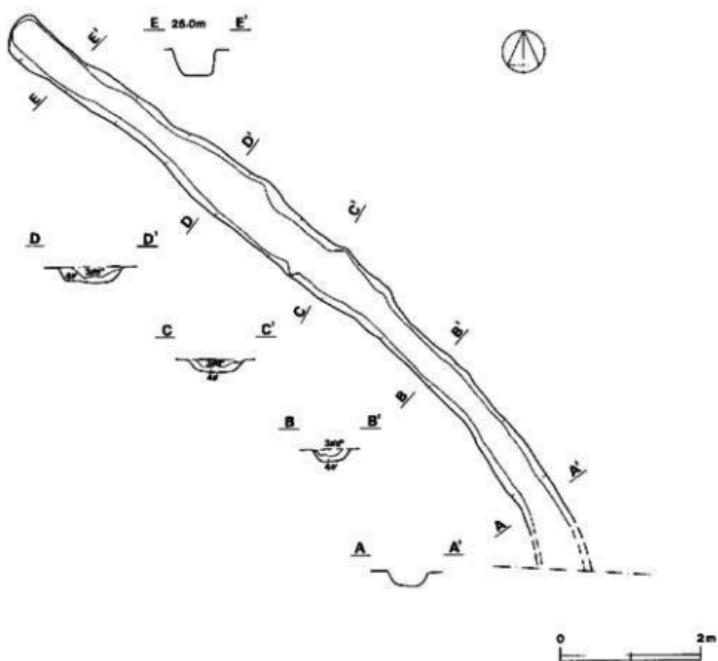
第2号溝（第81図）

本跡は大調査区B2区に直線状に確認されたもので、遺跡の南側に位置し、北西から南東方向へ延びてさらに区域外の低地へ向かっている。

B2c: 調査区に検出された溝の北西端部の主軸方向はN-127°-Eを指し、北西から南東方向へほぼ直線的に延び、端部から7mほどのところから若干彎曲しながら南東部の傾斜地へ延びている。検出した溝の全長は10.7mほどである。

溝の上幅は概して50cm前後であるが、北西端部から3mのところから6.5mのところまでは80cmとやや膨らんで広くなっている。遺構確認面から溝底面までの深さは18~35cmで、北西端部付近がやや深い。溝底面のレベル差はほとんどない。断面は「一」形で、壁、底面ともハードロームで硬い。溝内の覆土堆積状況は自然堆積で、ローム粒子を多く含む褐色土が堆積している。

溝内からの出土遺物は縄文土器片215点が覆土中から出土したが、本跡に関連する遺物とは考えられない。



第81図 第2号溝実測図

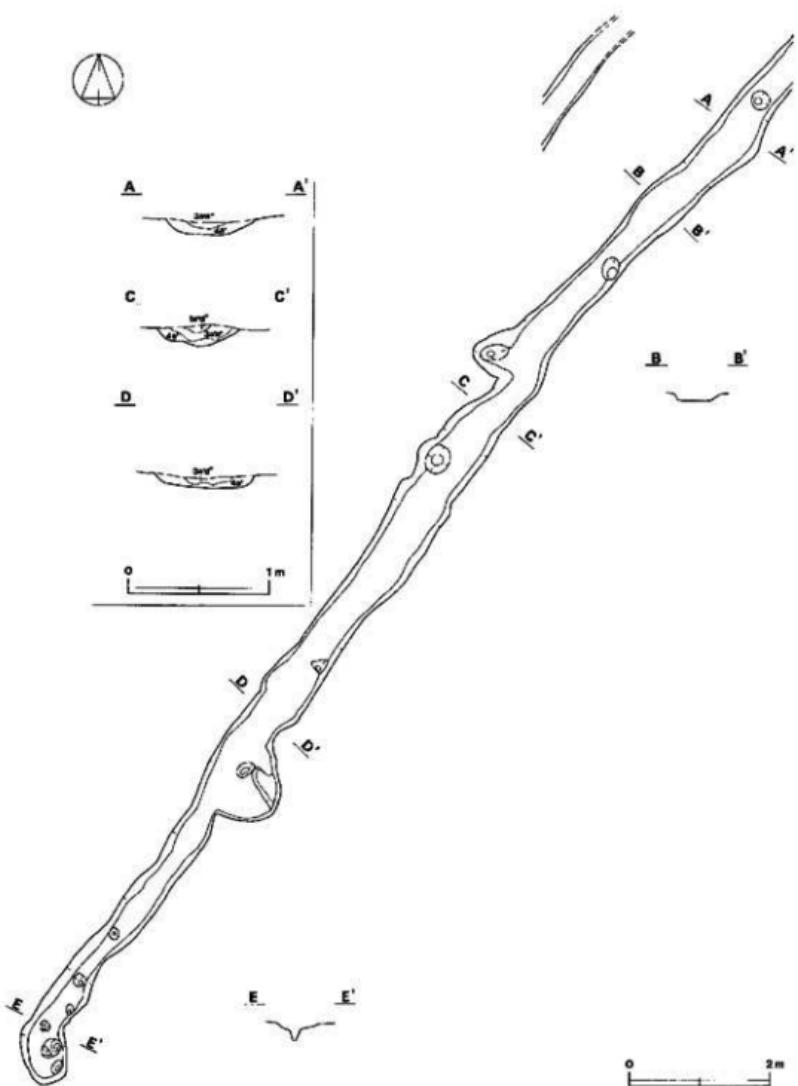
第3号溝（第82図）

本跡は大調査区A2・B2区にはほぼ直線状に確認されたもので、遺跡の中央からやや東側に位置し、南西から北東方向へ延びてさらに区域外の低地へ向かっている。

B2b調査区に検出された溝の南西端部の主軸方向はN-8°-Wを指し、端部から0.8mのところでN-36°-Eと北東方向へ向きを変え、ほぼ直線的に北東側の傾斜地へ延びている。検出した溝の全長は19.8mほどで、南西端部から4.8mから6mまでのところの南東舷が外側に大きく膨らんでいる。壁下や溝底に小ビットが12か所確認されたが、性格は不明である。

溝の上幅は40~80cmであるが、端部から5m付近の膨らみ部のところは110cmと広くなっている。遺構確認面から溝底面までの深さは10cm前後と浅い。断面は「ノ」形を呈している。溝内の覆土堆積状況は自然堆積で、ローム粒子を多く含む褐色土が堆積している。

溝内から繩文土器片が120点ほど出土したがいずれも覆土中からのもので、1・2号溝と同様、本跡に関連する遺物の出土はなかった。



第82図 第3号溝実測図

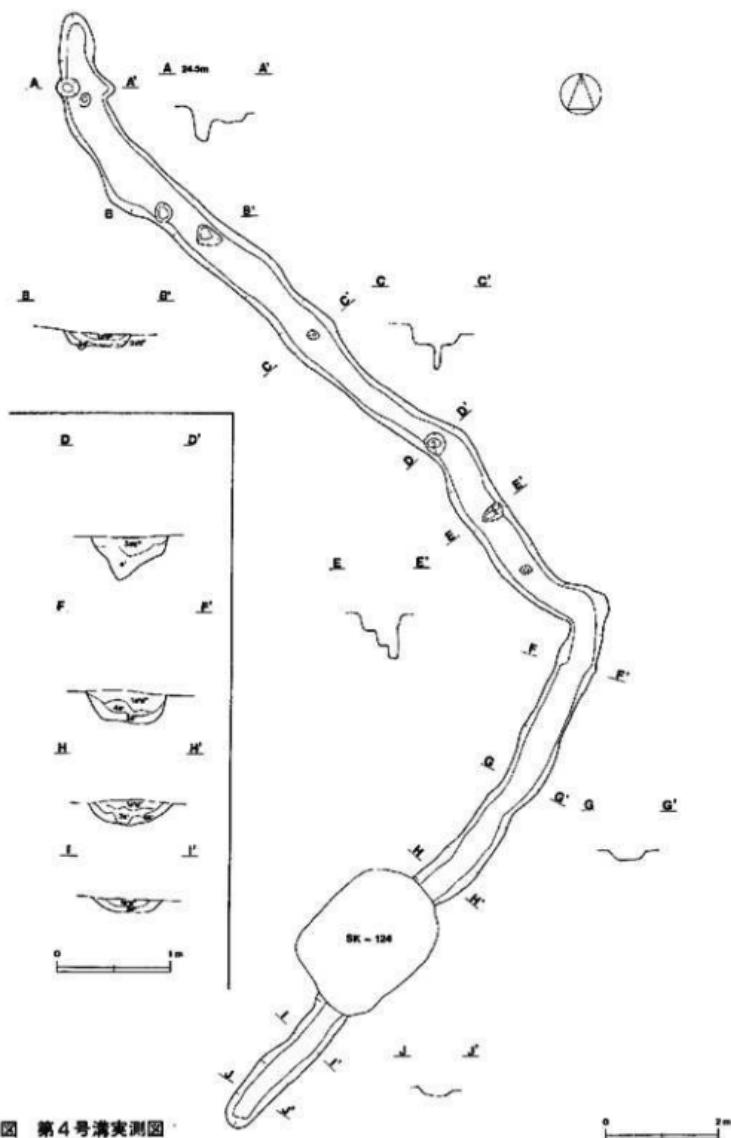
第4号溝（第83図）

本跡は大調査区A2・B2区の表土層を除去した時、暗褐色土の落ち込みで明確に確認されたものである。遺跡の東端に位置し、逆「L」字形を呈している。

A2i・調査区に検出された溝の北西端部から南東方向へほぼ直線的に延び、14.5mのところで南西方向へ大きく向きを変え、さらに直線的に延びてB2ds調査区の南西端部に至っている。検出した溝の全長は25.5mほどで、溝の南西端部から約2.7mから5.3mのところまで124号土壙を切り込んでいる。壁下や溝底面に小ピットが8か所確認されたが、性格は不明である。

溝の上幅は50~100cmで、遺構確認面から溝底面までの深さは10~25cmである。北西から南東へ延びている溝の方が、北東から南西へ延びている溝より概して深い。断面は「U」形を呈している。壁、底面ともハードロームで硬い。溝底面のレベル差は60cmほどあり、南西端部付近が最も高く、曲手状に屈曲する付近が最も低い。溝内の覆土地積状況は自然堆積で、上層に少量の焼土粒子や炭化粒子を含む暗褐色土、下層にローム粒子を多く含む褐色土が堆積している。

溝内からの出土遺物は、北西から南東に延びる溝部からは、縄文土器片106点、磨石2点、石皿1点、北東から南西に延びる溝部からは縄文土器片30点、打製石斧1点が出土した。しかし、いずれも覆土中からの出土で、本跡に間連する遺物とは考えられない。



第83図 第4号溝実測図

第5節 遺構外出土の土器

仲根台B遺跡の調査で出土した遺物は、遺物収納箱で120箱を数えるが、縄文時代に属する土器、石器、土製品、自然遺物が主体となっており、他にごく少量の古墳時代の土師器等がある。縄文時代の遺物の中でも、圧倒的に土器の出土が多い。縄文土器は中期末から後期前半に属するもので、中期のものでは加曾利E式、後期のものでは称名寺式、潮之内式、加曾利BI式等が検出された。ここでは、住居跡や土壤から出土した土器については既に掲載してきたので、表面採集やグリッド発掘中に出土した縄文土器を文様別に分類してみることにする。

第1群土器 縄文時代中期末の加曾利E式を一括した。

第1類 口縁部が隆帯によって渦文や区画文で構成される文様帶をもつもの（第84図1～5・7・9・10）

口縁部あるいは胴上部等に隆帯による渦文や区画文を施し、区画内に繩文を充填している。胴部には区画外や沈線間の磨り消しが施されている。1～5・7の口唇は内脣し、口唇はやや肥厚し丸味をおびて内側に傾斜するものと丸味をおびただけのものがある。4・5は波状口縁を呈している。9の口唇は外側に傾斜し、10の口唇は内側に傾斜している。

第2類 口縁部が沈線によって文様構成されるもの（第84図6・8）

6・8はともに口縁が内脣し、口唇はやや肥厚し丸味をおびている。それぞれ口縁上部に太い沈線を1条施している。6は沈線による区画外を磨り消している。8は沈線による区画内に繩文を充填し、胴部の懸垂文は、沈線間の磨り消しによる無文帶である。

第3類 第1類と第2類の胴部破片（第84図11～13）

胴部の懸垂文は、沈線間の磨り消しによる無文帶である。

第4類 繩文のみが施されているもの（第84図14～16、第85図1・2）

器表面に繩文のみを施したもので、第84図14～16の口縁は内脣し、15の口縁部は無文帶を巡らし、胴部と微隆帯によって区分している。第85図1の口縁は直立し、口唇は肥厚して平坦を呈している。

第2群土器 縄文時代後期初頭の称名寺式に比定される土器群である。

第1類 沈線区画内に繩文が施されているもの（第85図3～6）

3は胴部に「J」字状の磨り消し繩文帶で文様を構成している。4～6は、口縁部の弯曲部に隆帯が貼付され、それが隆起しながら把手へと続くものである。隆帯には沈線が施されている。

第2類 沈線区画内に刺突文が施されているもの（第85図7～14）

7～9は平縁口縁、10・11は波状口縁を呈し、10を除いて口縁は内凹している。12～14は胴部破片で、平行する曲線間に刺突文が施されている。刺突にはヘラ状工具や棒状工具が使用されている。

第3群土器 繩文時代後期初頭に属する沈線によって文様が構成される土器群である。

第1類 口縁部に無文帯が巡り、太い沈線によって胴部と区分されているもの（第86図1・2・5・6・8・10）

1・2は口縁がやや外反し、口唇が先細りとなる深鉢形土器で、口縁部に幅の広い無文帯が巡り、1条の横位の沈線で胴部と区分している。胴部には平行する沈線を1は斜位に、2は鋸歯状に施している。5は口縁部に幅の広い無文帯を巡らし、1条の横位の沈線で胴部と区分している。6・8は1条の太い沈線によって口縁部無文帯を作り出し、胴部に条線状の沈線を斜位に施している。10は緩やかな波状口縁を呈する深鉢形土器で、胴部から口縁へやや開いて直線的に立ち上がっている。口縁下部に1条の横位の沈線を施し、沈線上には円孔が穿たれている。胴部には半截竹管具による平行する沈線を4本単位に垂下させて区画し、区画内に同一工具による刺突を加えている。

第2類 口縁部から沈線が施されているもの（第86図3・4・7）

3は口唇が先細りとなり、口辺部に細い沈線を2条横位に施し、以下に沈線を密に縱方向に施している。4は口縁が内凹し、口唇は丸味をおびている。口縁部に2条の平行する沈線を横位に施している。7は口縁部に横位の条線状の沈線を施し、さらに口縁部から胴部に同様な沈線を格子目状に施している。

第4群土器 繩文時代後期初頭に属する条線文によって文様が構成される土器群である。

第1類 条線文が直線的に施されているもの（第86図9・11・12）

9は口縁がやや内凹する平縁の深鉢形土器で、口縁上部に横位の条線文、口縁下部から胴部に縱位、斜位の条線文を施している。11の口縁は直立し、口唇は肥厚し平坦である。1条の太い沈線によって口縁部無文帯を作り出し、胴部に密な条線文を縱方向に垂下させている。12は口縁部に隆帯を貼付し、胴部に条線文を格子目状に施している。

第2類 条線文が弧状に施されているもの（第86図13）

13は口縁部がほぼ直立し、口唇がやや肥厚し丸味をおびる深鉢形土器で、口縁部は無文で、胴部に施用した条線文を弧状に施している。

第3類 条線文が曲線的に施されているもの（第86図14～17）

14～17は、胴部に太目の条線文を波状に縱方向に施している。14は口縁部に1条の太い沈線を施し、胴部と区分している。15は口縁が内凹する平縁の深鉢形土器で、口縁部に微隆帯を貼付している。17は口縁の一部が小波状を呈するもので、この部分には「8」字状の貼付文が

施され、他の口縁部には2条の沈線が巡り、口縁下部には1条の沈線が巡り、さらにこれから出線的な条線文を交差させている。16は口唇部に刻みを加えている。

第5群土器 繩文時代後期前半に属する壺之内式の注口十器である。(第87図1・2)

1・2は同一個体と考えられる。内・外面ともに研磨されており、器形はおそらく胴部中央に最大径がある算盤玉状を呈するものと思われ。口縁は外反気味に立ち上がっている。口唇部に小突起を有し、その突起部に小孔が穿たれている。胴部上位の隆帯には刻みが加えられ、隆帯下はヘラ状工具による沈線が施されている。なお、小孔下から縦位の隆帯が胴部に垂下し、隆帯には1条の沈線を施している。また、その隆帯と胴部上位の隆帯との接点には半截竹管具による刺突が加えられている。

第6群土器 隆帯を有する十器群である。

第1類 隆帯を有しているもの(第87図3・4)

3は波状口縁を呈し、波頂部にくぼみがみられる。繩文の地文上に弧状の沈線を施し、突起部から断面三角形状の隆帯を縱方向に貼付している。4は舌状小突起を有し、口縁部に無文帯が巡り、微隆帯によって胴部と区分している。胴部には斜位の条線文が施されている。

第2類 隆帯に押圧・刺突が加えられているもの(第87図5~8)

5・6は横位の隆帯に押圧や刺突が加えられ、7・8は波頂部から縦位に押圧、刺突が加えられている。

第3類 隆帯に沈線が施されているもの(第87図9・10)

9は波状口縁を呈し、微隆帯によって口縁部と胴部を区分している。波頂部から微隆帯に背曲して接続する隆帯に1条の沈線を施し、その上・下端に刺突を加えている。10は口縁部に山形状に隆帯を貼付し、隆帯に1条の沈線を施している。山頂部には刺突が加えられている。

第4類 隆帯に刻みが加えられているもの(第87図11~17)

口縁部に刻みのある隆帯が巡っており、16を除いて他は波状口縁を呈する。11は突起部に円孔が穿たれ、周囲に沈線が施されている。さらにその外側に2条ずつの短い沈線を縱に施し、口唇下に1条の沈線を横位に巡らしている。沈線下の隆帯には斜位の刻みが加えられている。胴部は繩文の地文上に沈線を縦位、斜位に施している。13は波頂部に押圧を加え、山形状の隆帯とその頂部から垂下する隆帯には斜位の刻みを施し、隆帯による区画内・外には数条の沈線を施している。14・15も13と同様な施文方法であるが、突起部に円孔が穿たれている。16は平縁を呈し、口縁部に弧状の隆帯と、口縁部から胴部に縦位の隆帯を垂下させ、隆帯には刻みを施し、接続部には押圧を加えている。17は波頂部から斜位の刻みを加えた隆帯が垂下し、器表面には繩文が施されている。

第7群土器 把手を有する波状口縁の深鉢形土器である。(第88図1~3)

1は把手部に両側面から刺突、内・外面から押圧を加え、口唇上に沈線を施している。縄文の地文上に縦方向の沈線を施している。2も波頂部に両側面から刺突を加え、口唇上に沈線を施し、縄文地上に沈線を施している。3は把手部の両側面と頭部に押圧を加え、口縁部は沈線による文様が構成されている。

第8群土器 縄文時代後期初頭の堀之内式に比定される沈線文を有する土器群である。

第1類 沈線によって文様が構成されるもの（第88図4～6・8）

本類は第3群土器と類似するものであるが、沈線が明瞭で、しかも幾何学的な文様構成が施されているので、特に区別したものである。1の口縁は外反し、頭部に括れを持ち、縦やかな波状口縁を呈している。半截竹管具による平行沈線を口縁下部に横位に、さらにその下に渦巻状や波状の文様を縦方向に施している。2も半截竹管具による平行沈線を口縁部に横位に、胴部には弧状に施している。3はヘラ状工具による沈線を直線的にあるいは曲線的に施している。8は半截竹管具による山形状沈線を数次的に施している。

第2類 地文に縄文を有し、その上に沈線が施されているもの（第88図7・9～14、第89図1～12）

第88図7・10～13は、口縁部に1条ないし2条の太い沈線を横位に施し、胴部には縄文を地文として沈線が斜位、縦位、曲線的に施されている。第88図14、第89図1・2は口縁部に細い沈線を横位に施し、胴部には斜位、弧状、曲線的に施している。第89図4～6は、沈線を木葉状に施している。第89図7は器表面に縄文を施し、平行沈線によって口縁部と胴部を区分している。第89図8～11は、太い沈線を波状に垂下させている。第89図12は深鉢形土器の底部で、底径9.4cm。胎土に砂粒や蜜母を含み、胴部には縄文の地文上に沈線を施している。

第9群土器 縄文時代後期初頭に属する縄文のみが施されている土器群である。

第1類 口縁部が無文のもの（第89図13～16）

13は波状口縁を呈する深鉢形土器である。15・16は口縁部に1条の沈線を横位に施し、胴部と区分している。

第2類 口縁部に微隆帯を有するもの（第89図17・18）

17・18は口縁部に2条の微隆帯を有し、胴部に斜縄文を施している。

第3類 口縁上部から胴部にかけて縄文だけが施されるもの（第89図19・20、第90図1・2）

第89図19は原体L.Rの縄文が施され、20は波状口縁を呈する深鉢形土器で、付加縄文が施されている。第90図1も付加縄文が器表面に施され、2は無縫縄文である。

第10群土器 縄文時代後期前半の堀之内式に比定される土器群である。

第1類 三角形を文様構成の主体としているもの（第90図3～5）

口縁部文様帶は消失し、口唇部は内側に小さく突出して内に後をなす深鉢形土器で、縄文の地文上に沈線による横位と三角形の文様を構成している。5の突起下には円孔が穿たれている。

第2類 磨り消し縄文によって文様が構成されるもの（第90図7～10）

7～10は、口唇部が内側に小さく突出しており、胴部に数条の沈線が施され、磨り消し縄文帯が巡る。いずれも隆起帯を持たない。

第3類 口縁部に刻みのある隆起帯が巡るもの（第90図6・11～13）

6は把手を有し、突起部に円形の刺突を施し、口縁に沿って刻みのある隆起帯を巡らしている。胴上部には磨り消し縄文帯が巡り、内側には1条の沈線が施されている。11・12は口唇に刻みを施し、内側に3条の沈線が施されている。13は口縁部に刻みのある隆起帯が巡り、さらに隆起帯上に「8」字状の貼付文を附加している。

第11群土器 縄文時代後期に属する加曾利B式に比定される土器群である。

第1類 内面に数条の沈線が施されているもの（第90図14・15）

14・15ともに口縁部は無文で、内面に数条の沈線が施されている。15の口唇部には刻みが加えられている。

第2類 口縁部に連続的な指頭圧痕を施した隆帶を持つもの（第90図16～22、第91図1～3）

口縁部に1条の隆帶を持つもの（第90図16～18・20～22、第91図1・3）と、2条の隆帶を持つもの（第90図19、第91図2）がある。さらに、第90図16～21は胴部に縄文のみを施し、第90図22と第91図1～3は胴部には縄文の地文上に沈線が施されている。

第12群土器 口縁部に2条の沈線が巡り、沈線間に刻みを施している上器群である。（第91図4～6）

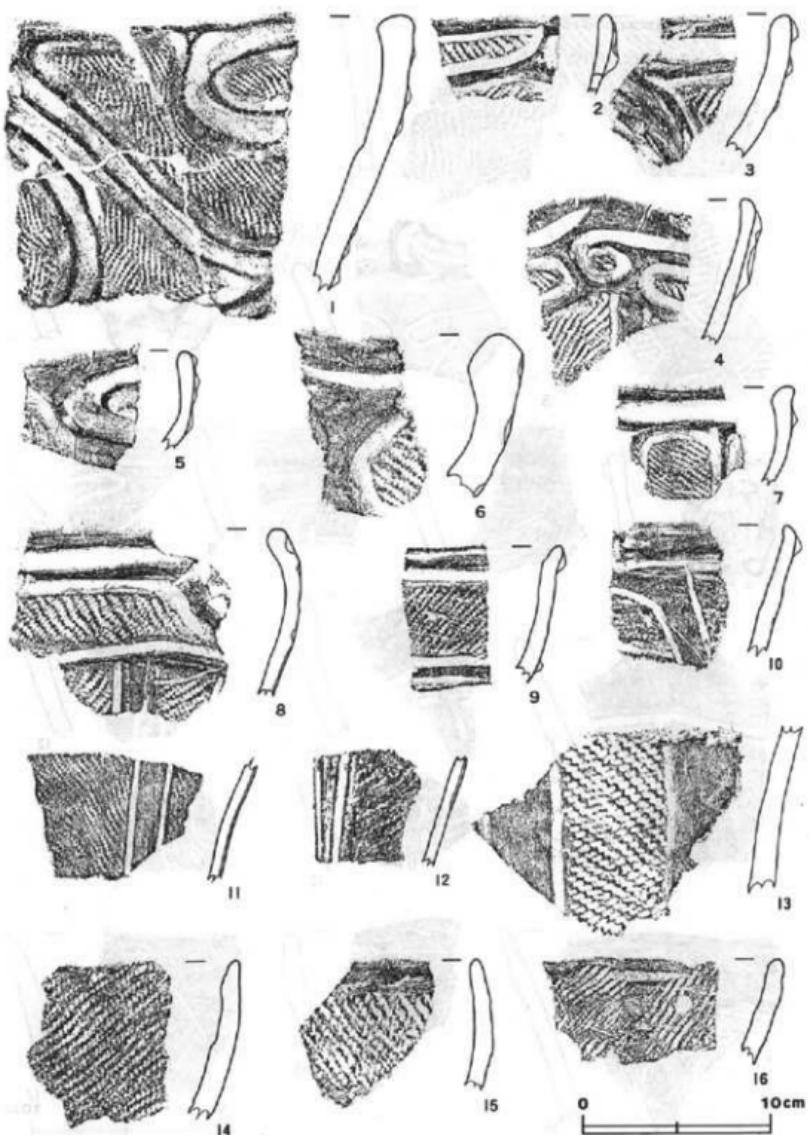
4～6は、口縁が内側に、口唇が丸味をおびている。口縁部に2条の沈線を巡らし、沈線間に半截竹管具による連続的な刻みを加えている。

第13群土器 ここでは無文の上器を一括した。（第91図7～12）

7～12は、無文を呈している土器群である。8は口径29cmの深鉢形土器で、口縁はほぼ直立し、口唇は丸味を持つ。胎土に砂粒・スコリアを含み、にぶい黄褐色を呈している。器表面はヘラ状工具による整形が施されている。9は口径26.2cmの鉢形土器で、口縁は直立し、口唇は先細りとなる。胎土に砂粒・スコリアを含み、内面は橙色、外面はにぶい橙色を呈している。器表面はヘラ状工具によるていねいな整形が施されている。11・12の口縁部には、棒状工具による連続的な押圧が加えられている。

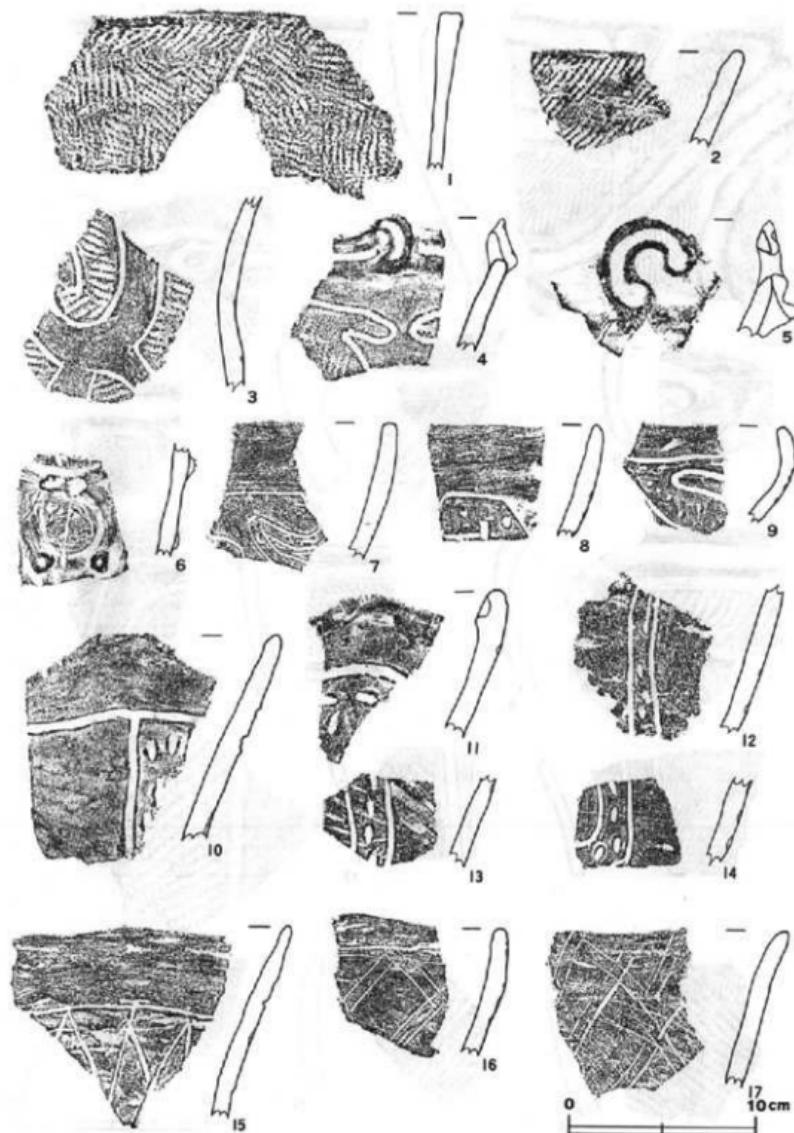
第14群土器 底部である。（第91図13～15）

13～15は、底部に網代痕を有するものである。しかし、仲根台B遺跡から出土した縄文土器の底部全体から見ると、網代痕を有する底部は1%にも満たない。



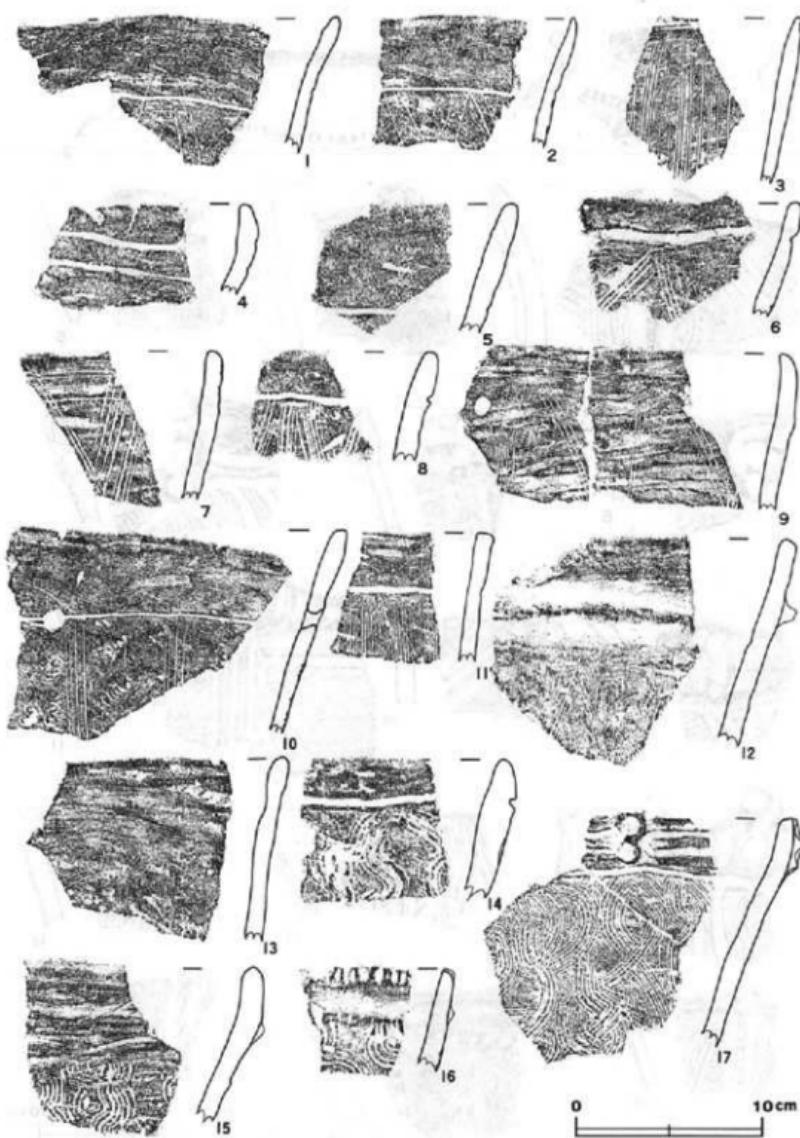
第84図 遺構外出土土器拓影図(1)

（遺構外出土土器拓影図(1)）

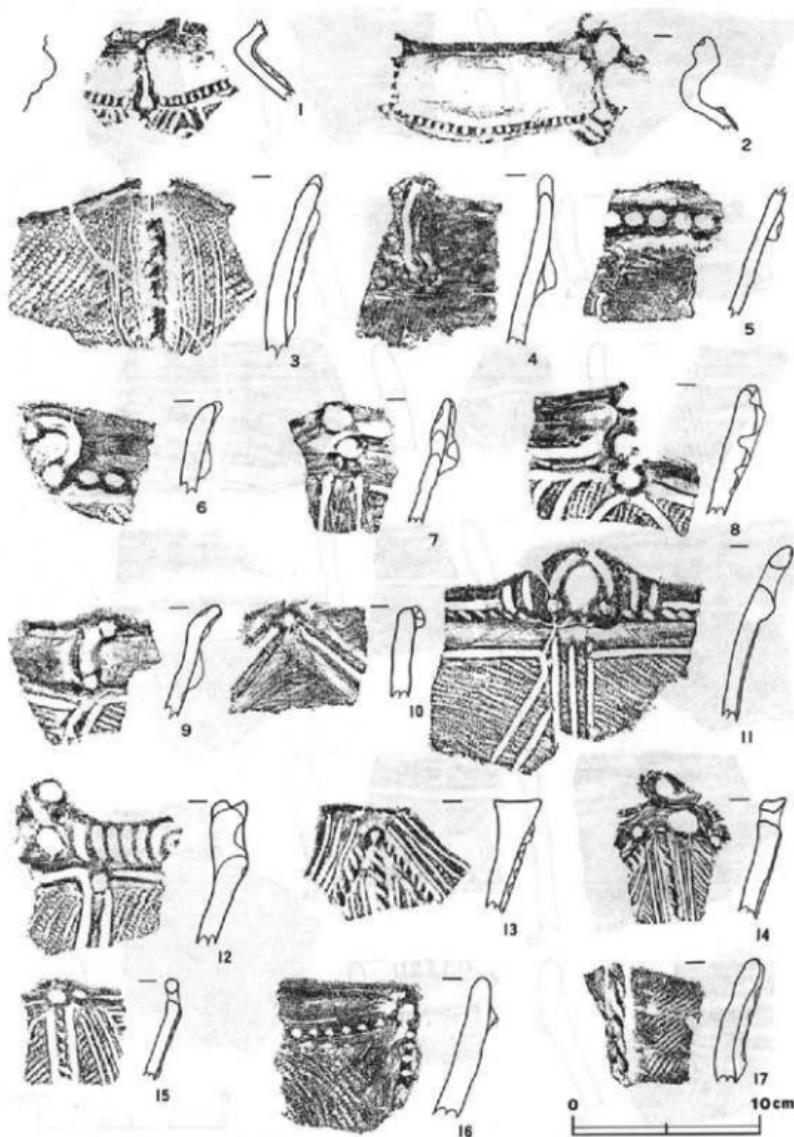


第85図 造構外出土土器拓影図(2)

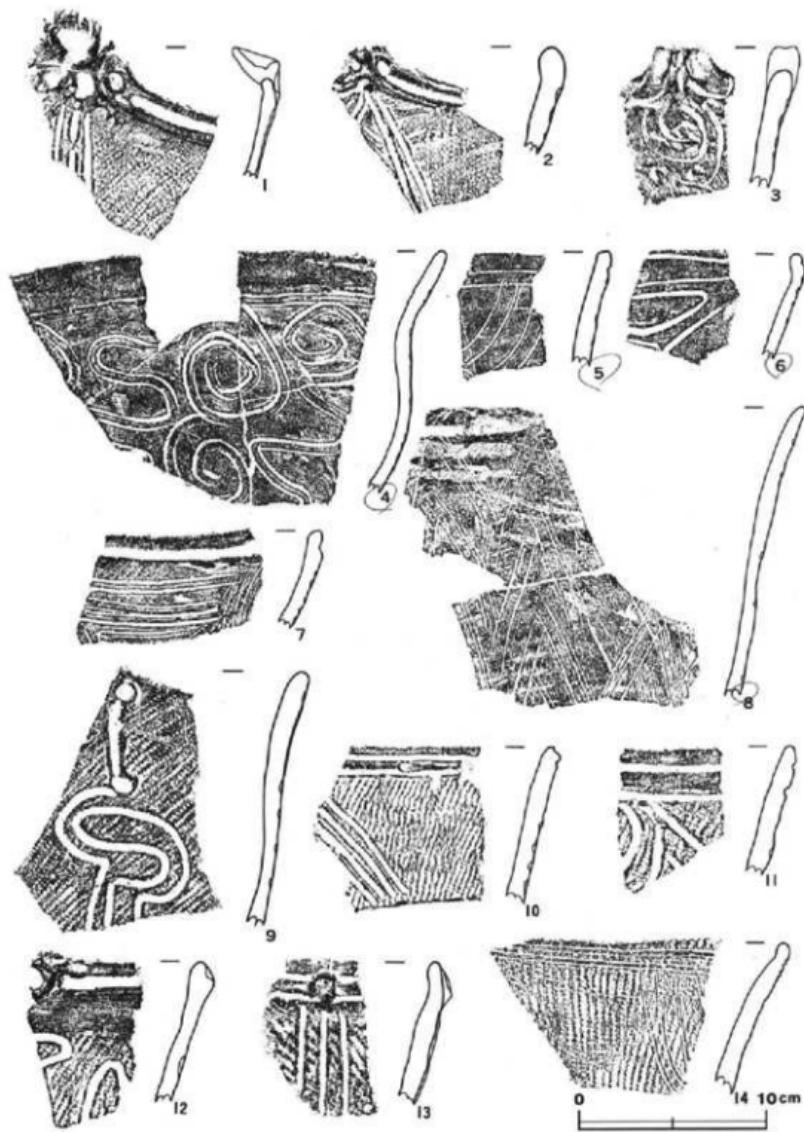
（出雲市立土器文化調査研究会）



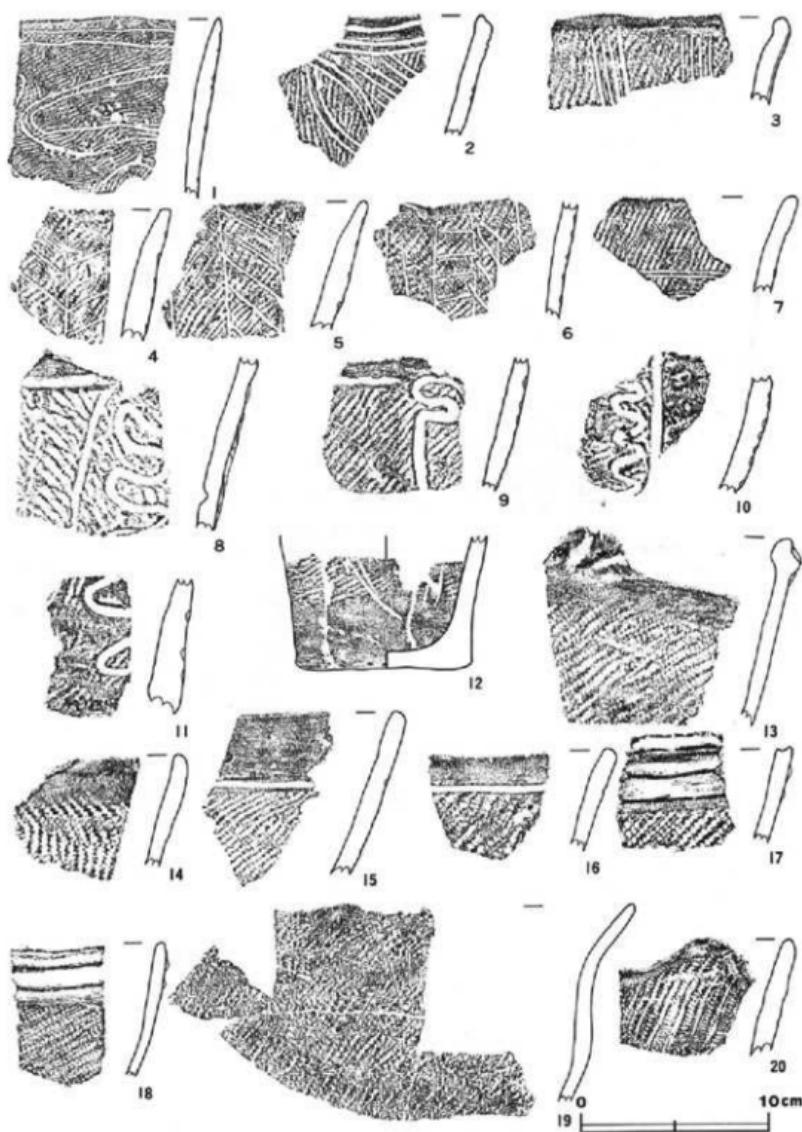
第86図 遺構外出土土器拓影図(3)



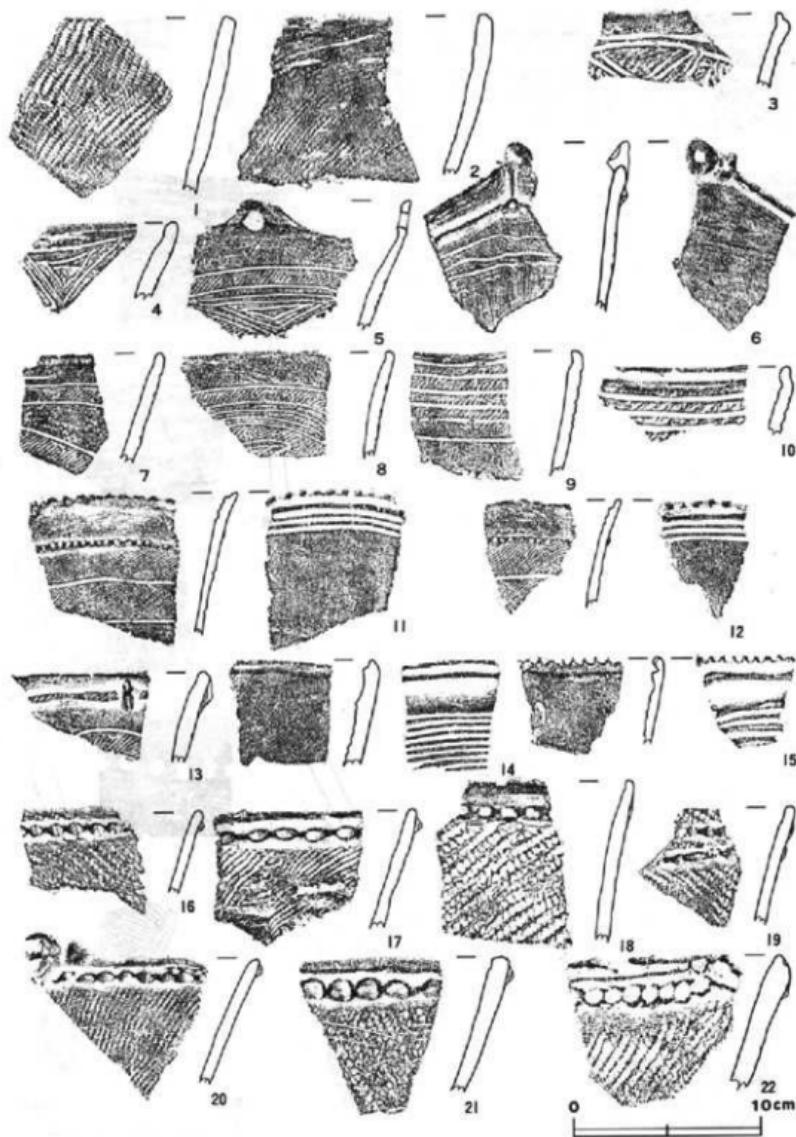
第87図 遺構外出土土器拓影(4)



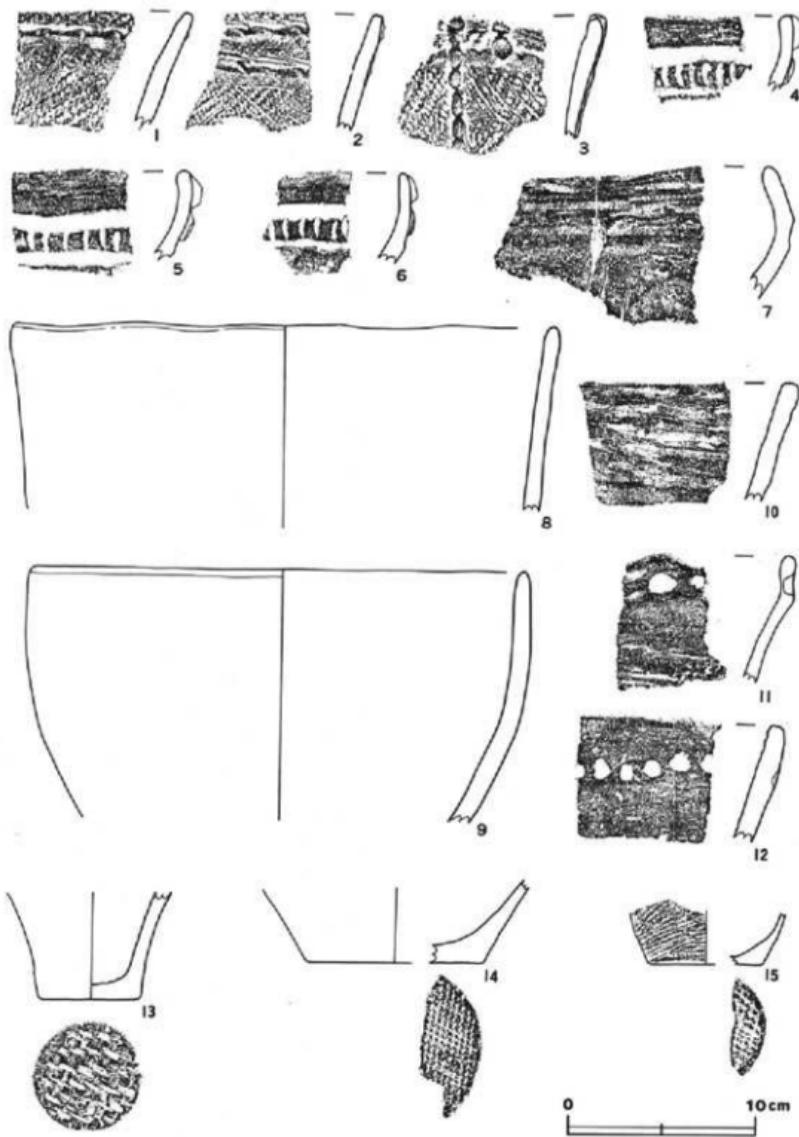
第88图 遗构外出土土器拓影图(5)



第89圖 遺構外出土土器拓影圖(6)

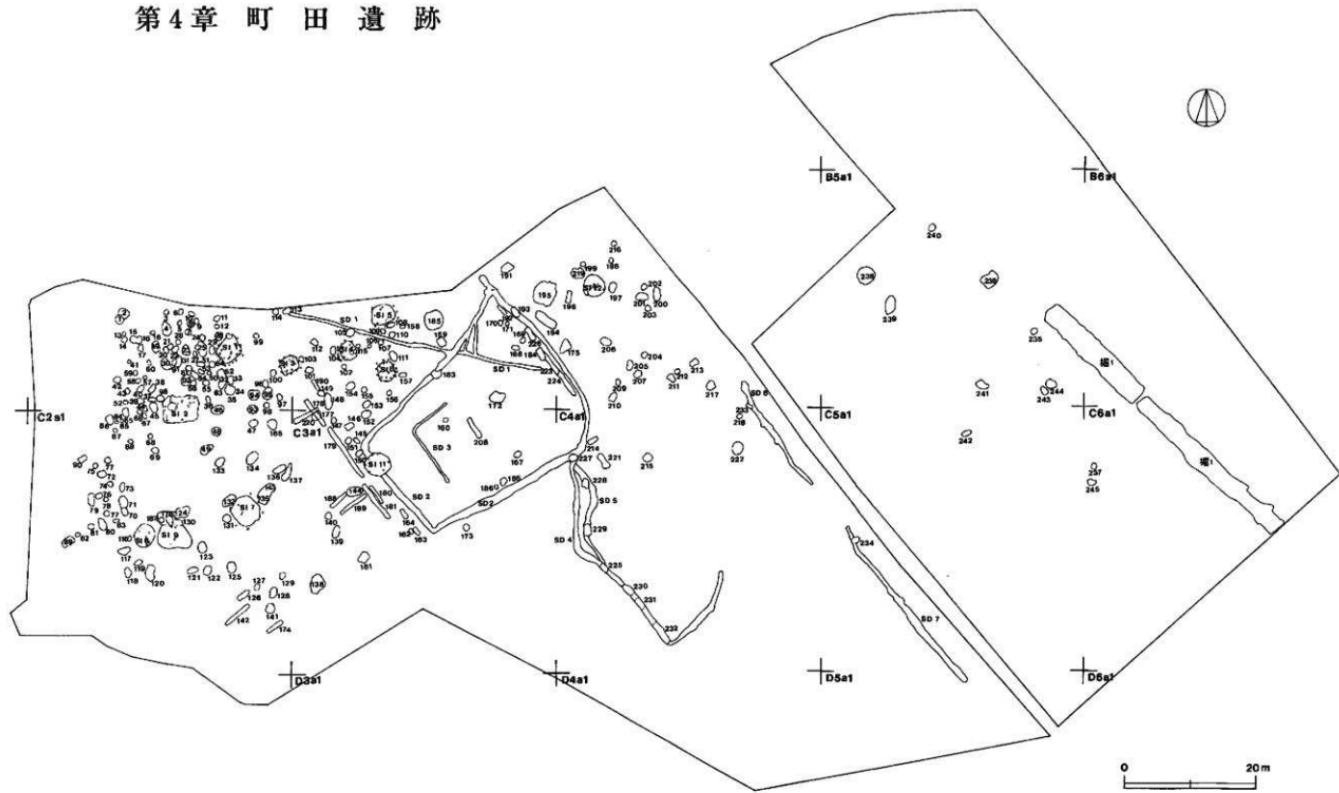


第90図 造構外出土土器拓影図(7)



第91図 遺構外出土土器拓影図(8)

第4章 町田遺跡



第92図 町田遺跡遺構配置図

第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

1 遺跡の概要

町山遺跡は周知の遺跡で、調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡と竪穴遺構、土壙、中世の堀、時期不明の上塙と溝が検出された。

縄文時代の遺構としては、前期の竪穴住居跡5軒、竪穴遺構6基、土壙130基が検出された。住居跡番号（竪穴遺構を含む）は12号まで番号を付したが、9・10号は1軒の住居跡（竪穴遺構）と判断し、10号は欠番とした。また、住居跡番号のついている遺構の中で、遺物の出土もなく、炉も検出されず、柱穴も不規則で、小規模なものは竪穴遺構とした。

これらの竪穴住居跡、竪穴遺構及び上塙から出土した縄文土器は、浮島式や興津式に比定されるものがほとんどである。石器の出土点数は少ないが、そのほとんどは石錐で、遺構と表土中から出土している。

中世の堀は遺跡の東側に存在するが、この遺構に伴うと思われる遺物の出土は少なく、しかもほとんどが破片である。

時期不明の遺構としては、7条の溝と114基の上塙がある。溝からの出土遺物としては、流れこんだ縄文土器片が出上しているだけである。土壙は抜根跡が多く、また芋穴と思われるものも検出されている。

2 遺構・遺物の記載方法

第3章第1節2の項を参照されたい。

第2節 竪穴住居跡及び竪穴遺構

第1号住居跡（第93図）

本跡はB2-h*調査区に確認されたもので、遺跡の西側に位置している。平面形は長軸3.45m、短軸3mの不整隅丸方形を呈し、長軸方向はN-51°Eを指す。

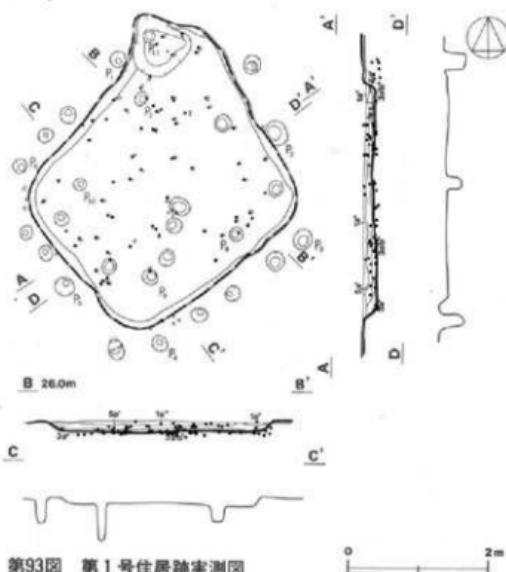
残存壁高は5~12cmである。壁はソフトロームで軟らかく、緩やかに外傾して立ち上がりっている。床面は軟弱であるが、ほぼ平坦である。炉は検出されなかった。ピットは床面に13か所、住居跡掘り込みの外側に15か所検出され、P₁~P₁₀は柱穴と思われる。北側コーナー部のP₁₁は土壙と考えられ、直径約0.8mの不整円形を呈し、床面からの深さは20cmである。上層に締まりのない暗褐色土と底面付近にローム粒子を多く含む褐色土が自然堆積している。本跡の覆土地積状況は自然堆積で、上層は締まりのない暗褐色土、下層はローム粒子を多く含む褐色土で、底面

付近は締まっている。

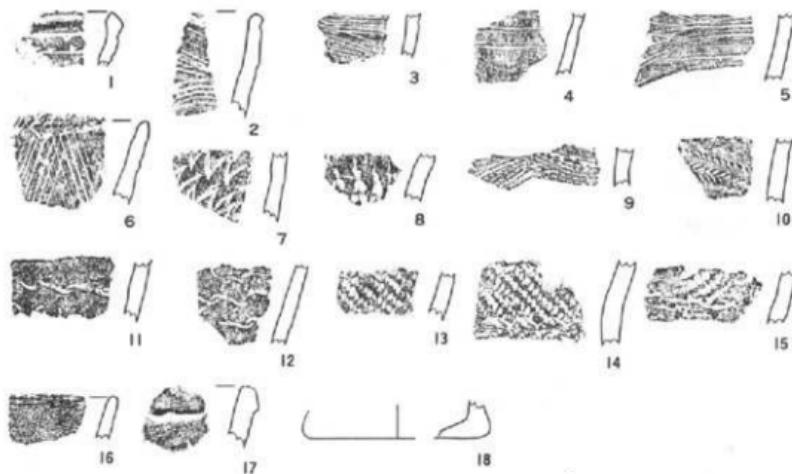
遺物は縄文土器片が233点ほど出土したがほとんど細片で、器形を推測できるものはなかった。他に石鏃が2点覆土中から出土した。

出土遺物（第94・206図）

第94図は1号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～6は半截竹管による平行沈線文を有し、2・3・5・6は多条の沈線文である。1には細い三角形状の刺突文が施されている。7～9は貝殻文を有し、7・8はジグザグ波状文、9は押し引きの貝殻文である。10は微隆起線文にキザミを施してい



第93図 第1号住居跡実測図



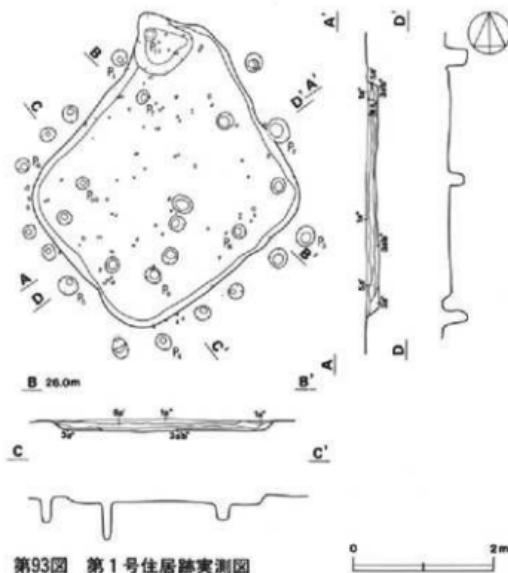
第94図 第1号住居跡出土土器拓影図

付近は締まっている。

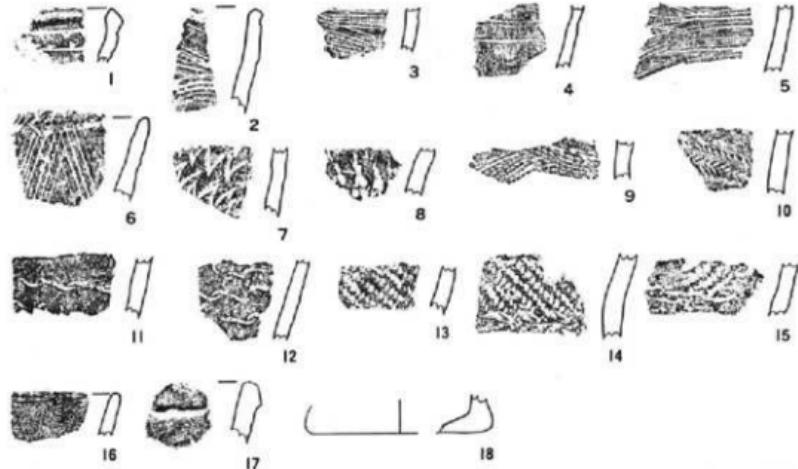
遺物は縄文土器片が233点ほど出土したがほとんど細片で、器形を推測できるものはなかった。他に石鏃が2点覆土中から出土した。

出土遺物（第94・206図）

第94図は1号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～6は半截竹管による平行沈線文を有し、2・3・5・6は多条の沈線文である。1には細い三角形状の刺突文が施されている。7～9は貝殻文を有し、7・8はジグザグ波状文、9は押し引きの貝殻文である。10は微隆起線文にキザミを施している。



第93図 第1号住居跡実測図



第94図 第1号住居跡出土土器拓影図

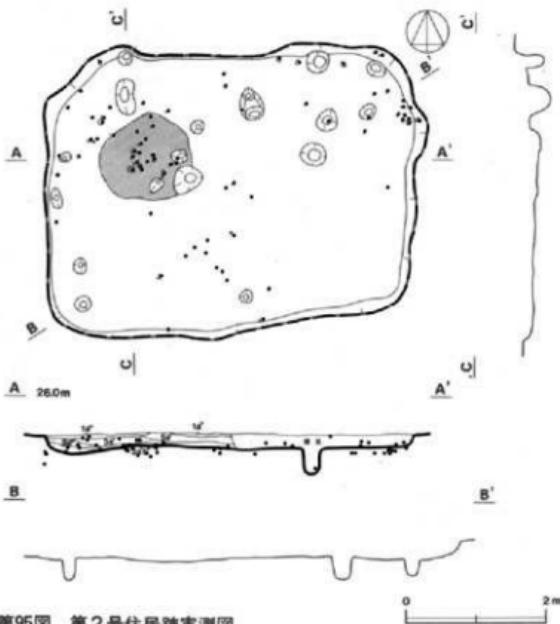
る。11・12は結節文を有し、大木系の土器と考えられる。13～15は斜繩文を有し、14・15には結節文を施している。16・17は無文の粗製土器で、17には輪積痕が認められる。18は底部で、底端部がやや外へ出ている。

第206図の1・2は石鐵で、覆土中から出土したものである。1は粗製の無基石鐵（凹基）で、基部の一方が欠損している。石材はホルンフェルスで、長さ1.7cm、幅1.5cm、厚さ0.35cmである。2は円基石鐵であるが、未製品であろう。石材はホルンフェルスで、長さ2.2cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmで、1に比べやや長い。いずれも剥片に簡単な調整を加えている。

第2号住居跡（第95図）

本跡はB2 j* 調査区を中心に確認されたもので、遺跡の西側に位置し、北東約7mのところに同時期のものと思われる1号住居跡が存在する。平面形は長軸5.3m、短軸4mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-87°-Eとほぼ東西を指す。

残存壁高は南側で12cm、他は20cm前後である。西壁は垂直に立ち上がっているが、他は緩やかに外傾して立ち上がっている。床面は南東側、つまり全体の $\frac{1}{4}$ 以上が天地換えのため擾乱をうけ



第95図 第2号住居跡実測図

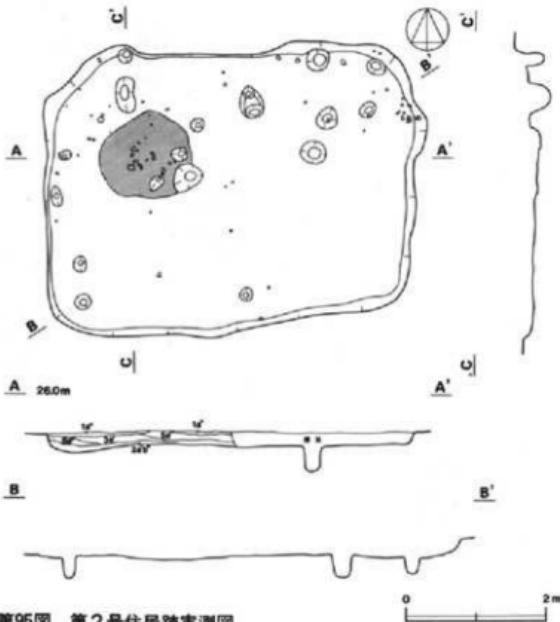
る。11・12は結節文を有し、大木系の土器と考えられる。13～15は斜繩文を有し、14・15には結節文を施している。16・17は無文の粗製土器で、17には輪積痕が認められる。18は底部で、底端部がやや外へ出ている。

第206図の1・2は石鐵で、覆土中から出土したものである。1は粗製の無基石鐵（凹基）で、基部の一方が欠損している。石材はホルンフェルスで、長さ1.7cm、幅1.5cm、厚さ0.35cmである。2は円基石鐵であるが、未製品であろう。石材はホルンフェルスで、長さ2.2cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmで、1に比べやや長い。いずれも剥片に簡単な調整を加えている。

第2号住居跡（第95図）

本跡はB2 j4調査区を中心に確認されたもので、遺跡の西側に位置し、北東約7mのところに同時期のものと思われる1号住居跡が存在する。平面形は長軸5.3m、短軸4mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-87°-Eとほぼ東西を指す。

残存壁高は南側で12cm、他は20cm前後である。西壁は垂直に立ち上がっているが、他は緩やかに外傾して立ち上がっている。床面は南東側、つまり全体の1/4以上が天地換えのため擾乱をうけ

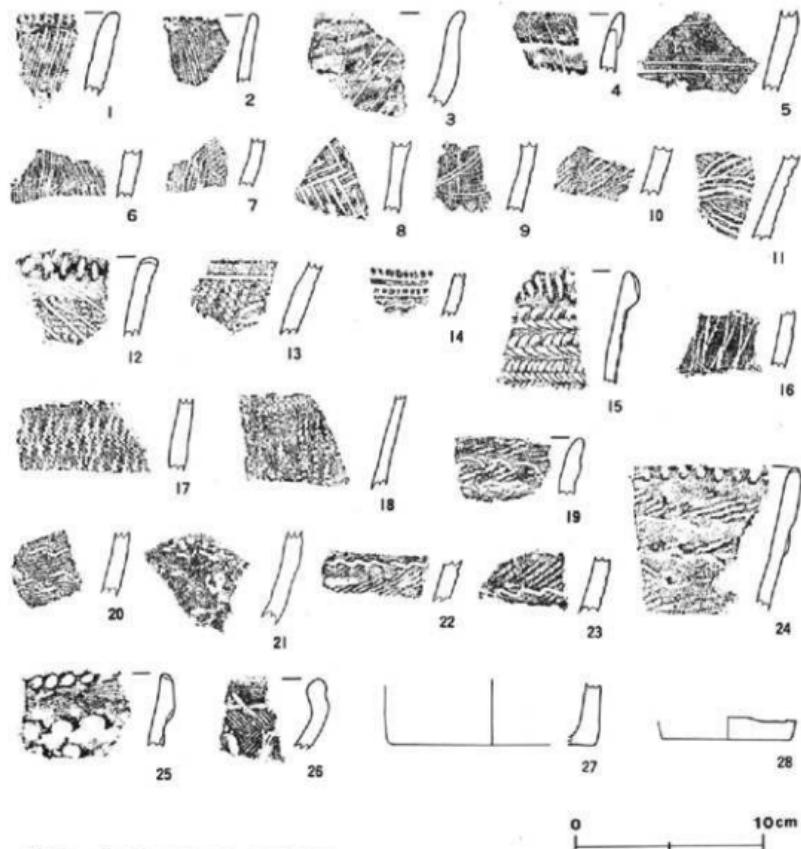


第95図 第2号住居跡実測図

ている。北西部に土壤状の落ち込みを確認したので掘り込みを実施したところ、10cmほどで底面に達した。覆土中に炭、炭化粒子、焼土粒子が含まれており、わずかな焼土ブロックの層も検出されたので、炉跡と判断した。直径1.3mほどの不整円形を呈する地床炉である。ピットは17か所検出され、深さは15~38cmと比較的浅く、擾乱部からも1か所検出された。本跡の覆土堆積状況は中央から南東側にかけての擾乱部を除くと自然堆積で、上層は締まりのない暗褐色土、中間層はローム粒子を多く含む褐色土、下層は締まりのある褐色土が堆積している。

遺物は縄文土器片が169点ほど出土したが、特に炉付近から多く出土している。

出土遺物（第96図）



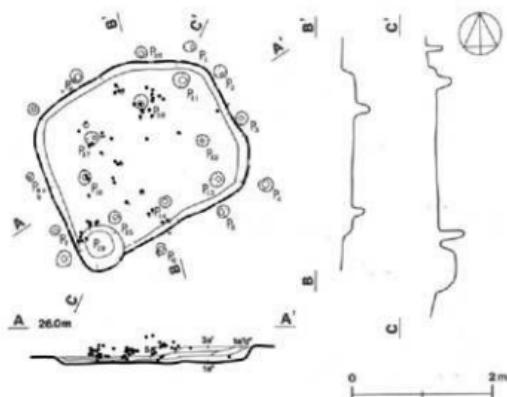
第96図 第2号住居跡出土土器拓影図

第96図は2号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～13は平行沈線文を有し、1～4・6・7・10は斜位に、5は横位に、8は羽状に、9・11は曲線状にそれぞれ沈線文が施されている。12・13は地文に縄文を有し、12の口唇部には刺突文が付されている。12・13は諸穀式に比定される。14は有節平行沈線文を施している。15は変形爪形文と連続爪形文を口縁に沿って施し、口唇部にキザミ目文を有し、興津式に比定される。16～18は貝殻文である。19～24は結節文を有する土器群で、大木系に包括される。25は無文の土器で、口唇部と輪積痕の下端に指頭圧を連続的に施文している。26は羽状縄文を施し、口縁部に横位の沈線文を1条施している。27・28は底部で、平底を呈している。

第3号住居跡（第97図）

本跡はB2 i調査区を中心に確認されたもので、遺跡の西側に位置し、東側6mのところには同時期のものと思われる4号住居跡が存在する。平面形は長軸2.8m、短軸2.35mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-64°-Eを指す。

残存壁高は西側が最も低く9cm、北側が最も高く17cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。床面はソフトロームで



第97図 第3号住居跡実測図

軟らかいが、ほぼ平坦である。

炉は検出されなかった。ピットは床面に9か所、住居跡掘り込みの外側の壁際に12か所検出された。P₁～P₁₈は柱穴と思われる。直径11～20cm、深さ15～40cmである。南東側コーナー部のP₁₉は土壙と考えられ、直径0.65mの円形を呈し、床面からの深さは22cmである。ローム粒子を多く含む褐色土が堆積している。P₁₉内からの遺物出土はない。本跡の覆土堆積状況は自然堆積で、上層はローム粒子を多く含む褐色土、下層は締まりのある暗褐色土が堆積している。

遺物は縄文土器片が222点ほど出土したが床面からの出土はなく、しかも東側からの出土はほとんどない。

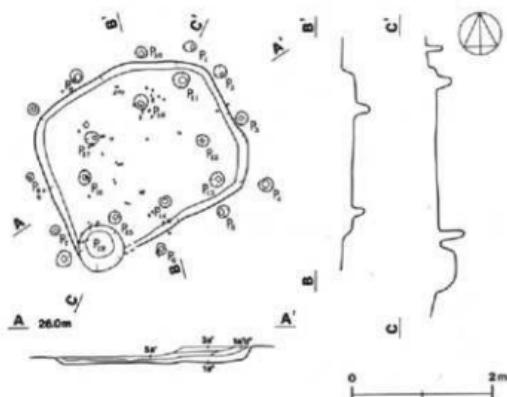
本跡は規模が小さく、床面も軟らかく、炉も検出されないことから居住施設としての住居跡とは異なり、本跡を竪穴遺構とする。

第96図は2号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1～13は平行沈線文を有し、1～4・6・7・10は斜位に、5は横位に、8は羽状に、9・11は曲線状にそれぞれ沈線文が施されている。12・13は地文に縄文を有し、12の口唇部には刺突文が付されている。12・13は諸穀式に比定される。14は有節平行沈線文を施している。15は変形爪形文と連続爪形文を口縁に沿って施し、口唇部にキザミ目文を有し、興津式に比定される。16～18は貝殻文である。19～24は結節文を有する土器群で、大木系に包括される。25は無文の土器で、口唇部と輪積痕の下端に指頭圧を連続的に施文している。26は羽状縄文を施し、口縁部に横位の沈線文を1条施している。27・28は底部で、平底を呈している。

第3号住居跡（第97図）

本跡はB2 i調査区を中心に確認されたもので、遺跡の西側に位置し、東側6mのところには同時期のものと思われる4号住居跡が存在する。平面形は長軸2.8m、短軸2.35mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-64°-Eを指す。

残存壁高は西側が最も低く9cm、北側が最も高く17cmで、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。床面はソフトロームで



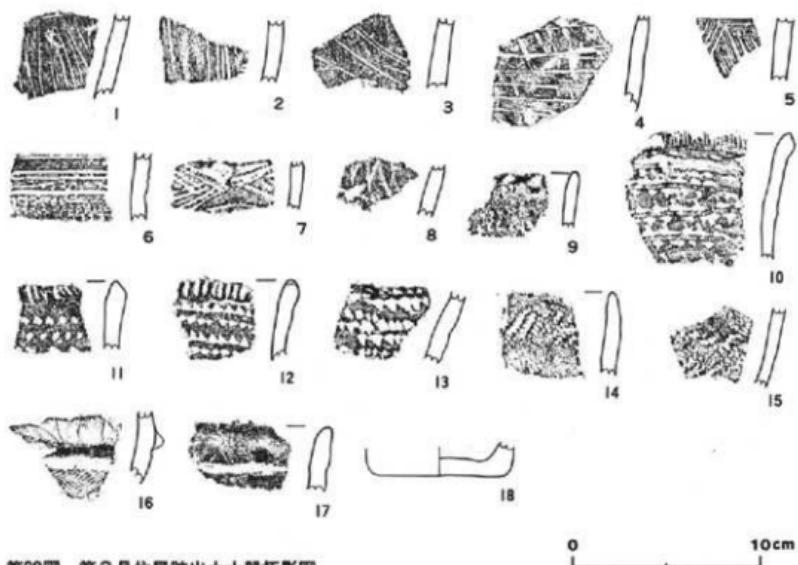
第97図 第3号住居跡実測図

軟らかいが、ほぼ平坦である。

炉は検出されなかった。ピットは床面に9か所、住居跡掘り込みの外側の壁際に12か所検出された。P₁～P₁₈は柱穴と思われる。直径11～20cm、深さ15～40cmである。南東側コーナー部のP₁₉は土壙と考えられ、直径0.65mの円形を呈し、床面からの深さは22cmである。ローム粒子を多く含む褐色土が堆積している。P₁₉内からの遺物出土はない。本跡の覆土堆積状況は自然堆積で、上層はローム粒子を多く含む褐色土、下層は締まりのある暗褐色土が堆積している。

遺物は縄文土器片が222点ほど出土したが床面からの出土はなく、しかも東側からの出土はほとんどない。

本跡は規模が小さく、床面も軟らかく、炉も検出されないことから居住施設としての住居跡とは異なり、本跡を竪穴遺構とする。



第98図 第3号住居跡出土土器拓影図

出土遺物（第98図）

第98図は3号跡竪穴遺構から出土した縄文土器片の拓影図である。1～6は沈線文を有し、4には刺突がなされ、6は地文に貝殻文が施されている。7は有節平行沈線文、8・9は貝殻文が施されている。10～13は三角文の土器で、10～12の口唇部にはキザミ目を有している。14・15は縄文が施されている。16は隆帶を有し、繩文が羽状を呈している。17は無文の粗製土器で、輪積痕を残している。18は底部で、平底を呈している。

第4号住居跡（第99図）

本跡はB3ha調査区を中心に確認されたもので、平面形は長軸2.65m、短軸2.35mの隅丸台形状を呈している。

残存壁高は7～12cmで、壁は南側が垂直で、他は緩やかに外傾して立ち上がっている。床面はソフトロームで軟らかいが、平坦である。炉は検出されなかった。ピットは床面に9か所検出され、P₁～P₅は柱穴と思われる。P₂～P₅は壁下に、P₁とP₅はやや内側に存在し、直径15～25cm、床面からの深さ20～26cmである。中央部から東側にあるP₆は土壤と考えられ、長径0.75m、短径0.55mの楕円形を呈し、床面からの深さは最深部で33cmであるが、南側は20cmほどで、床面

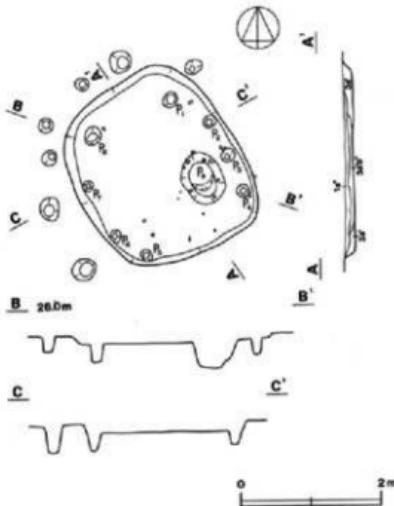
は段状をなしている。暗褐色土と褐色土が自然堆積しており、遺物の出土はない。住居跡掘り込みの外側にもピットは7か所検出されたが東と南ではなく、本跡に関連するものは定かでない。本跡の覆土堆積状況は自然堆積で、上層は綺まりのある暗褐色土、下層はローム粒子を多く含む綺まりのある褐色土が堆積している。

遺物は縄文土器片が130点ほど出土したが、ほとんど東と南側の覆土中から出土している。

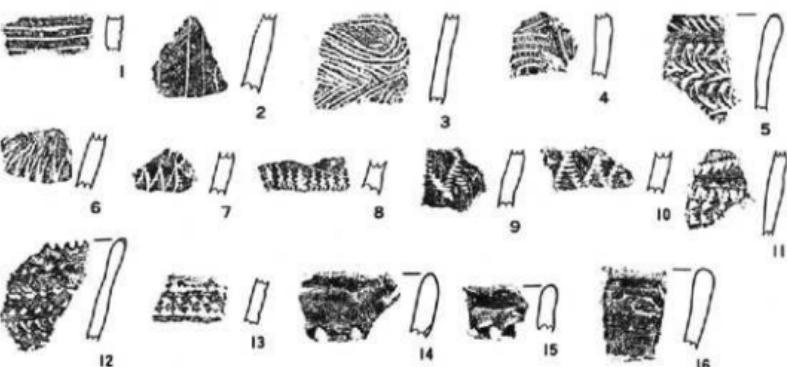
本跡は規模が小さいことや炉がないことなどから居住施設としての住居跡とは異なり、本跡を竪穴遺構とする。

出土遺物（第100図）

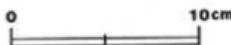
第100図は4号跡竪穴遺構から出土した縄文土器の拓影図である。1は平行沈線文を横位に、2は沈線文を縱位に施している。3は有節平行沈線文を曲線的と三角形状に施している。4は半截竹管による連続爪形文、5は幅広の連続爪形文で、5の口唇部には半截竹管によるキザミ目文を施している。6～10は貝殻腹縁によるジグザグ文、11～13は三角文が施されている。14



第99図 第4号住居跡実測図



第100図 第4号住居跡出土土器拓影図



～16は無文の土器で、14・15には指頭圧痕がみられる。

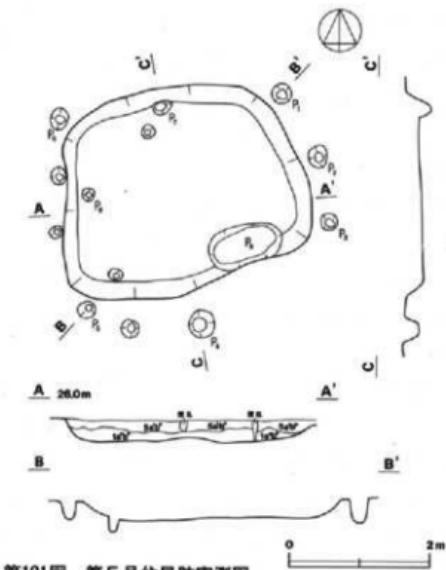
第5号住居跡（第101図）

本跡はB3g₄調査区に確認されたもので、遺跡の北西端に位置する。平面形は長軸3.4m、短軸2.9mの隅丸台形状を呈している。

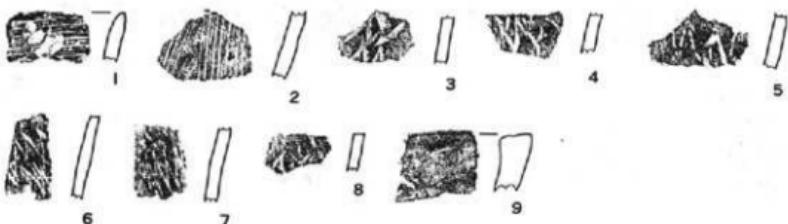
残存壁高は10～23cmで、南東側が低い。壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。床面はやや南側に傾斜している。炉は検出されなかった。ピットは床面に5か所、住居跡掘り込みの外側に9か所検出された。 P_1 ～ P_4 は柱穴と思われる。直径20～38cm、深さ20～37cmである。南東側の壁下にある P_5 は土壤と考えられ、長径1.1m、短径0.55mの長楕円形を呈し、床面からの深さは22cmである。本跡の覆土堆積状況は自然堆積であるが、部分的に樹木の根による擾乱がみられる。上層はローム粒子を多く含む締まりのない褐色土、下層は締まりのある暗褐色土が堆積している。

遺物は西壁際の覆土中から、縄文土器片がごく少量出土しただけである。

時期や性格は不明であるが、炉が検出されず、壁・床面とも軟らかく、遺物もほとんど出土し



第101図 第5号住居跡実測図



第102図 第5号住居跡出土土器拓影図

ていないことなどから居住施設としての住居跡とは異なり、本跡を竪穴遺構とする。

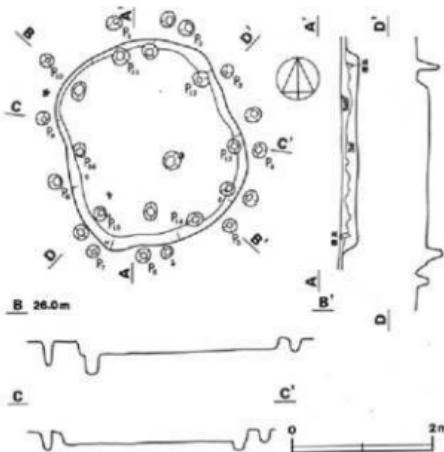
出土遺物（第102図）

第102図は5号竪穴遺構から出土した縄文土器片の拓影図である。1は半截竹管による幅の狭い平行沈線文が口縁に沿って、2は楕位、斜位に施されている。3～8は貝殻腹縁によるジグザグ波状文で、貝種については不明であるがアナダラ属の貝であろう。9は口縁部で、無文を呈している。

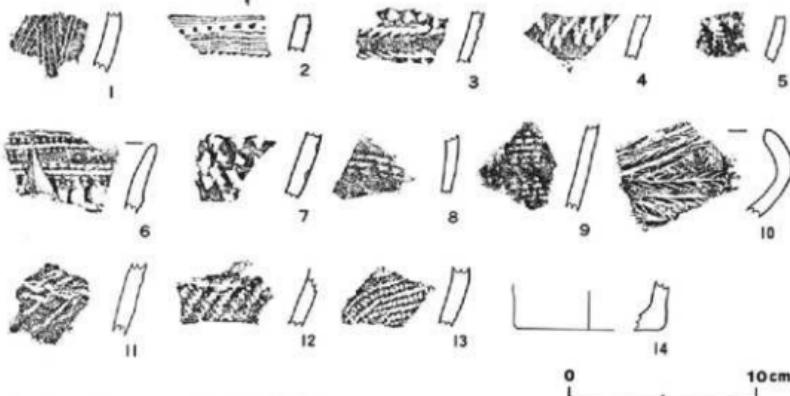
第6号住居跡（第103図）

本跡はB3 i. 調査区に確認されたもので、遺跡の北西側に位置している。平面形は長軸2.9m、短軸2.45mの各辺がやや曲線的な隅丸長方形状を呈し、長軸方向はN-18°-Wを指す。

残存壁高は15～20cmで、壁は東側と西側がほぼ垂直、北側と南側が緩やかに外傾して立ち上がっている。床面はやや軟弱であるが、平坦である。炉は検出されなかった。ピットは床面に11か所、住居跡掘り込みの外側に15か所検出された。床面のピットは、壁直下に9か所、内側



第103図 第6号住居跡実測図



第104図 第6号住居跡出土土器拓影図

に2か所存在し、直径18~25cm、深さ16~28cmである。外側のピットは、壁際に周回しており、直径20cm前後、深さ20~33cmである。 P_1 ~ P_{16} は柱穴と思われる。本跡の覆土堆積状況は自然堆積である。上層は暗褐色土、下層はローム粒子を多く含む褐色土であるが、いずれも縮まりはない。

遺物は縄文土器片が54点ほど出土したが、本跡を北と南に二分した場合、いずれも南側の覆土中からの出土である。

本跡は規模が小さいこと、炉が検出されないこと、遺物の出土がほとんどないことなどから居住施設としての住居跡とは異なり、本跡を竪穴遺構とする。

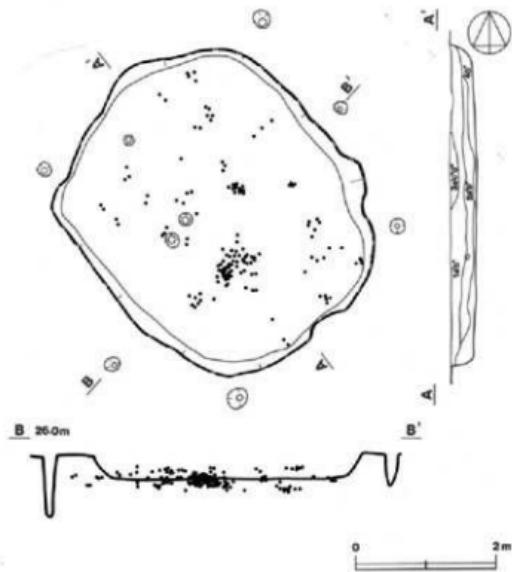
出土遺物（第104図）

第104図は6号跡竪穴遺構から出土した縄文土器片の拓影図である。1は平行沈線文が斜位に、2は平行沈線文の間に有節平行沈線文が1条横位に施されている。3は爪形文で、両端だけが深く刻まれている。4・5は貝殻腹縁を用いたジグザグ文が施されている。貝種については不明である。6~9は三角文の土器である。10は微隆起線を有し、微隆起線文にはキザミが施されている。11は結節文で、大木系に包括されるものと思われる。12・13は斜行纏文である。14は底部で、平底を呈している。

第7号住居跡（第105図）

本跡はC2d調査区を中心確認されたもので、遺跡の西側に位置している。平面形は長軸4.5m、短軸3.7mの各辺がやや膨らむ隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-42°-Wを指す。

残存壁高は北側が最も低く25cm、南側が最も高く35cmである。壁は緩やかな南西壁を除いてはほぼ垂直に立ち上がっている。中央からやや南側の床面上に、焼土や炭化粒子が直径30cmほど円形状に散布していた。床面は平坦で、ブロック状をなしておらず硬い。焼土が散布していた



第105図 第7号住居跡実測図

に2か所存在し、直径18~25cm、深さ16~28cmである。外側のピットは、壁際に周回しており、直径20cm前後、深さ20~33cmである。 P_1 ~ P_{16} は柱穴と思われる。本跡の覆土堆積状況は自然堆積である。上層は暗褐色土、下層はローム粒子を多く含む褐色土であるが、いずれも縮まりはない。

遺物は縄文土器片が54点ほど出土したが、本跡を北と南に二分した場合、いずれも南側の覆土中からの出土である。

本跡は規模が小さいこと、炉が検出されないこと、遺物の出土がほとんどないことなどから居住施設としての住居跡とは異なり、本跡を竪穴遺構とする。

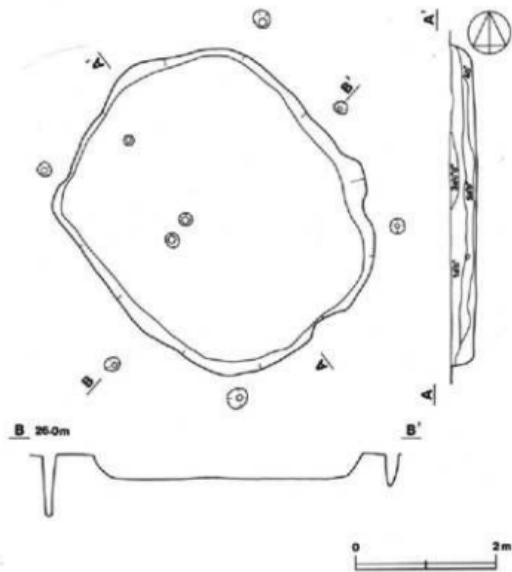
出土遺物（第104図）

第104図は6号跡竪穴遺構から出土した縄文土器片の拓影図である。1は平行沈線文が斜位に、2は平行沈線文の間に有節平行沈線文が1条横位に施されている。3は爪形文で、両端だけが深く刻まれている。4・5は貝殻腹縁を用いたジグザグ文が施されている。貝種については不明である。6~9は三角文の土器である。10は微隆起線を有し、微隆起線文にはキザミが施されている。11は結節文で、大木系に包括されるものと思われる。12・13は斜行纏文である。14は底部で、平底を呈している。

第7号住居跡（第105図）

本跡はC2d調査区を中心確認されたもので、遺跡の西側に位置している。平面形は長軸4.5m、短軸3.7mの各辺がやや膨らむ隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-42°-Wを指す。

残存壁高は北側が最も低く25cm、南側が最も高く35cmである。壁は緩やかな南西壁を除いてはほぼ垂直に立ち上がっている。中央からやや南側の床面上に、焼土や炭化粒子が直径30cmほど円形状に散布していた。床面は平坦で、ブロック状をなしており硬い。焼土が散布していた



第105図 第7号住居跡実測図

ところとその付近は踏み固められていて特に硬く、やや低くなっている。ビットは床面に3か所、住居跡掘り込みの外側に6か所検出された。床面のビットは、北西側の壁近くに1か所、中央から西側にかけて2か所存在し、直徑15~20cm、深さ20~30cmと小規模で浅い。外側のビットは、壁から20~50cm離れて存在し、深さ30~87cmと床面のビットに比べて深い。柱穴は不明である。本跡の覆土堆積状況は自然堆積で、上層は暗褐色土、下層は褐色土でいずれもローム粒子を多く含み、床面付近はやや粘性がある。

遺物は繩文土器片が床面から13~45cmほど浮いた状態で出土しており、號跡からの出土は少ない。しかし、当遺跡の住居跡群の中では最も多い土器片の出土をみた。

本跡は当初土壤として掘り込みを実施したところ、プランが拡大され、さらにブロック状を呈する硬い床面が検出されたことによって住居跡として判断したものである。

出土遺物（第106・107図）

第106・107図は7号住居跡から出土した繩文土器片の拓影図である。第106図1~8は平行沈線文を有し、1・3・5・7は細い半截竹管によって沈線文が施されている。4は格子目、5は鋸歯状に描出している。6の口縁部には繩文、7には刺突文、8には貝紋文が組み合わさっている。9・10は有節平行沈線文を有し、9は太い半截竹管具、10は細い半截竹管具によって施文されている。11は変形爪形文である。12~15は連続爪形文を有し、いずれも口辺部にキザミ目文が施されている。16~29は貝紋並線文を有し、16~23はシグザグ波状文、24~29は押し引きである。30~35、第107図1~9は三角文の土器で、30~35と第107図1には口辺部にキザミ目文が施されている。第107図10~11は微隆起線文にキザミが施され、その浮線文の下は繩文が施文されている。12~15の口縁部は無文で隆起を貼付し、その下に繩文が施文されている。16・17は12~14に付随する胸部で、繩文が施されている。18は底部で、平底を呈す。

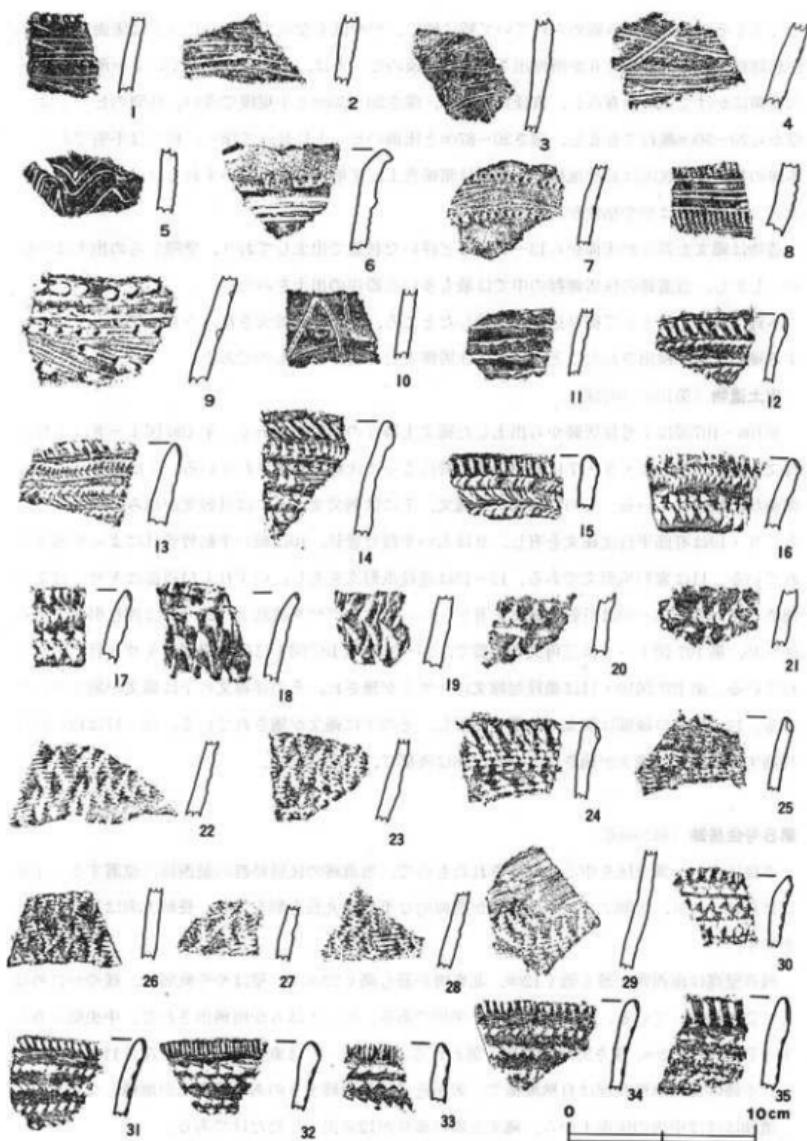
第8号住居跡（第108図）

本跡はC2e調査区を中心に確認されたもので、当遺跡の住居跡群の最内端に位置する。平面形は長軸3.4m、短軸2.8mの南西辺が曲線的な不整隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-27°-Eを指す。

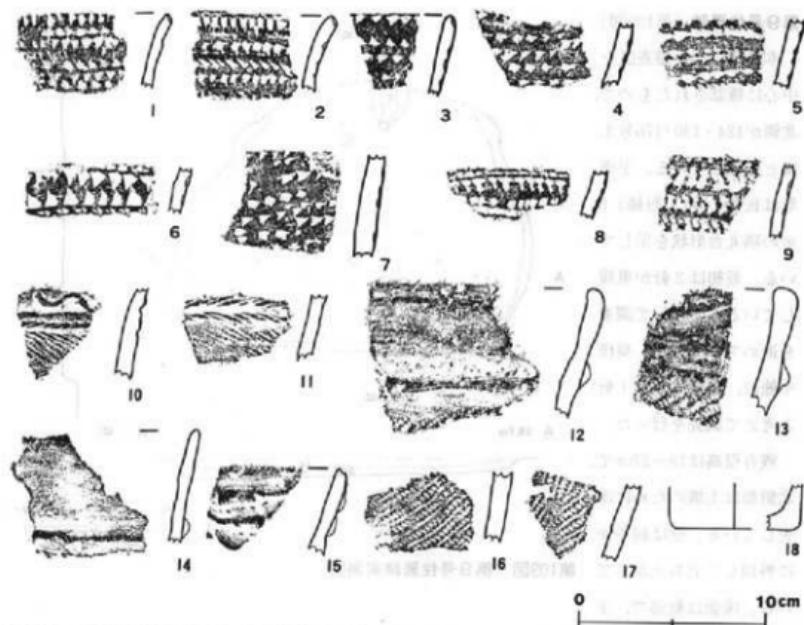
残存壁高は南西側が最も低く12cm、北東側が最も高く22cmで、壁はやや軟弱で、緩やかに外傾して立ち上がっている。床面は軟弱で、平坦である。ビットは6か所検出された。中央部に存在するP₁は直徑22cm、深さ52cmで柱穴と思われる。他のビットは直徑21~30cm、深さ11~30cmである。本跡の覆土堆積状況は自然堆積で、床面近くはやや縮まりのある褐色土が堆積している。

遺物はほぼ中央の床面上から、繩文土器の細片が12点出土しただけである。

時期や性格は不明であるが、炉が検出されなかったこと、柱穴が1か所しか検出されなかつた

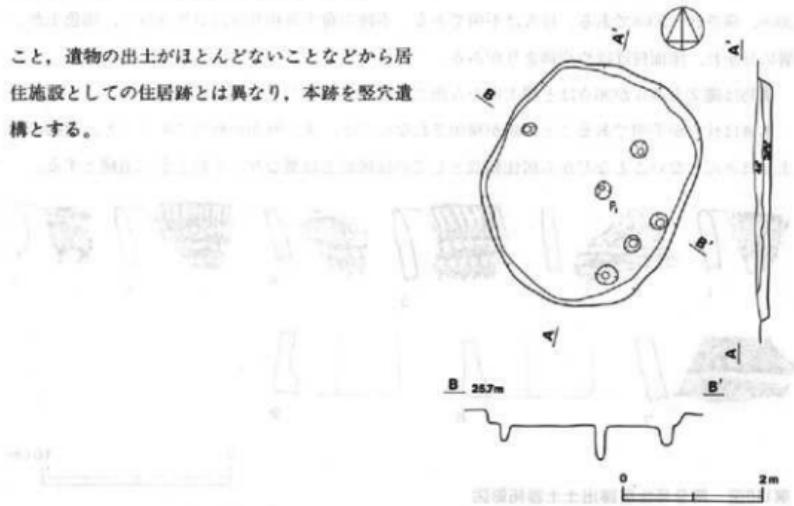


第106図 第7号住居跡出土土器拓影図 (1)



第107図 第7号住居跡出土土器拓影図 (2)

こと、遺物の出土がほとんどないことなどから居住施設としての住居跡とは異なり、本跡を竪穴造構とする。



第108図 第8号住居跡実測図

第9号住居跡（第109図）

本跡はC2e調査区を中心確認されたもので、北側が124・130・176号土壌と重複している。平面形は長軸4.9m、短軸3.8mの隅丸台形状を呈している。最初は2軒が重複しているものとして調査を進めていったが、規模や施設、遺物等から1軒と考えて調査を行った。

残存壁高は18~27cmで、北側部は土壌のために消失している。壁は緩やか

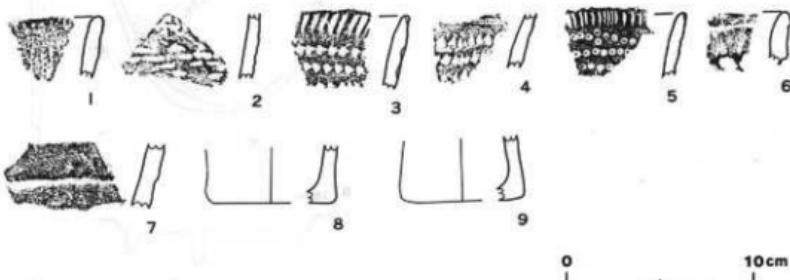
に外傾して立ち上がって 第109図 第9号住居跡実測図

いる。床面は軟弱で、平

坦である。ピットは5か所検出された。北側のP₁は抜根跡と思われる。他のピットは直径15~20cm、深さ20~50cmである。柱穴は不明である。本跡の覆土堆積状況は自然堆積で、褐色土が2層に分かれ、床面付近はやや縮まりがある。

遺物は繩文土器片が96点ほど覆土中から出土したが、ほとんどが細片である。

本跡は柱穴が不明であること、炉が検出されないこと、床・壁面が軟弱であること、遺物の出土がほとんどないことなどから居住施設としての住居跡とは異なり、本跡を竪穴造構とする。



第110図 第9号住居跡出土土器拓影図

（著者撮影）

出土遺物（第110図）

第110図は9号跡空穴遺構から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は貝殻文が施文されており、2は貝殻腹縁を押し引きしたものである。3・4はいわゆる三角文で、3の口唇部には半截竹管によるキザミ目文が施されている。5は円形竹管文が施文され、口唇部にキザミ目文が施されている。6・7は無文の粗製土器で、輪積痕を残している。8・9は底部で、8は底端部がわずかに外へ出ている。

第10号住居跡

9号住居跡と重複していると思われた住居跡を10号住居跡としたが、調査の結果重複関係が認められず、欠番とした。

第11号住居跡（第111図）

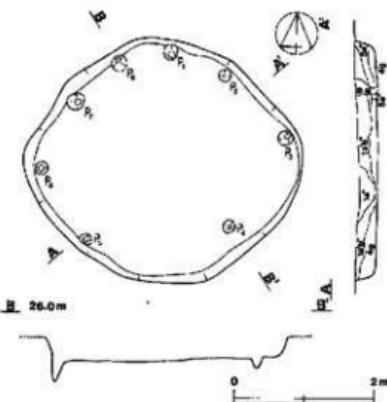
本跡はC3c4調査区を中心に確認されたもので、遺跡中央からやや西側に位置している。中央部を北西から南東にかけて2号溝によって切られている。平面形は長軸3.52m、短軸3.4mの各辺ともやや曲線的な隅丸方形形状を呈し、長軸方向はN-50°-Wを指す。

残存壁高は南西側が最も低く25cm、北東側が最も高く38cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は全体的には平坦であるが、中央部からやや西側のところに8cmほど低くなっているところがみられる。柱穴は8か所検出され、P₁～P₃とP₅～P₈は壁下に、P₄は南東側の壁下から約30cmほど内側に配列されている。これらの柱穴は直径17～24cm、深さ17～32cmである。本跡の覆土堆積状況は、一部の木の根による攪乱を除いて自然堆積で、上層は締まりのない暗褐色土、下層は締まりのある粘性の褐色土が堆積している。

遺物は縄文土器片が106点ほど覆土中から出土したが、ほとんどが細片である。

出土遺物（第112図）

第112図は11号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は沈線文の間に貝殻腹縁文を充填している。いずれも興津式に比定される。3は連続爪形文を横位に施している。4は



第111図 第11号住居跡実測図



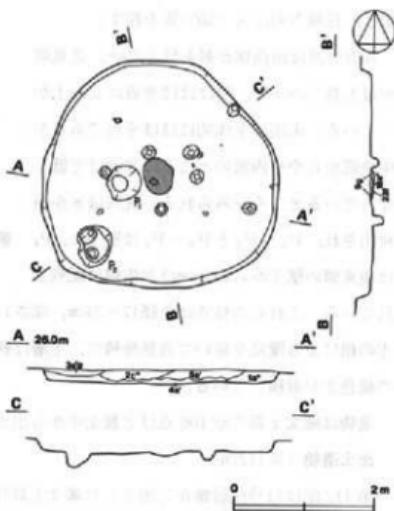
第112図 第11号住居跡出土土器拓影図

貝殻ジグザグ文である。5～8は三角文で、竹管の先端を三角形状にそいで連続的に刺突したものである。5・6の口唇部には半截竹管によるキザミ目文が施されている。9・10は無文の粗製土器で、輪積痕を残している。11は底部である。

第12号住居跡（第113図）

本跡はB4 f; 調査区に確認されたもので、遺跡の北側、住居跡群の東端に位置する。平面形は直径3.35mほどの東側がやや張り出している不整円形を呈している。

残存壁高は12~20cmで、壁はやや軟弱で、ほぼ垂直に立ち上がっている。床面はほぼ平坦である。炉は住居跡のほぼ中央に検出され、長径0.4m、短径0.3mの橢円形を呈し、床面を5cmほど掘りくぼめた地床炉である。焼土の堆積はわずかで、炉床や炉壁も全体的に軟弱であり、この炉は長期間は使用されなかつたと思われる。ピットは大小11か所検出されたが、そのうち6か所が炉の周辺に存在している。炉の西側に位置するP₁は直径50cm



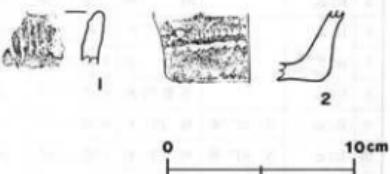
第113図 第12号住居跡実測図

の円形を呈し、床面からの深さは35cmほどで、極暗褐色土と暗褐色土が堆積している。南西側に位置するP₂は長径60cm、短径45cmの不整橢円形を呈し、床面からの深さは25cmほどで、暗褐色土と黒褐色土が堆積している。いずれも遺物の出土はなく、本跡に関連するものかどうか未定である。他のピットは直径20cm前後、深さは10~30cmである。本跡の覆土堆積状況は自然堆積で、ローム粒子を多く含む褐色土と締まりのある暗褐色土が堆積している。

遺物はごく少量の縄文土器片が覆土中から出土した。

出土遺物（第114図）

第114図は12号住居跡から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部で、平行沈線文が縱位に短く施されている。2は底部で、胴下半まで三角文が施されている。



第114図 第12号住居跡出土土器拓影図

第3節 土 壤

土壌群は遺跡の中央部から西側部にかけて多く検出された。規模は大小さまざまであるが、一般的に細長く深い土壌は覆土の状況や耕作者の話から芋穴と考えられる。

当遺跡で番号を付して発掘した土壌は245基である。しかし、精査の結果187号土壌は耕作土を掘りこんでおり、表土除去中に消滅してしまい、わずかに底面の一部が残存していたにすぎないもので欠番とした。222号土壌と238号土壌は規模や覆土から井戸跡と考えられる。また、整理の段階で1号住居跡のP₁₁、3号住居跡のP₁₈、4号住居跡のP₉、5号住居跡のP₉、7号溝のP₁も土壌と判明したが、これらのものについては各遺構の解説の中で述べているので、ここでは取り扱わないことにする。

遺物は縄文土器の細片が多く、しかも覆土中からの出土がほとんどで、時期決定の資料としては乏しい。実測できるものがないため土器片を選択して、土壌別に拓影図を掲載した。

土壤一覧表(第115~149回)

土壌 番号	性質	長径方向	平面形	規格 長径×短径×高さ(cm)	横面	底面	覆土	P数	出土遺物	備考		
										幅	深	
1	B2-4	N-47°W	楕円形	1.33×1.05	14	緩斜	水平平坦	N	縄文土器片18点	SK2と重複		
2	B2-5	N-61°W	不定形	1.63×0.98	13	緩斜	水平平坦	N	縄文土器片20点	SK1と重複		
3	B2-6	N-39°E	略円形	0.91×0.69	37	外傾	水平平坦	N	縄文土器片13点			
4	B2-5-ka	N-13°W	楕円形	2.20×1.40	93	板状	水平平坦	N	縄文土器片13点	東壁ゆるやか 南壁はほぼ直立		
5	B2-6a		円形	0.78×0.58	22	緩斜	水平平坦	N	縄文土器片18点	北東壁傾伏		
6	B2-6a		円形	0.80×0.73	52	緩斜二段 開きこみ	V字状	N	縄文土器片31点			
7	B2-6a-6b		円形	1.10×0.95	21	緩斜	水平平坦	N	縄文土器片23点			
8	B2-6a		不整円形	1.07×0.98	24	緩斜	水平平坦	N	1	北壁はほぼ直立		
9	B2-6a	N-27°W	楕円形	0.95×0.72	26	緩斜	直状	N	縄文土器片7点			
10	B2-6a	N-61°W	略円形	1.05×0.65	28	緩斜	直状	N	縄文土器片7点	西面西気合や高い 壁		
11	B2-6a	N-57°E	楕円形	1.02×0.80	8	緩斜	平坦	N	1	縄文土器片8点	北西壁傾伏	
12	B2-6a		円形	0.73×0.66	30	緩斜	直状	N				
13	B2-6a		円形	0.58×0.48	38	緩斜	直状	N		北壁袋状		
14	B2-6a		円形	0.95×0.80	35	緩斜	板状平坦	N	1			
15	B2-6a-6a	N-33°W	楕円形	1.30×0.95	22	緩斜	水平平坦	N	縄文土器片21点	SK16と重複		
16	B2-6a-6a		円形	1.18×1.05	25	緩斜	板状平坦	N	縄文土器片27点	SK16と重複		
17	B2-6a	N-13°W	楕円形	1.11×0.75	18	緩斜	板状平坦	N	縄文土器片9点			
18	B2-5a		円形	0.65×0.60	26	外傾	直状	N	縄文土器片11点			
19	B2-5a	N-20°W	楕円形	1.60×1.20	15	緩斜	水平平坦	N	1	縄文土器片11点	東壁直立	
20	B2-5a	N-35°W	不整椭円形	0.95×0.75	28	緩斜	水平平坦	N	2	縄文土器片11点		
21	B2-6a	N-44°E	楕円形	1.00×0.75	20	緩斜	板状平坦	N	縄文土器片6点	北・東壁はほぼ直立		
22	B2-6a	N-41°E	楕円形	1.23×0.80	18	緩斜	平坦	N	縄文土器片15点	東面中央部や高い 壁		
23	B2-6a-6a	N-12°W	楕円形	1.63×1.18	22	緩斜	板状平坦	N	縄文土器片19点	西壁はほぼ直立		
24	B2-6a	N-24°W	略円形	1.01×0.84	20	緩斜	水平平坦	N	縄文土器片9点 石第1点			
25	B2-6a	N-10°W	不整椭円形	2.25×1.05	20	外傾	板状平坦	N	3	西面西側張り 手でくわえ跡1点	既面西側張り 出している	
26	B2-6a	N-15°E	楕円形	1.30×1.03	14	緩斜	水平平坦	N	1	縄文土器片5点	南西壁不明	
27	B2-6a		円形	0.77×0.64	20	外傾	水平平坦	N	縄文土器片4点			
28	B2-6a	N-68°E	楕円形	0.91×0.70	36	緩斜	直状	N	2	縄文土器片8点		
29	B2-6a	N-21°W	楕円形	1.35×0.75	30	緩斜	水平平坦	N	縄文土器片3点			
30	B2-6a	N-37°W	不整椭円形	1.66×1.20	20	外傾	凸凹	N	縄文土器片29点			
31	B2-5a-6a	N-10°E	楕円形	1.52×(0.95)	40	緩斜	凸凹	A	縄文土器片10点	SK91と重複		
32	B2-6a	N-72°W	不定形	1.05×0.98	35	緩斜	水平平坦	N	1	縄文土器片18点	SK33-62-63 と重複	
33	B2-6a-6a	N-12°W	楕円形	1.40×1.00	22	緩斜	水平平坦	N	縄文土器片17点	SK32と重複		
34	B2-6a	N-79°W	楕円形	1.43×0.80	34	外傾	水平平坦	N	1	縄文土器片15点	SK35と重複	
35	B2-6a		円形	1.60×(1.50)	28	外傾	水平平坦	N		SK34と重複		

土壤 番号	位置	延伸方向	平面形	規 格 長径×短径(cm)	模 様	壁 面	底 面	表 面	P数	出土遺物	備 考
36	B2 j _r	N-35°-W	楕円形	1.08×0.76	40 緩斜	水平平坦	N		縄文土器片15点	西壁には帯直	
37	B2 j _s	N-87°-W	楕円形	1.28×0.68	24 外傾	水平平坦	N				
38	B2 j _s	N-27°-E	楕円形	1.45×0.75	25 外傾	皿状	N	2	縄文土器片13点		
39	B2 j _s	N-79°-W	楕円形	1.28×0.88	36 緩斜	凸凹	N		縄文土器片6点		
40	B2 j _s	N-55°-E	不整楕円形	1.30×0.80	30 外傾	水平平坦	N		縄文土器片7点	東壁ゆるやか	
41	B2 i _s		円形	0.66×0.58	26 緩斜	皿状	N	1	縄文土器片10点		
42	B2 i _s	N-78°-E	楕円形	1.20×0.96	22 缓斜	水平平坦	N		縄文土器片42点		
43	B2 j _s	N-19°-E	楕円形	0.98×0.78	16 緩斜	水平平坦	N	1	縄文土器片12点		
44	B2 j _s C2 z _s		不整円形	0.92×0.84	24 緩斜	皿状	N				
45	B2 j _s C2 z _s	N-19°-W	楕円形	1.60×1.06	80 緩斜	水平平坦	K		縄文土器片14点	北壁には帯直	
46	B2 j _{r+s} C2 z _{r+s}	N-72°-E	不整椭円形	1.88×1.30	64 緩斜	皿状	K		縄文土器片25点		
47	C2 a _s		円形	1.30×1.10	34 緩斜	皿状	N	1	縄文土器片10点		
48	C2 a _{r+s}	N-77°-E	楕円形	1.38×1.15	28 緩斜	水平平坦	N	1	縄文土器片3点		
49	C2 b _s	N-61°-E	不整椭円形	2.00×1.20	47 緩斜	凸凹	K	2	縄文土器片10点	西壁には帯直	
50	B2 i _v		円形	0.62×0.53	27 緩斜	皿状	N	1	縄文土器片13点		
51	B2 i _v	N-81°-W	楕円形	1.17×0.74	17 緩斜	水平平坦	N	1	縄文土器片4点	西壁垂直	
52	B2 j _s		円形	0.74×0.60	47 緩斜	皿状	N				
53	B2 i _r	N-59°-W	楕円形	1.08×0.60	20 緩斜	水平平坦	N		縄文土器片4点		
54	B2 i _r	N-45°-W	楕円形	1.55×0.95	20 外傾	坂状平坦	N	1			
55	B2 i _{r+j_s}		不整円形	1.03×0.90	30 緩斜	皿状	N		縄文土器片5点		
56	B2 i _{r+j_s}		不整円形	1.00×0.91	50 外傾	水平平坦	N	1	縄文土器片31点	SK92と重複	
57	B2 i _s	N-89°-E	楕円形	0.74×0.57	20 緩斜	水平平坦	N		縄文土器片2点		
58	B2 i _s	N-64°-E	楕円形	0.82×0.67	16 緩斜	水平平坦	N				
59	B2 i _{r+s}	N-6°-W	楕円形	0.80×0.66	10 緩斜	水平平坦	N				
60	B2 i _s	N-26°-W	不整椭円形	0.90×0.45	12 緩斜	凸凹	N	1	縄文土器片2点		
61	B2 i _{s-i_r}		円形	0.98×0.85	40 緩斜	V字状	N		縄文土器片12点		
62	B2 i _s	N-29°-W	楕円形(2.00)×1.05	20 緩斜	水平平坦	N					
63	B2 i _{s+j_s}	N-22°-E	楕円形(1.80)×1.00	30 緩斜	水平平坦	N			縄文土器片26点		
64	B2 i _{r+i_s}	N-16°-W	楕円形	1.05×0.88	40 緩斜	凸凹	A 2				
65	B2 j _s C2 z _s	N-12°-W	不整長方形	1.40×0.90	87 外傾	水平平坦	N		縄文土器片5点		
66	B2 j _s C2 z _s		不整円形	1.00×0.86	25 緩斜	水平平坦	N		縄文土器片2点		
67	C2 a _s	N-34°-W	楕円形	0.90×0.60	30 緩斜	水平平坦	N				
68	C2 a _{r+s}		円形	0.78×0.72	25 緩斜	凸凹	N	1	縄文土器片9点	南壁垂直	
69	C2 b _s	N-74°-W	楕円形	1.10×0.90	30 緩斜	坂状平坦	N		縄文土器片5点	南壁には帯直	
70	C2 d _s	N-32°-W	楕円形	1.36×1.00	30 外傾	水平平坦	N		縄文土器片1点	SK71と重複	
71	C2 d _s	N-17°-W	楕円形	1.75×1.25	28 緩斜	水平平坦	K		縄文土器片44点	SK70と重複	

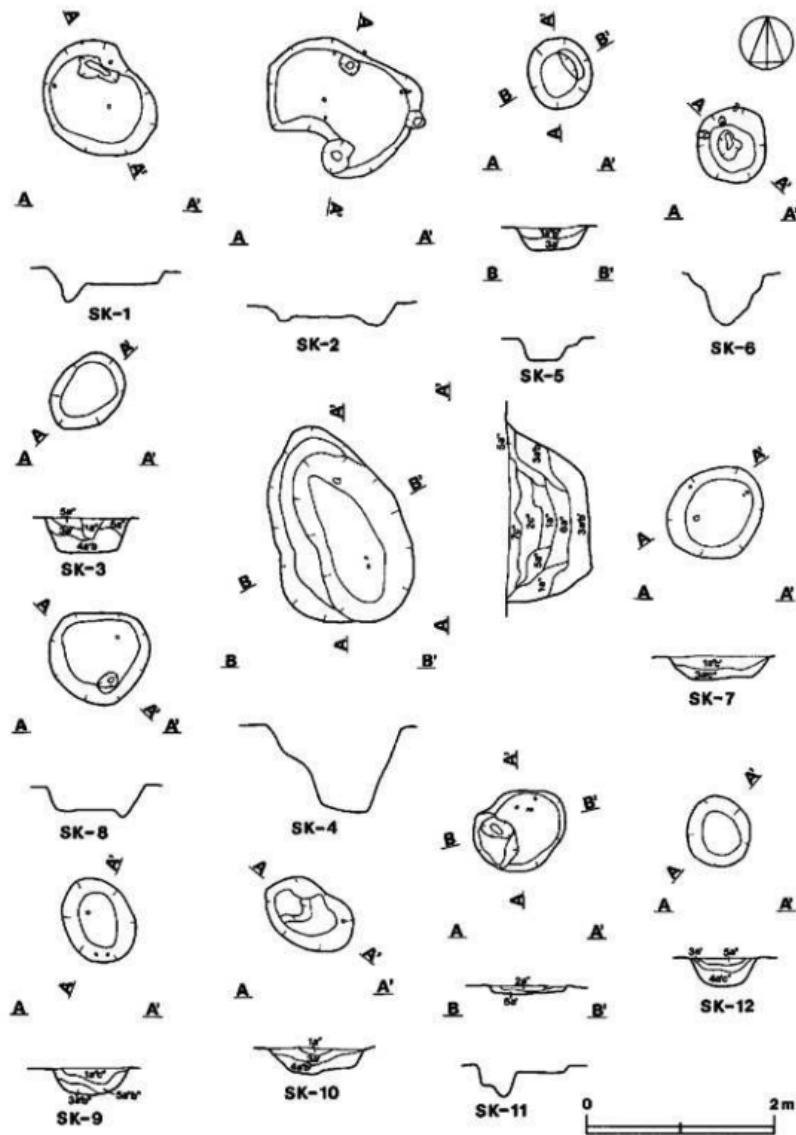
土壤番号	位置	長径方向	平面形	規 長径×短径(m)	傾 度(度)	盤面	底面	裏上	P数	出土遺物	備考
72	C2c ₃	N-79°-E	橢円形	1.23×1.00	24	外傾	水平平坦	N		縄文土器片5点	
73	C2c ₄ -d ₄	N-6°-E	長楕円形	1.48×0.72	28	東側傾斜 北は外傾	凸凹	N	1		
74	C2c ₄ -e ₄		不整円形	0.87×0.81	20	緩斜	水平平坦	N			
75	C2c ₅	N-16°-W	橢円形	0.80×0.65	28	緩斜	皿状	N			
76	C2d ₄	N-61°-E	橢円形	1.05×0.78	22	緩斜	坂状平坦	N			
77	C2d ₄ -d ₄ e ₄ -e ₄		円形	0.93×0.90	32	緩斜	水平平坦	N		縄文土器片4点	
78	C2d ₄ -d ₄		円形	0.76×0.72	30	緩斜 南西3度傾	皿状	N	1		
79	C2d ₅	N-2°-W	長楕円形	1.95×0.95	15	外傾	坂状平坦	N	1	縄文土器片9点	
80	C2e ₃	N-21°-W	不整円形	1.85×1.05	28	北東外傾 他は緩斜	皿状	N	3	縄文土器片5点	
81	C2e ₃	N-89°-W	橢円形	0.94×0.75	24	北西緩斜 他は外傾	皿状	N			
82	C2e ₂		円形	0.72×0.62	12	緩斜	水平平坦	N			
83	C2e ₄	N-65°-E	橢円形	0.85×0.60	30	緩斜 直立、南北傾 てゆき傾	皿状	N		縄文土器片6点	
84	C2e ₄		円形	0.54×0.46	18	緩斜	皿状	N			
85	C2e ₄		円形	0.57×0.55	30	外傾	皿状	N			
86	C2a ₃ -a ₄	N-15°-W	溝丸長方形	1.40×1.00	82	緩斜	水平平坦	K		縄文土器片12点	
87	C2a ₄	N-71°-W	橢円形	0.70×0.58	33	緩斜	皿状 半くぼみ	N			
88	C2b ₄	N-70°-W	橢円形	0.83×0.64	23	片傾	水平平坦	A	1		
89	C2e ₂ -f ₃	N-60°-E	長方形	2.00×1.10	24	外傾	水平平坦	K		縄文土器片21点	
90	C2b ₄ -b ₄ c ₄ -c ₄	N-55°-E	長方形	1.32×0.83	25	外傾	水平平坦	N			
91	R2j ₄		円形	1.20×(1.05)	40	外傾	凸凹	N		縄文土器片21点	SK31と重複
92	B2 _j ¹ - _j ² _j ³ - _j ⁴	N-37°-E	橢円形	1.75×1.45	130	北と西 袋状	直	N		縄文土器片41点	SK56と重複
93	B2 _j ₃ C2a ₄	N-84°-E	橢円形	1.60×1.15	30	緩斜	水平平坦	N	1	縄文土器片3点	南北袋状
94	B2j ₄	N-90°	不定形	1.60×1.50	20	北は外傾 他は緩斜	水平平坦	N	2	縄文土器片10点	
95	B2j ₄ -j ₅	N-9°-E	橢円形	1.90×1.35	20	外傾	凸凹	N		縄文土器片47点	
96	B2 _j ¹ - _j ² _j ³ - _j ⁴	N-6°-W	橢円形	1.25×1.00	35	外傾	水平平坦	N		縄文土器片17点	
97	B2j ₄	N-22°-W	橢円形	1.10×0.70	15	緩斜	凸凹	N	2		
98	B2j ₄ -j ₅		円形	1.20×1.12	25	緩斜	水平平坦	N		縄文土器片6点	
99	B2h ₄		円形	0.83×0.82	20	緩斜	皿状	N			
100	B2i ₄	N-10°-E	橢円形	1.04×0.77	15	外傾	水平平坦	N	1	縄文土器片5点	
101	B3i ₁	N-84°-E	橢円形	1.20×0.90	40	緩斜	水平平坦	N		縄文土器片9点	
102	B3i ₂ -i ₃	N-6°-W	橢円形	0.75×0.58	24	外傾	皿状	N		縄文土器片32点	
103	B3i ₁		円形	0.88×0.78	24	緩斜	水平平坦	N			
104	B3h ₂	N-2°-E	橢円形	1.60×0.68	30	緩斜	皿状	K		縄文土器片6点	
105	B3g ₃ -h ₃		円形	1.35×1.20	28	緩斜	水平平坦	N			SD1と重複
106	B3h ₃		円形	0.64×0.60	19	緩斜	水平平坦	N			
107	B3h ₄		円形	0.67×0.80	35	緩斜	皿状	N		縄文土器片33点	

土壤 番号	位 置	取样方向	平 面形	規 模 長径×短径(m) (m×dm)	壁 面	底 面	覺 土 數	出 土 物	備 考
108	B3 g ₁	N 63° E	椭 圆 形	1.15×0.85	30	縱 斜 水平平坦	N : 1		
109	B3 g ₁ ·h ₄		圆 形	0.68×0.60	32	縱 斜 水平平坦	N		
110	B3 h ₄		圆 形	1.00×0.94	25	縱 斜 扇状平坦	N	1 繩文土器片4点	
111	B3 h ₄ ·i ₄	N-35°-W	椭 圆 形	1.60×1.05	15	縱 斜 水平平坦	N	1 繩文土器片1点	
112	B3 h ₄	N-55°-W	椭 圆 形	1.15×0.90	25	縱 斜 水平平坦	N	繩文土器片9点	
113	B2 g ₆	N-70°-E	椭 圆 形	1.30×0.92	25	縱 斜 水平平坦	N	繩文土器片25点	SD1之重複
114	B2 g ₆		圆 形	0.98×0.84	14	縱 斜 圈 状	N : 1		
115	B3 h ₄	N-85°-E	椭 圆 形	0.65×0.32	25	縱 斜 水平平坦	N	1 繩文土器片1点	
116	C2 e ₄	N 26° E	椭 圆 形	1.00×0.62	25	外 傾 水平平坦	N		
117	C2 f ₄	N-70°-E	不整椭圆形	1.92×1.05	30	外 傾 水平平坦	N	繩文土器片12点	
118	C2 g ₄	N-5°-W	不整椭圆形	1.62×1.05	35	外 傾 水平平坦	N	繩文土器片5点	
119	C2 f ₁	N 53° E	不整椭圆形	1.30×0.69	30	垂 直 水平平坦	N		
120	C2 f ₁ ·g ₅	N-10°-E	不整椭圆形	2.38×1.23	40	縱 斜 凸 圆	N	繩文土器片42点	
121	C2 g ₅	N-67°-E	椭 圆 形	1.65×1.00	25	外 傾 水平平坦	N	繩文土器片12点	
122	C2 f ₁ ·g ₅	N 32° E	椭 圆 形	1.45×1.10	25	縱 斜 凸 圆	N	繩文土器片6点	
123	C2 f ₁		圆 形	1.59×1.43	33	外 傾 水平平坦	N	1 繩文土器片30点	
124	C2 d ₅ ·d ₇ d ₅ ·e ₇	N-60°-E	不整椭圆形	2.50×1.60	25	外 傾 凸 圆	N	6 繩文土器片50点	
125	C2 f ₁ ·g ₅	N-7°-W	椭 圆 形	1.77×1.35	33	縱 斜 水平平坦	N	繩文土器片22点	
126	C2 h ₅ ·h ₃	N-54°-E	不整长方形	2.01×0.73	97	垂 直 水平平坦	K	繩文土器片11点 南東壁段狀	
127	C2 g ₅	N 19° E	不整椭圆形	0.97×0.72	23	外 傾 扇状平坦	N	繩文土器片6点	
128	C2 g ₅ ·h ₄	N-3°-E	椭 圆 形	1.70×0.98	27	外 傾 水平平坦	N	繩文土器片9点	
129	C2 g ₅	N-32°-E	椭 圆 形	1.15×0.88	24	外 傾 水平平坦	N	繩文土器片8点	
130	C2 e ₆		不整椭圆形	1.22×1.10	35	縱 斜 水平平坦	N	繩文土器片54点	
131	C2 e ₆		圆 形	1.29×1.21	43	縱 斜 圆 滴	N	繩文土器片25点	
132	C2 d ₆	N-56°-E	椭 圆 形	2.25×1.29	38	縱 斜 水平平坦	N	繩文土器片95点	
133	C2 b ₅ ·e ₆	N-51°-E	不整椭圆形	1.62×1.13	75	縱 斜 圓 狹	K		北東壁段狀
134	C2 b ₅	N-42°-E	椭 圆 形	2.15×1.48	47	外 傾 水平平坦	N	垂 直 (橫折) 狹	垂 直 (橫折) 狹
135	C2 d ₅ ·e ₆ d ₅ ·d ₆	N-34°-E	不整椭圆形	3.39×1.75	39	垂 直 水平平坦	N	垂 直 (橫折) 狹	垂 直 (橫折) 狹 SK 143之重複
136	C2 e ₆	N 62° E	椭 圆 形	2.08×1.05	30	外 傾 水平平坦	N	繩文土器片18点	
137	C2 e ₆	N-22°-E	不整椭圆形	2.98×0.80	37	垂 直 水平平坦	N	繩文土器片57点	
138	C3 g ₁ ·g ₂	N-9°-E	不整椭圆形	2.98×2.15	85	縱 斜 凸 圆	N	繩文土器片76点 南西壁段狀	
139	C3 e ₂	N 15° E	椭 圆 形	1.90×1.05	28	外 傾 圓 狹	N	3 繩文土器片24点	
140	C3 d ₂ ·e ₂		圆 形	1.07×0.92	30	外 傾 水平平坦	N	繩文土器片8点	
141	C2 h ₅	N-21°-E	椭 圆 形	1.58×1.32	28	外 傾 水平平坦	N	繩文土器片30点	
142	C2 h ₅ ·h ₃	N-49°-E	不整长方形	4.65×0.50	100	垂 直 水平平坦	K	繩文土器片8点 学大	
143	C2 d ₅ ·e ₂ d ₅ ·d ₆	N-17° W	不整椭圆形	0.98×0.73	55	垂 直 圓 狹	N	繩文土器片17点 SK 135之重複	

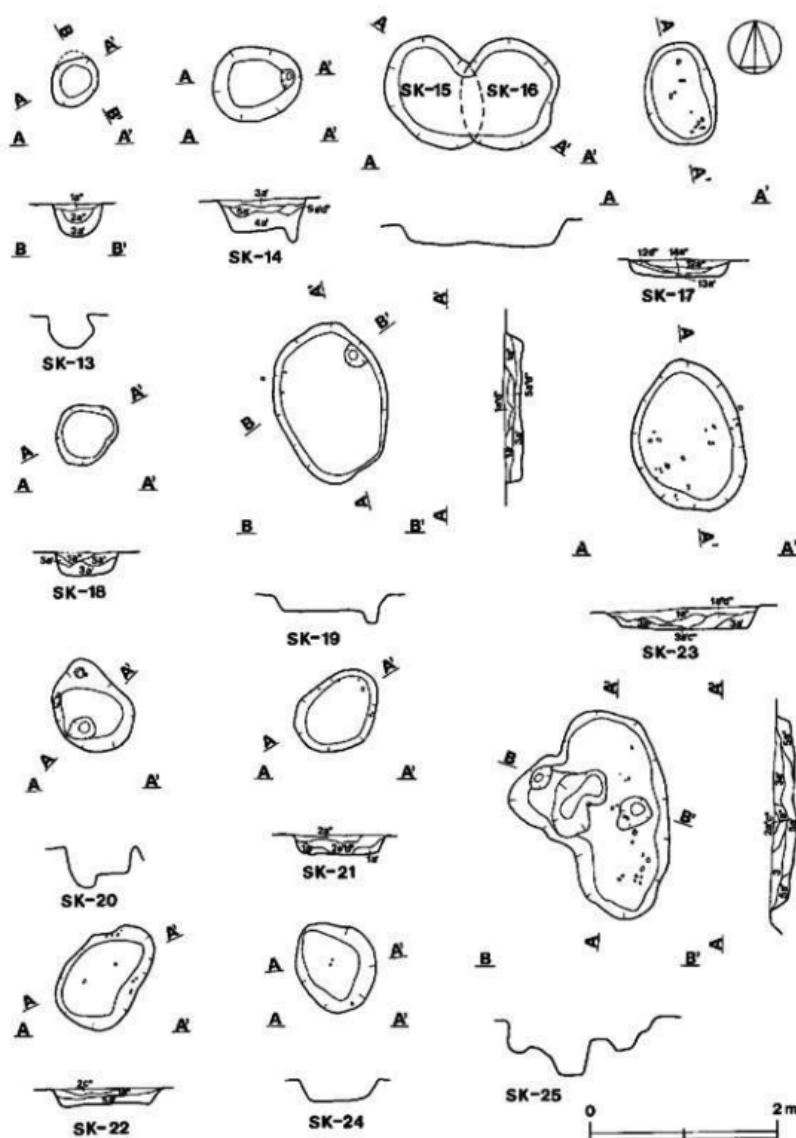
土器号	位 漢	長径方向	平 面 形	規 模		壁 厚	底 面	質:	P数	出土遺物	備 考
				長径×短径(cm)	高さ(cm)						
144	C3 ₂₃ -d ₃	N 84° E	楕円形	2.33×1.43	35	外傾	坂状平坦	A		縄文土器片23点	
145	C3 b ₃	N-43°-E	椭円形	1.08×0.87	38	緩斜	圓底	N		縄文土器片16点	
146	C3 a ₃	N-55°-E	長方形	1.24×0.90	53	垂直	水平平坦	K		縄文土器片19点	
147	C3 a ₃		円形	1.00×0.90	29	垂直	水平平坦	N		縄文土器片10点	
148	B3 j ₂	N-7°-W	不整椭円形	2.50×1.74	35	緩斜	水平平坦	N		縄文土器片60点	
149	B3 j ₂	N-70°-W	椭円形	1.11×0.91	35	垂直	水平平坦	N		縄文土器片46点	
150	C3 b ₃	N-49°-E	椭円形	1.20×0.75	39	緩斜	直状	N		縄文土器片8点	
151	C3 b ₃	N 36° W	椭円形	1.10×0.64	50	垂直	直状	N		東壁ゆるやか	
152	C3 a ₃	N-56°-E	椭円形	1.52×1.10	57	段状	直状	N		縄文土器片19点	北壁垂直
153	B3 j ₂	N-35°-E	椭円形	1.33×0.85	28	垂直	水平平坦	N		縄文土器片7点	
154	B3 i ₂ -j ₂	N 61° E	椭円形	1.53×1.15	16	外傾	水平平坦	N		縄文土器片25点	
155	B3 j ₂		円形	0.92×0.83	55	垂直	直状	N	1	縄文土器片12点	南西壁ゆるやか
156	B3 j ₄		円形	0.78	28	緩斜	直状	N		縄文土器片5点	
157	B3 i ₂	N-77°-E	椭円形	1.15×0.68	20	外傾	水平平坦	N	4		
158	B3 g ₂	N-88° W	椭円形	0.82×0.58	20	外傾	直状	N			
159	B3 h ₂	N-27°-W	不整椭円形	1.45×1.20	28	垂直	坂状平坦	N		縄文土器片6点	
160	C3 a ₃	N-81°-E	椭円形	0.85×0.64	36	垂直	水平平坦	N		縄文土器片5点	
161	C3 f ₂	N-31°-E	隅丸長方形	1.67×1.33	15	外傾	水平平坦	K		縄文土器片20点	
162	C3 a ₃	N-31°-W	隅丸長方形	0.89×0.58	40	垂直	水平平坦	K		縄文土器片2点	
163	C3 a ₃	N-35°-W	隅丸長方形	1.37×0.72	48	垂直	水平平坦	K		縄文土器片4点	
164	C3 d ₂ -e ₂	N-31°-W	隅丸長方形	1.75×0.61	48	垂直	水平平坦	K	1	縄文土器片4点	
165	C2 a ₃		不整円形	1.47×1.30	25	外傾	凸凹	N		縄文土器片7点	
166	C3 c ₂ -c ₃	N-37° E	椭円形	1.30×0.95	15	緩斜	水平平坦	N			
167	C3 b ₃	N-68°-E	椭円形	1.18×0.85	20	緩斜	水平平坦	N			
168	B3 a ₃	N-73°-W	椭円形	1.33×0.80	30	緩斜	直状	N			
169	B3 h ₂	N-2° E	椭円形	1.03×0.80	23	外傾	水平平坦	N			
170	B3 g ₂	N-5°-E	椭円形	0.90×0.65	35	外傾	水平平坦	N			西壁垂直
171	B3 g ₂		円形	0.70×0.55	31	外傾	直状	A			
172	B3 j ₂		不定形	1.90×1.50	45	緩斜	平坦段状	K		板骨 縄文土器片21点	東壁垂直
173	C3 a ₂		円形	1.01×0.96	25	垂直	二段深月 二段平坦	N		縄文土器片1点	
174	C2 i ₂	N-52°-E	隅丸長方形	2.85×0.57	15	緩斜	凸凹	N		縄文土器片25点	
175	B4 b ₃	N-28°-E	不定形	2.20×1.58	45	外傾	二段深月 二段平坦	K	1		
176	C2 d ₂ -d ₃ (N-83°-W)		椭円形	(3.84)×(2.32)	30	外傾	水平平坦	K		縄文土器片12点	SI 9, SK124- 130-182と重複
177	C3 a ₂ -a ₃		小整円形	1.55×1.38	12	緩斜	水平平坦	K		縄文土器片11点	SK 178と重複
178	B3 j ₂ C3 a ₂ -a ₃	N 37°-W	隅丸長方形	4.90×0.60	25	緩斜	水平/傾	K		縄文土器片54点	SK 177と重複 小穴
179	C2 a ₂ -b ₂ B3 j ₂ -c ₃	N-35°-W	隅丸長方形	0.13×0.67	50	外傾	坂状平坦	N		縄文土器片23点	李穴

上層 番号	位 置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土 P数	出 土 遺 物	備 考
				長径×短径(単位)	深さ(単位)					
180	C3 _{4a} -e ₄ d ₃ -d ₄	N-36°W	隅丸長方形	3.16×0.55	73	垂 直	水平平坦	K	縄文土器片1点	丁穴
181	C3 _{4a} -d ₄ d ₁ -e ₄	N-37°W	隅丸長方形	6.50×0.63	40	垂 直	板状平坦	K	縄文土器片44点	手穴
182	C2-e ₄		円 形	0.81×0.74	30	外 傾	水平平坦	N	縄文土器片42点	
183	B3 i ₄		不 定 形	1.37×1.27	45	垂 直	水平平坦	K	1	縄文土器片4点
184	B3 h ₄ -i ₄	N-29°W	隅丸長方形	1.90×0.95	80	垂 直	水平平坦	K		SD2と重複 北東壁段状 SK223と重複 手穴
185	B3 g ₄		円 形	3.00×2.85	25	外 傾	水平平坦	K		
186	C3 e ₄ -d ₄		円 形	0.79×0.66	29	垂 直	水平平坦	N	1	
187										欠番
188	C3 d ₃ -d ₄	N-49°E	隅丸長方形	3.30×0.64	54	垂 直	水平平坦	K	縄文土器片12点	丁穴
189	C3 d ₃ -e ₃	N-50°E	隅丸長方形	4.78×0.50	75	垂 直	水平平坦	K	縄文土器片40点	北東壁段状 手穴
190	B3 i ₁ -j ₁	N-32°W	隅丸長方形	2.00×0.50	92	垂 直	凸 凹	K		手穴
191	B3 e ₄ -e ₅	N-56°E	不 定 形	1.75×1.12	40	傾 斜	Ⅱ 状	N	2	縄文土器片6点
192	B3 g ₄ -g ₅	N-40°W	隅丸長方形	1.86×0.56	85	垂 直	水平平坦	K		北東張り面 手穴
193	B3 g ₅	N-29°W	不整長方形	1.67×0.95	93	傾 斜	水平平坦	K	縄文土器片27点	
194	B3 g ₅	N-53°W	隅丸長方形	3.80×1.30	18	傾 斜	Ⅱ 状	K	1	
195	B3 f ₄ -g ₅	N-53°E	不 定 形	4.00×3.60	70	傾 斜	Ⅱ 状	K	1	縄文土器片45点
196	B4 f ₁	N-10°E	長 方 形	1.79×0.72	20	垂 直	水平平坦	N		
197	B4 e ₁ -e ₂		円 形	0.82×0.76	26	外 傾	水平平坦	N		
198	B4 e ₂ -e ₃	N-5°E	椭 圆 形	0.95×0.66	40	傾 斜	凸凹段状	N		
199	B4 i ₂ -i ₃	N-21°E	椭 圆 形	1.45×1.10	36	傾 斜	凸凹段状	N	1	縄文土器片5点
200	B4 f ₄	N-7°W	長 楕 圆 形	2.15×0.95	11	傾 斜	板状平坦	N		
201	B4 f ₄	N-89°W	椭 圆 形	1.78×1.20	28	外 傾	Ⅱ 状	N	1	
202	B4 f ₄		不整圓形	0.98×0.84	23	傾 斜	Ⅱ 状	N	2	
203	B4 g ₁		円 形	1.00×0.90	42	垂 直	皿 状	N	2	
204	B4 h ₄ -i ₄	N-65°E	椭 圆 形	1.07×0.74	17	外 傾	凸 凹	N	1	
205	B4 i ₄	N-6°E	椭 圆 形	1.61×0.98	16	外 傾	水平平坦	N		
206	B4 h ₄	N-69°W	椭 圆 形	1.71×1.28	68	傾 斜	Ⅱ 状	N	2	
207	B4 i ₄ -i ₅	N-49°E	椭 圆 形	1.30×1.05	36	垂 直	水平平坦	N	1	縄文土器片2点
208	C3 _{4a} -a ₃ b ₄	N-31°W	隅丸長方形	3.46×0.68	60	外 傾	水平平坦		縄文土器片92点	丁穴
209	B4 i ₂ -j ₃	N-5°W	椭 圆 形	0.90×0.72	25	傾 斜	Ⅱ 状	N		
210	B4 j ₂ -j ₃	N-35°E	椭 圆 形	1.43×0.95	45	外 傾	Ⅱ 状	K	1	北東壁段状
211	B4 i ₂	N-46°W	不整長方形	1.53×0.82	20	外 傾	水平平坦	K	1	
212	B4 i ₂		不整圓形	0.92	15	傾 斜	凸凹段状	K		
213	B4 f ₄	N-50°E	不整橢円形	1.41×0.90	54	垂 直	凸凹段状	K		
214	C4 b ₂	N-56°E	長 方 形	1.63×0.74	80	垂 直	凸 凹	K		手穴
215	C4 b ₂ -c ₄	N-50°E	椭 圆 形	1.47×1.23	18	傾 斜	板状平坦	K		

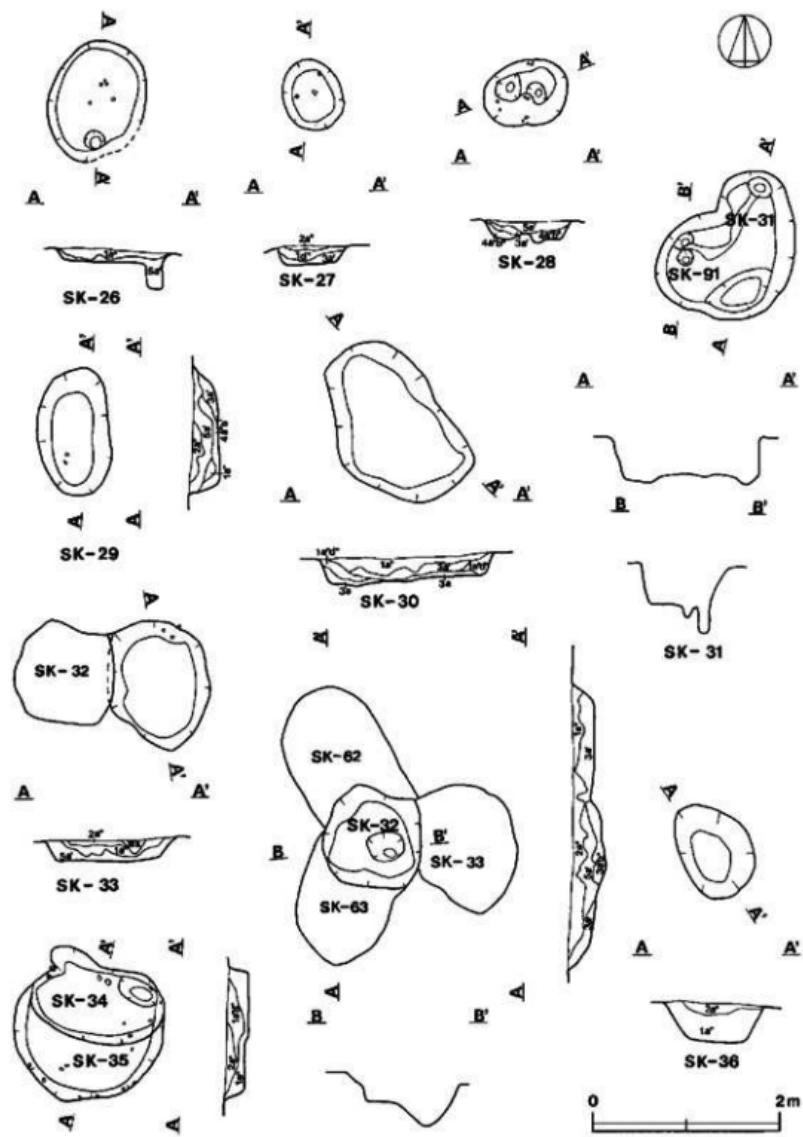
土質 番号	位 置	長径方向	平面形	規 模		壁 厚	底 面	覆 土	P数	出土遺物	備 考
				長径×短径(cm)	深さ(cm)						
216	B4 ds		円 形	1.12×1.02	20	外 傾	水平平坦	N			
217	B4 ja		不整円形	1.43×1.25	35	緩 斜	凸凹波状	K 1			
218	C4 a ₁ ·a ₂		不整円形	0.90×0.75	42	北は重複 南は傾斜	水平平坦	N			
219	B4 e ₁ ·f ₁	N 87° W	不 定 形	2.05×1.40	49	緩 斜	凸 四	K			
220	33 j ₁	N-60°-E	隅丸長方形	4.24×0.67	95	垂 直	水平平坦	K	縄文土器片33点 ポイント1点	寺穴	
	C3 a ₁										
221	C4 h ₂ ·c ₂	N-35°-W	不整長方形	2.40×0.80	72	垂 直	水平平坦	K		丁穴	
222	C4 b ₂ ·b ₃	N-22°-E	格 形	2.00×1.60	255	垂 直	水平平坦	N	縄文土器片13点 井戸跡		
223	B3 h ₂ ·h ₃ B4 l ₁	N-34° W	隅丸長方形	4.20×0.50	60	垂 直	水平平坦	K		SK164と重複 手穴	
224	B4 l ₁ ·l ₂	N 36° W	隅丸長方形	2.85×0.60	67	垂 直	水平平坦	K		手穴	
225	C4 f ₂ ·g ₂	N-60°-W	不整楕円形	1.53×0.95	87	垂 直	水平平坦	K		底面北西側段 SD4と重複	
226	B3 g ₂ ·h ₂ h ₃	N-34°-W	隅丸長方形	2.20×0.77	88	垂 直	水平平坦	K	縄文土器片3点 手穴	SD4と重複 手穴	
227	C4 b ₃	N 74° E	不整楕円形	1.50×1.00	65	緩 斜	凸 四 状	K 2		SD2-4-5 と重複	
228	C4 c ₃	N-14°-W	不整楕円形	1.55×1.00	93	垂 直	北側波状	K		SD5と重複	
229	C4 u ₂	N-7-E	格 形	1.67×1.14	57	外 傾	凸 四 面 南側波状	K 2		SD5と重複	
230	C4 g ₃ ·h ₃	N 43° W	隅丸長方形	1.69×1.10	90	袋 状	収放平坦	K		内壁垂直 SD4と重複	
231	C4 h ₃ ·h ₄	N-39°-W	隅丸長方形	1.87×0.80	58	垂 直	水平平坦	K		SD4と重複	
232	C4 i ₁ ·i ₂	N-36°-W	隅丸長方形	3.76×0.85	100	垂 直	水平平坦	K		SD4と重複 手穴	
233	B4 j ₂	N-48°-W	隅丸長方形	0.90×0.62	48	垂 直	凸 四	K		SD6と重複	
234	C5 o ₂ ·f ₂	N-65°-E	不整楕円形	1.45×0.95	67	緩 斜	直 状	N		SD7と重複 北壁傾斜	
235	B5 h ₂ ·h ₃	N 27°-E	格 形	1.08×0.89	20	外 傾	収放平坦	N	1		
236	B5 n ₂ ·f ₂	N-50°-E	不 定 形	2.57×1.90	150	垂 直	凸 四	K	縄文土器片9点		
237	C6 c ₁	N-3°-W	格 形	1.05×0.78	24	緩 斜	水平平坦	N			
238	B5 e ₂ ·e ₃ f ₂ ·f ₃		円 形	2.70	300	外 傾	水平平坦	N	縄文土器片28点 井戸跡		
239	B5 f ₂ ·g ₂	N-10°-E	椭 圆 形	2.62×1.55	30	緩 斜	水平平坦	N	縄文土器片1点		
240	B5 d ₄	N-58°-E	椭 圆 形	1.12×0.87	15	外 傾	水平平坦	N			
241	B5 j ₁ ·j ₂	N-31° W	椭 圆 形	1.38×1.09	38	外 傾	凸 四	N			
242	C5 a ₂ ·b ₂	N-72°-E	椭 圆 形	1.48×0.72	17	緩 斜	凸 四 A	2			
243	B5 j ₃	N-37°-W	椭 圆 形	1.39×0.90	12	緩 斜	水平平坦	N			
244	B5 i ₂ ·j ₂	N 63° W	椭 圆 形	1.80×1.32	120	外 傾	凸 四	K	縄文土器片4点		
245	C6 c ₁ ·c ₂	N-84°-W	椭 圆 形	1.23×1.00	50	外 傾	直 状	N			



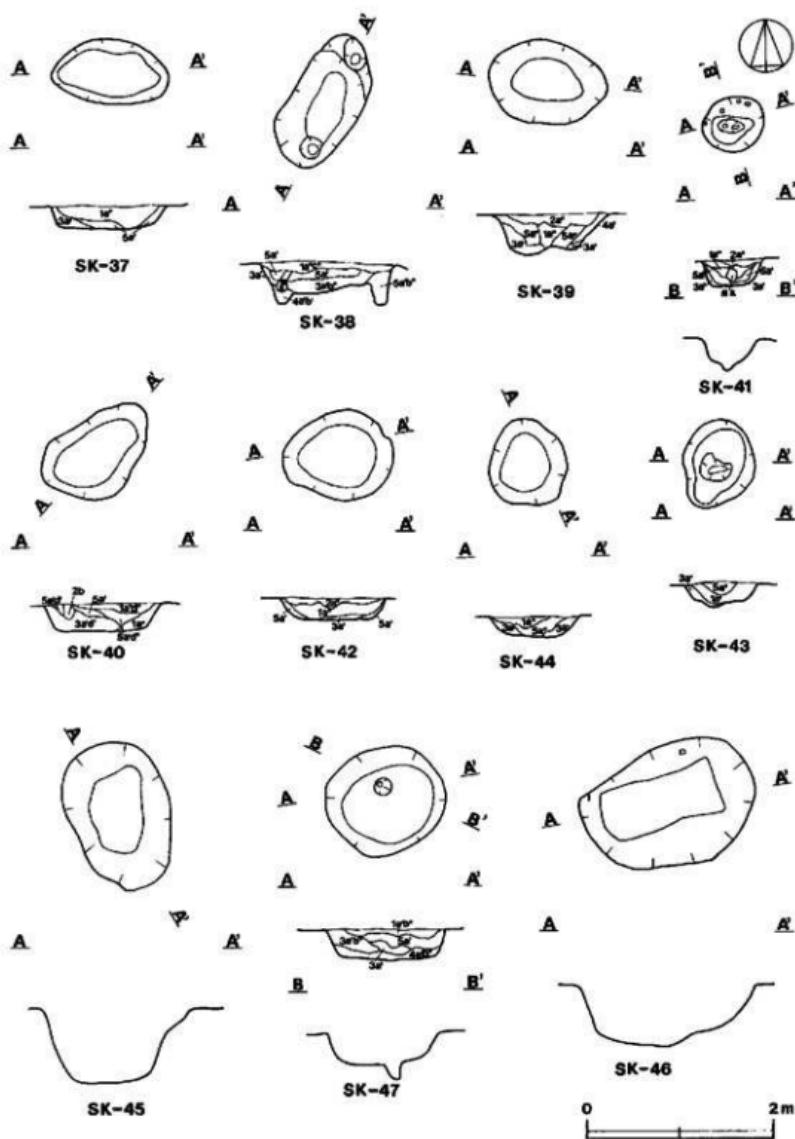
第115図 土壌実測図 (1) (L=26.0m)



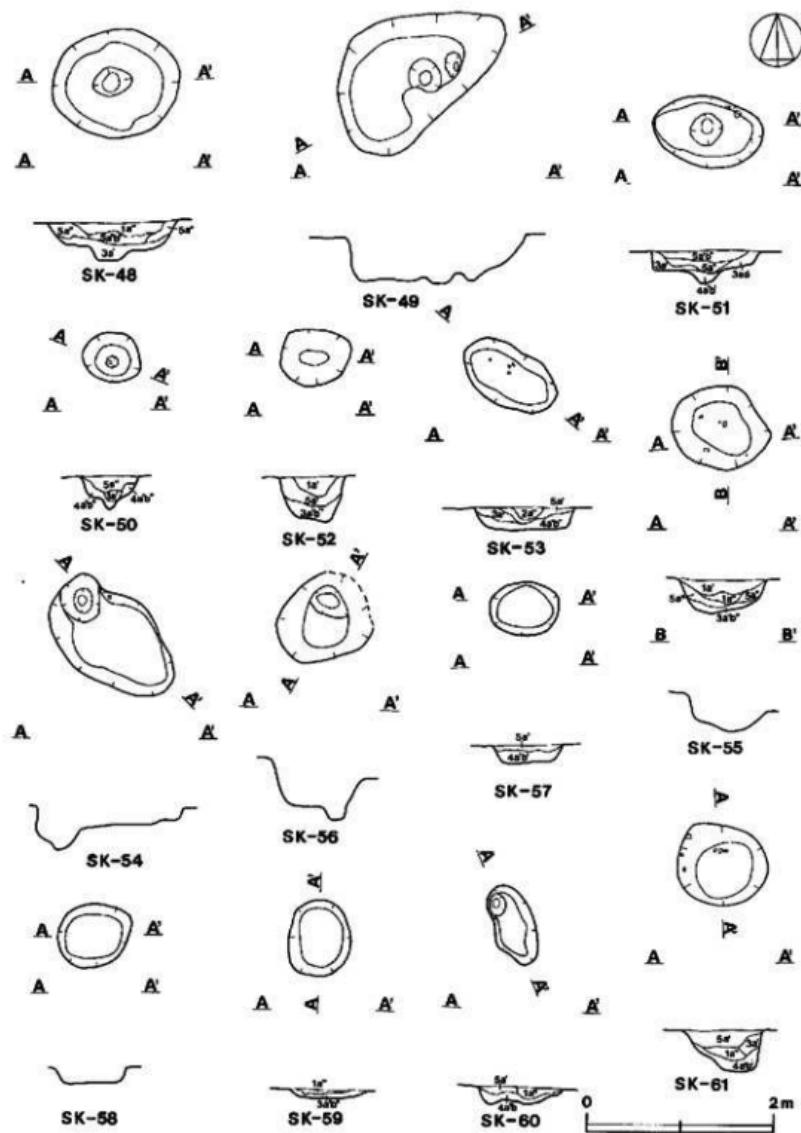
第116図 土壌実測図 (2) ($L=26.0\text{m}$)



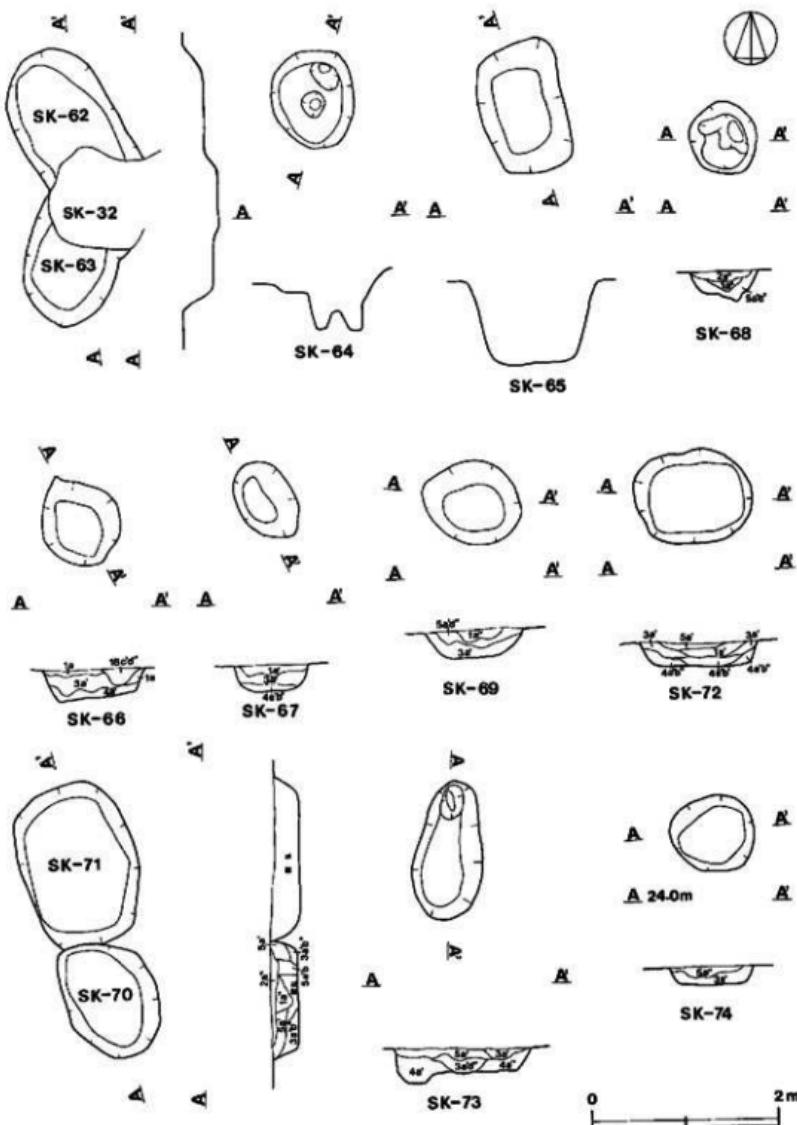
第117図 土壌実測図 (3) ($L = 26.0\text{m}$)



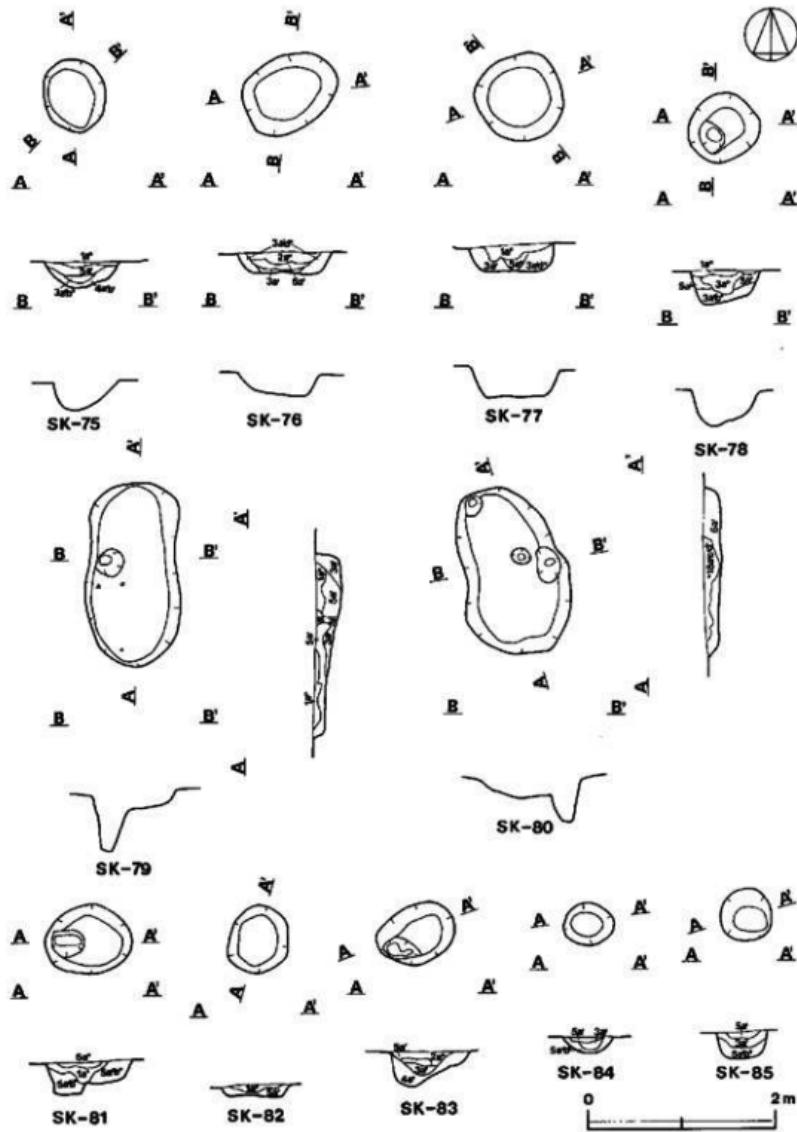
第118図 土壤実測図 (4) (L=26.0m)



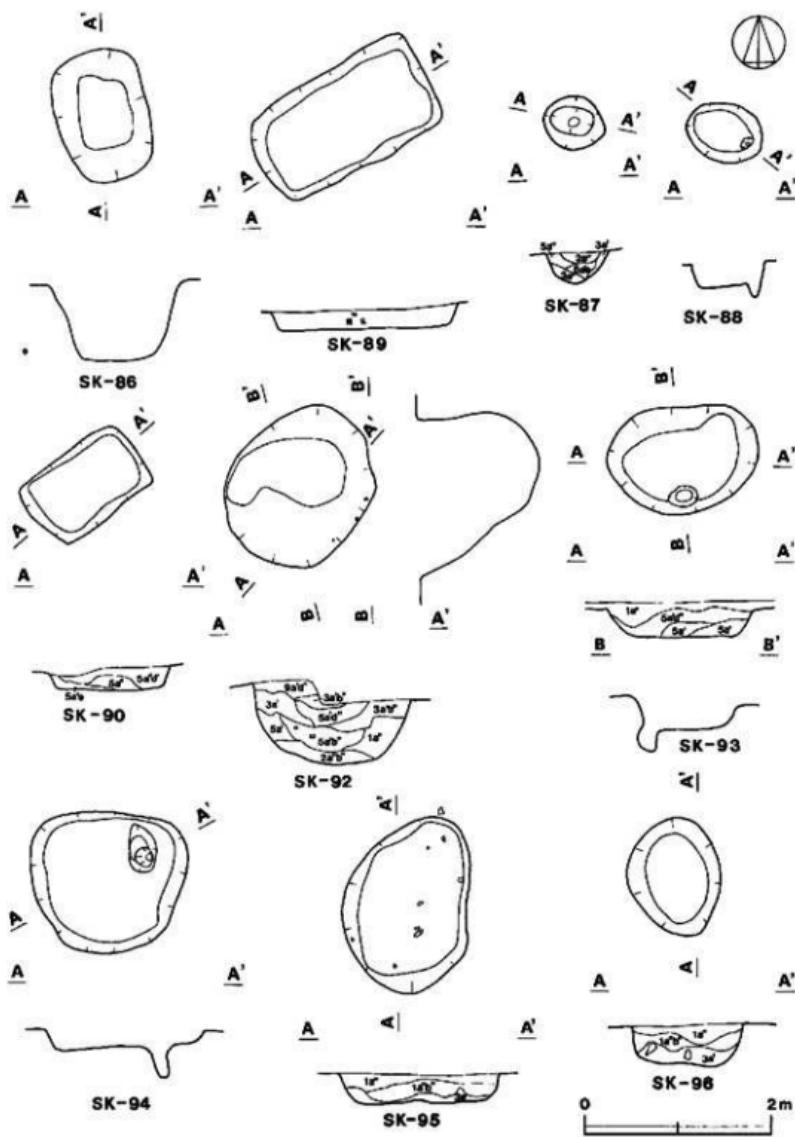
第119図 土壌実測図 (5) ($L = 26.0\text{m}$)



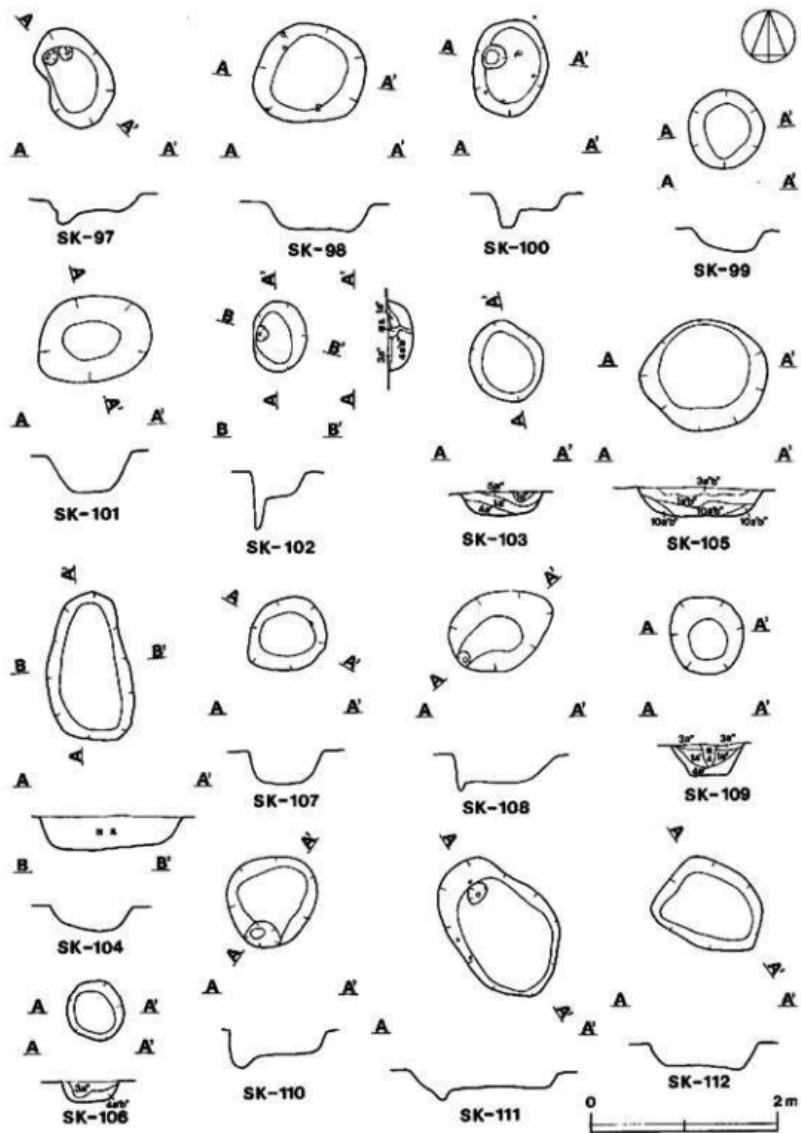
第120図 土壌実測図 (6) ($L = 26.0\text{m}$)



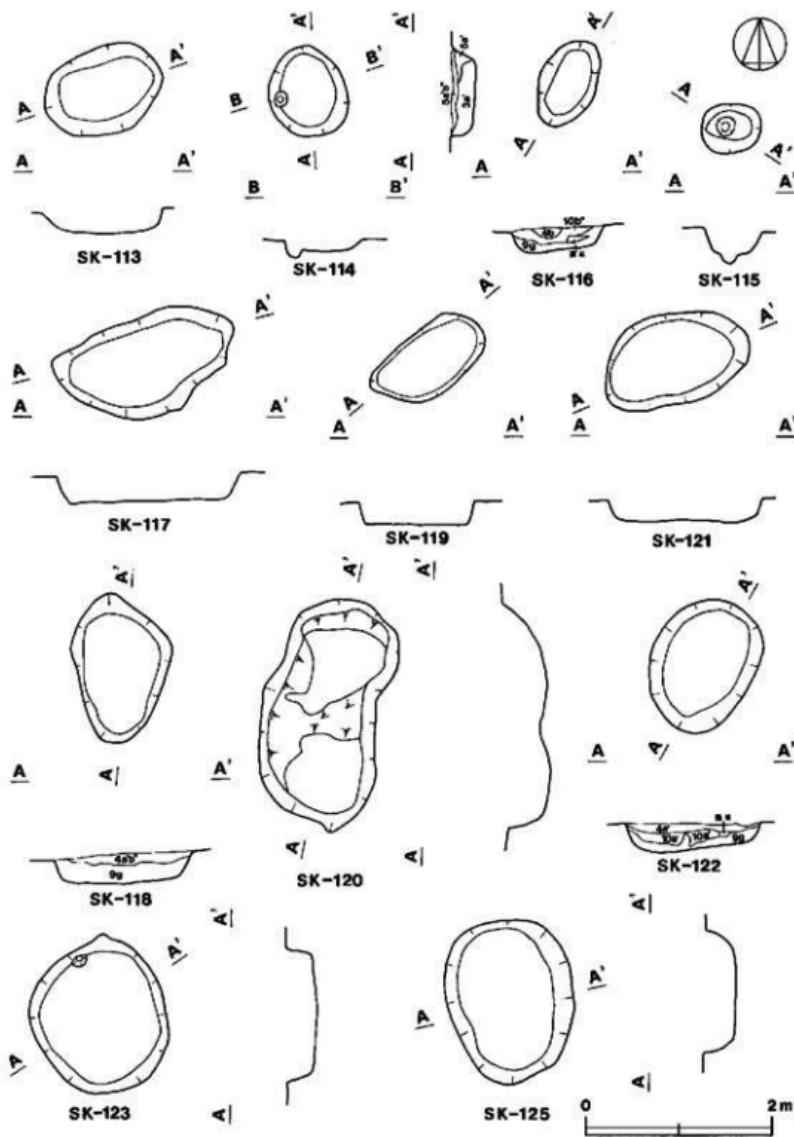
第121図 土壌実測図 (7) ($L = 26.0\text{m}$)



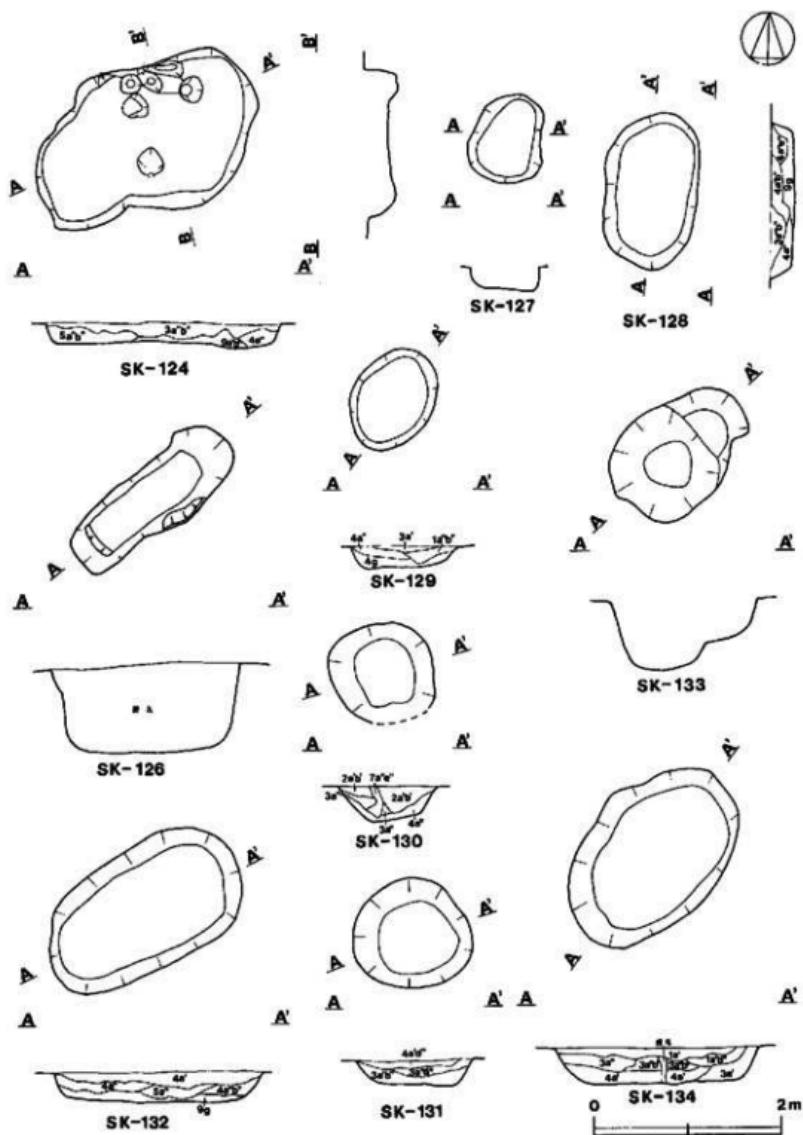
第122図 土壌実測図 (8) ($L=26.0\text{m}$)



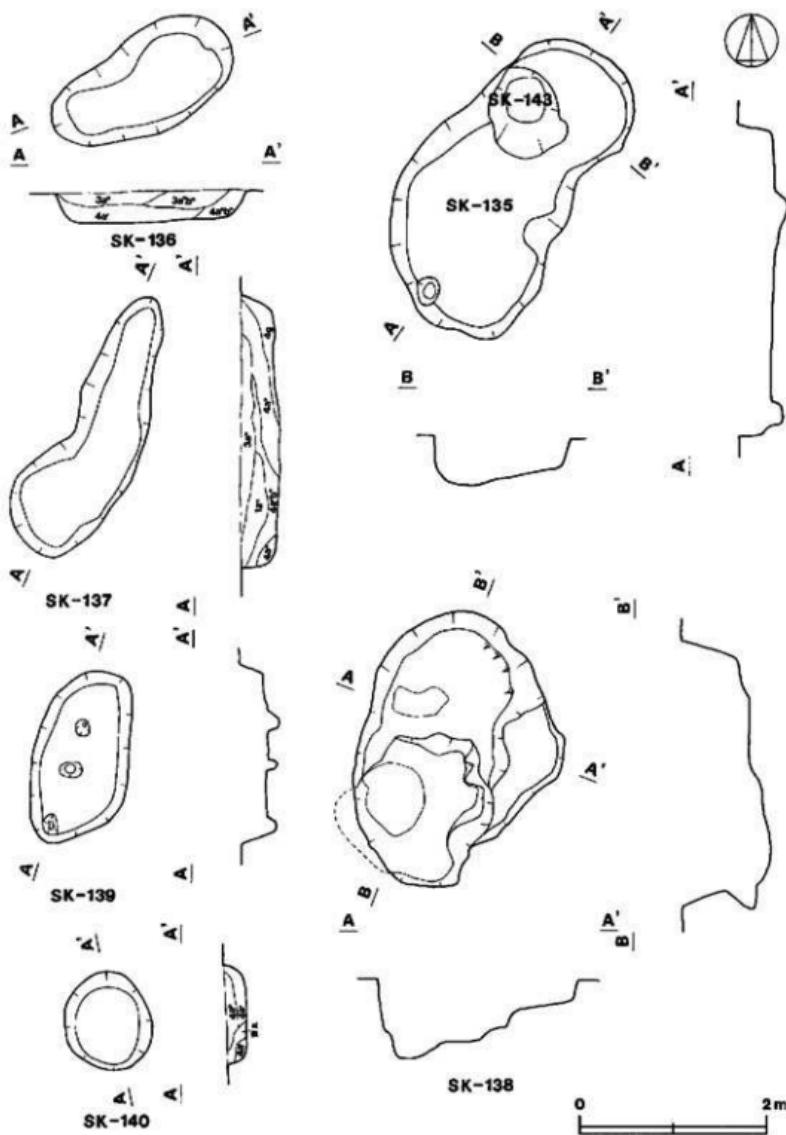
第123図 土壌実測図 (9) ($L=26.0m$)



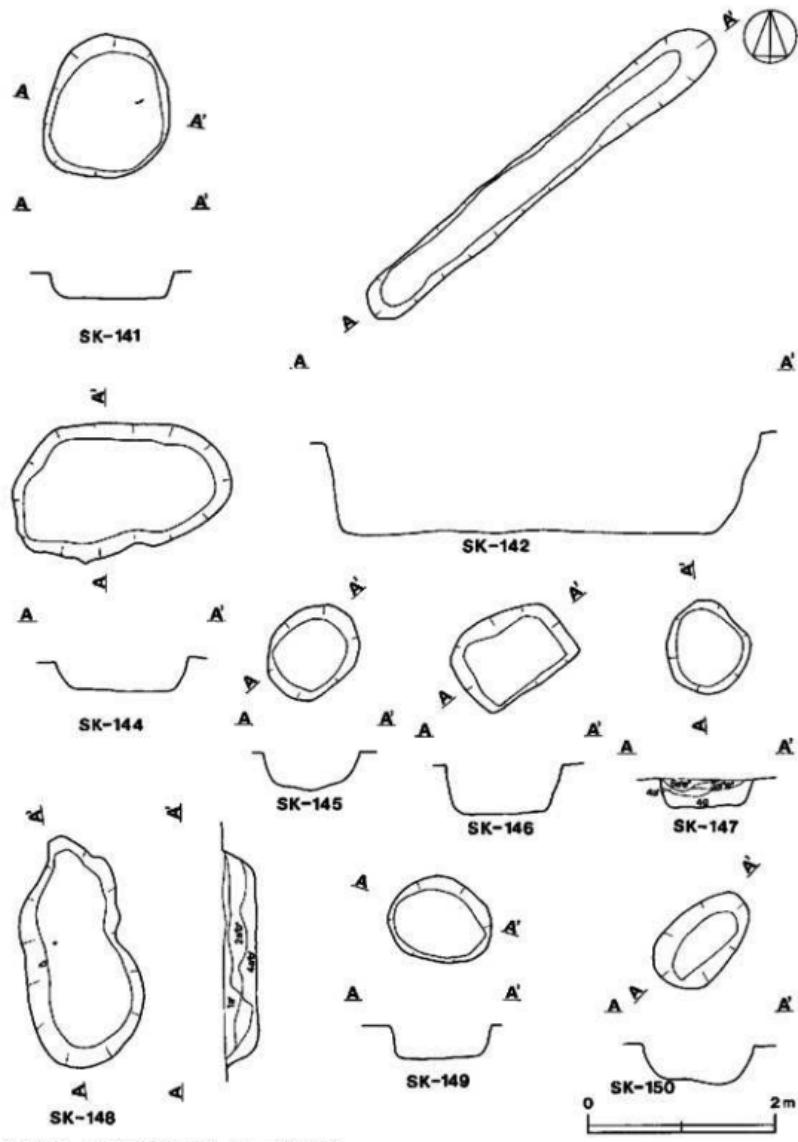
第124図 土壤実測図 (1) (L=26.0m)



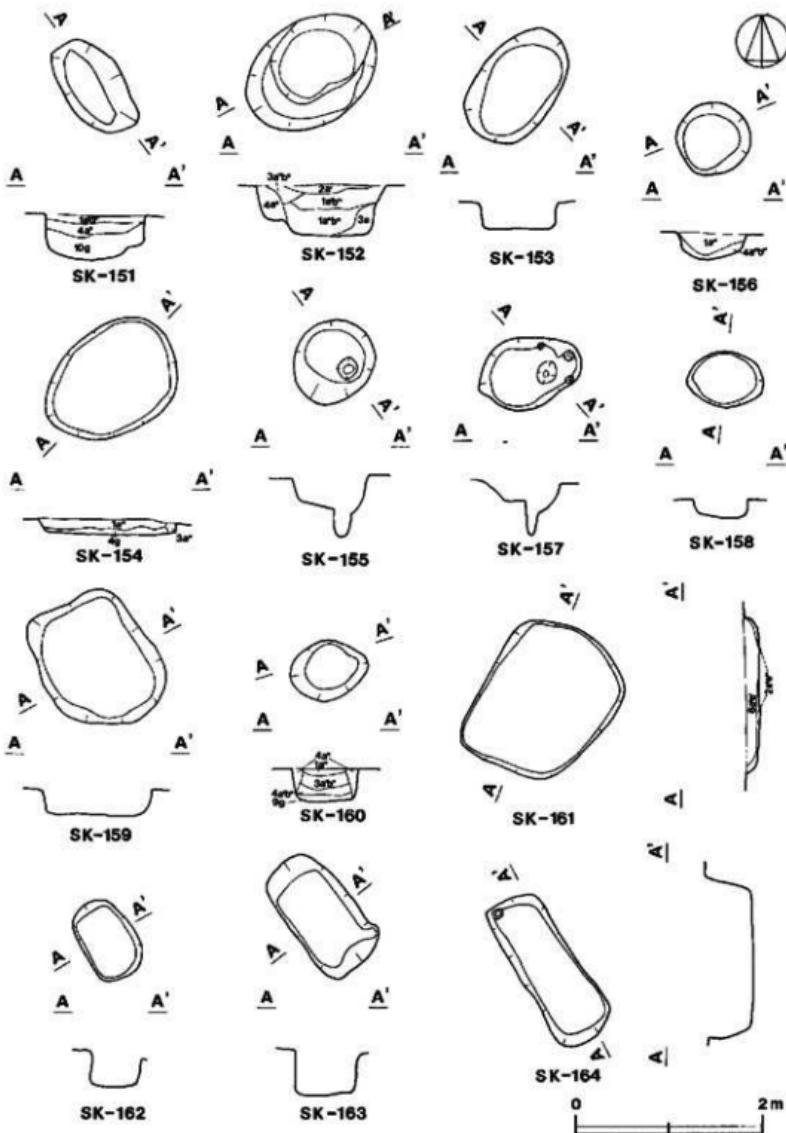
第125図 土壌実測図 (II) ($L = 26.0\text{m}$)



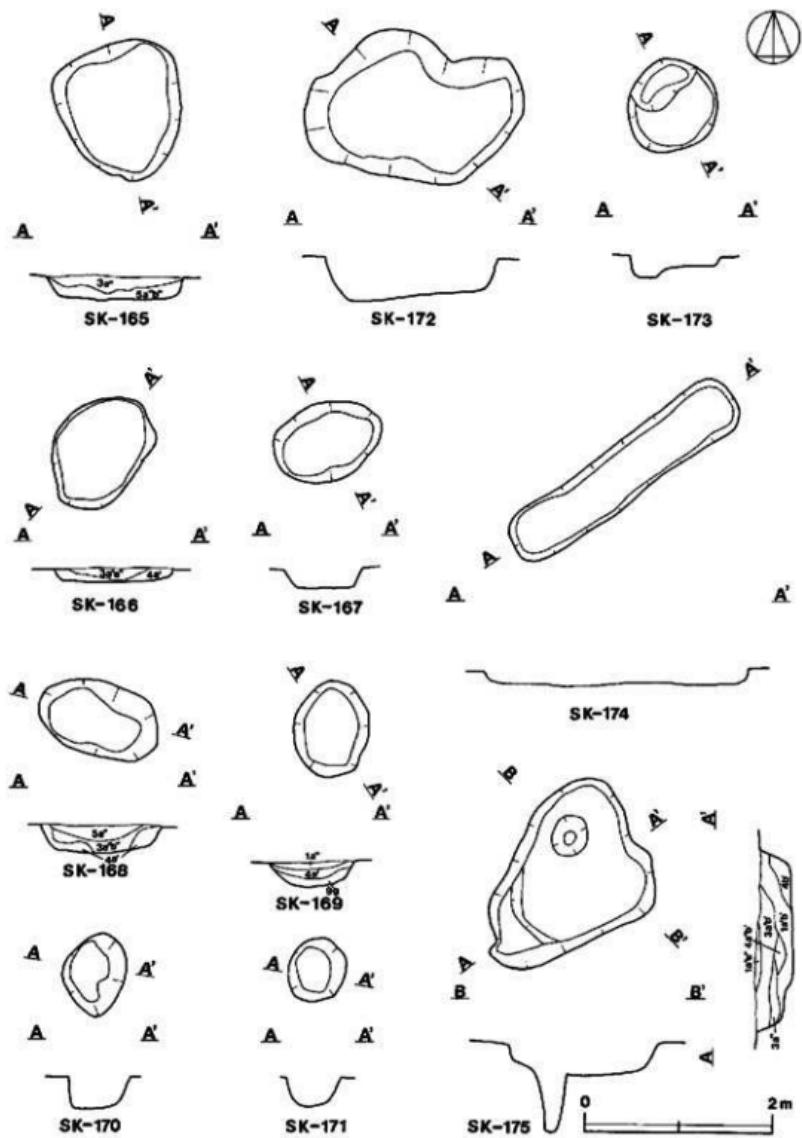
第126図 土壌実測図 (12) ($L = 26.0\text{m}$)



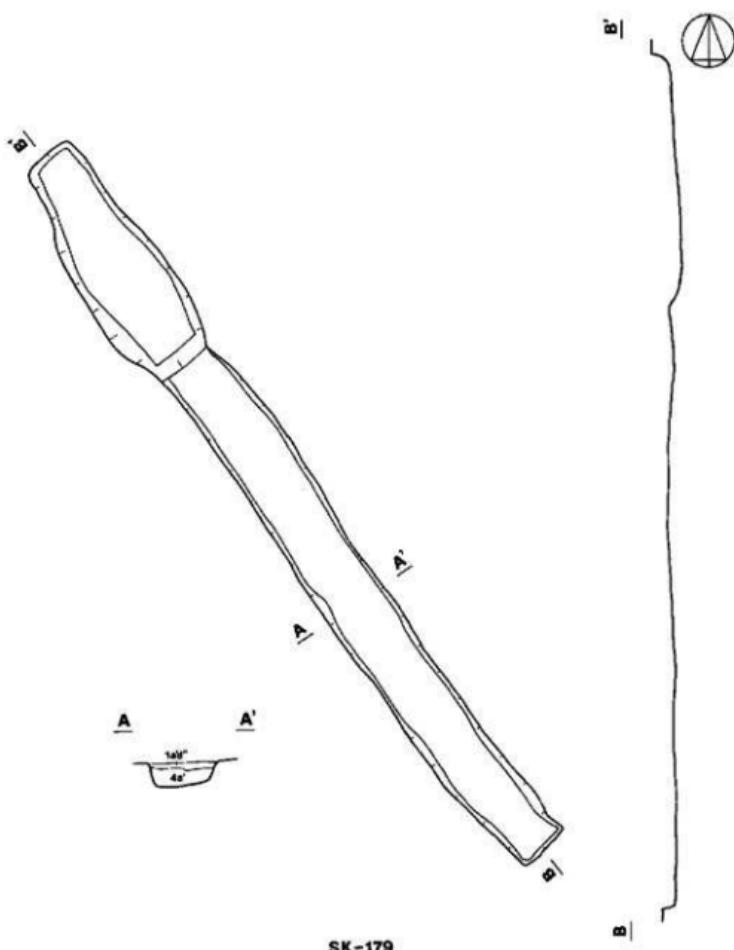
第127図 土壌実測図 (3) ($L=26.0\text{m}$)



第128図 土壤実測図 04 (L=26.0m)



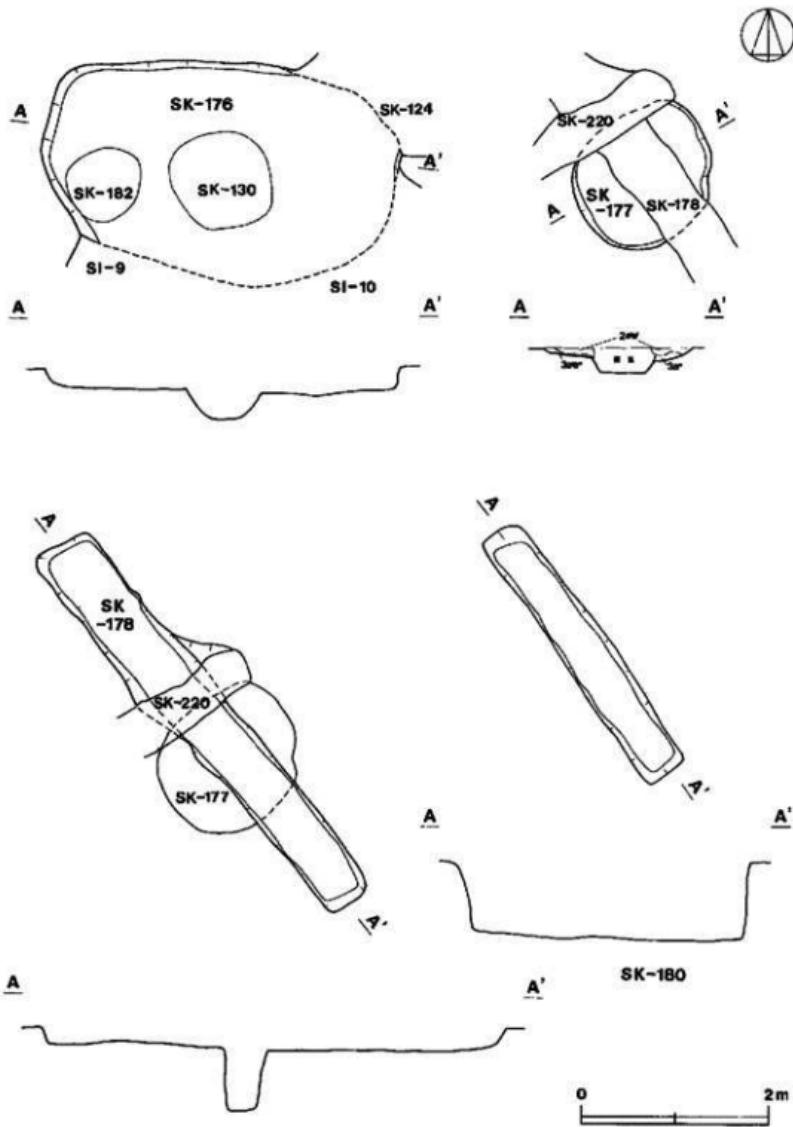
第129図 土壌実測図 (1) ($L = 26.0\text{m}$)



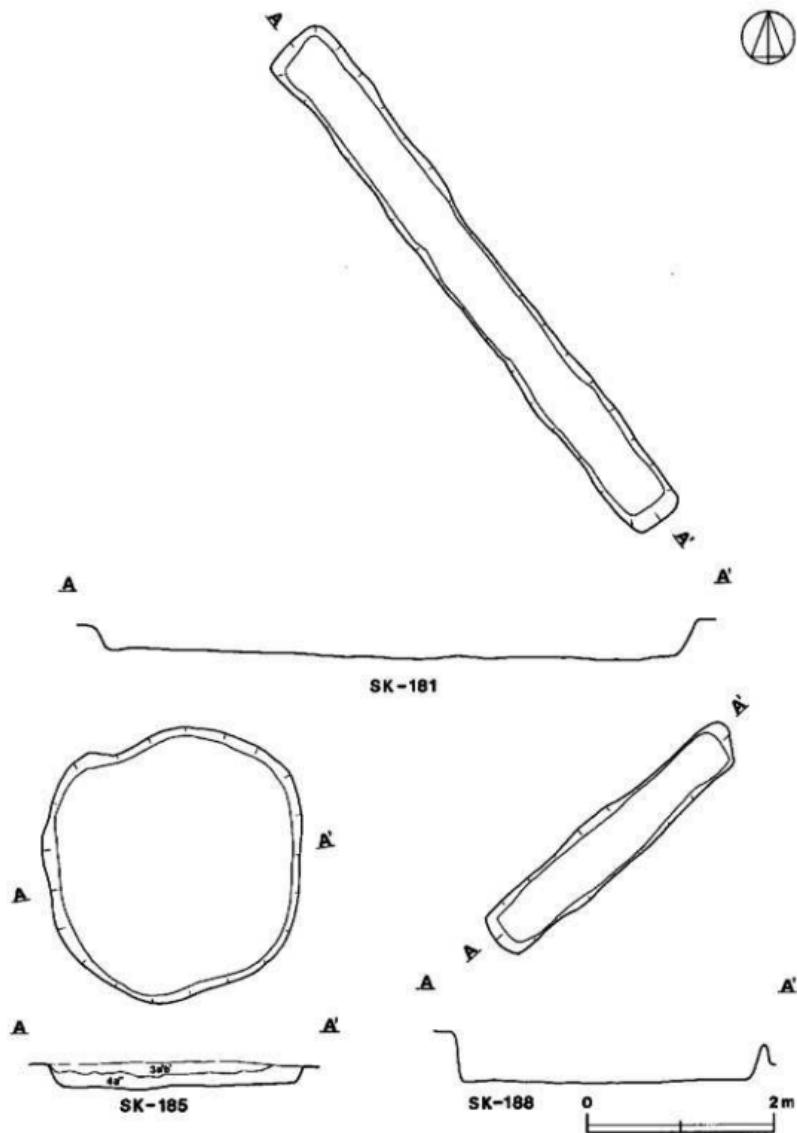
SK-179



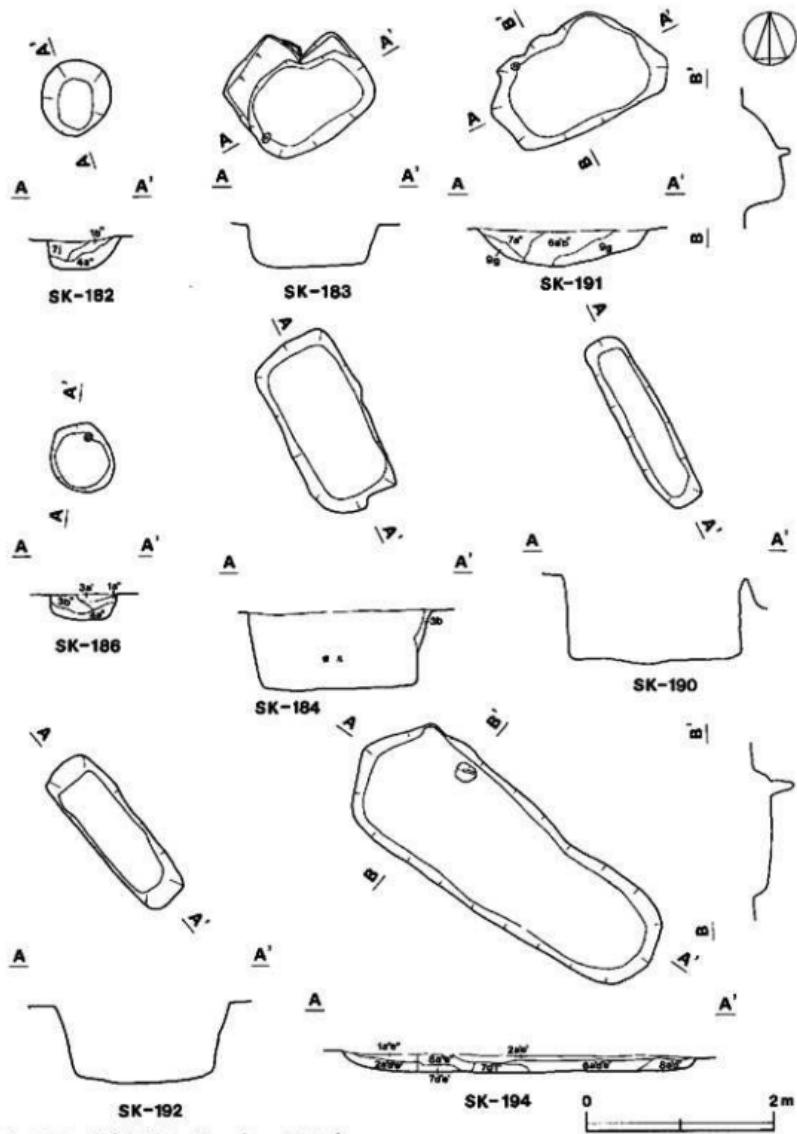
第130図 土壌実測図 (1) (L=26.0m)



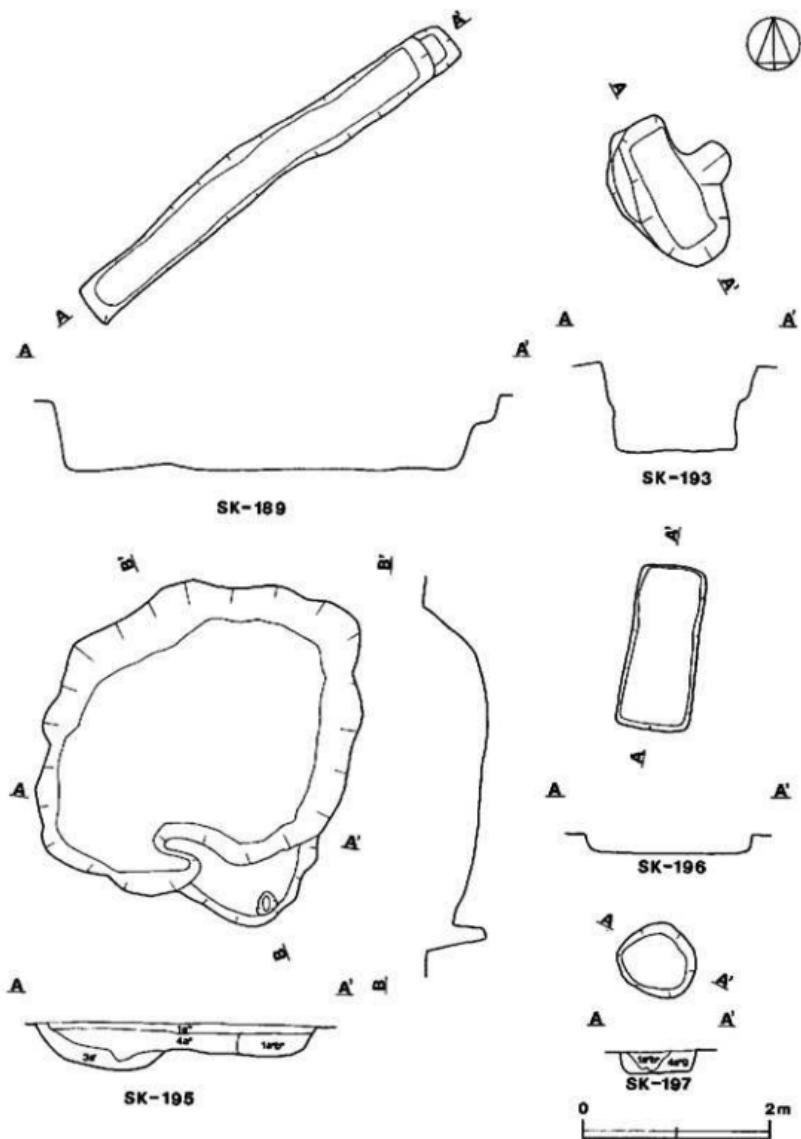
第131図 土壌実測図 (1) ($L = 26.0\text{m}$)

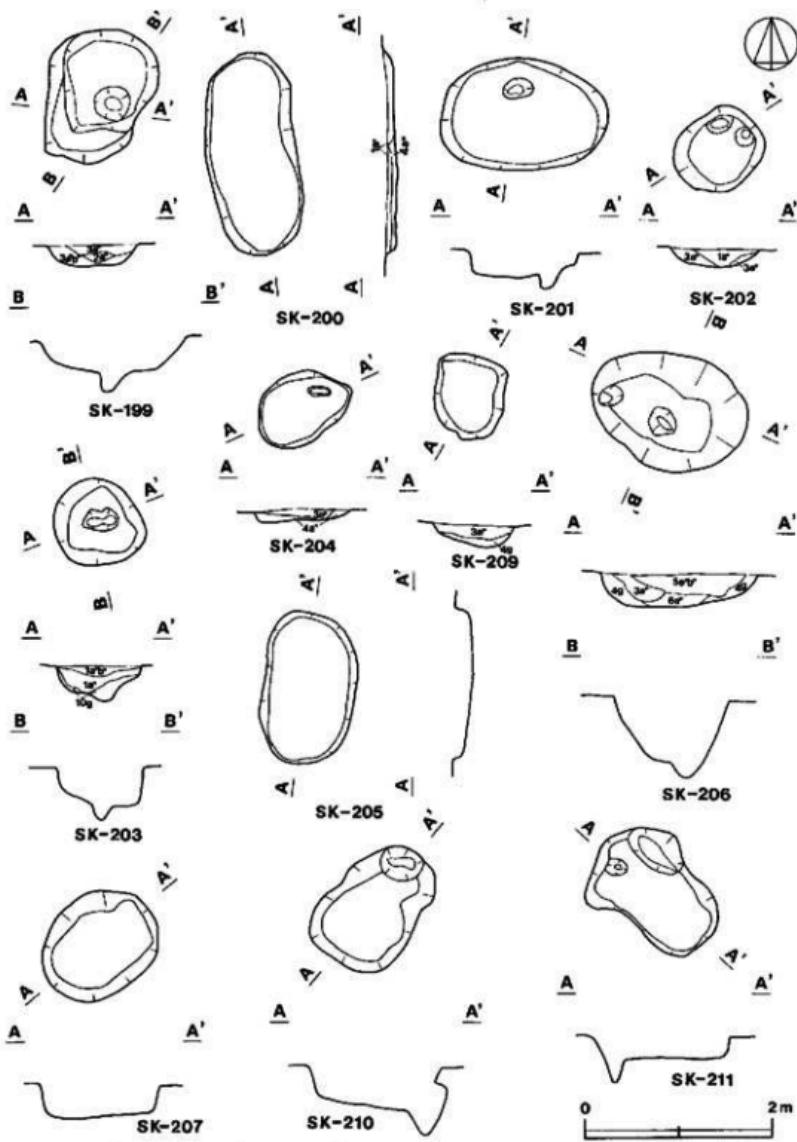


第132図 土壌実測図 ⑩ (L=26.0m)

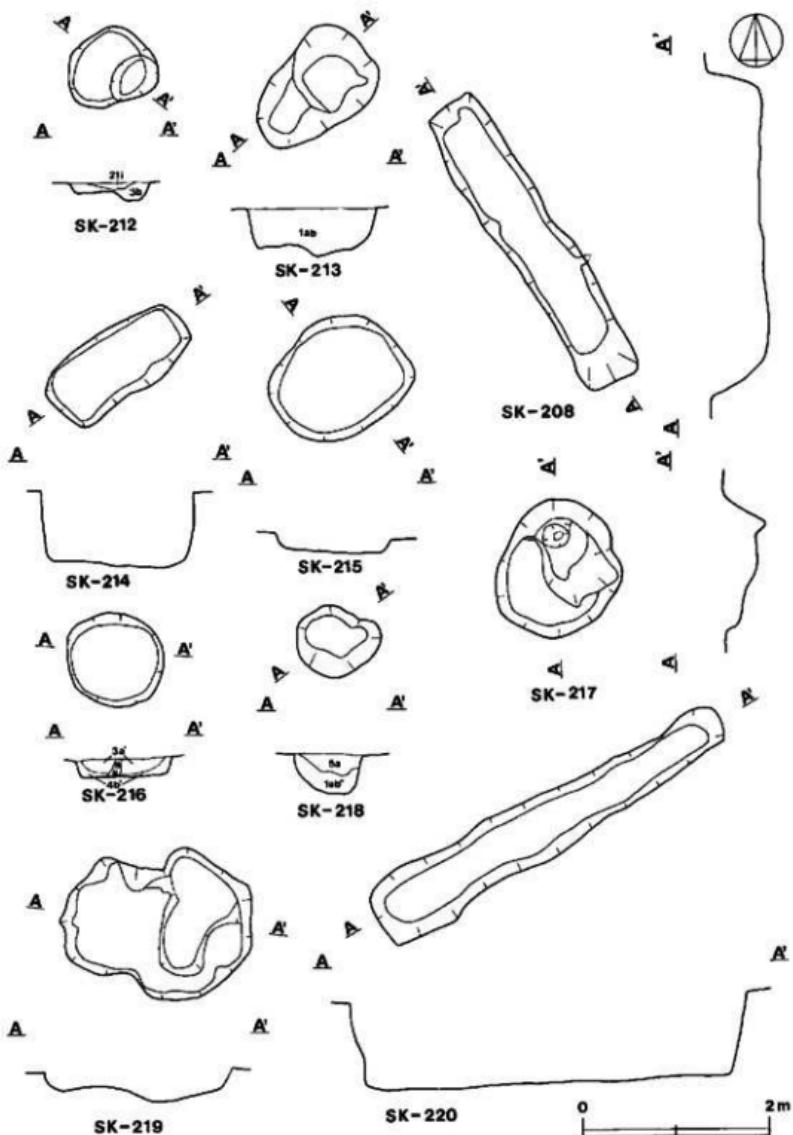


第133図 土壌実測図 (L = 26.0m)

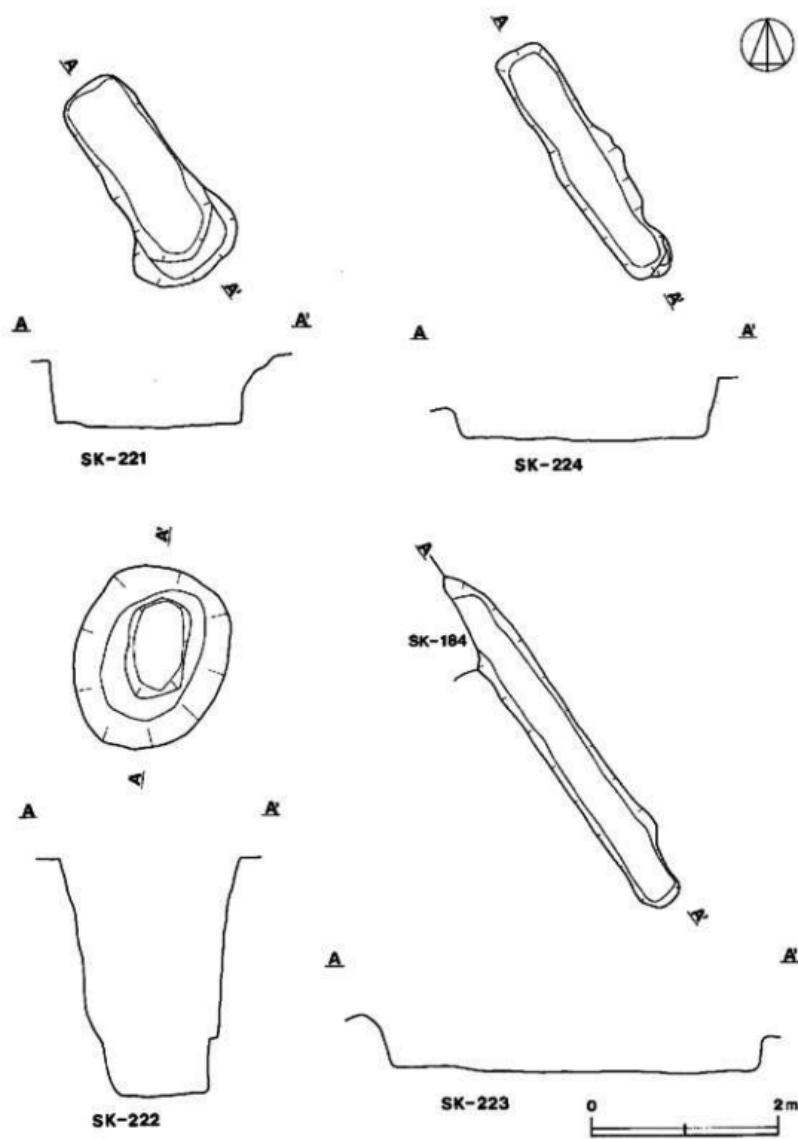




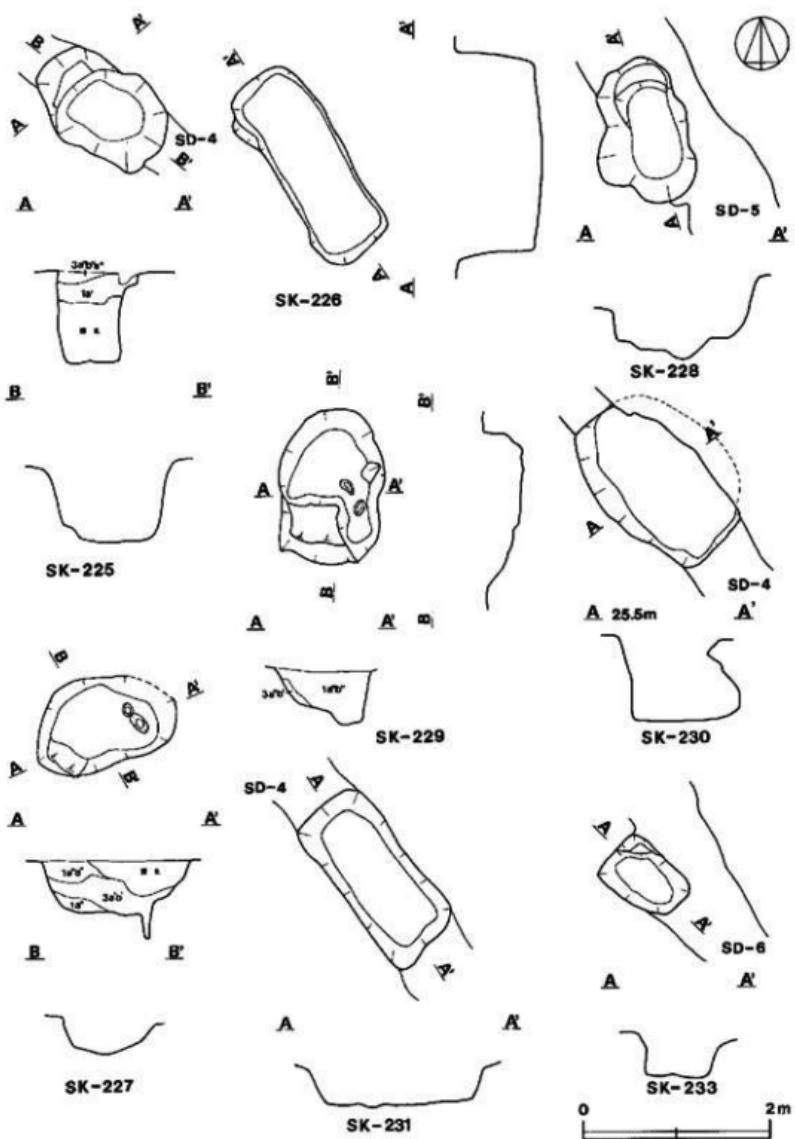
第135図 土壌実測図 (2) (L=26.0m)



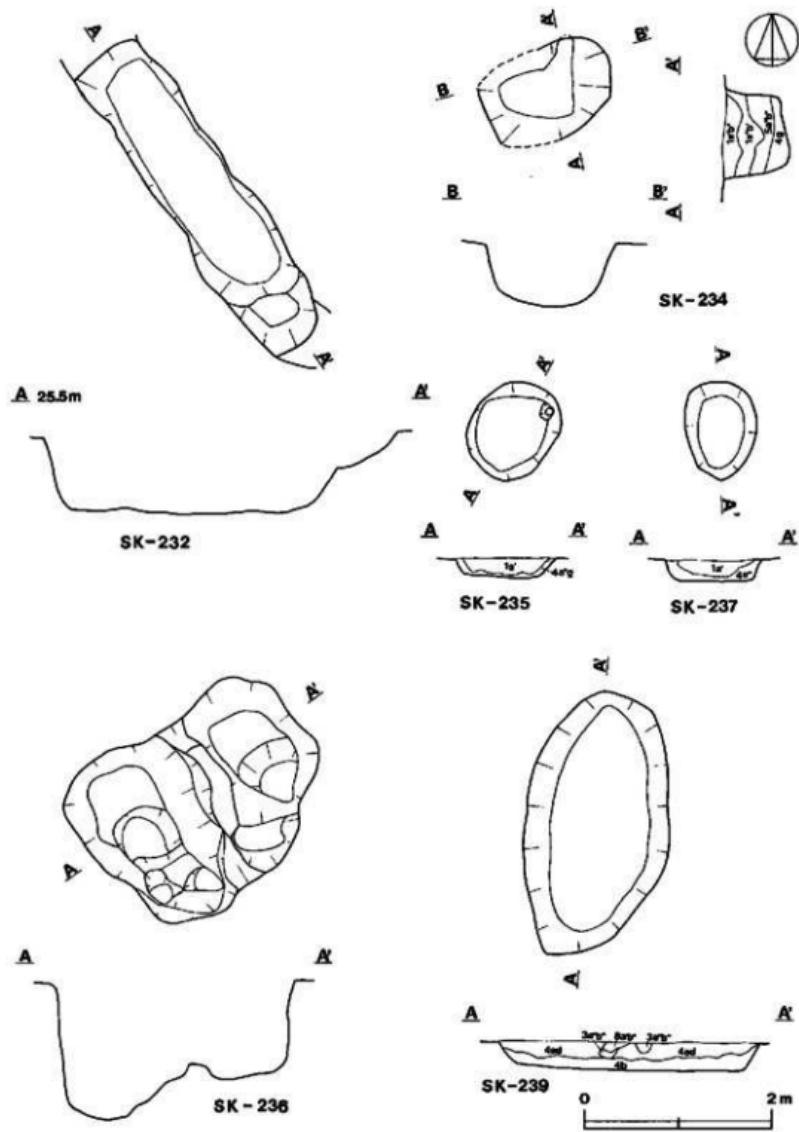
第136図 土壌実測図 (2) ($L = 26.0\text{m}$)



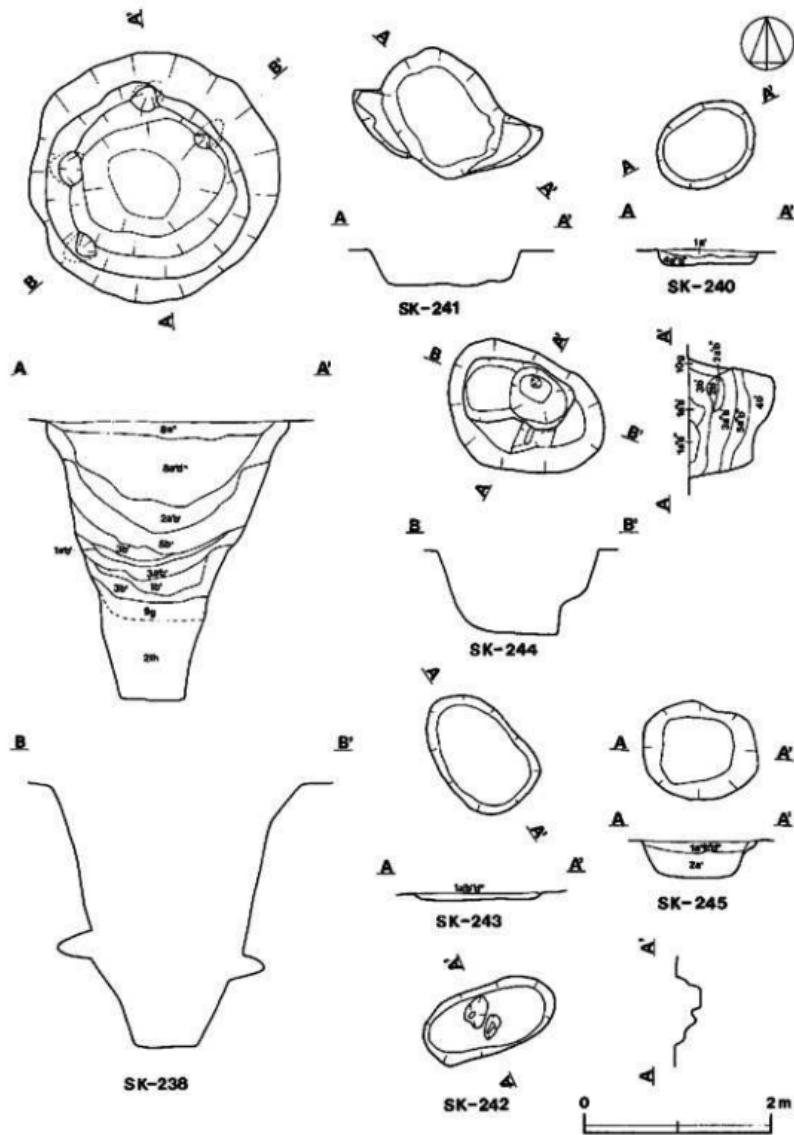
第137図 土壌実測図 (2) ($L=26.0\text{m}$)



第138図 土壌実測図 24 (L=26.0m)



第139図 土壤実測図 (5) ($L=26.0\text{m}$)

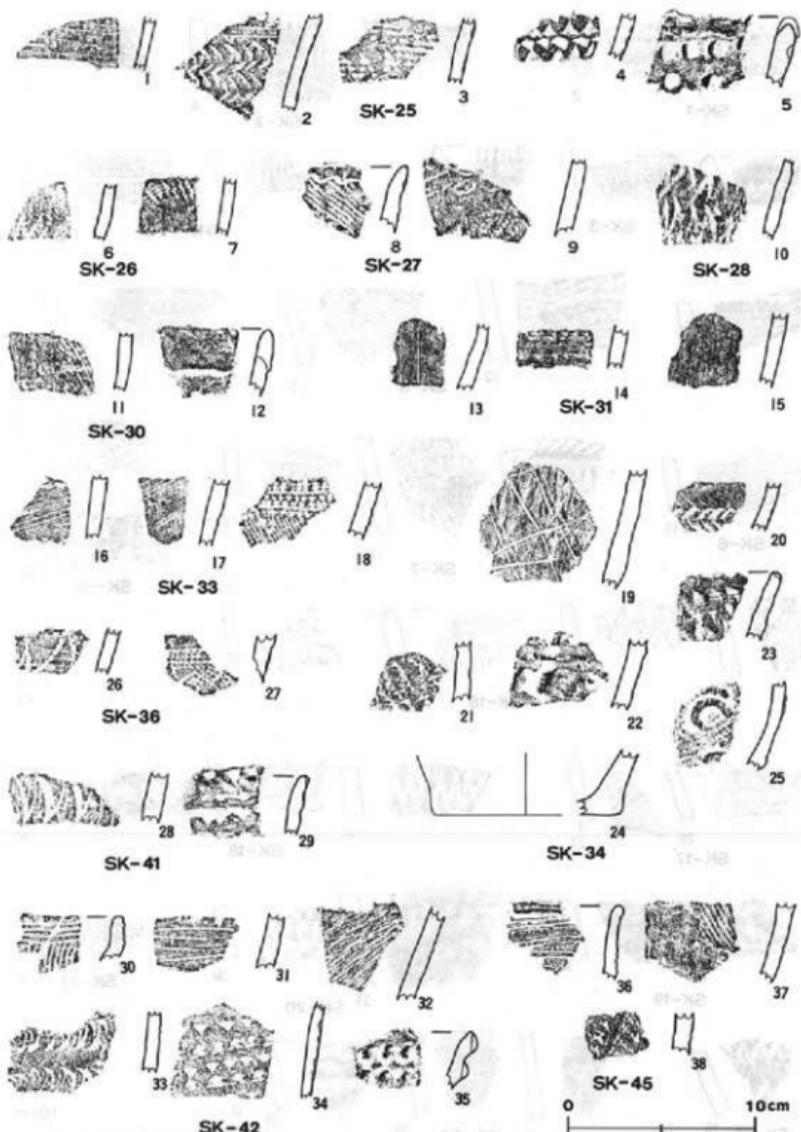


第140図 土壤実測図 (L=26.0m)



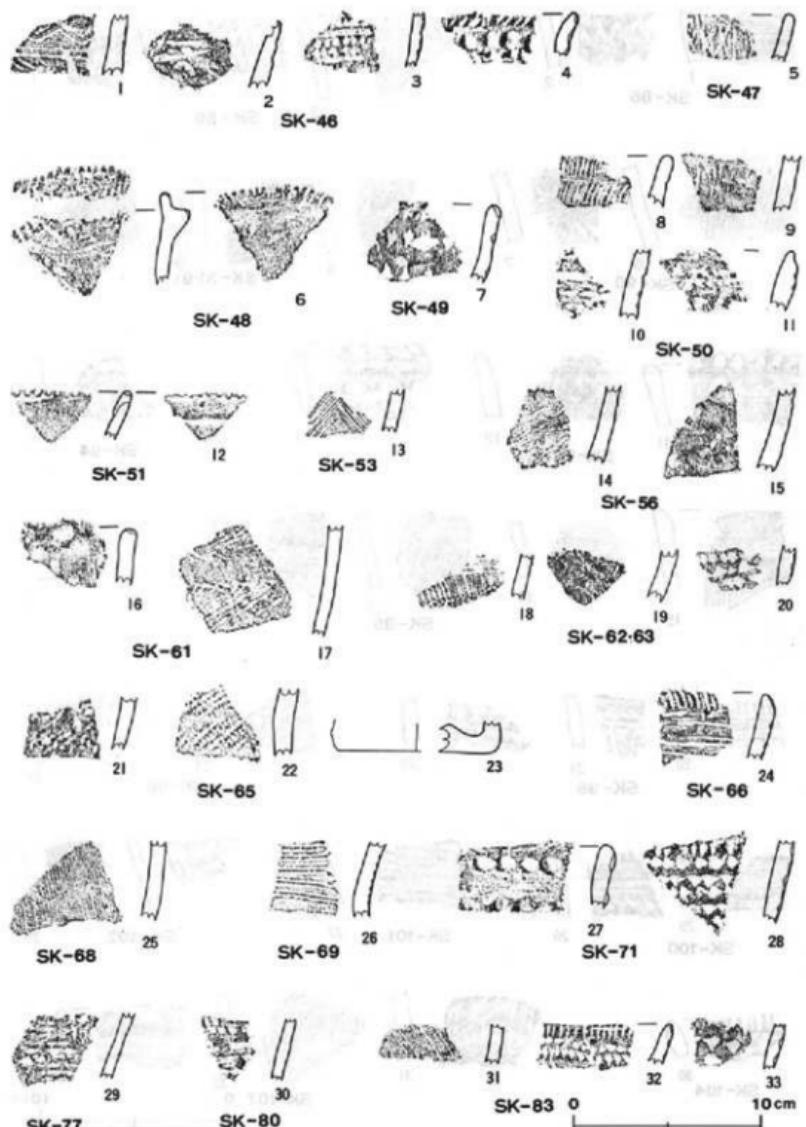
第141圖 土壤出土土器拓影圖 (1)

1 土器拓影圖 2 土器拓影圖 3 土器拓影圖



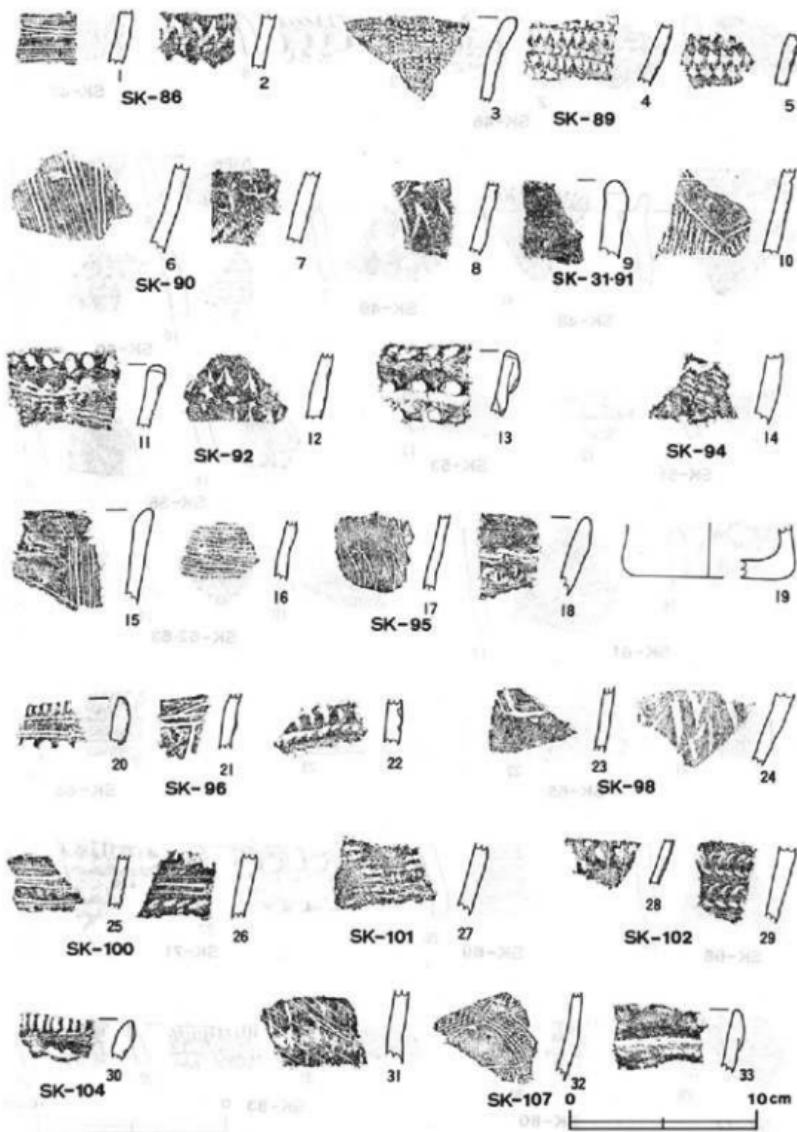
第142図 土壤出土土器拓影図 (2)

同前出図(2) 土器拓影図(2)

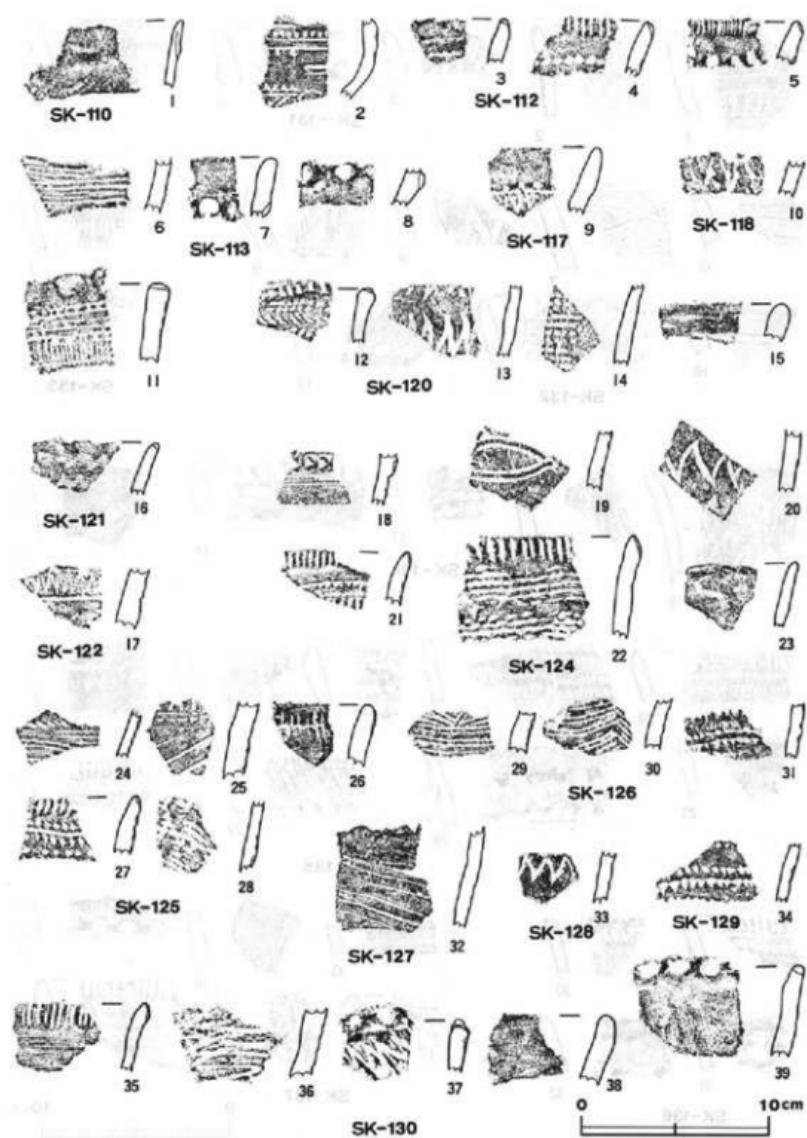


第143図 土壤出土土器拓影図 (3)

○ 土器の断面図 土器の断面図 土器の断面図

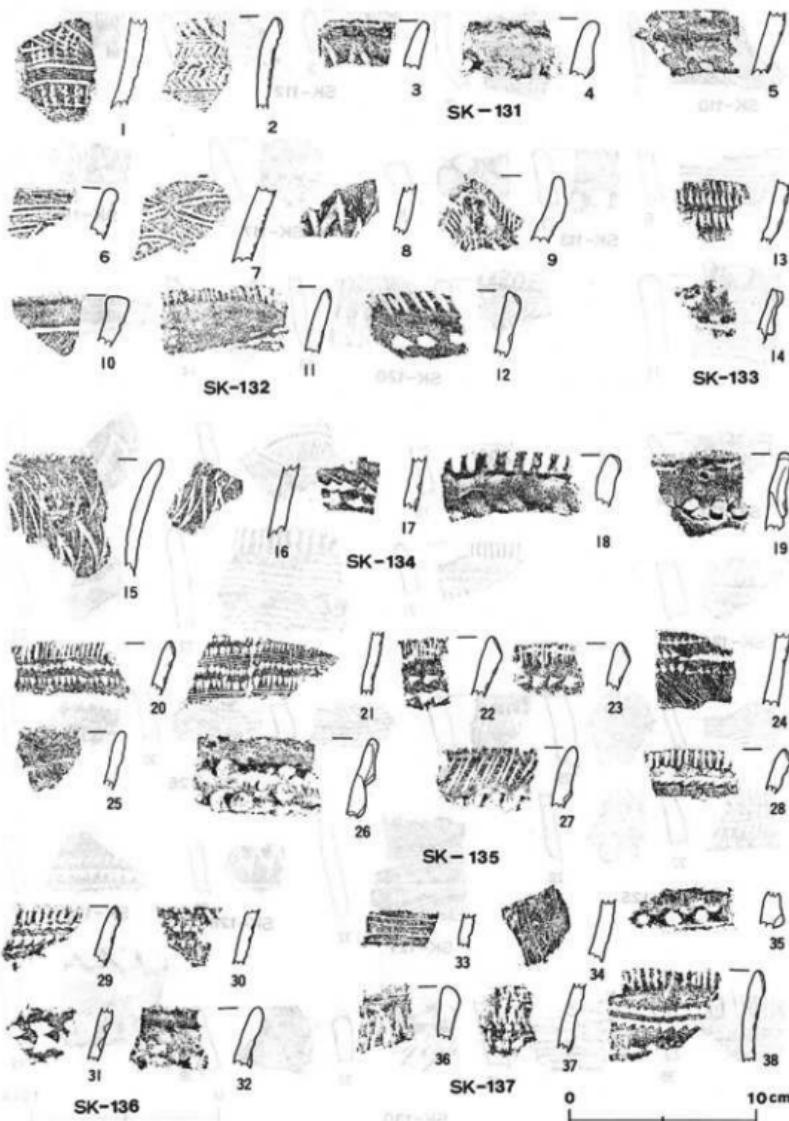


第144図 土壙出土土器拓影図 (4)



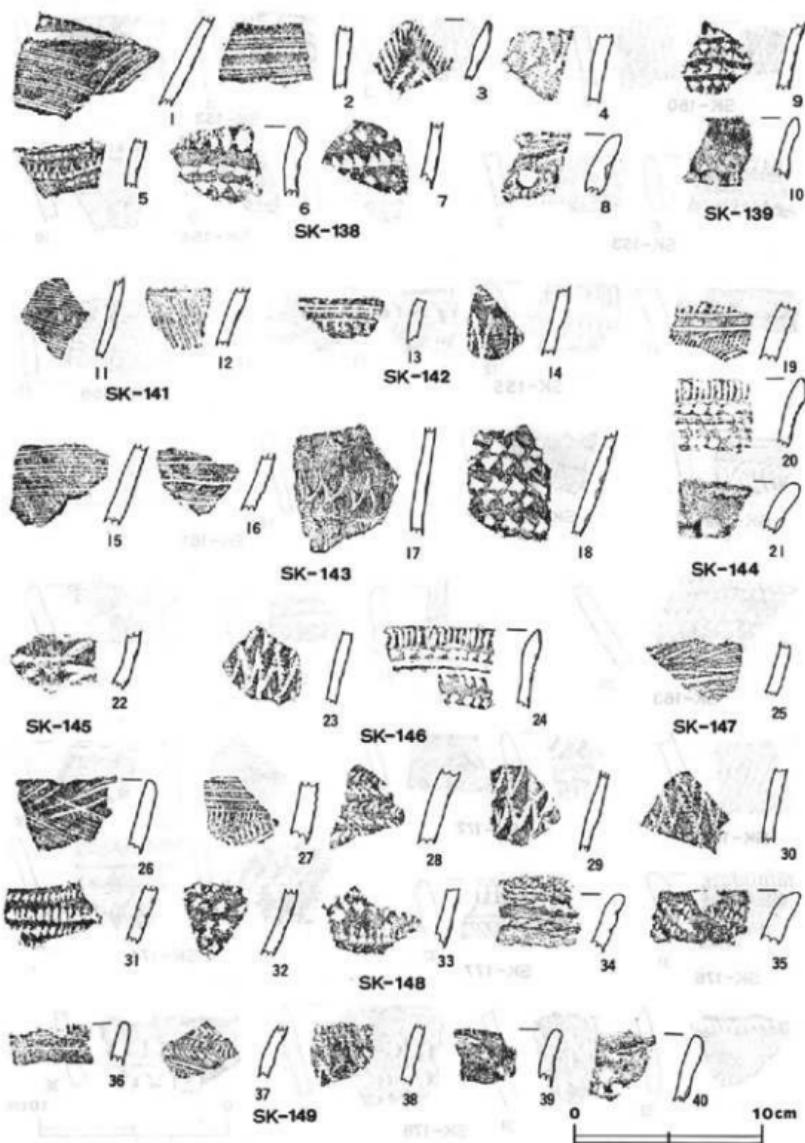
第145図 土壤出土土器拓影図 (5)

（）は薄削土器、（）は厚削土器



第146図 土壤出土土器拓影図 (6)

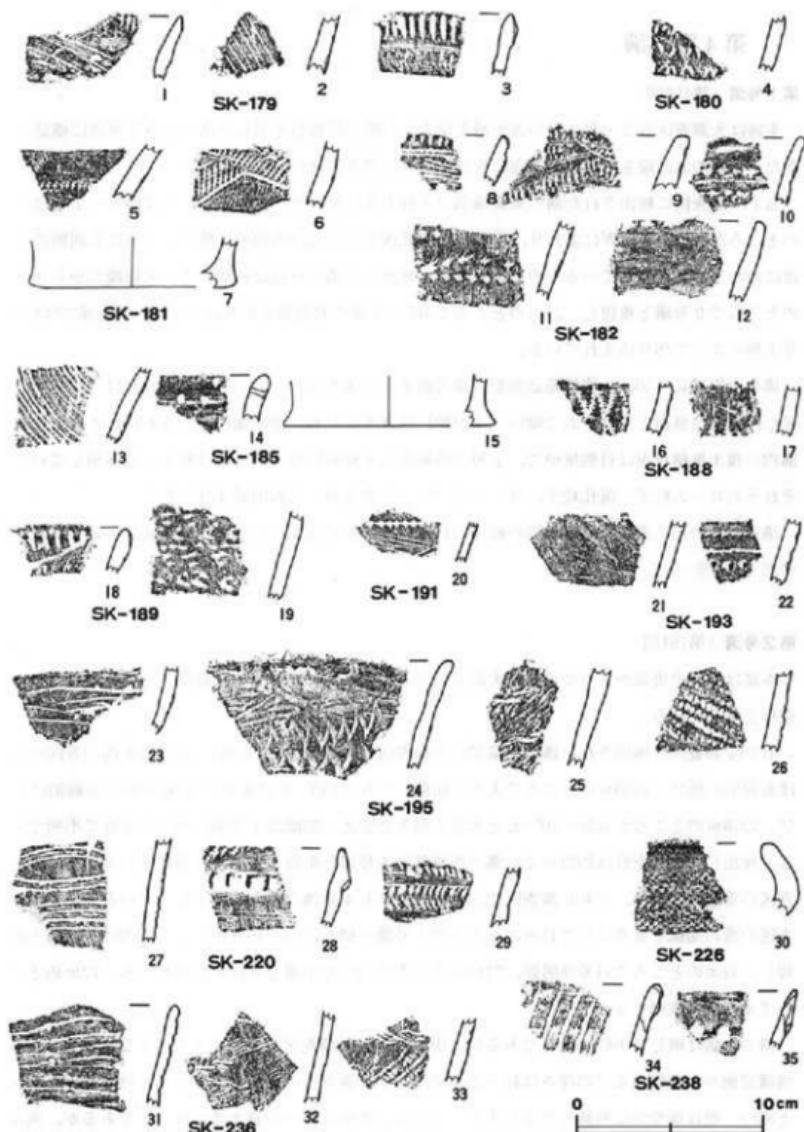
昭和35年 土器出発地 考古学



第147図 土壤出土土器拓影図 (7)



第148図 土壤出土土器拓影図 (8)



第149図 土壤出土土器拓影図 (9)

第4節 溝

第1号溝（第150図）

本跡は大調査区B2・B3区の表土層を除去した際、暗褐色を呈した落ち込みを明確に確認できた。遺跡の北西端を西北西の方向に延び、さらに調査区域外へも延びている。

B3 io 調査区に検出された溝の東側端部の主軸方向はN-80°Eを指し、ほぼ西方へ7mほどのところからN-75°Wに変わり、そこから西北西方向へほぼ直線的に延び、さらに北西側の谷津に向かって落ちこんでいるものと思われる。検出した溝の全長は約39mで、東側端部から13mのところで2号溝と重複し、29mのところで105号土壠の北側部を切り込み、エリア端部では113号土壠によって切り込まれている。

溝の上幅は40~60cm、遺認面から溝底面までの深さは12~30cmである。断面は「V」形を呈し、底面・壁面ともロームで硬い。平坦地に位置するため、溝底面のレベル差はほとんどない。溝内の覆土堆積状況は自然堆積で、上層は暗褐色土や灰暗褐色土、下層は褐色土が堆積している。それぞれローム粒子、炭化粒子、ローム小ブロックを含み、比較的綺麗である。

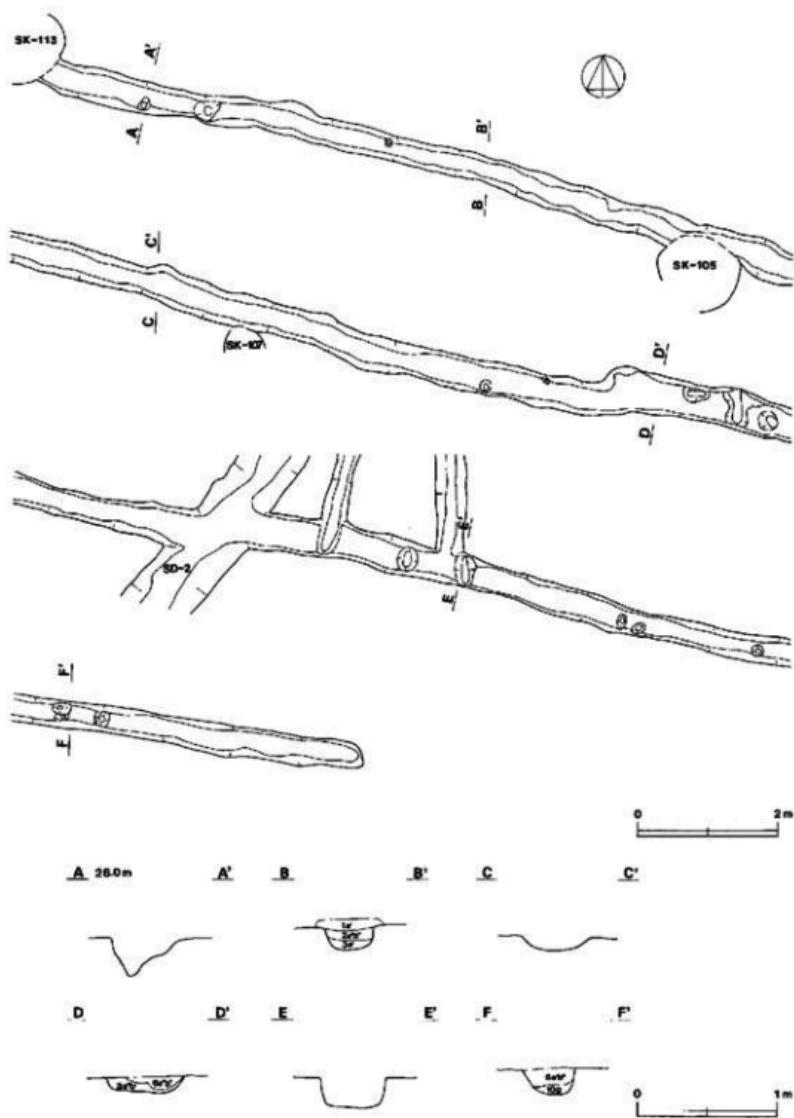
溝内からの出土遺物は縄文土器の無片が12点覆土中から出土しただけで、本跡に関連する遺物の出土はなかった。

第2号溝（第151図）

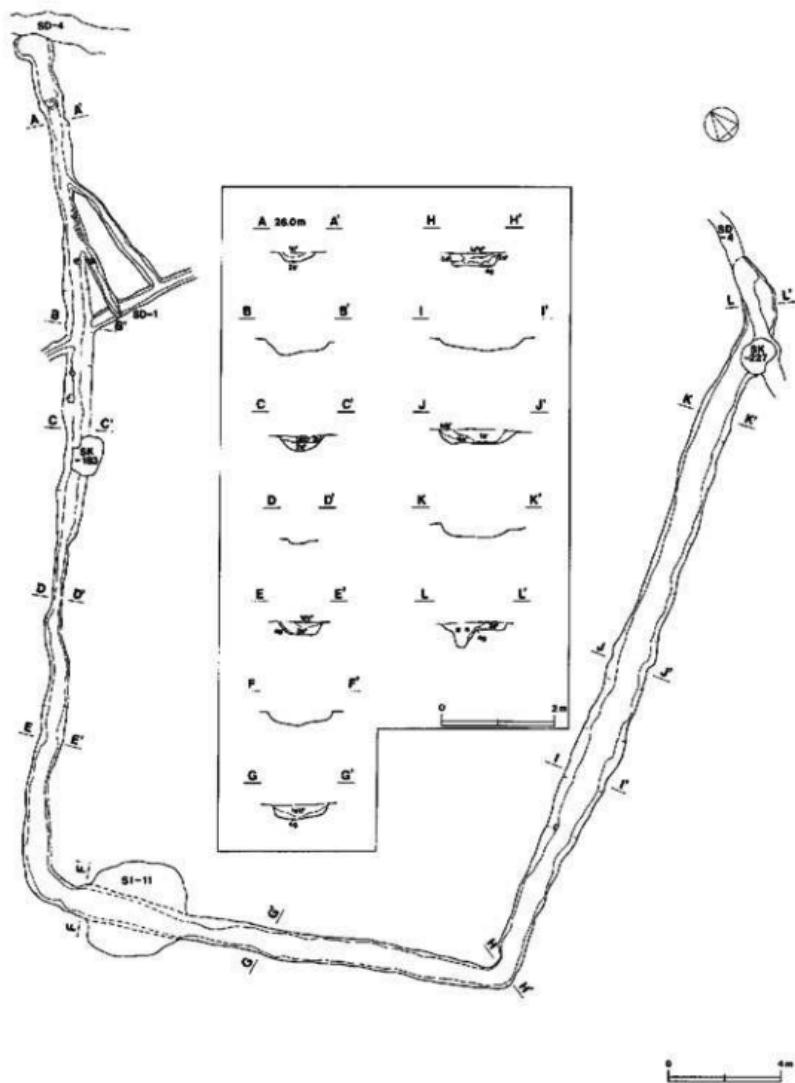
本跡は遺跡中央部からやや西側の大調査区B3・C3区に1号溝と同様に確認され、「コ」の字形を呈している。

B3 f₁ 調査区に検出された溝の北端部の主軸方向はN-210°Eを指し、溝は南南西の方向へほぼ直線的に延び、約30mのところで大きく屈曲してN-140°Eに変わり南東方向へ直線的に延び、72.8mのところからN-10°Eと大きく向きを変え、端部は4号溝に切り込まれて不明である。検出した溝の全長は約75mで、溝の両端部は4号溝と重複しており、溝底面の差はB3 f₁ 調査区の重複部で14cm、C4 b₁ 調査区で28cm本跡よりも4号溝の底面が低くなっている。B3 f₁ 調査区の溝の端部を基点にして11mのところで1号溝を切り込み、15mのところで183号土壠と重複し、32mのところで11号住居跡、71mのところで227号土壠をそれぞれ切り込み、72mのところで4号溝と重複する。

溝の上幅は概して100cm前後であるが、南側のC3 ds 調査区では150cmと広くなっている。遺認面から溝底面までの深さは18~25cmで、C4 b₁ 調査区の4号溝と重複する付近だけが44cmと深い。壁は緩やかに外傾して立ち上がりっている。底面はローム質土ではなく半坦であるが、両端部近くは圓状を呈している。平坦地に位置するため、溝底面のレベル差は20cmほどで、ほぼ水平



第150図 第1号溝実測図



第151図 第2号溝実測図

である。溝内の覆土堆積状況は自然堆積で、上層は緑よりのない暗褐色土、底面付近や壁際は粘性のある褐色土が堆積している。

溝内からの出土遺物は純文土器片が105点、土師質の澄明皿片が1点、覆土中から出土しただけである。

出土遺物（第152図）

1は土師質の澄明皿片である。橙色で砂粒を含み、焼成は良好である。



第152図 第2号溝出土遺物実測図

第3号溝（第153図）

本跡は大調査区B 3・C 3区に「L」字形に確認され、「コ」の字形を呈する2号溝の内側に位置している。

検出した溝の全長は16.4mで、B 3 j. 調査区に検出された溝の北端部の主軸方向はN-230°-Eを指し、南西方向へ直線的に延び、6.8mぐらいのところから南東方向へほぼ直角に屈曲し、さらに直線的に延びている。

溝の上幅は30~35cm、遺構確認面から溝底面までの深さは10~26cmである。断面は「一」形を呈し、壁・底面ともソフトロームである。底面のレベル差は15cmほどで、溝底面はほとんど水平である。また、溝底面に小ビットが5か所検出されたが、樹木の支根跡と思われる。溝内の覆土堆積状況は自然堆積で、上層は緑よりのない暗褐色土、下層は粘性のある褐色土が堆積している。

溝内からの遺物の出土はなかった。

第4号溝（第154図）

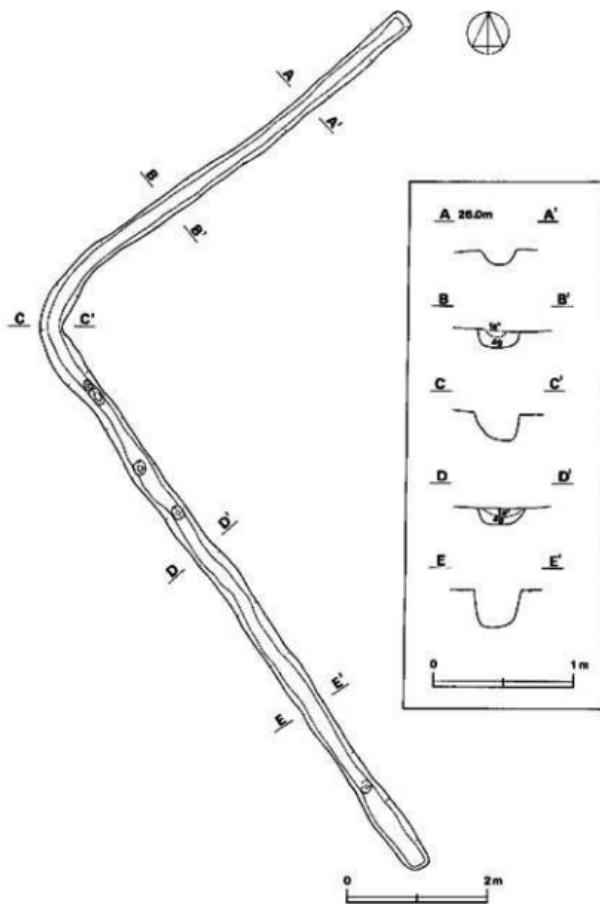
本跡は大調査区B 3・B 4・C 4区に逆「S」字形に確認され、遺跡のはば中央に位置している。

B 3 f. 調査区に検出された溝の北西端部の主軸方向はN-137°-Eを指し、南東方向へやや彎曲しながら延び、端部から25mのところからは南へ蛇行しながら延び、46mのところで溝底の段差がわずかにみられる。さらに48mのところで向きを南東方向へ変えてほぼ直線的に延び、68mのところでN-49°-Eと大きく北東方向へ向きを変え、76mのところでN-15°-Eとほぼ北向きに変わる。検出した溝の全長は約82mで、B 3 f. 調査区の溝の端部から7.5mのところで193号土壤、11mのところで226号土壤にそれぞれ切り込まれ、25.5mのところで227号土壤を切り込み、52.5mのところで225号土壤、57mのところで230号土壤、60mのところで231号土壤、65mのところで232号土壤にそれぞれ切り込まれている。

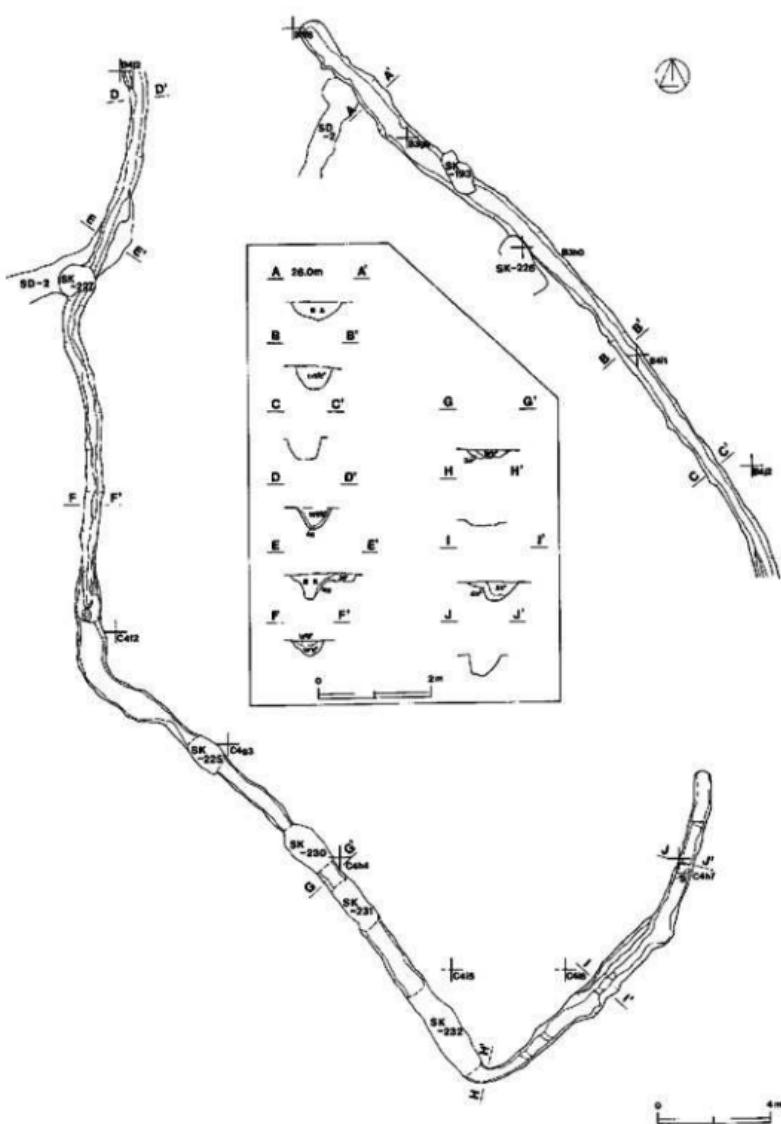
溝の上幅は45~90cm、遺構確認面から溝底面までの深さは10~38cmである。壁は全体的に緩やかに外傾して立ち上がりっている。底面は凸凹しており、溝底面のレベル差は33cmほどである。溝

内の覆土堆積状況は自然堆積で、北側部は擾乱を受けている暗褐色土、中央部と南側部は上層に暗褐色土、下層に締まりのある粘性的褐色土がそれぞれ堆積している。

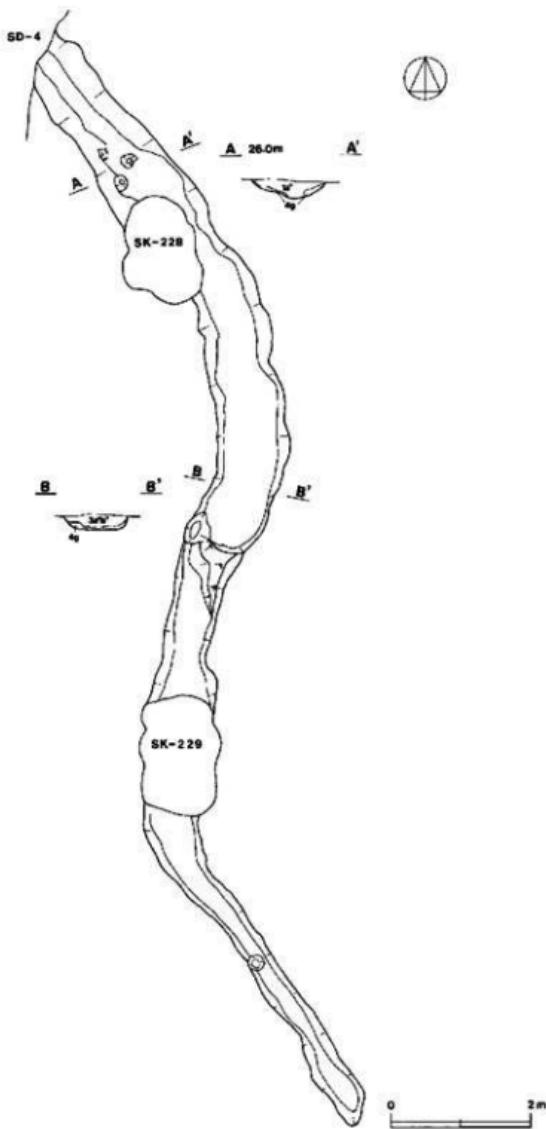
溝内からの出土遺物は縄文土器片が8点覆土巾から出土しただけで、本跡に関連する遺物の出土はなかった。



第153図 第3号溝実測図



第154図 第4号溝実測図



第155図 第5号溝実測図

第5号溝（第155図）

本跡は大調査区C 4 区に確認され、遺跡のはば中央部を蛇行しながら北から南へ延びている。

C 4 c: 調査区に検出された溝の北端部は4号溝に切り込まれて不明である。発端部の主軸方向はN-143°-Eを指し、南東方向へ直線的に延び、約5mのところで南方へ向きを変え、緩やかな蛇行を描きながら延びている。約12mのところでN-144°-Eと南東方向に再び向きを変えた後で直線的に南側の傾斜地へと延びている。検出した全長は約17mで、発端部から2.6mのところで228号土壙に切り込まれ、10.5mのところで229号土壙に切り込まれている。

溝の発端部から12mぐらいのところまでは、上幅80~108cm、遺構確認面から溝底面までの深さ20~25cmであるが、そこから南東方向へ延びている溝は極端に狭く浅くなっている。断面は北西部と南東部で「一」形、中央部が「ノ」形を呈し、壁・底面とも硬いロームである。溝底面のレベル差が約20cmほどであるので、これは傾斜地のため土砂が流出してしまったものと思われる。溝内の覆土堆積状況は、締まりのない暗褐色土とソフトロームを多く含む褐色土が自然堆積している。溝の南側部は、締まりのある褐色土だけの堆積である。

溝内からの出土遺物は縄文土器片5点、陶器の底部片1点が覆土中から出土しただけである。

出土遺物（第156図）

1は陶器の黒天目茶碗で、底部は削り出し高台である。高台径は4.85cmである。



第156図 第5
号溝出土遺物
実測図

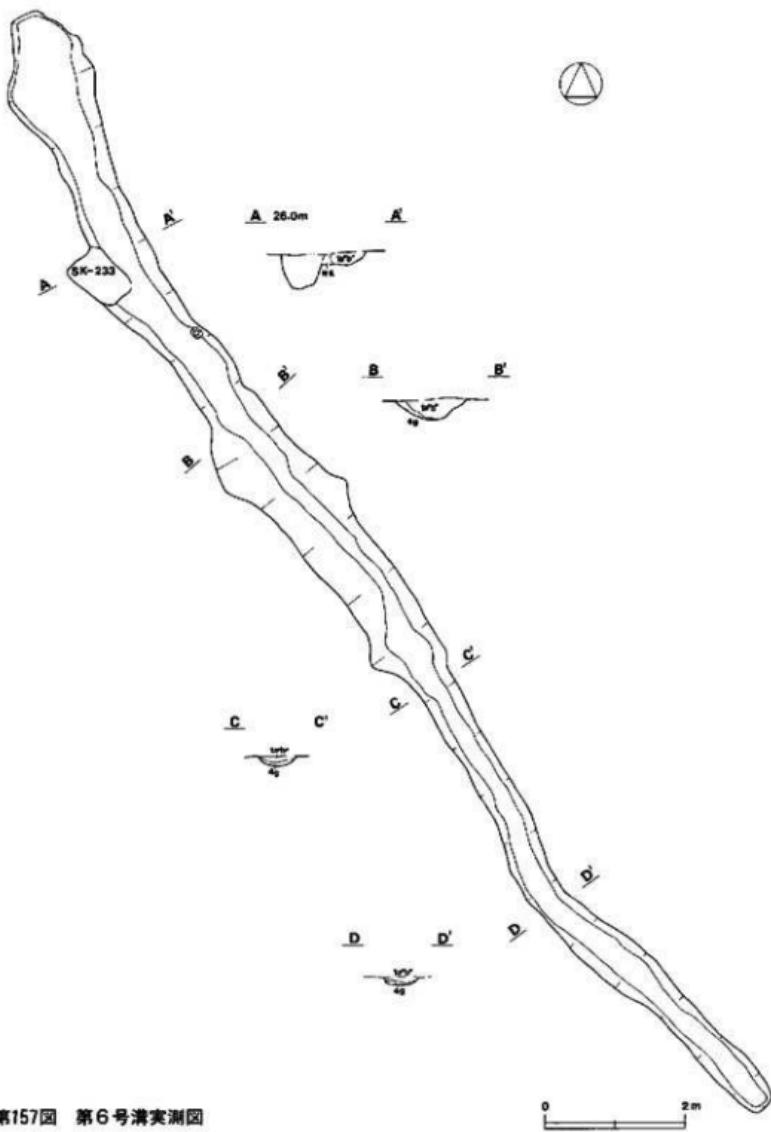
第6号溝（第157図）

本跡は大調査区B 4 + C 4 区に確認され、遺跡のはば中央部を北西から南東へ延びている。

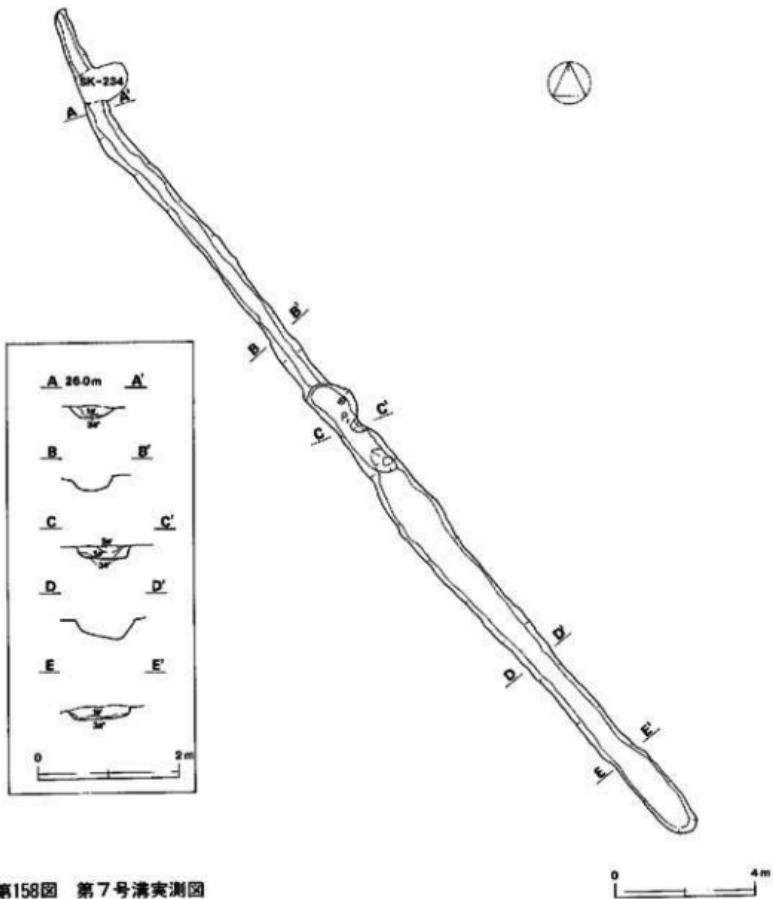
B 4 j: 調査区に検出された溝の北西端部の主軸方向はN-158°-Eを指し、南南東方へ延びている。4.5mのところからN-141°-Eと南東方に向きを変え、6.5mのところから12mのところまでは溝の上端が膨らみ、底面が細くなっている。15.7mまでは直線的に延び、さらにそこからN-133°-Eと向きを変え南東方へ延びている。検出した溝の全長は約20mで、北西端部から約3.6mのところで233号土壙を切り込んでいる。

溝の上幅は北西部で70cm、中央部で100cm、南東部で50cmほどである。遺構確認面から溝底面までの深さは12~28cmで、南東部がやや浅くなっている。断面は北西部で「一」形、他は「ノ」形を呈し、壁・底面ともソフトロームでやや軟弱である。溝底面のレベル差は25cmで、凸凹がみられる。溝内の覆土堆積状況は自然堆積で、上層は締まりのない暗褐色土、下層は締まりのある粘性の褐色土が堆積している。

溝内からの遺物の出土はなかった。



第157図 第6号溝実測図



第158図 第7号溝実測図

第7号溝（第158図）

本跡は大調査区C 5区に確認されたもので、遺跡中央部からやや南東側に位置し、6号溝の南東端部から8mの距離をおいて直線的に南東方向へ延びている。

C3e) 調査区に検出された溝の北西端部の主軸方向はN-158°Eを指し、北西端部から3.8mのところでN-140°Eに変わり、そこから南東方向へ直線的に延びている。検出した溝の全長は約30mで、北西端部から1.6mのところで23cmほど底面が低くなる。2mのところで234号土壤

に切り込まれ、13.5mぐらいのところに存在するP₁は、溝底面からの深さ20cm、底面の長径1.05m、短径0.7mの楕円形を呈する土壙と思われる。さらに、溝は南側の傾斜地に向かって延びている。

溝の上幅は北西部で60~65cm、中央部で100~138cm、南東部で80~100cmほどで、遺構確認面から溝底面までの深さは17~26cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、底面は南東部が平坦、他は直状を呈している。壁・底面ともやや軟弱である。溝内の覆土堆積状況は自然堆積で、上層はローム粒子が多く含む暗褐色土、下層は粘性のある褐色土が堆積している。

溝内からの出土遺物は縄文土器の細片が3点覆土中から出土しただけで、本跡に関連する遺物の出土はなかった。

第5節 堀

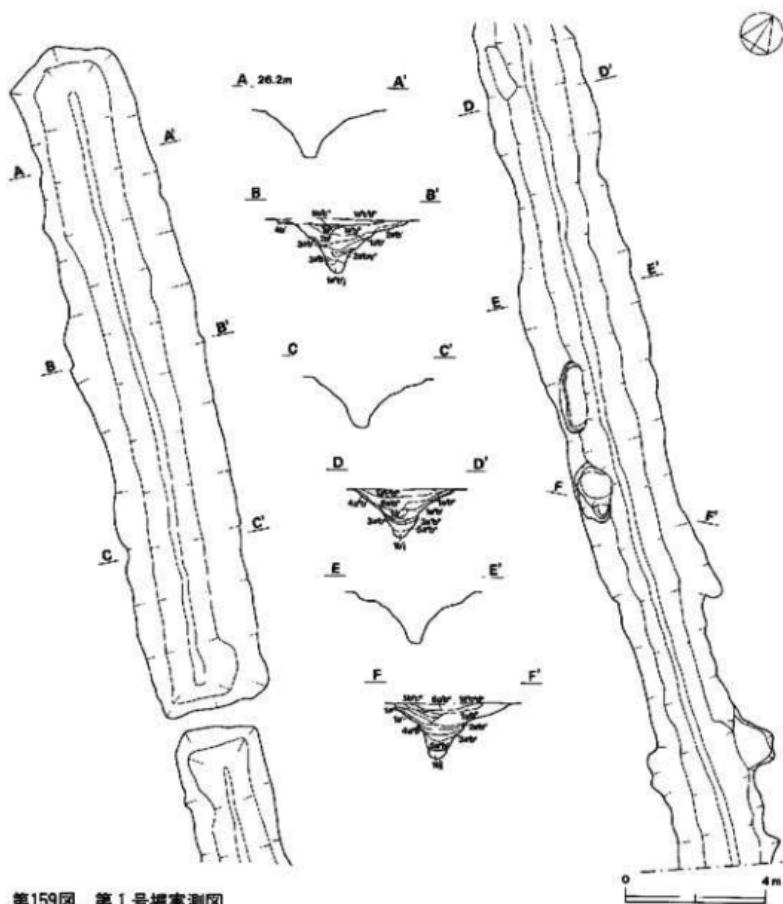
第1号堀（第159図）

本跡は遺跡東側の大調査区B5・B6・C6区に確認され、断面が薬研状の空堀で、当遺跡の遺構群の最東端に位置する。

B5区調査区内に検出された堀の北西端部の主軸方向はN-134°-Eを指し、そこから南東方向へ直線的に延びている。検出した堀の全長は48mで、堀の北西端部から19mのところで堀の底面が立ち上がり、虎口と考えられる幅60cmの堀の切れ目がある。

堀の上幅は2.2~3.7m、底面幅は0.2~0.25m、遺構確認面から底面までの深さは1.3~1.55mである。虎口から北西側が幅広くやや浅い。壁・底面とともにハードロームで硬く、底面はほぼ平坦である。南西壁は底面から約60度の角度で立ち上がり、中段からは25~38度の緩い傾斜となって肩部へ立ち上がっている。堀の南東端付近は底面から中段への立ち上がりが急傾斜をなしている。北東壁は底面から約70度の角度で立ち上がり、外反しながら中段に至っている。中段からは20~30度の緩い傾斜となって肩部へ立ち上がっている。南西壁の北西端部から22m、25m、34m、37mのところに擾乱を受けたピットが存在しているが、それぞれ板根跡と思われる。底面のレベル差は46cmほどであるが、部分的に高低差がある。堀の覆土堆積状況は自然堆積で、8層ないし13層に区分され、ローム粒子、ローム小ブロックを含む暗褐色土や褐色土が堆積している。また、極暗褐色土が一層だけみられるが、いずれも南西側からの投げ込みであり、土星が存在していたことがうかがえる。さらに、底面付近の暗褐色土中に黒褐色の腐植土が少量含まれている。

遺物は土師質の小皿・内耳土器・鉢、陶器、石器がいずれも覆土中から出土した。その他に、本跡には関連のない縄文土器片が10点ほど出土した。



第159図 第1号墳実測図

出土遺物（第160図）

1は浅鉢形土器で、外面に印花文が施されている。にぶい橙色で、胎土に砂粒・雲母・長石を含んでいる。器高は4.5cmである。2～6は上節皿で、透明皿として使われたものと思われる。2はほぼ完形品で、虎口北側の覆土中から出土した。口径7.4cm、器高2.6cmの粗製上器で、底部は回転糸切りで凸凹している。口縁内側に燈芯痕が残っている。3・4・6の底部は回転糸切りで、内・外面にススが付着している。5は器高1.8cmで、他のものと同様、底部は回転糸切り

である。7・8は内耳土器の口縁部で、口縁端部は平坦である。内耳鍋と思われる。

陶器は鎌倉時代以降のものが出土している。

9は黒天目茶碗で、鉄釉がかけられている。底部は削り出し高台であるが浅い。高台径は4.6cmである。10は瀬戸の浅鉢で、外面は灰釉がかけられている。11はおろし器と思われ、底部は回転糸切りで、内面は格子目状の割みが施されている。灰黄色である。

石器としては第207図23の砥石だけで、南東側の覆土中から出土した。



第160図 第1号堀出土遺物実測図

第6節 遺構外出土の土器

表面採集やグリッド発掘中に出土した遺物は、前期縄文土器とごく少量の石器である。縄文土器は細片が多く、しかも量的に少ない。本遺跡における縄文土器の主体をなしているものは、縄文時代前期後葉の浮島式に属するものである。土器の分類は文様によって下記のとおり分けた。石器についてはまとめの項で述べることにする。

第1群土器 横糸文を有する土器である。（第161図1）

1は当遺跡で、横糸文のみを有する唯一の土器片である。

第2群土器 平行沈線文を有する土器群である。（第161図2～25）

2～15は無地に平行沈線文が横位、縦位、斜位に施文されたもので、13は曲線化し、14は山形状に、15は波状に施文されている。5・11の口辺部には指頭圧による凹凸文、6・7の口辺部には半截竹管による斜めの短い平行沈線文が施されている。16は地文に縄文を有し、沈線文を斜行させている。17～20は地文に横糸文を有し、その上に17は沈線文を格子目状に、18・19は沈線

文を木葉状に描出している。20~25は半截竹管具による有節沈線文を横位、縦位、曲線的に施している。20には滌糸の二重転がしがみられる。21の口辺部には半截竹管具による縦位の短い平行沈線文が施され、23には円形竹管文が押捺されている。

第3群土器 爪形文を有する七器群である。（第161図26~33、第162図1~3）

半截竹管具を連続的に施したものです、やや幅の狭いものと幅の広いものとがある。第161図26~33は「ハ」の字状の連続となっている。26・27の口辺部にはキザミ目が施されている。28~31には爪形文と組み合わさせて沈線が横位、斜位に施文されている。平行沈線文は間隔が密である。33は2段の爪形文の下は貝殻腹縁を押し引きして文様を描出しており、浮島田式に比定される。第162図1~3は幅の広い連続爪形文である。

第4群土器 波状貝殻文を有する七器群である。（第162図4~22）

4~22は貝殻腹縁によるシグザグ波状文が施されている。4~14はハマグリのような二枚貝、15~22はサルボウなどの鶴の貝殻を使用して、その腹縁の支点を交互に変えて文様を描出した。4は輪積模の縁に指頭圧を加えて凹凸文を施している。5は口辺部にキザミ目文を持つ。8は穿孔がみられ、二次的に利用されたものであろう。20~22は貝殻の押し引きによって文様を構成している。

第5群土器 沈線文と貝殻文を施文している土器群である。（第162図23~31）

沈線文で区画された中に貝殻腹縁のシグザグ文を充填している。23・24の口辺部にはキザミ目文、25~27の口辺部には貝殻シグザグ文が施されている。沈線は横位、斜位、曲線的に描出され、幅は8~13mmほどである。

第6群土器 いわゆる三角文を有する土器群である。（第163図1~11）

口辺から脇部にかけて方形のヘラの先端部を斜めに押しつけたり、竹管の両端を剥いで三角形状を作り出し、それを連続的に刺突して三角文を構成する。1~3は連続爪形文から発展したもの、4~11は刺突文から発展したものと考えられる。1~8は口縁部片で、口辺部にはキザミ目を持っている。

第7群土器 凹凸文を有する土器群である。（第163図12~21）

12~21はいずれも口縁部片で、連続的な指頭圧による凹凸文を施文している。20・21は口縁に沿って平行沈線文が施され、その間隔に凹凸文を備位に押捺している。なお、14・20・21の口辺部にはキザミ目文が施されている。

第8群土器 いわゆる浮線文を有する土器である。（第163図22）

22は隆線文を横位、斜位に配し、隆起線文にはキザミが施されている。キザミ目は逆方向から刻んでいる。地文は縦文である。

第9群土器 結節繩文を有する上器群である。（第163図23～30）

23～30には結節繩文が施文され、23・26・29は斜位に、他は横位に押捺している。23・24の口縁部にはキザミ目文を有している。

第10群土器 繩文を施文している土器群である。（第163図31～34）

31・32は繩文原体の直接押捺で、33には斜繩文、34には羽状繩文が施文されている。

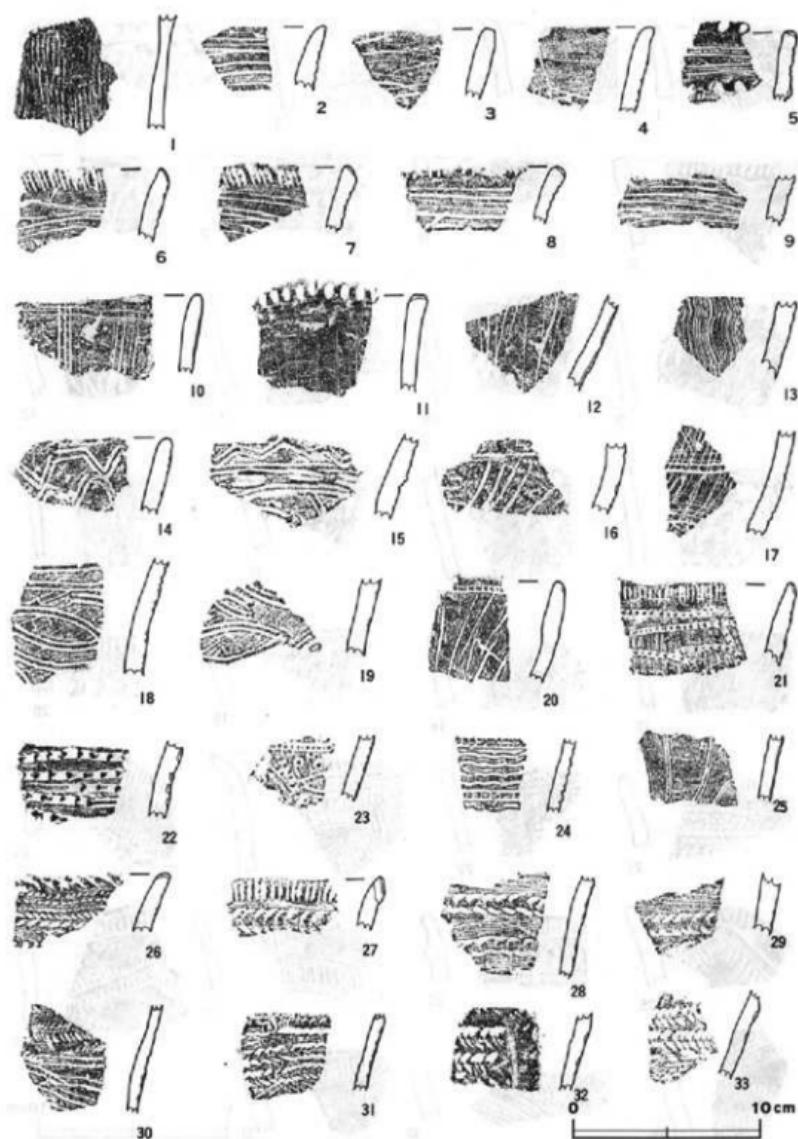
第11群土器 無文の粗製上器を一括する。（第164図1～5）

1～5はいずれも口縁部片である。無文で輪積痕を残している。4は輪積痕の上に刺突文が施されている。

第12群土器 称名寺式に比定される土器群である。（第164図6～8）

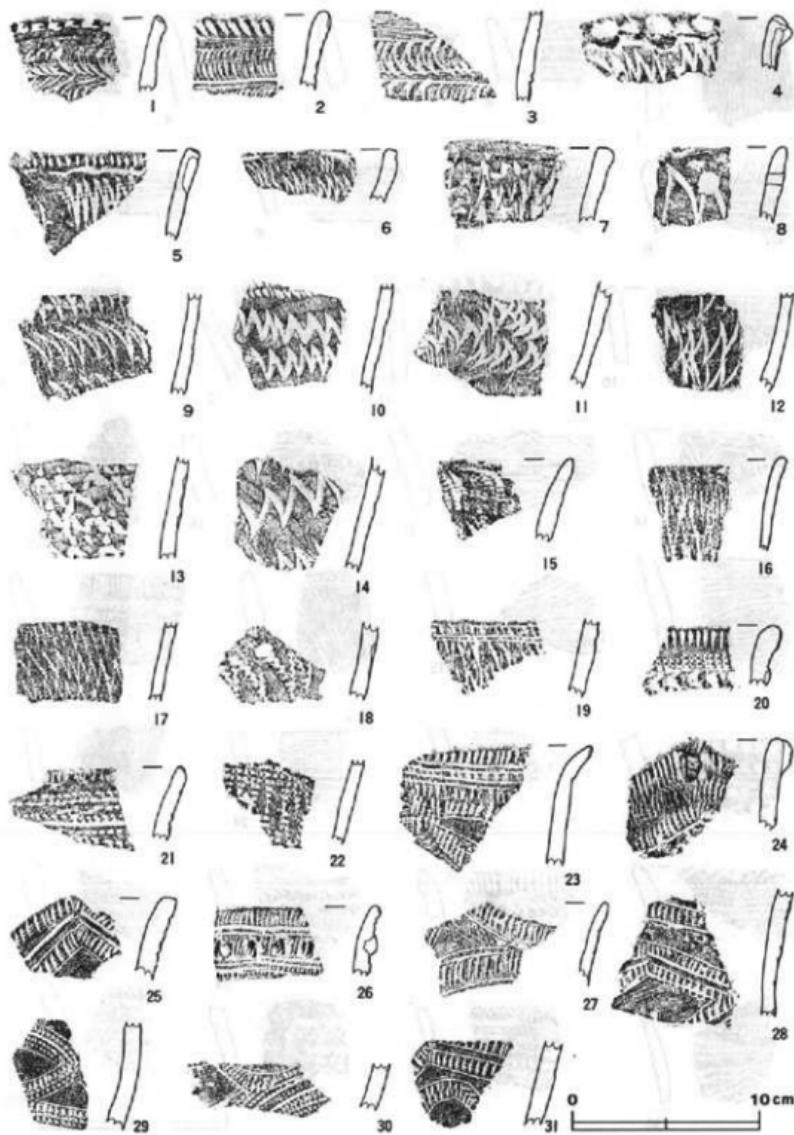
6は沈線文が施され、沈線文間に列点文がみられる。深鉢形土器の胴部である。7・8は口縁部片で、器面には沈線区向による磨り消し繩文が施文されている。

なお、第164図9～16は底部で、ほとんど平底を呈している。



第161図 造構外出土土器拓影図 (1)

1. 四周跳线土器出片断面。照201号

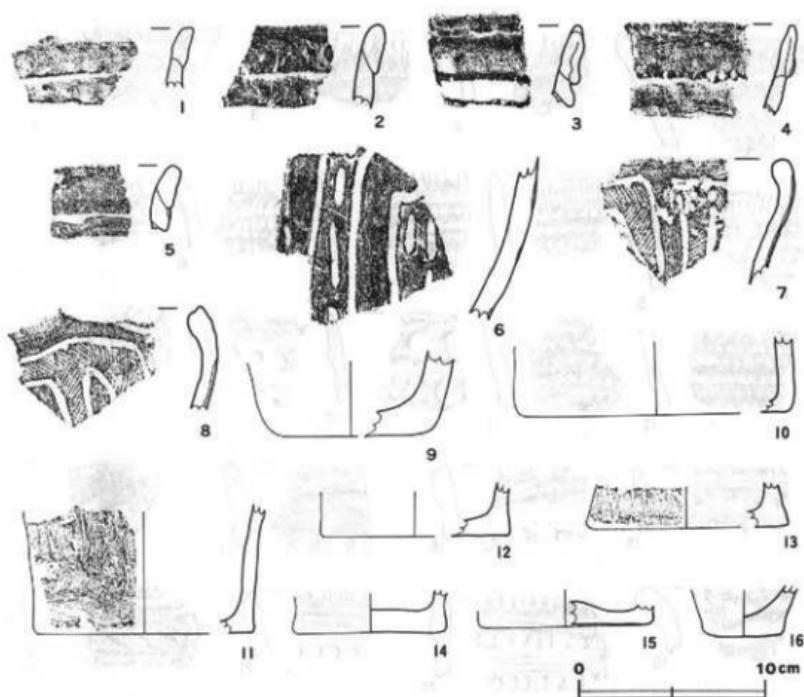


第162図 造構外出土土器拓影図 (2)

奈良県御所市大字大字
奈良県御所市大字大字



第163図 造構外出土土器拓影図 (3)



第164図 造構外出土土器拓影図 (4)

1. 田原本西土出長野系 陶器

第5章 まとめ

第1節 仲根台B遺跡

1 遺構

(1) 積穴住居跡について

当遺跡で検出された積穴住居跡は17軒で、その内訳は、縄文時代に属するものが15軒、古墳時代に属するものが1軒。歴史時代（占墳時代鬼高期以降で、時期不明）に属するものが1軒である。

個々の内容については、次表のとおりである。

住居跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 格		茅・カマド	柱穴数	覆土	出土遺物	時 期	備 考
				長径×短径	壁高						
1	A1-hs-hs-hs hs		円形	5.0		地床	8		縄文土器片 81点	縄文時代後期 (昭之内)	SI-2-4 と重複
2	A1-hs-hs-hs hs-hs-hs		長円形	6.3×5.6		地床	12		縄文土器片 5点		SI-1と重複 柄鏡形住居
3	A1-hs-hs-hs hs-hs-hs		円形	7.14×6.05	5~8	地床	30		縄文土器片 1110点 上質品	縄文時代後期 (昭之内)	SI-7-14 と重複
4	A1-hs-hs-hs hs		円形	4.3		地床	7		縄文土器片 76点	縄文時代後期 (加曾利B)	SI-1 と重複
5	B1-hs-hs-hs hs-hs-hs	N 22°W	方形	2.66×2.55	30	地床	11	N	土器器(底坏) 古墳時代 十五		SD-1 と重複
6	A1-hs-hs A2-hs-hs		円形	6.0×5.8		地床	11		縄文土器片 673点	縄文時代後期 (昭之内)	SI-8-10 と重複
7	A1-hs-hs-hs hs		長円形	4.8×4.4	10~25	地床	18	N	縄文土器片 2840点 石器、石斧、石刀	縄文時代後期	SI-3と重複 柄鏡形住居
8	A1-hs-hs A2-hs-hs		長円形	6.5×6.0		地床	10		縄文土器片 44点	縄文時代後期	SI-5-10 と重複
9	A2-hs-hs-hs hs	N 12°W	椭円形	5.2×4.2		地床	16		縄文土器片 5点	縄文時代後期	SI-10-12 と重複
10	A1-hs A2-hs		長円形	3.3×3.0	10	地床	16	N	縄文土器片 1125点	縄文時代中期 (加曾利E)	SI-6-8-9 と重複
11	A2-hs-hs		長円形	3.7×3.4	7	土器器	11	N	縄文土器片 9点	縄文時代中期 木	SI-12 と重複
12	A2-hs-hs-hs hs		長円形	5.7×5.2	12	地床炉	22	N	縄文土器片 677点 石器、竹	縄文時代中期 (加曾利E)	SI-9-11-15と重複
13											欠番
14	A1-hs-hs-hs hs		長円形	4.0×3.5	6~15	地床	7	N	縄文土器片 483点	縄文時代後期	SI-3-7 と重複
15	A2-hs-hs-hs hs		円形	4.5		地床	17		縄文土器片 34点	縄文時代後期 (昭之内)	SI-12 と重複
16	A2-f1-f2-f3 hs	N-35°W	壠円形	5.5×4.5	10~30	地床炉	27	N	縄文土器片 2161点	縄文時代後期 木	SK-114, 119と重複 柄鏡形住居
17	A1-f1-f2-f3		円形	4.5	10~30	土器器	9	N	縄文土器片 175点	縄文時代中期 (加曾利E)	SK-119 と重複 出入口
18	B2-cs-cs	N-65°E	椭方形	3.0×2.5	10~15	カマド	10	N	土器器片 1点 須恵器片 1点	歴史時代	SK-123 と重複

○縄文時代の堅穴住居跡

17軒の住居跡の内、5号住居跡と18号住居跡を除いた1・4・6・12・14～17号住居跡が縄文時代に属するものである。

〈平面形〉 縄文時代に属する住居跡群の平面形には、円形を基調とするものと楕円形を基調とするものがある。さらに円形を基調とするものの中には、円形のものとやや横円がかった長円形のものとに細分され、その内訳は、次のとおりである。

平面形	{	円形	··· 1・3・4・6・15・17号住居跡
		長円形	··· 2・7・8・10・11・12・14号住居跡
		楕円形	··· 9・16号住居跡

このように、当遺跡の縄文時代の住居跡は、円形状を呈するものが大半である。

また、2・7・16号住居跡の3軒は、いわゆる柄鏡形住居跡である。茨城県下では柄鏡形住居跡の調査例は少なかったが、最近の発掘調査でその類例が増加しつつある。当遺跡から北西へ350mほどの同一台地上に位置する「廻り地A遺跡」からも4軒の柄鏡形住居跡が検出されており、これらの7軒を時期的にみると称名寺式期2軒、堀之内I式期5軒で、最盛期は縄文時代後期前半ということができよう。当遺跡で検出された3軒の柄鏡形住居跡は、柄部を除いた主体部が長径4.8～6.3mの長円形あるいは楕円形を呈する。「廻り地A遺跡」で検出された4軒の柄鏡形住居跡も当遺跡のものと規模や形態に大差はない。柱穴は壁に沿って巡る壁柱穴で、炉はほぼ中央に位置し、地床炉である。これは、当遺跡の縄文時代後期前半に比定される通常の住居跡と比べて異なるものではない。柄部は短いものが多い。南関東では中期後半が最盛期で、柄部が細長いのに対し、千葉県や本県では異なる在り方を示している。本集落跡において柄鏡形住居跡の具体的な機能を示す手懸りを得ることはできなかったが、ほぼ同時期の住居跡と比較して、占有場所、形態、規模等何ら異なることがないので、柄鏡形住居は特殊な住居ではなく一般的な住居であったと考えられる。

〈規模〉 住居跡の平面プランを明確に把握できるものはごく少数のため、推定で計測したものも含めて検討することにする。

まず、住居跡の長径規模の違いを、単純に50cmごとに分類してみると、次のようになる。

- a類 3.01～3.50m···10号住居跡
- b類 3.51～4.00m···11・14号住居跡
- c類 4.01～4.50m···4・15・17号住居跡
- d類 4.51～5.00m···1・7号住居跡
- e類 5.01～5.50m···9・16号住居跡
- f類 5.51～6.00m···6・12号住居跡

g類 6.01~6.50m………2・8号住居跡

h類 6.51~7.00m………なし

i類 7.01~7.50m………3号住居跡

これらの分類に基づいて形態を考えてみると、楕円形を呈するものはe類に属し、円形を呈するものはc・d・f・i類に属し、特にi類は最大の規模を呈するものである。長円形を呈するものはa・b・d・f・g類に属し、特にa・b類としたものは、住居跡群の中では小規模な住居跡が含まれる。したがって、楕円形を呈する住居跡は長径5.2mと5.5mで、ばらつきは認められない。円形を呈する住居跡は長径4.3m~7.14m、長円形を呈する住居跡は長径3.3m~6.5mとばらつきが認められる。

〈柱穴〉 柱穴と考えられるピット数は7~30本とさまざまであり、配置も一定の規則性は認められない。以下、柱穴の数とその配置状況を中心に分類すると、次のとおりである。

I類 柱穴と考えられるピットが10本以下のもの。

Ia類 壁下に柱穴が巡り、その間隔が粗いもの………1・14号住居跡

Ib類 壁下に柱穴が巡り、その間隔がやや密なもの…8号住居跡

Ic類 壁から10~20cm内側に離れて巡るもの………4号住居跡

17号住居跡は柱穴が9本であるが、 $\frac{1}{3}$ が削除されているので従来は15本ぐらいの柱穴を有するものと考えられる。

II類 柱穴と考えられるピットが11~15本のもの。

IIa類 壁に沿って柱穴が巡り、その間隔が粗いもの………2・6号住居跡

IIb類 壁に沿って柱穴が巡り、その間隔がやや密なもの…11号住居跡

III類 柱穴と考えられるピットが16~20本のもの。

IIIa類 壁下に柱穴が巡り、その間隔が最長1mを超えるもの………9号住居跡

IIIb類 壁下に柱穴が巡り、その間隔が最長1m以内のもの………7・10号住居跡

IIIc類 壁際と内側に二重に柱穴が巡るもの………15号住居跡

IV類 柱穴と考えられるピットが21本以上のもの。

IVa類 壁下に柱穴が巡り、その間隔が密なもの………16号住居跡

IVb類 壁下と内側に二重に柱穴が巡るもの………3・12号住居跡

住居跡の平面形と柱穴の配置との関連を考えると、楕円形を呈する住居跡はIIIa類・IVa類、円形を呈する住居跡はIa類・Ic類・IIa類・IIIc類、長円形を呈する住居跡はIa類・Ib類・IIa類・IIb類・IIIb類・IVb類となり、同一性はみられない。

〈炉〉 炉は壁穴住居跡という限られた空間内での人間活動を象徴する主要な場所とも考えられ、その構造や作られた位置は、住居の平面形や柱穴の配置とも大きな係わりを持つものと思われる。

・構造

A類 住居の床面を掘りくぼめた地床がで、何らの施設も伴わない。

A I類 形が円形を呈する。

A II類 形が梢円形を呈する。

B類 A類とした地床炉と単体土器埋設炉を組み合せた複式がである。

B I類 地床炉の形が円形を呈する。

・位置

a類 住居跡のはば中央に位置するもの。

b類 住居跡の中央からややずれるもの。

炉の分類

A類 (地床炉) — A I a …… 1・7・16号住居跡

A I b …… 6・8号住居跡

A II a …… 3・4・15号住居跡

A II b …… 2・9・10・12・14号住居跡

B類 (複式が) — B I a …… 11号住居跡

B I b …… 17号住居跡

炉の構造と住居跡内におけるがの位置とを分類してみたが、構造からみると地床炉が半倒的に多く、他は土器埋設を伴う複式がが2軒存在するのみである。また、円形を呈するものと梢円形を呈するものがほぼ半々である。位置をみると、やはりはば中央に位置するものと中央からややずれているものがほぼ半々であり、当遺跡の住居跡群のがの形態や位置については特徴的なことは見出せなかった。

〈時期〉 時期決定に備する良好な資料が各住居跡から得られたわけではないので、出土遺物や住居跡の形態等の比較により、推定して区分してみる。

A群 繩文時代中期後半…… 10・11・12・17号住居跡

B群 繩文時代後期前半…… 2・7・16号住居跡 (柄鏡形住居)

C群 繩文時代後期前半…… 1・3・6・8・9・14・15号住居跡

D群 繩文時代後期中葉…… 4号住居跡

〈建て替え・拡張〉 柱穴の配列の仕方や炉の在り方から、建て替えあるいは拡張が行われたと思われるものが4例ある。

・3号住居跡 柱穴と考えられるピットがおおむね二重に巡っており、同心円状に拡張されたものと思われる。

・12号住居跡 がが2か所に存在し、柱穴と考えられるピットがおおむね二重に巡っており、

建て替え又は拡張が行われたと思われる。

- ・15号住居跡 柱穴と考えられるビットがおおむね二重に巡っており、同心円状に拡張されたものと思われる。
- ・16号住居跡 灰が2か所に存在し、柱穴と考えられるビットの数や配列から拡張が行われたものと思われる。

当遺跡における縄文時代の住居跡群は、中期後半の加曾利E式期から後期中葉の加曾利B式期までのもので、「廻り地A遺跡」の住居跡群とはほぼ同時期に営まれたものと言えよう。当遺跡の住居跡群をまとめてみると、平面形は円形状（長円形も含む）を呈し、規模は4～6mで、ほぼ中央に炉跡、実際に比較的多くの柱穴をそれぞれ有するものが主体を成している。また、調査区域内に検出された縄文時代の住居跡の時間的変遷を考えた場合、その出土土器などから判断して、先に示したA群からB群、C群、そしてD群へと変遷していったものと考えられる。

○その他の堅穴住居跡

古墳時代和泉期の5号住居跡と歴史時代（古墳時代鬼高期以降で、時期不明）の18号住居跡が検出された。5号住居跡は遺跡の南西部に位置し、壁や床面の遺存状態は良好であった。長軸7.66m、短軸7.55mのはば方形を呈する大形住居跡である。主柱穴は4本で、いずれも床面からの深さが58cm以上と深く、住居跡の軸線に対称に配置され、4本を結ぶ形は正方形に近い。がは住居内の床面を掘りくぼめた地床炉で、住居跡の中央から北西側に偏り、しかも長軸線上からもやや離れている。壁溝は全周しており、その断面は浅い「U」字形を呈するものであるが、その機能を示す痕跡は見当らなかった。18号住居跡は遺跡の南東部の緩やかな傾斜地に位置し、長軸3m、短軸2.5mの隅丸長方形を呈する小規模な住居跡である。柱穴と壁溝等の施設はなく、カマドは北東壁の南側に設置されている。しかし、遺存状態は不良で、内容については不明な点が多い。

(2) 上塙について

当遺跡で検出された土塙は116基である。これらを地形との関連でみると、遺跡の西側と北西側にあたる台地の尾根上に最も多く分布し、遺跡の東側と南側にあたる傾斜地にも散在している。これらの上塙の特徴などを考えるために、形態の分類を中心にして順次まとめていくことにする。

土塙を分類するにあたり、基準となる要素として、土塙の平面形、断面形、規模、ビットの有無、出土遺物、覆土の堆積状況などがあげられる。これらの諸要素を組み合わせて分類することにより、土塙の特徴や機能などの一端が明らかになってくるものと考えられる。ここでは十分でないが、これらの諸要素のうちの平面形、断面形、規模（長径・長軸と深さ）に重点を置き、分類してみた。

平面形

- A 円形（不整円形も含む）
- B 傘円形（不整橢円形、長橢円形、不整長橢円形も含む）
- C 長方形（隅丸長方形も含む）
- D 台形（隅丸台形、不整隅丸台形も含む）
- E 丸円形
- F 舟形（不整舟形も含む）
- G 半円形
- H 不定形

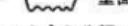
規模（長径・長軸）

- I 長径・長軸が50cm以下
- II 長径・長軸が51～100cm
- III 長径・長軸が101～150cm
- IV 長径・長軸が151～200cm
- V 長径・長軸が201cm以上

規模（深さ）

- a 壇底面までの深さが25cm以下
- b 壇底面までの深さが26～50cm
- c 壇底面までの深さが51～75cm
- d 壇底面までの深さが76～100cm
- e 壇底面までの深さが101～125cm
- f 壇底面までの深さが126cm以上

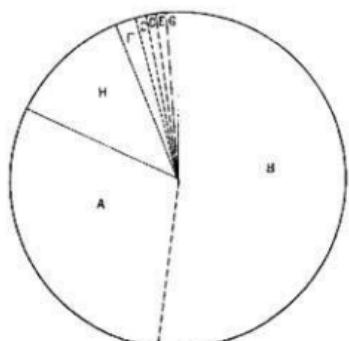
断面形状

- 1  壁面一外傾・緩斜 底面一皿状
- 2  壁面一垂直 底面一皿状
- 3  壁面一垂直 底面一平坦
- 4  壁面一外傾・緩斜 底面一平坦
- 5  袋状
- 6  V字状
- 7  壁面一外傾・緩斜 底面一凸凹

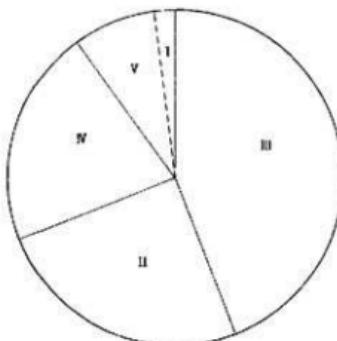
以上のような分類に基づいて、形態上の特徴を考えてみることにする。

〈平面形〉 第165図を見てみると、楕円形状を呈するB類に属するものは52%と全体の過半数を占め、次いで円形状を呈するA類に属するものが30%と、このA・B類だけで当選地の土壤群の大半を占めている。他にF類に属するものが2基、C・D・E・G類に属するものが各1基ずつ、不定形のH類に属するものが14基ある。

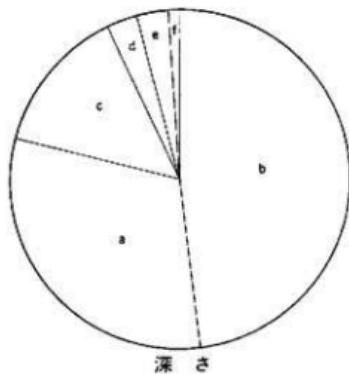
〈規模〉 まず長径・長軸を見てみると、101～150cmのIII類に属するものが44%と最も多く、次いで51～100cmのII類に属するものが25%、151～200cmのIV類に属するものが21%と続く。これからみると、長径規模の主体は100cm前後と思われる。



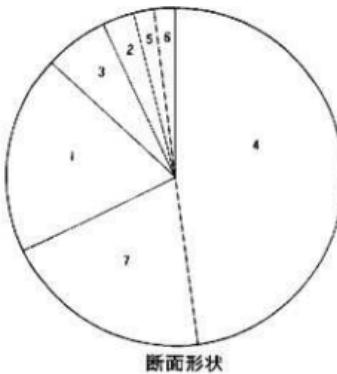
平面形



平面規模(長径)



深さ



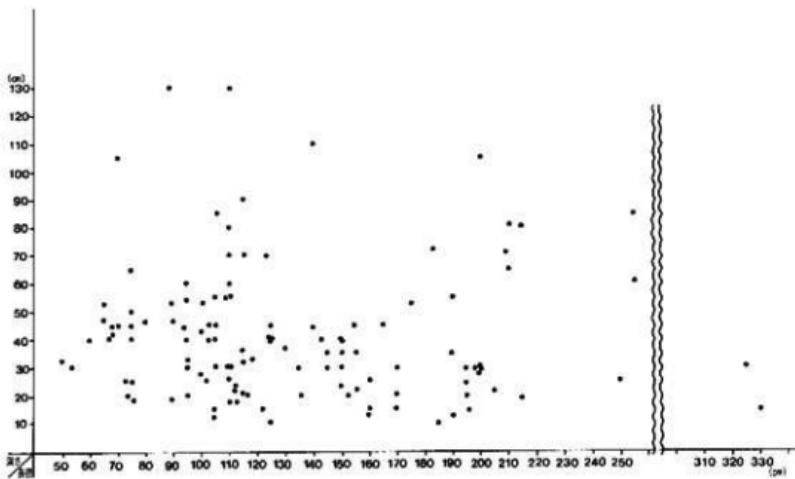
断面形状

第165図 土壌形態規模分類

構底面までの深さを見てみると、26~50cmのb類に属するものが48%と半数近くを占め、当遺跡で検出された上壤群の深さの主体を成すと考えられる。次いで25cm以下のa類に属するものが31%と続く。深さ50cmまでのものが約8割を占め、浅い上壤が多いことがうかがえる。

以上の集計結果をまとめてみると、当遺跡で検出された土壌を規模についてだけ観察すれば、長径・長軸は最小50cmを測るものから最大330cmを測るものまであるが、90~120cmを中心である。深さは最浅10cmのものから最深130cmのものまであるが、20~50cmを中心であるということができる。

〈断面形〉 断面形態を見てみると、壁面が外傾し、底面が平坦を呈する4類に属するものが48%と半数近くを占め、次いで底面が凸凹を呈する7類に属するものが続く。最も多い4類を細分

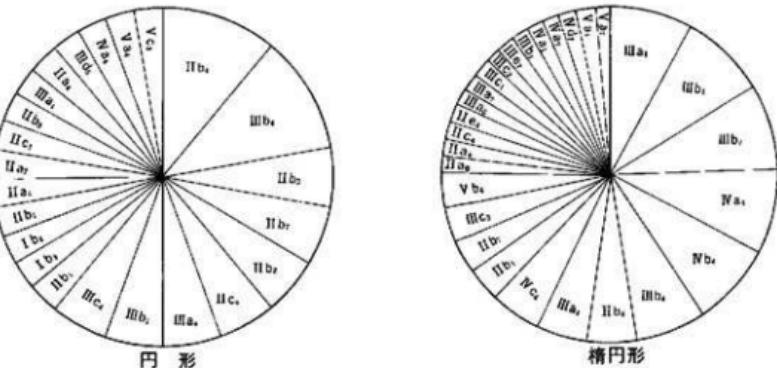


第166図 土壌の長径と深さの関係

すれば、壌底面から壁面が立ち上がる角度が $65\text{--}80^\circ$ の場合とその角度より緩やかな立ち上がりを呈するものとに区分できる。前者に属するものは25基、後者に属するものは25基と同数である。さらに底面の状態も、水平な平坦を呈するものと傾斜のある平坦を呈するものに区分すると、水平平坦を呈するものは40基、坂状平坦を呈するものは10基である。

これらをまとめてみると、壁は $50\text{--}70^\circ$ ぐらいの角度で立ち上がり、底面は水平な平坦を呈している土壌が最も多い。また、底面が凸凹しているものが多くみられる。逆に、断面形が円筒形や袋状を呈するものは少ない。

ところで、当遺跡の土壌群の平面形は前述のように凸形を呈するものと橢円形を呈するものと大別できる。この平面形と規模及び断面形を組み合わせてみると、変化に富み、特徴的なものはとらえられない。その中で、同じ形態をとるもののうち多いものを挙げると、円形を呈する上壌ではA II b₁が5基、A III b₁が4基を数える。橢円形を呈する上壌ではB III b₁・B III b₂・B IV a₁がそれぞれ5基ずつ、B II b₁・B III a₁・B III a₂・B III b₁・B IV b₁がそれぞれ4基を数える。これからみても、当遺跡の土壌群の分類による特徴的なものは見出せない。しかし、数的に表れた結果をまとめてみると、凸形あるいは橢円形を呈し、規模は長軸又は長軸90~120cm、深さ20~50cmで、しかも断面形は壁面がやや緩やかに立ち上がり、さらに底面が平坦を呈するのが主体を成しているということができる。



第167図 土壌の平面形からみた分類

次に時期について触れてみたい。当遺跡で検出された上塙のほとんどから遺物が出土している。その遺物の大半は縄文土器片で、しかも細片が多い。最も多く出土した土壙は11号で、縄文土器片398点を数える。その他にも縄文土器片を300点以上出土した土壙は、31・39・44・50号である。しかし、底面に密着した状態で出土したものではなく、覆土中からの出土である。他の土壙にも同じことがいえる。このような状況の中では時期を決定しうるものではないが、参考資料として活用できればと考え、記述した。

各土壙から出土した縄文土器片の口縁部を中心とした拓影図（第70図～第79図）をみると、住居跡からの出土土器と同様に中期後半の加曾利E III・E IV式、後期前半の称名寺式、堀之内I・II式、後期中葉の加曾利II式に比定される土器群である。その中で主体となるものは堀之内I式である。土壙が形成された時期も、大半は縄文時代中期後半から後期中葉にかけてのものと思われる。

上塙と呼ばれる遺構は一般的に貯藏穴、墓塙、落とし穴、粘土の採掘場などいずれかの機能を有していたものと考えられているが、当遺跡のものは次に記したようにこれらのいずれかを決定づける資料が得られず、判然としなかった。

まず、土壙が貯蔵穴的な機能を有していたとすれば、土壙内で貯蔵用具として使用されたであろう大形の土器が、土壙が廃棄される際にも放置されたままになっているものもあると思われるが、当遺跡ではそのような土器の出土状況はみられなかった。たとえ土器を使用せず、じかに食料を貯蔵していたとしても、穀物の種子などが残っている場合もあり得るが、その痕跡も見出せなかった。

上塙を墓壙と考えた場合は、当然埋土の際に人為的作用が働くであろうから、上塙の底面やその付近には水平的な上層の堆積や縱位的な土層の堆積がみられると思う。ところが、各土塙の覆土にはそのような堆積状況がみられない。また、墓壙に伴う遺物としては、小形土器、耳飾り、玉類などが出土する場合が多いとされているが、装飾品類の出土も皆無であるので、墓壙と判断するのは困難である。

上塙を落とし穴と考えた場合、疑問点が多い。第一に、当遺跡から検出された上塙群の深さが比較的浅い点である。多くは深さ50cm以下のもので、形状もTピット状を呈するものは皆無である。横底面の施設をみると、確かに小ピットを有する土塙が約半数を占めるが、ピットの深さも浅く、各土塙に付属する施設かどうか定かでない。また、動物などを追い込むために使用されたであろうと思われる石器類や礫などの遺物がほとんど出土していないことが第二の疑問点である。

最後に、土塙が土器の原料である粘土を採掘した跡であるのかを検討してみると、当遺跡の土塙群からはその痕跡は全くみられなかった。つまり、横底面や壁面から粘土ブロックや粘土層も検出されず、覆土中からも粘土を含む層は検出されなかった。

以上のように、土塙を形態の分類、規模、時期、出土遺物、機能などから検討してきたが、当遺跡の上塙群の性格づけを行える資料は得られなかった。今後は、住居跡との関連や遺跡の性格などを検討していく必要があるだろう。

(3) 溝について

溝は調査区域内で4条検出されたが、いずれも調査範囲が狭いため全貌を明らかにすることができなかった。したがって、時期も性格も明確にすることはできなかった。

1～3号溝はほぼ直線を呈し、4号溝は逆「L」字形を呈している。また、溝の向きは北東～南西に、北西～南東にそれぞれ斜走するものとに分けられる。溝幅は上幅50～70cmのものとそれよりやや幅の広いものとに分けられる。前者は1～3号溝、後者は4号溝である。しかし、各溝とも多少の幅の変化はある。深さは10～30cmぐらいと浅い。断面は「U」形を呈し、覆土は自然に堆積している。また、溝底面のレベル差もほとんどない。出土遺物は繩文土器片が覆土中から出土したが、流れ込んだものであり、溝に伴うと思われる遺物の出土は皆無である。

溝の性格を仮に排水溝と考えるならば、壁面や底面に有機物を含む上層の堆積があり、表土層と異なる土層もみられるものと思われる。ところが、4条の溝からはそのような点は認められないので、排水溝とは考えにくい。また、規模等から考えても居住空間域を分ける施設とは考えられない。

不明な部分が多く結論づけることはできないが、それぞれの溝は規模や形態などがほぼ同様な状態を示し、覆土の綿まりも硬くなく、溝と関連する遺物の出土がみられないことなどから、新しい時期の根切り溝的なものではないかと思われる。

2 遺 物

(1) 土器について

当遺跡から検出された土器は、大半が縄文土器で、その他はごく少量の上部器である。ここでは、その縄文土器について若干のまとめをしてみたい。

住居跡、上塙等の遺構や遺構外のグリッドから出土した縄文土器は、若干の土器片を除いて中期後半の加曾利E.III式～後期中葉の加曾利B.I式に比定されるものである。遺構から出土した縄文土器は、遺構外出土の土器の中で分類したいずれかの群に属するもので、その分類に従って説明していくことにする。

第1群土器

第1群土器は中期後半の加曾利E.III・E.IV式に比定される土器群である。これらを、口縁部の文様帯が隆帯による渦文や区画文で構成されるもの、口縁部の文様帯が沈線で構成されるもの、それらの胴部破片、器表面に縄文のみを施しているものの4類に分類した。器形は、口縁が内側し、口唇がやや肥厚し丸味をおびている深鉢形土器が多く、波状口縁を有するものもある。区画された口縁部文様帯と胴部に磨り消し縄文帯を持つ加曾利E.III式に比定されるものがほとんどである。

第2群土器・第3群土器・第4群土器

後期初頭の称名寺式に比定されるものである。ただし第3・4群の土器として包括したものの中には堀之内I式に比定されるものもあると思われるが、その判別ははっきりしない。第2群の土器は、沈線で区画された中に縄文を施しているもの、沈線で区画された中に刺突を施しているものとに大別される。前者の出土は非常に少なく、当遺跡でこの期にみられる手法は後者の方が主体を成していると思われる。口縁は内側し、波状口縁が平縁を呈する深鉢形土器が多い。第3・4群土器は、沈線や条縄文が直線状、弧状、曲線状に施されている。口縁が内側するものと外反するものがあり、胴部に括れを有している。

第5群土器・第6群土器・第7群土器・第8群土器・第9群土器

これらは後期前半の堀之内I式に比定されるものである。数量的に最も多く出土し、当遺跡の縄文土器の主体を成すものである。第5群の注口土器に分類される土器の出土は非常に少なかった。内・外面とも良く研磨されており、精巧な作りである。第6群土器は隆帯を有するもの、隆帯だけのもの、隆帯に押圧や刺突が施されているもの、隆帯に沈線が施されているもの、隆帯に刻みが施されているものに大別した。なお当遺跡では隆帯上に刺突・刻みを施し、波状口縁を有する深鉢形土器が多く出土している。把手を有し、波状口縁を有する深鉢形土器を第7群として取り上げたが、文様から分類すれば第8群に属するものである。第8群土器は第3・4群土器

と類似するものであるが、明らかに壇之内式に比定されるものをここで取り上げた。これらを沈線だけで文様を構成しているものと、地文に縦文を有し、その上に沈線を施しているものとに大別したが、その出上比率は半々ぐらいである。また、沈線を横位、斜位、縱位、弧状、鋸歯状、曲線状、格子目状にヘラ状工具や半截竹管具等を利用して描出している。器表面に縦文のみを施している第9群十器の出上も比較的多い。

第10群土器

後期前半の壇之内II式に比定されるもので、器形は口唇上に把手状の突起を有するもの、山形状の小突起を有するもの、平縁の口縁を呈するものがある。口縁部文様帶は消失し、体部の文様も単純化したものがみられる。

第11群土器

後期中葉の加曾利B I式に比定される土器群で、出上数は非常に少ない。口縁部が無文で、内面に数条の沈線が施されているものと、口縁部に1条ないし2条の隆帯を持つものがある。

第12群土器

当遺跡からの出土は非常に少ない。沈線間の刻みは半截竹管具を使用して施文している。

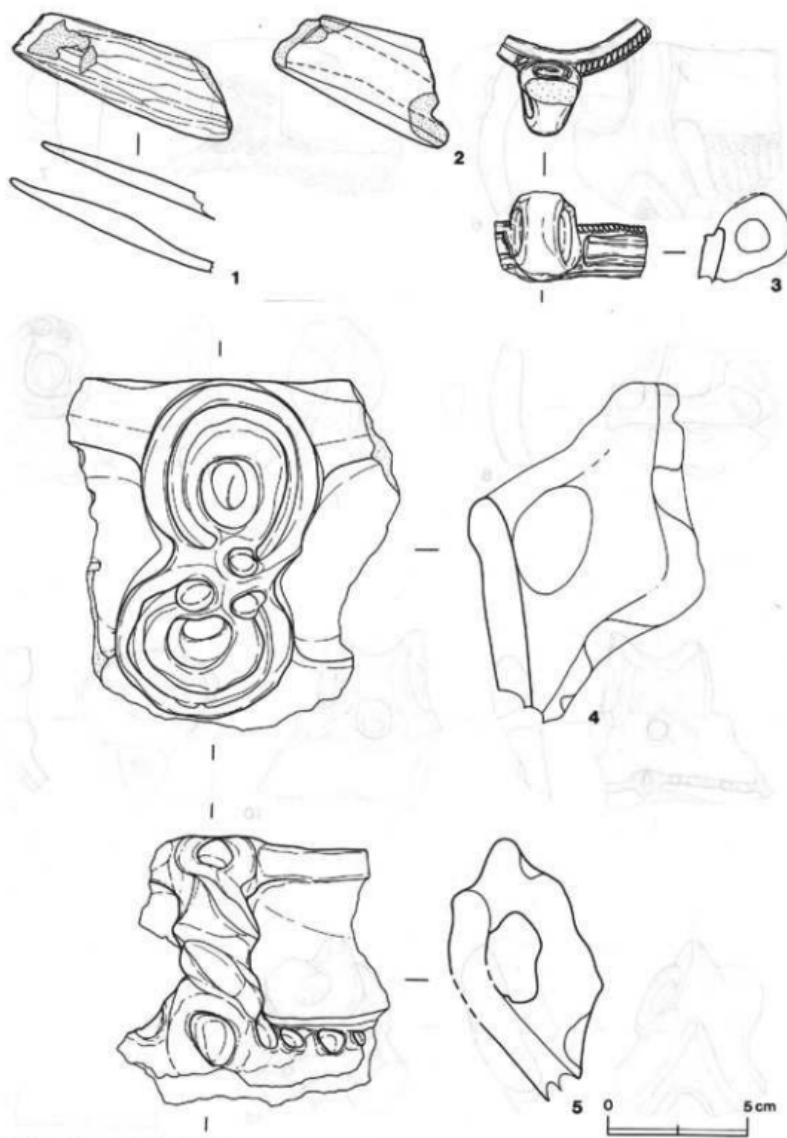
第13群土器

いずれも器表面は無文で、ヘラ状工具によるナテ整形が成されている。中期後半から後期前半の土器群と思われる。

第14群土器

網代痕を有する底部で、壇之内I式に比定されるものである。

その他に、これらの土器に付帯していた把手や注口部が出土している。（第168～172図）

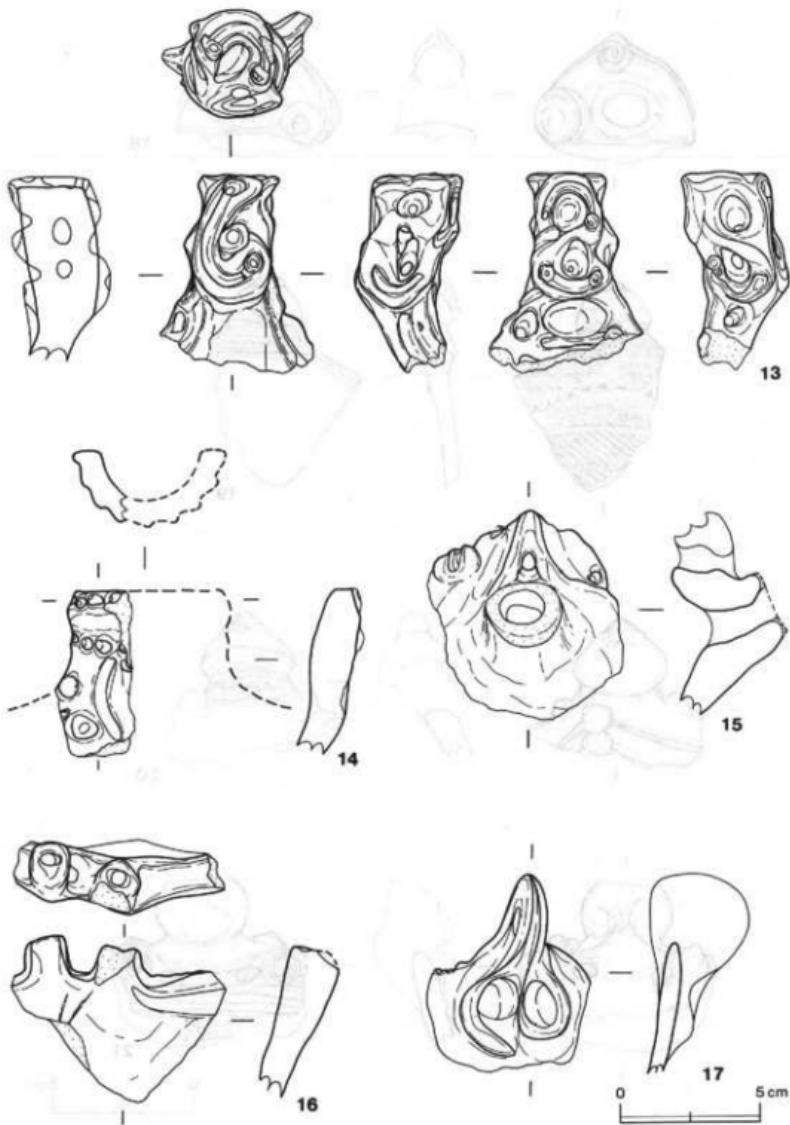


第168図 注口・把手実測図(1)



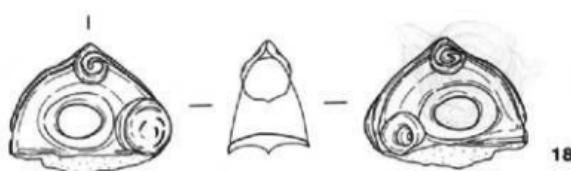
第169图 把手实测图 (2)

图版一四四·(2)·图版二四



第170図 把手実測図 (3)

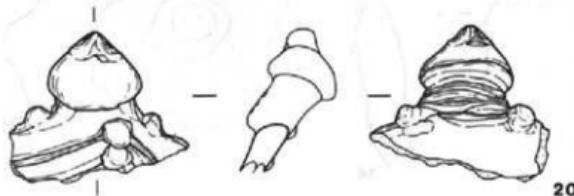
6. 開拓者手標 1111



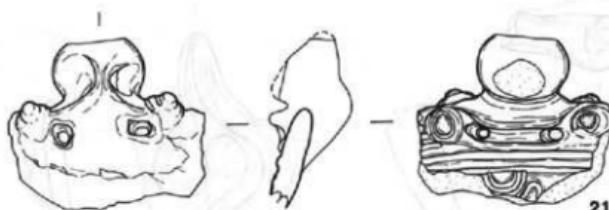
18



19



20

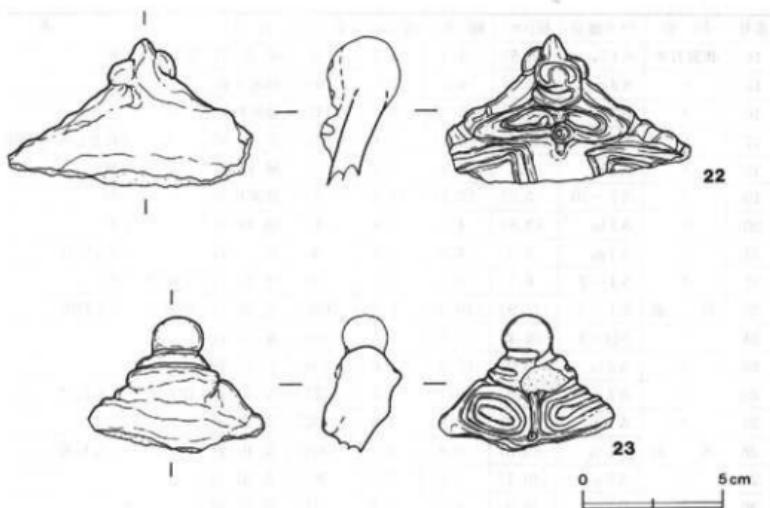


21



第171図 把手実測図 (4)

（国務省考古研究所蔵）



第172図 把手実測図 (5)

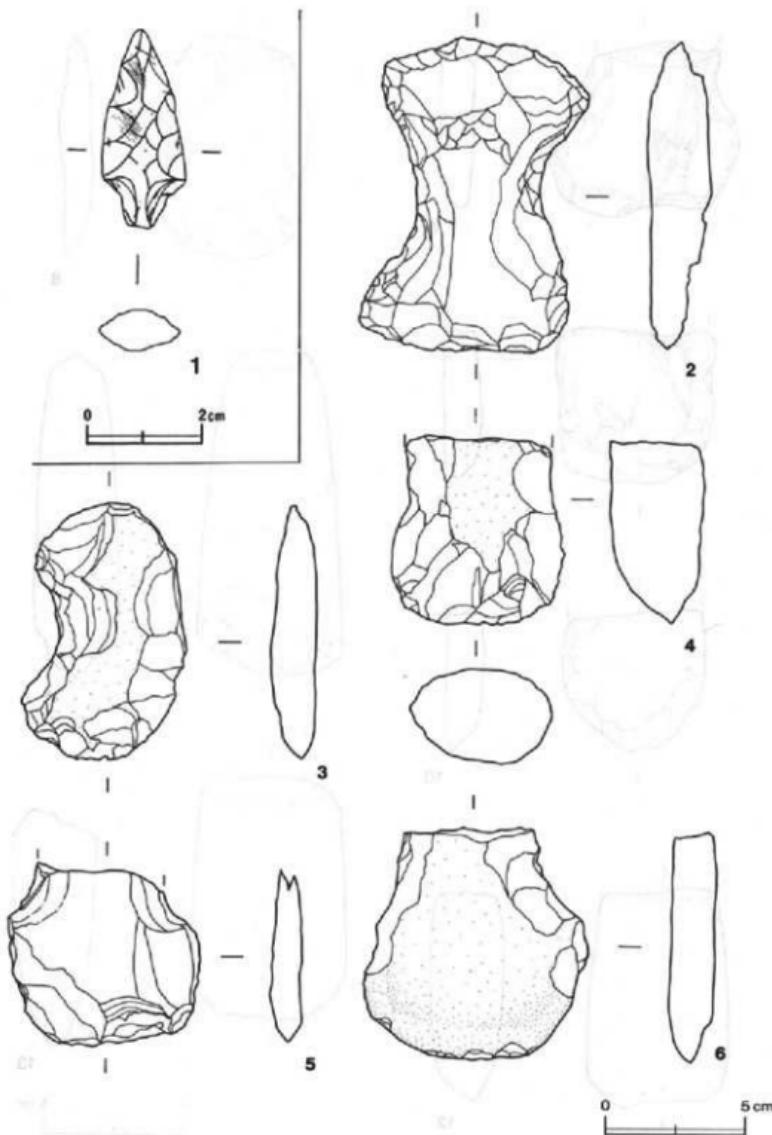
(2) 石器について

当遺跡から出土した石器総数は50点で、遺構の絶対数に比べて非常に少ない。さらに遺構に伴って出土したものは少なく、遺構外出土が多い。なお、個々の石器の概要については一覧表にまとめて表示した。

石器一覧表 (第173~182図)

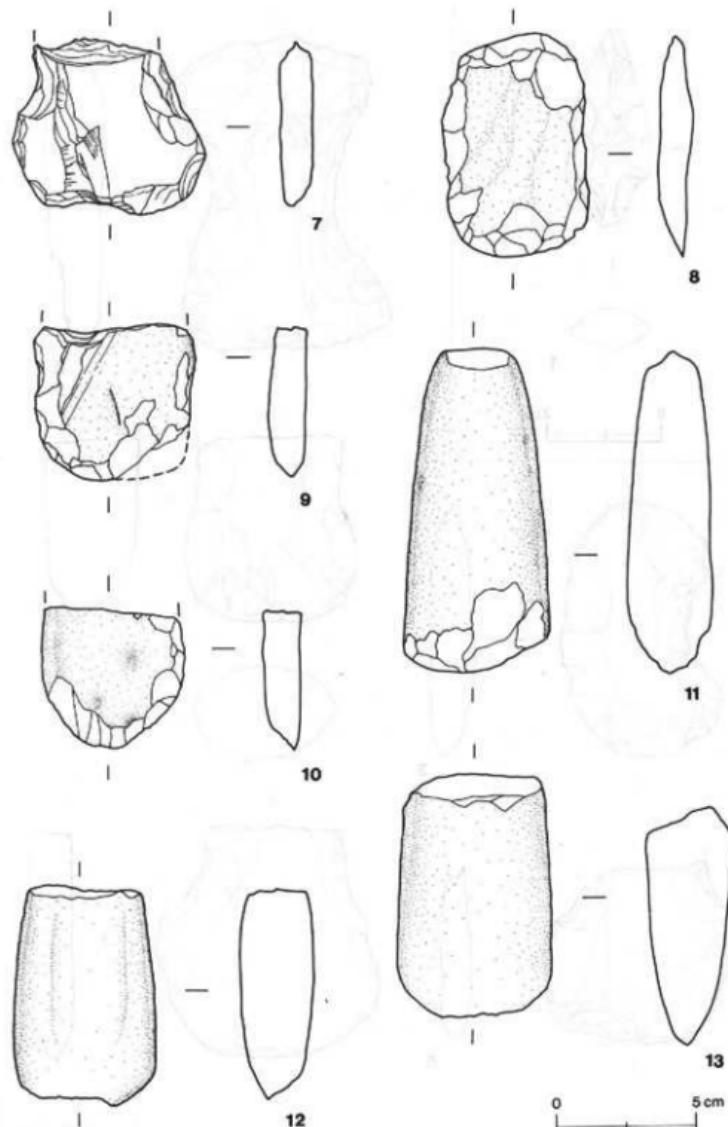
番号	類別	出土地点	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材	備考
1	石鎌	SK-27	3.5	1.5	0.75	3	流紋岩	凸基有茎鐵
2	打製石斧	SI-12	10.9	7.4	2.2	210	安山岩	分鋸形
3	"	SI-7	9.1	5.3	1.6	112	安山岩	"
4	"	SD-5	(6.5)	6.0	3.2	(190)	安山岩	"
5	"	SI-11	(6.1)	6.1	1.2	(80)	片麻岩	"
6	"	A1 h ₇	(8.1)	7.5	1.6	(155)	安山岩	"
7	"	A1 g ₈	(5.8)	6.8	1.3	(75)	粘板岩	"
8	"	A2 h ₁	7.8	5.0	1.0	65	安山岩	短冊形
9	"	A2 i ₄	(5.3)	5.7	1.3	(65)	砂岩	"
10	"	B2 b ₃	(4.9)	5.0	1.3	(65)	安山岩	"
11	磨製石斧	SI-12	11.4	5.1	2.8	353	綠泥片岩	定角式、敲石として再利用
12	"	B1 a ₈	(7.5)	5.1	2.5	(220)	綠泥片岩	"
13	"	A1 g ₈	(8.5)	5.5	3.0	(250)	綠泥片岩	"

番号	類別	出土地点	長(cm)	割(cm)	厚(cm)	重(g)	石材	備考
14	磨製石器	A1 i ₃	(5.5)	3.3	1.5	(46)	硬砂岩	定角式, 小形
15	"	A2 g ₁	(5.5)	4.2	2.1	(90)	綠泥片岩	" , 小形
16	"	B2 a ₁	(5.0)	(5.0)	2.8	(119)	綠泥片岩	"
17	"	A2 g ₂	(13.0)	(6.2)	3.4	(394)	安山岩	" , 故石としても利用
18	"	A1 b ₁	8.4	4.3	3.5	185	硬砂岩	" , 小形
19	"	SI-10	(3.2)	(3.1)	(1.7)	(30)	綠泥片岩	" , 小形
20	"	A2 h ₅	(3.8)	4.5	1.8	(45)	硬砂岩	" , 小形
21	"	A1 g ₃	7.3	4.8	2.5	98	砂岩	" , 小形, 片刃
22	"	SI-7	6.5	3.9	1.1	40	流紋岩	乳棒状, 小形
23	石皿	SI-7	(11.9)	(10.3)	6.7	(650)	安山岩	凹石としても利用
24	"	SD-4	(6.4)	(7.7)	5.5	(290)	安山岩	
25	"	A2 h ₅	(5.0)	(5.9)	5.0	(100)	安山岩	
26	"	A2 g ₃	(8.2)	(8.7)	4.1	(311)	安山岩	凹石としても利用
27	"	A1 g ₃	(13.3)	(13.9)	4.8	(682)	安山岩	
28	凹石	A1 i ₃	(5.8)	9.8	4.0	(316)	安山岩	廢石としても利用
29	"	A2 g ₃	(10.1)	6.0	3.2	(306)	安山岩	"
30	"	B1 a ₁	10.0	8.5	4.4	575	流紋岩	"
31	"	B2 a ₁	(9.5)	6.3	2.9	(254)	安山岩	"
32	磨石	SI-5	6.0	6.4	(2.2)	(155)	安山岩	
33	"	SI-5	(8.8)	6.1	2.0	(160)	安山岩	石皿の破片の再利用
34	"	SD-4	8.5	4.3	4.3	218	安山岩	敲石としても利用
35	"	SD-4	(9.6)	(4.8)	(4.5)	(276)	安山岩	
36	"	SK-114	(7.6)	5.2	3.5	(194)	安山岩	
37	"	A1 g ₃	13.8	7.4	3.6	633	流紋岩	凹石としても利用
38	"	B1 j ₁	(6.4)	(5.2)	1.6	(83)	砂岩	
39	"	B1 c ₁	(8.2)	(7.4)	2.1	(180)	流紋岩	
40	"	B2 a ₃	10.3	4.3	3.4	259	安山岩	
41	"	B2 b ₂	(4.8)	(5.3)	1.2	(46)	硬砂岩	敲石としても利用
42	"	B2 d ₆	10.3	5.6	4.2	313	砂岩	"
43	敲石	A2 h ₅	9.4	6.4	4.3	(297)	流紋岩	
44	砾石	B1 a ₉	(8.6)	6.1	1.4	(102)	砂岩	
45	石橋	SK-38	(10.3)	9.0	6.8	(877)	流紋岩	基部
46	"	A1 g ₂	11.6	11.2	5.6	(860)	流紋岩	頭部
47	"	A2 h ₃	(9.0)	3.8	3.5	(173)	片麻岩	基部
48	石船	SK-15	(3.4)	4.3	0.8	(16)	チャート	未完成品
49	板状石器	A1 i ₃	4.3	3.7	0.5	21	粘板岩	全面研磨
50	"	A1 g ₂	(7.3)	4.7	0.7	(44)	硬砂岩	"



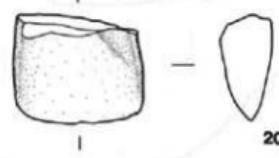
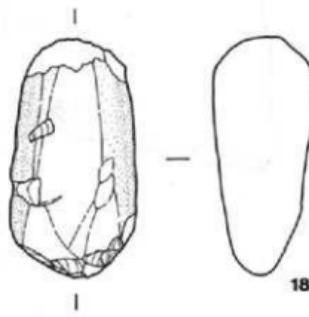
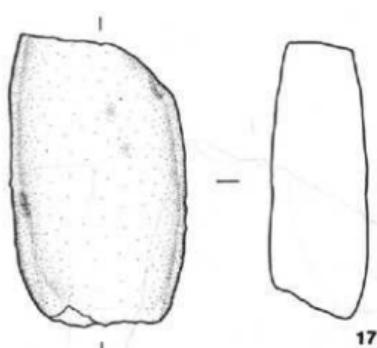
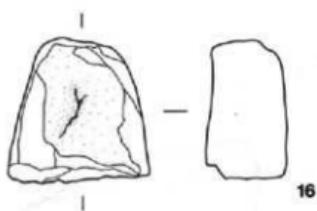
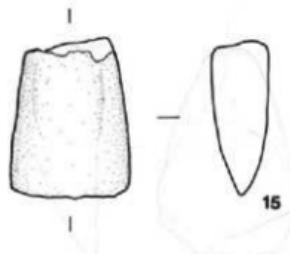
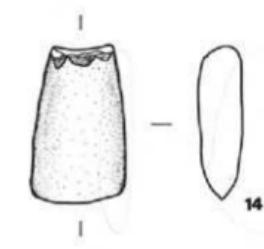
第173図 石器実測図 (1)

石器実測図 (1)



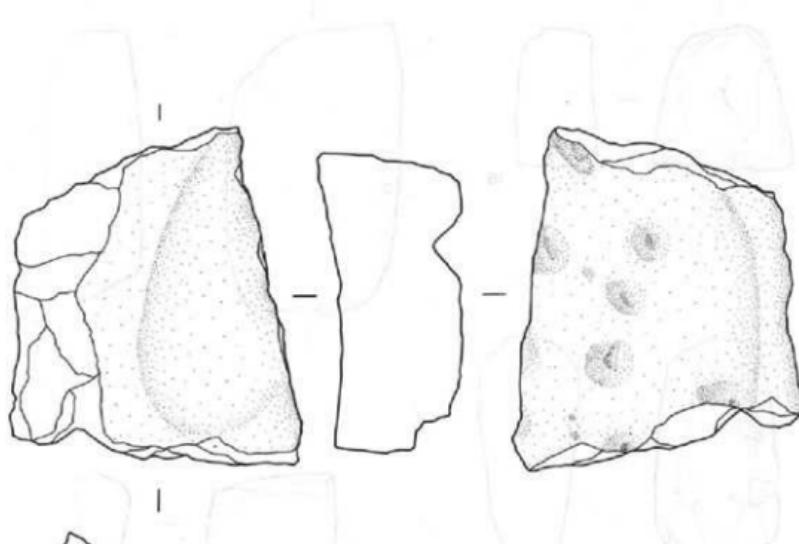
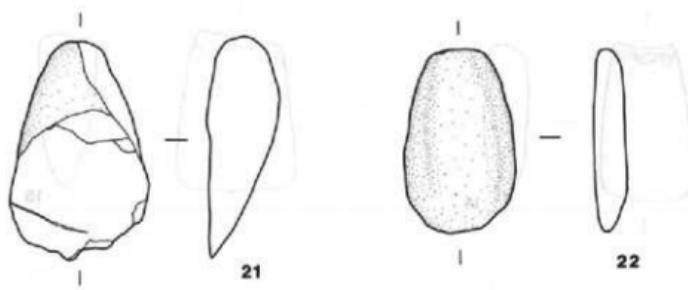
第174図 石器実測図 (2)

上：加須美鉄器 下：竹原



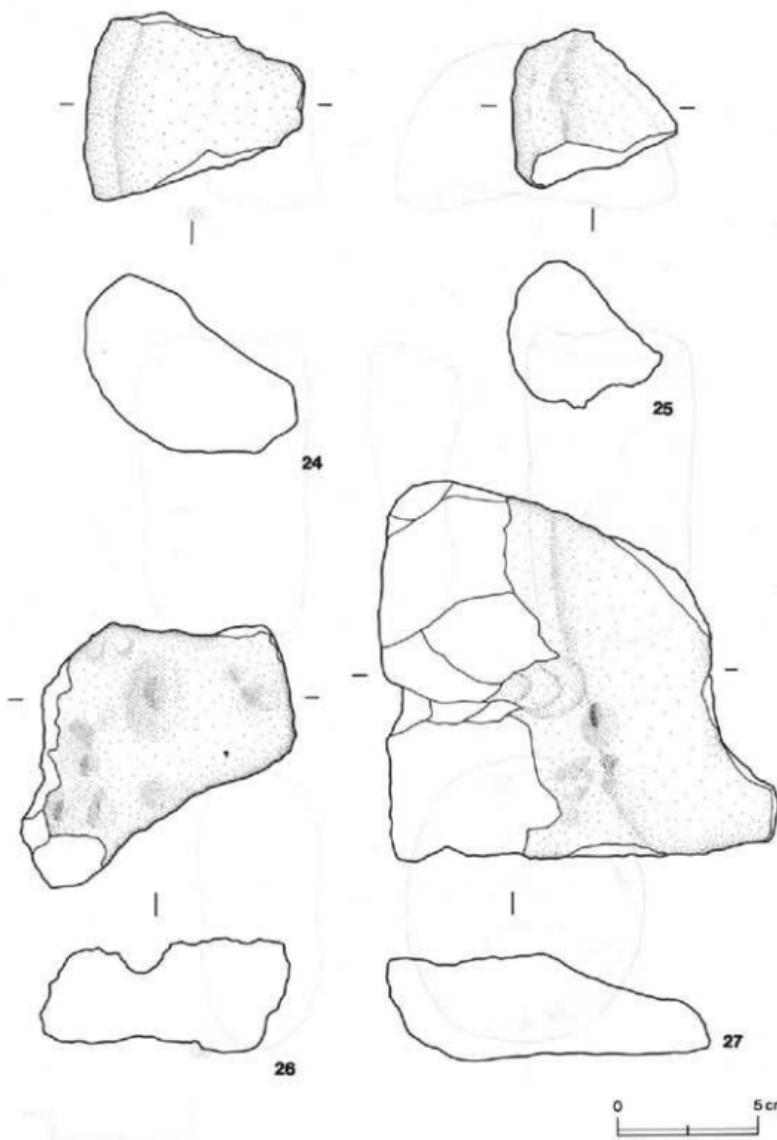
0 5 cm

第175図 石器実測図 (3)



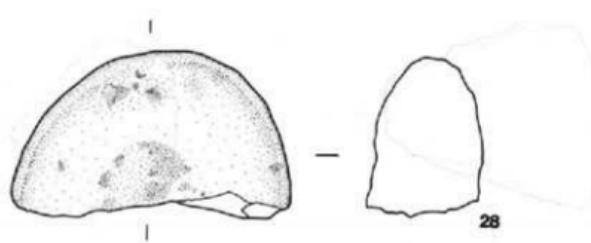
第176図 石器実測図 (4)

1. 四角形標本 2. 古石器

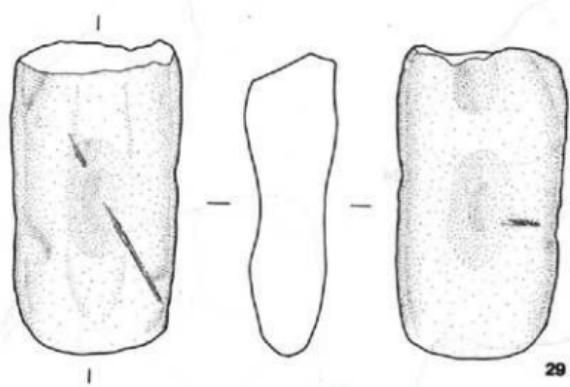


第177図 石器実測図 (5)

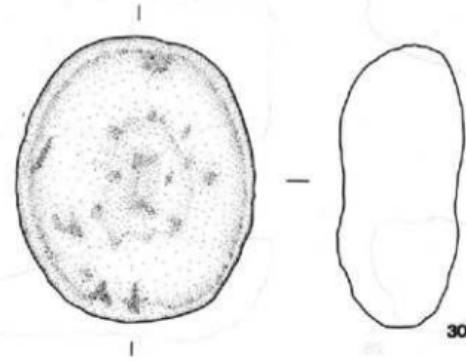
○ 田中実測三 田中7年



28



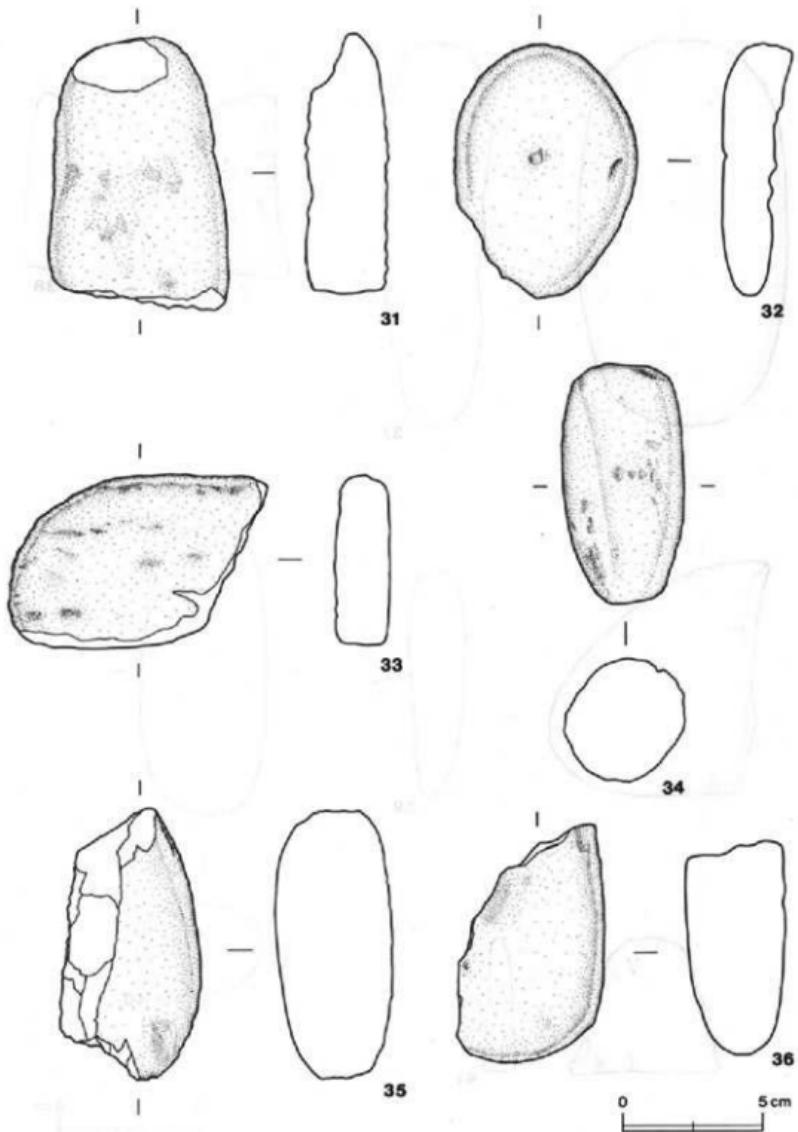
29



30

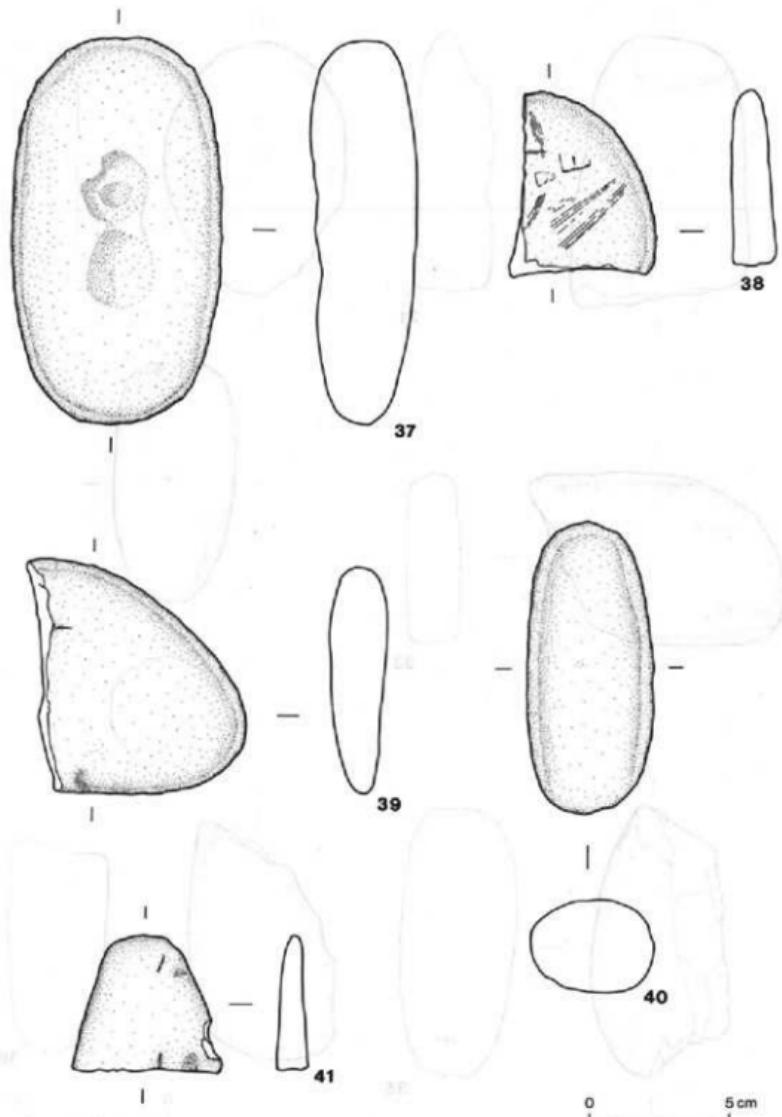


第178図 石器実測図 (6)



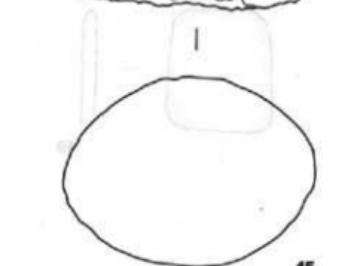
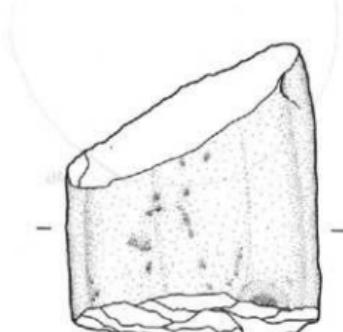
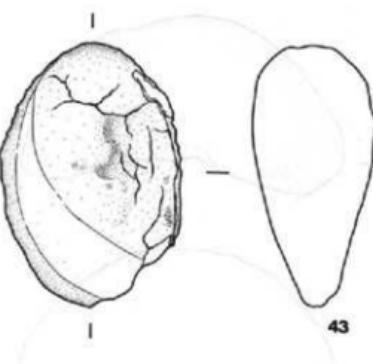
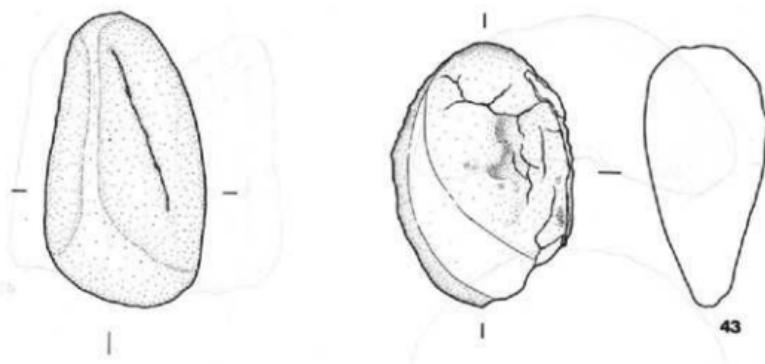
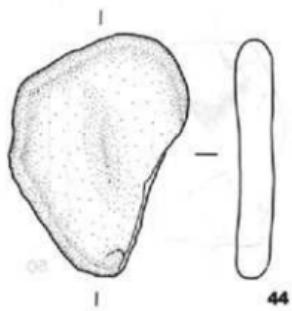
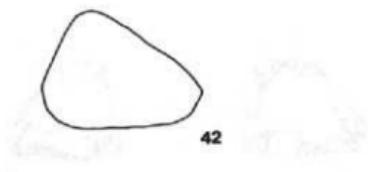
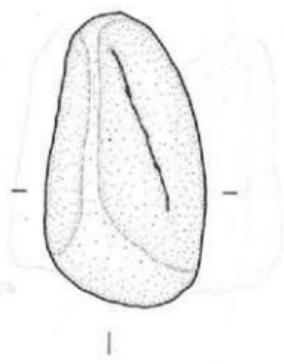
第179図 石器実測図 (7)

右：細面尖頭器　左：細面器



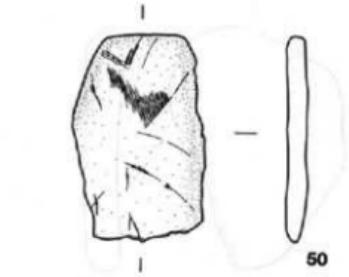
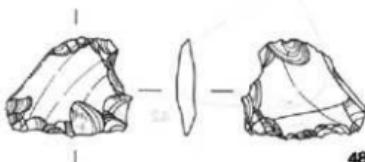
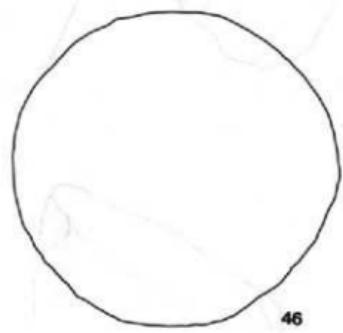
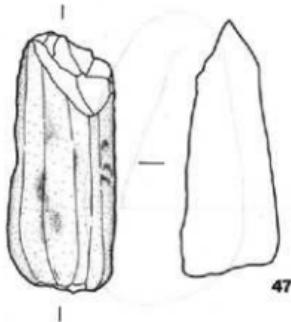
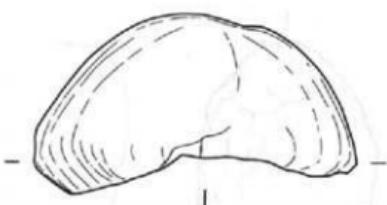
第180図 石器実測図 (8)

1: 四角高脚石器 5cm



0 5 cm

第181図 石器実測図 (9)



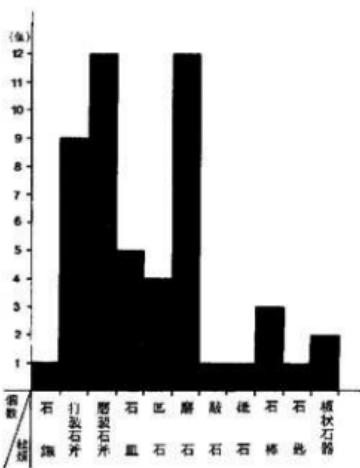
0 5 cm

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

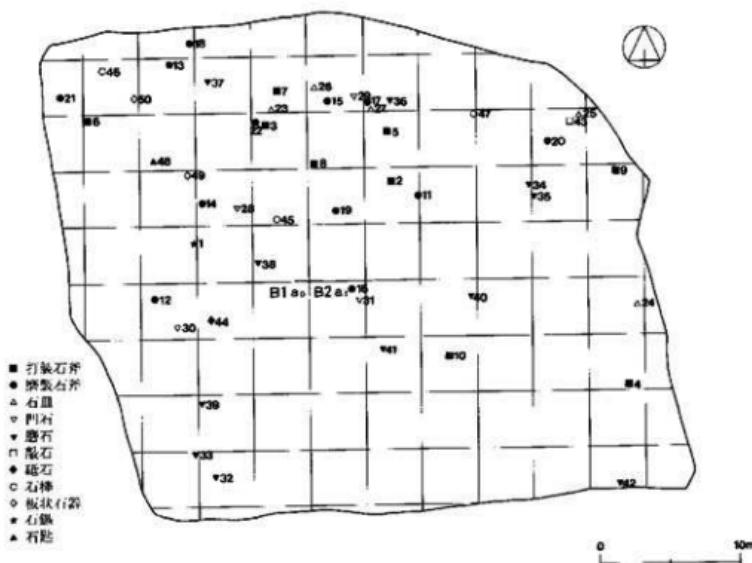
第182図 石器実測図 06

石器の種類と出土点数は第183図に示したとおりで、石鎚1点、打製石斧9点、磨製石斧12点、石皿5点、凹石4点、磨石11点、敲石1点、砥石1点、石棒3点、石匙1点、板状石器2点が出土した。その分布は第184図に示すように種類別による分布の偏りはなく、調査区域内に散在しており、廃棄されたものや攪乱された覆土中から出土したものが多い。時期的には、上器群が縄文時代中期後半から後期前半に比定されるものであるから、石器群も一応これらとの時期に比定されるものと考えられる。

出土した数少ない石器の中では石斧や磨石が多く、石鎚や石匙は各1点と少なく、種類によってばらつきがある。石器の出土点数が



第183図 石器の種類と出土点数



第184図 石器分布図

少ないので断定はできないが、この出土頻度の高低は当遺跡における生産活動の傾向をある程度反映しているのではないかと考えられる。狩猟用具と考えられる石鎌や石斧などがほとんど出土していないが、後述するように動物遺体が検出されていることから狩猟生活が行われていたことは確かである。これに反して、石斧や磨石が他の石器に比べて多く出土しているが、磨製石斧は二次的に磨石や敲打として、また磨石も二次的に敲石としての機能を持たせて再利用されている。このほか、石皿や凹石が出土している。これらのことから、採集生活が行われていたことも確かである。

既往的なものと考えられる石棒が3点出土したが、そのうち2点は大形のもので、1点は小形のものである。これらのものは住居跡から検出されたものでなく、遺跡の性格や祭祀に係わるものかどうかは不明であるが、前者は縄文時代中期、後者は縄文時代後期の所産と思われる。

また、石錐、石錐などの石器類が当遺跡から出土しなかった。

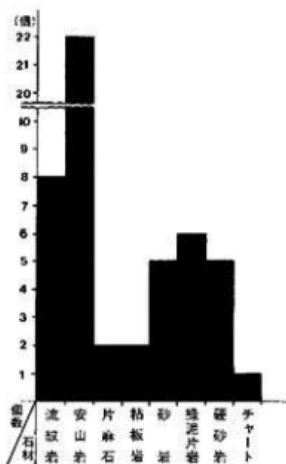
石材について考えてみると、第185図に示したように安山岩が最も多く、次いで流紋岩、粘泥片岩の順である。石器の種類と石材の組み合せをみると、石錐は流紋岩、打製石斧は大半が安山岩である。磨製石斧は粘泥片岩のものが多く、小形の磨製石斧は砂岩系のものが多い。石皿はすべて安山岩、凹石も4点のうち3点が安山岩、磨石も過半数が安山岩である。石棒は2点が流紋岩で、1点が片麻岩である。このように、各種の石器は石材にかなりの一貫性があり、比較的手近な材料を使用している。これは用途に応じて石材を選択したものか、それとも供給源を特定したもののかを考えられるが定かでない。

(3) 動物遺体について

仲根台B遺跡から発見された縄文時代の住居跡には貝殻の集積がみられ、その規模はいずれも小さいものであった。しかし、貝類、魚類、鳥類、哺乳類の動物遺体が検出され、貝類を除いた他の動物遺体については、埼玉大学教養部小池裕子氏から御指導を得、寄稿を賜ったので後に掲載する。

ア 貝類遺体

(1) 貝類遺体種名



第185図 石材による分類

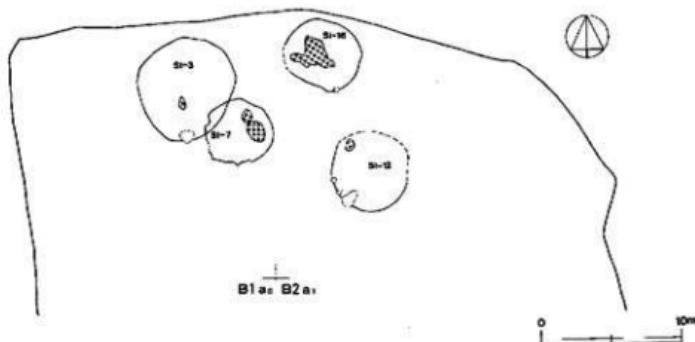
軟體動物門

腹足綱（巻貝類）

アカニシ	<i>Rapana venosa</i>
ウミニナ	<i>Batillaria multiformis</i>
カワニナ	<i>Semisulcospira bensonii</i>
アラムシロ	<i>Reticunassa festiva</i>
キセル	<i>Clausillid</i>
カワアイ	<i>Cerithidea djadjariensis</i>
イシマキガイ	<i>Clithon retropictus</i>
オカチョウジガイ	<i>Allopeas kyotoensis</i>

斧足綱（二枚貝類）

サルボウ	<i>Scapharca subcrenata</i>
ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
カガミガイ	<i>Phacoisma japonicum</i>
シオフキ	<i>Mactra veneriformis</i>
オオノガイ	<i>Mya arenaria oonogai</i>
ヒメシラトリ	<i>Macoma incongrua</i>
ナミマガシワ	<i>Anomia chinensis</i>



第186図 貝層採取地点の平面分布図

ミルクイ

*Tresus keenai*ウネナシトマヤガイ *Trapezium japonicum*

今回検出された貝類は腹足綱8種、斧足綱（二枚貝綱）12種である。

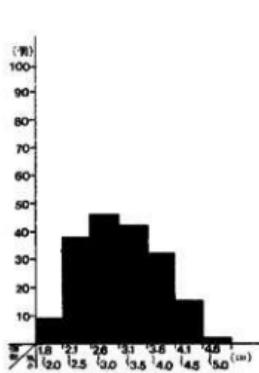
(1)各住居跡の貝層ブロックにおける貝類遺体の概要

貝類出土率表

貝出土住居跡番号 貝類	SI-3		SI 7		SI 12		SI 16		計	
	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	最少個体数	%
〔腹足綱〕										
アカニシ	3	0.3					8	0.4	11	0.1
ウミニナ	3	0.3	5	0.3	8	0.2	30	1.5	46	0.6
カワニナ							7	0.3	7	
アラムシロ					3	0.1	3	0.1	6	
キセル		1					2	0.1	3	
カワアイ							1		1	
イシマキガイ							1		1	
オカチョウジガイ							1		1	
〔斧足綱〕										
サルボウ	94	7.8	81	4.5	23	0.7	427	21.0	625	7.5
ヤマトシジミ	15	1.3	12	0.7	1		219	10.8	247	3.0
アサリ	5	0.4	3	0.2	4	0.1	9	0.4	21	0.3
オキシジミ	1		1				1		3	
ハマグリ	974	81.2	1594	88.1			983	48.3	3551	42.9
カガミガイ	1		1						2	
シオフキ	93	7.8	77	4.3	8	0.2	316	15.5	494	6.0
オオノガイ	3	0.3	28	1.5			5	0.2	36	0.4
ヒメシラトリ	1		1		3191	98.5	18	0.9	3211	38.8
ナミマガシワ	7	0.6	5	0.3			3	0.1	15	0.2
ミルクイ			1						1	
ウネナシトマヤガイ					1				1	
計	1200	100	1810	99.9	3239	99.8	2034	99.6	8283	99.8

第3号住居跡内貝層ブロック

住居跡中央からやや南東側に長径90cm、厚さ20cmほどの貝層が発見された。堆積していた貝類は腹足綱2種、斧足綱10種の計12種が同定された。貝種別の出土率が最も高いのはハマグリで、全体の81%を占め、殻高は25~35mmのものが多く、最大は48mmである。次いでサルボウとシオフキがそれぞれ全体の7.8%を占めている。他の貝種としては、ヤマトシジミ、ナミマガシワ、ア



第187図 第3号住居跡出土ハマグリの殻高分布図

サリ、アカニシ、ウミニナ、オオノガイ、オキシジミ、カガミガイ、ヒメシラトリが低率でみられる。

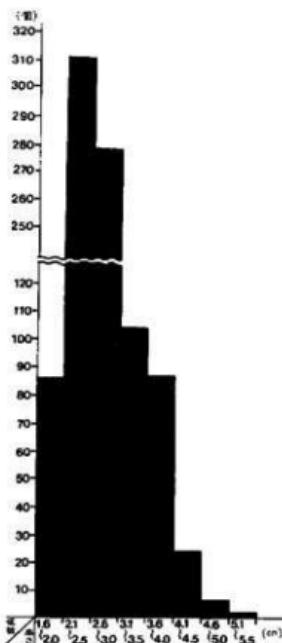
第7号住居跡内貝層ブロック

住居跡の北東側に長径95cm、厚さ30cmほどの貝層と、その南側に接続して直径170cm、厚さ20cmほどの貝層がそれぞれ発見された。

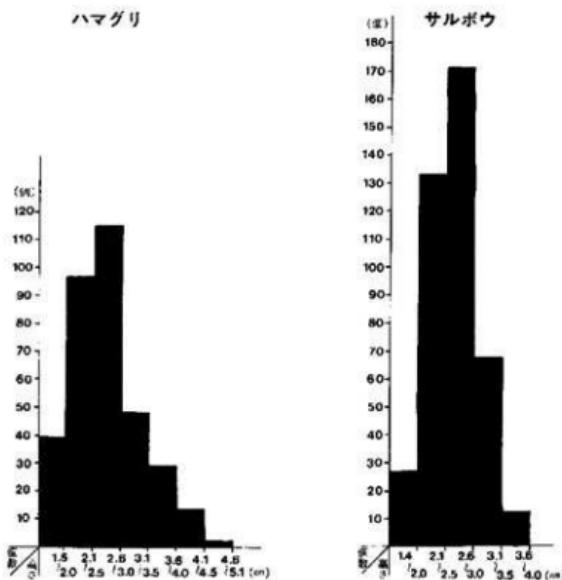
堆積していた貝類は腹足綱2種、斧足綱10種の計12種が同定された。主体を成す貝種はハマグリで、全体の88%を占め、殻高20~30mmのものが多く、最大は55mm、最小は16mmである。次いでサルボウが4.5%、シオフキが4.3%を占めている。他の貝種としては、オオノガイ、ヤマトシジミ、ウミニナ、ナミマガシワ、アサリ、そして1個体ずつキセル、オキシジミ、カガミガイ、ヒメシラトリ、ミルクイがみられる。

第12号住居跡内貝層ブロック

住居跡の北西隅に反径80cm、厚さ18cmほどの貝層が発見された。堆積していた貝類は腹足綱2種、斧足綱6種の計8種が同定された。他の貝層ブロックで主体を成していたハマグリの出土は全くなく、出土率が最も高いのはヒメシラトリで、全体の98.5%を占め、ごくわずかにサルボウ、ウミニナ、シオフキ、アサリ、アラムシロ、そして1個体ずつヤマトシジミ、ウネナシトマヤガイがみられる。



第188図 第7号住居跡出土ハマグリの殻高分布図



第189図 第16号住居跡出土完存ハマグリ・サルボウの殻高分布図

第16号住居跡内貝層ブロック

住居跡のはば中央に長軸 160 cm、厚さ 20cm ほどの貝層が発見された。堆積していた貝類は腹足綱 8 種、斧足綱 9 種の計 17 種が同定され、当遺跡で検出された貝類のほとんどが出土している。貝種別の出土率が最も高いのはハマグリで、全体の 48% を占め、殻高 20~30mm のものが多く、最大は 51mm である。次いでサルボウが 21%、シオフキが 16% と続く。サルボウは殻高 22~30mm のもののが最も多い。その他の貝種としては、低率でヒメシラトリ、アサリ、アカニシ、カワニナなどがみられる。

(つづき)

3・7 号住居跡内貝層ブロックからは、ハマグリが圧倒的に高い比率で出土し、シオフキ、サルボウがこれに次ぐが、12号住居跡内からはほとんどがヒメシラトリである。16号住居跡内ではハマグリが最も出土率が高く、次いでサルボウ、シオフキの順となっている。これらの貝類の投棄された時期は、貝層の堆積状況からみて住居跡の時期と関連していると思われる。12号住居跡は縄文時代中期後半、3・7・16号住居跡は後期前半に営まれた住居跡である。縄文時代の海進

海進現象で、中期末葉には温水に生息するヒメシラトリが異常発生し、内湾に一定期間侵入し生息したものではないのだろうか。後期前半の住居跡内に投棄された貝種の出土は、ほぼ同時期の「蓬り地A遺跡」の貝塚出土の貝種と同様である。この時期（柵之内I式期）に海進が起こり、テリトリー内に淡水の流入する内湾が生じ、そこの砂灘に生息していたハマグリ、サルボウ、シオフキ等の貝を捕獲し、食料としていたものであろう。

各住居跡内出土貝種

BLK& 部号	各プロック内貝種				
	1	2	3	4	
4	アカアキカノイ カミツラ ニニシ シナラル	サヤアオハカシオ シマラ ムツ アキウ ガジ ルイイ	ヒナミ オメミ ノント タグ タガ イ	ウ	
3	○○	○○○○○○○○○○			
7	○○	○○○○○○○○○○			
12	○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○		
16	○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○	○○○○○○		

混 貝 率

各プロック内貝種	3	7	12	16
総重量	15,600	84,405	13,250	188,752
混貝率%	53.2	14.7	41.1	7.9

上の表から分かるように、4町の住居跡内貝層ブロックから共通して出土したものは、ウミニ子、サルボウ、ヤマトシジミ、アサリ、シオフキ、ヒメシラトリの6種で、各ブロックとも内湾奥の窪間帯砂泥底に生息する貝類の出土率が全体に高い。

イ その他の動物遺体

小池裕子

仲根台B遺跡（R28-B遺跡）の発掘では、魚類・鳥類および哺乳類の歯及び骨格が貝層中から発見された。その大半が小破片のため部位や種の同定が困難なものが多かったが、歯牙標本を中心に同定を行なった。現在までに確認された出土動物は次のとおりである。

Osteichthyles 硬骨魚類綱

- | | |
|-------------------------------|-----------|
| <i>Anguilla japonica</i> | ウナギ |
| <i>Mugilidae sp.</i> | ホラ科の一種 |
| <i>Lateolabrax sp.</i> | スズキ科の一種 |
| <i>Acanthopagrus sp.</i> | クロダイ科の一種 |
| <i>Tetraodontiformes spp.</i> | フグ目に属する数種 |

Aves 鳥類綱

- | | |
|----------------------|-----------|
| <i>Cygnus sp.</i> | ハクチョウ属の一種 |
| <i>Anatidae sp.</i> | ガンカモ科の一種 |
| <i>Phasianus sp.</i> | キジ属の一種 |

Mammalia 哺乳類綱

<i>Nyctereutes procyonoides</i>	タヌキ
<i>Meles familiaris</i>	アナグマ
<i>Sus scrofa</i>	イノシシ
<i>Homo sapiens</i>	ヒト

なお、鳥類の同定には国立科学博物館の小野龍一氏、魚類の同定には早稲田大学の金子浩昌氏の御教示を賜った。厚くお礼申し上げる。

(3)魚類

魚類遺体の中で顎骨片は次の12点である。

出土地	同定資料	出土地	同定資料
貝塚No3-3層	クロダイ左前上顎骨 やや大きい	SI 16-2区X-1232	フグ目右前上顎骨
SI 16-2区X-1233	スズキ左前上顎骨 顎骨長推定27mm	SI 16-2区X-1233	フグ目右前上顎骨
貝塚No1 1区1層	フグ目歯骨破片	SI 16-3区X-1234	フグ目左前上顎骨
貝塚No1 3区3層	フグ目左歯骨	SI 16-2区X-1234	フグ目左前上顎骨
SI 16-1区X-1232	フグ目右前上顎骨	SI 16-3区X	フグ目右前上顎骨
SI 16-1区X-1232	フグ目左歯骨	SI 16-1267	フグ目左前上顎骨

中軸骨格はかなり保存の良い椎体が36片出土した。そのうち、日の段階程度まで同定できたのは次の20点である。

出土地	同定資料	出土地	同定資料
SI 13	スズキ日 腹椎1 尾椎2	SI 16-2区X	タイ科 腹椎1 尾椎1
SI 13	フグ目 尾椎2	SI 16-2区X	スズキ 腹椎3
SI 13	ウナギ目 2	SI 16-3区X	ウナギ目 3
SI 17-1148	タイ科 尾椎1	SI 16-3区X	ボラ科 尾椎1
SI 16-1区X-1232	フグ目 尾椎1	SI 16-3区X	フグ目 尾椎2

(4)鳥類

鳥類骨として選別した骨片は16片にのぼった。かなり大型の骨ではハクチョウ属の右腕掌骨(翼の骨)、ガンカモ科の上腕骨他4点など湖沼棲の渡り鳥の出土が目立った。

出土地	同定資料
SI 16-1254	ハクチョウ属の一種、右腕掌骨推定長135mm、サイズ・形態から コブハクチョウ <i>Cygnus olor</i> と差はない。
貝塚No1-3区3層	ガンカモ科左大腿骨
SI 16-2区X	ガンカモ科左上腕骨

SI 16-3区X	ガンカモ科右尺骨遠位端
S 116-1352	ガンカモ科右第1指基節部
SI 16-1234	キジ属の左蹠蹠骨

(2) 哺乳類

哺乳類遺体の中で歯牙標本は次の8点である。

出土地	同定資料
貝塚No1-3区3層	タヌキ右上顎大歯(C)
貝塚No3-3層	アナグマ左下顎体及び第2切歯、犬歯、第1・第2・第3前臼歯、第1後臼歯(I ₂ C P ₁ P ₂ P ₃ M ₁)
貝塚No3-3層	アナグマ右下顎体及び第1後臼歯(M ₁)
SI 16-3区X	アナグマ左下顎第3前臼歯あるいはタヌキ左下顎第2前臼歯
貝塚No2-2区3層	イノシシ右下顎第2切歯
SI 16-1区X	イノシシ下顎第2前臼歯 破片のため左右不明
SI 16-3区X	イノシシ右上顎第4前臼歯
貝塚No1-3区3層	ヒト上顎第2切歯 齧根を欠き左右不明

貝塚No3出土のアナグマの下顎は、左側が保存が良いが、右側は表面が離脱し歯も歯冠エナメル質を欠くなど保存状態が悪く、形態の細部を比較して左右が同一個体かどうか判定することは困難であるが、サイズはほぼ同じであった。歯牙標本以外の歯骨は破片が多く、部位の同定さらに種の同定は困難なものが大半であった。その中には、海獣類の寛骨破片と思われる骨片があった。歯牙標本の中にニホンジカが含まれていなかったが、体幹部骨片の中にも明らかにシカと思われるもの、通常は部位別出土率の高い蹠骨、距骨、中足骨は一片もみあたらなかった。

写真図版説明

P L25 魚類遺体(×2)

- スズキ目の右前上顎骨
- クロダイ科の右前上顎骨
- フグ目の右前上顎骨
- フグ目の左歯骨
- フグ目の左歯骨
- ウナギ目の椎体
- ボラ科の尾椎
- マダイ科の尾椎
- スズキ目の腹椎

12 フグ目の椎体

P L26 鳥類・哺乳類遺体

- 1 ハクチョウ属の右前掌骨 (×1)
- 2 ガンカモ科の右尺骨遠位端 (×2)
- 3 タヌキの右上顎犬歯 (×2)
- 4 アナグマの左下顎 (×1.5)
- 5 アナグマの左下顎第3前臼歯 (×2)
- 6 イノシシの右上顎第4前臼歯 (×2)
- 7 イノシシの下顎乳臼歯 (×2)
- 8 イノシシの右下顎第2切歯 (×1.5)
- 9 海棲哺乳類の寛骨片 (×1.5)
- 10 ヒトの上顎乳切歯 (×2)

(4) 土製品について

当遺跡から出土した土製品は、土器片60点、円板14点、有孔円板3点、装飾品31点、土玉3点、有孔球形土製品1点、手挽土器5点である。これらの土製品は、遺跡を南側部と北側部に二分した場合、主に北側部から出土している。個々の遺物の出土地点や計測値などについては、一覧表にまとめた。

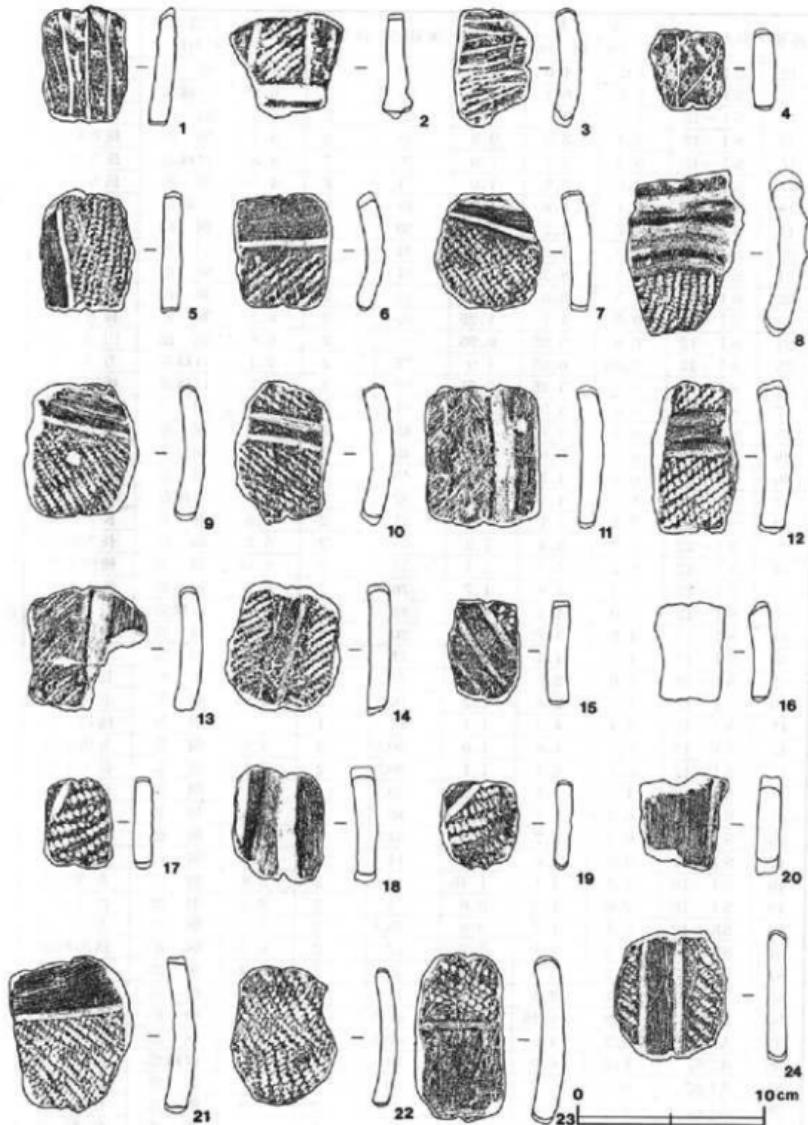
ア 土器片類（第190～192図）

上器片を再利用した上器片類は、完存品85%、破損品15%で完存品の比率が高い。表中の抉り数が1個の場合はほとんど破損品である。抉りは上器片の長軸方向上下端に「V」字形か「U」字形に施されている。出土地点をみて分かることおり、出土点数が圧倒的に多いのは12号住居跡であり、12号住居跡の特殊性がうかがえる。

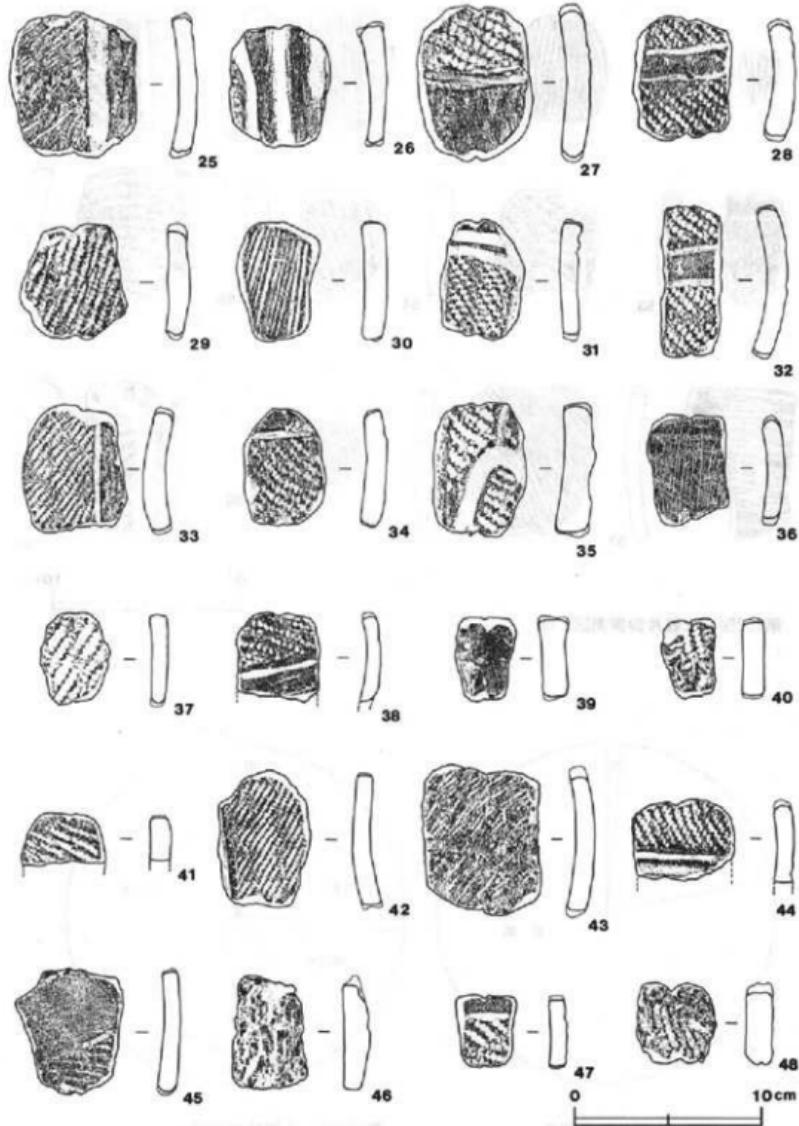
土器片類一覧表（第190～192図）

番号	出土地点	大きさ			重量(g)	抉り数	抉り間の長さ(cm)	土器片の利用部位	形状
		長(cm)	幅(cm)	厚(cm)					
1	SI-3	6.2	4.4	1.0	38	2	5.7	胴部	長方形状
2	SI-3	6.6	6.0	1.0	35	2	4.9	口縁部	舌形状
3	SI-5	6.35	3.95	1.1	35	3	5.8	胴部	舌形状
4	SI-7	4.4	4.0	1.2	25	2	3.9	胴部	舌形状
5	SI-12	6.75	4.9	1.0	54	2	5.9	胴部	長方形状
6	SI-12	6.4	5.0	0.9	46	2	5.6	胴部	長方形状
7	SI-12	6.3	5.7	1.1	54	2	5.95	胴部	円形状
8	SI-12	9.4	5.7	1.4	87	2	7.8	口縁部	舌形状
9	SI-12	7.2	5.9	1.0	70	2	6.8	胴部	五角形状
10	SI-12	7.6	5.0	1.2	60	2	6.95	胴部	楕円形状
11	SI-12	7.4	6.0	1.1	76	2	7.05	口縁部	長方形状

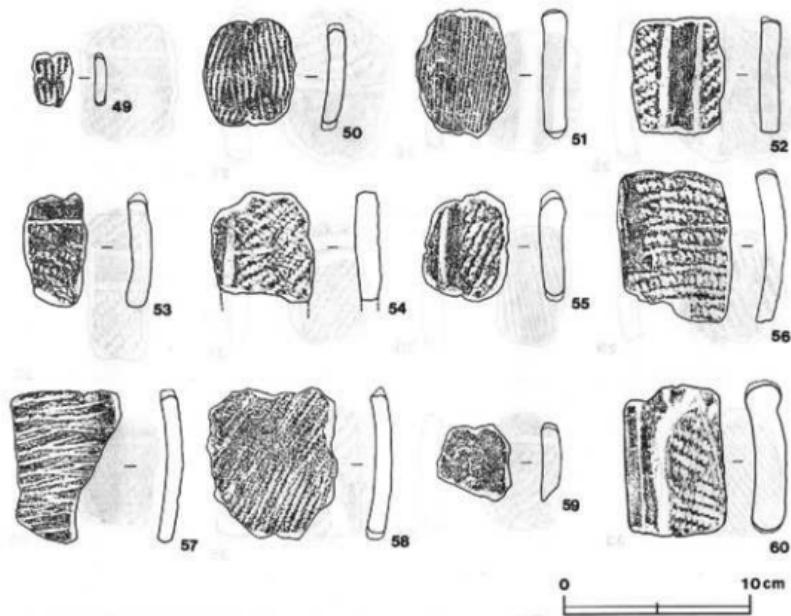
番号	出土地点	大きさ			重積(g)	抉り数	抉り間の長さ(cm)	土器片の利用部位	形状
		長(cm)	幅(cm)	厚(cm)					
12	SI-12	8.2	4.6	1.5	78	2	7.45	胴部	長方形状
13	SI-12	6.6	6.1	1.0	50	2	6.25	口縁部	方形状
14	SI-12	7.0	6.0	1.1	60	2	6.3	胴部	方形状
15	SI-12	5.4	3.8	0.9	30	2	5.1	胴部	長方形状
16	SI-12	5.3	3.7	1.0	26	2	4.8	口縁部	長方形状
17	SI-12	4.9	3.5	1.0	24	2	4.35	胴部	長方形状
18	SI-12	6.1	4.8	1.1	49	2	5.2	口縁部	長方形状
19	SI-12	4.7	4.2	0.8	20	2	4.35	胴部	方形状
20	SI-12	5.2	4.25	1.2	34	2	3.9	胴部	台形状
21	SI-12	8.3	8.25	1.0	81	2	7.2	胴部	五角形状
22	SI-12	7.3	5.6	0.8	45	2	7.1	胴部	橢円形状
23	SI-12	9.0	4.7	1.25	85	2	8.5	胴部	長方形状
24	SI-12	6.9	5.95	0.95	60	2	6.5	胴部	円形状
25	SI-12	7.65	6.65	1.0	75	2	7.1	口縁部	方形状
26	SI-12	6.5	5.25	0.75	50	2	6.2	口縁部	橢円形状
27	SI-12	8.4	6.0	1.3	91	2	7.75	胴部	橢円形状
28	SI-12	6.5	5.1	1.15	55	2	5.9	胴部	長方形状
29	SI-12	6.2	5.6	1.2	48	3	5.4	胴部	五角形状
30	SI-12	6.3	4.1	1.2	43	2	6.2	胴部	長方形状
31	SI-12	6.3	4.4	0.9	32	2	5.9	口縁部	長方形状
32	SI-12	7.9	3.1	1.1	41	2	7.8	胴部	長方形状
33	SI-12	7.2	5.4	1.2	55	2	6.2	胴部	長方形状
34	SI-12	6.2	4.3	1.1	35	2	6.05	胴部	橢円形状
35	SI-12	7.1	4.8	1.7	76	2	6.7	胴部	長方形状
36	SI-12	5.9	4.2	0.9	35	2	5.2	口縁部	台形状
37	SI-12	4.9	3.7	0.8	20	2	4.15	胴部	橢円形状
38	SI-12	4.8	4.4	0.8	21	1	—	胴部	方形状
39	SI-12	4.6	2.7	1.3	23	2	4.1	不明	長方形状
40	SI-12	4.3	2.8	1.2	16	2	3.85	胴部	五角形状
41	SI-12	2.4	4.5	1.1	16	1	—	胴部	橢円形状
42	SI-12	7.3	4.8	1.0	50.5	2	6.85	胴部	五角形状
43	SI-12	8.1	6.1	1.1	80.5	2	7.1	胴部	長方形状
44	SI-12	4.4	5.5	0.9	30.5	1	—	胴部	長方形状
45	SI-12	6.8	5.8	1.0	46	3	6.45	胴部	五角形状
46	SI-12	6.1	3.7	1.3	34.5	1	—	胴部	台形状
47	SI-12	3.9	2.6	0.9	14	2	3.55	胴部	長方形状
48	SI-16	4.3	4.1	1.45	33	2	3.8	胴部	方形状
49	SI-16	2.8	1.9	0.6	4	2	2.5	胴部	台形状
50	SK-12	5.7	4.7	0.9	35.5	2	5.0	胴部	方形状
51	SK-24	6.9	4.3	1.2	57	2	6.35	胴部	橢円形状
52	SK-83	6.3	5.0	1.0	55	2	5.9	胴部	長方形状
53	SK-83	6.1	3.3	1.1	31	1	—	胴部	長方形状
54	SK-83	5.9	5.45	1.2	47.5	1	—	胴部	台形状
55	A2 h ₄	5.9	4.5	1.2	40.5	3	5.15	胴部	台形状
56	A2 h ₄	8.2	6.0	1.1	74	1	—	口縁部	長方形状
57	A1 g ₁	8.1	5.7	0.85	50	1	—	胴部	長方形状
58	A1 g ₂	8.1	6.6	0.85	75	2	7.3	胴部	五角形状
59	A1 h ₂	4.2	3.8	1.0	17	1	—	胴部	台形状
60	All h ₁	8.0	5.3	1.6	77	2	7.7	口縁部	長方形状



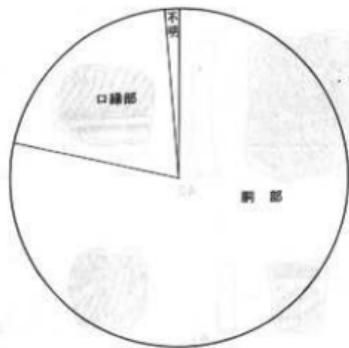
第190図 土器片鉋実測図 (1)



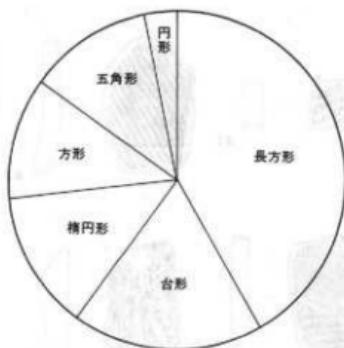
第191図 土器片鑑定測図 (2)



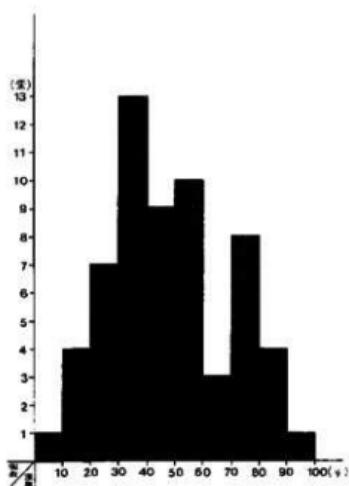
第192図 土器片鑿実測図 (3)



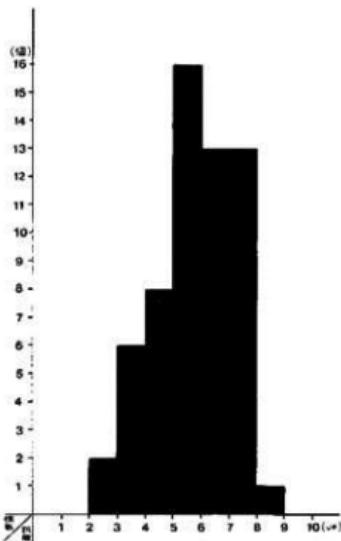
第193図 土器片利用部位



第194図 土器片鑿形状



第195図 土器片錐重量



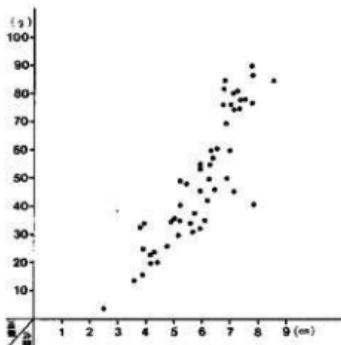
第196図 土器片錐完存品の挟り間の距離

検出された60点はすべて土器片を利用したもので、第193図にみられるように胴部の破片を利用したものが約78%、口縁部の破片を利用したもののが約20%で、利用部位が不明なものが1点ある。

形状は、第194図に示したとおり様々な形状を呈しているが、最も多い形状は長方形、次いで台形、橢円形と続き、この三つの形状で全体の73%を占めている。その他に方形、五角形、円形にそれぞれ近い形に整形されているものもある。

第195図は土器片錐の重量を表したもので、重量幅は4gから91gまで認められた。量的に一番多いのが30~40gのもので、次いで50~60g、以下40~50g、70~80g、20~30gと続く。主体は20~60gで、全体の65%を占めている。

次に完存品の挟り間の距離を見てみると、2.25~8.5cmの間にある。第196図にみられるように一番多いのが5~6cm、次いで6~8cmと続く。大部分がこの5~8cmの間に集中している。第



第197図 土器片錐の重量と挟り間の距離

197図は土器片鉢の重量と挟り間の距離の関係を示したもので、挟り間の距離が長くなるにしたがって重量も増加していくことがうかがえる。

また、使用されている上器片は時期不明のものを除いてはすべて縄文時代中期後半の加曾利E式期のもので、同期の所産と思われる。これらの土器片鉢の用途は、一般的に漁網用鉢と考えられている。しかし、今までの分析を検討してみると、形状にいろいろな種類があり、形態にも重量70g以上の大型のものもあれば、長軸3cm内外、重量20g以下の小型のものもあり、これらのものは重量や形状によって使用目的が異なっていたものと考えられる。ここでは指摘だけにとどめ、今後検討していく必要があると考えられる。

イ 上製円板・有孔円板（第198図）

土製円板・有孔円板一覧表（第198図）

番号	種別	出土地点	大きさ(cm)		重(g)	土器片利用部位	形狀	備考
			たて	よこ				
1	土製円板	B1 bs	4.0	4.2	0.95	20	胸部	五角形 縄文 摩滅
2	"	A2 hs	4.55	4.45	0.9	25	"	円形 "
3	"	A1 bs	3.4	3.6	1.3	18	"	無文 偏平
4	"	A1 ge	2.9	2.9	1.05	10.5	"	縄文 粗製
5	"	A1 hr	4.6	4.7	0.75	21	"	円形 " 一部欠損
6	"	A2 hs	6.7	7.2	0.85	60	"	五角形 "
7	"	A1 jx	4.6	5.1	0.7	21	"	楕円形 "
8	"	SI-16	3.7	4.0	1.0	24	"	六角形 沈縄文 周縁研磨
9	"	A1 ge	3.65	3.8	0.7	5.5	"	無文
10	"	A1 hr	5.6	5.9	0.75	34	"	縄文 一部欠損
11	"	A2 gs	3.6	4.06	0.75	15	口縁部	"
12	"	A2 h:	5.35	4.7	1.05	35	胸部	縄文 粗製
13	"	A2 hs	3.1	3.6	0.85	14	"	楕円形 "
14	"	SK-123	4.3	3.8	0.8	18	"	" 周縁研磨
15	有孔円板	SI-16		2.4		10	円形	"
16	"	A2 gs	6.0		0.9	23	"	縄文 " 孔の大きさ 1.5mm
17	"	SK-39	2.85	2.8	1.1	5.5	"	" 孔の大きさ 0.4mm

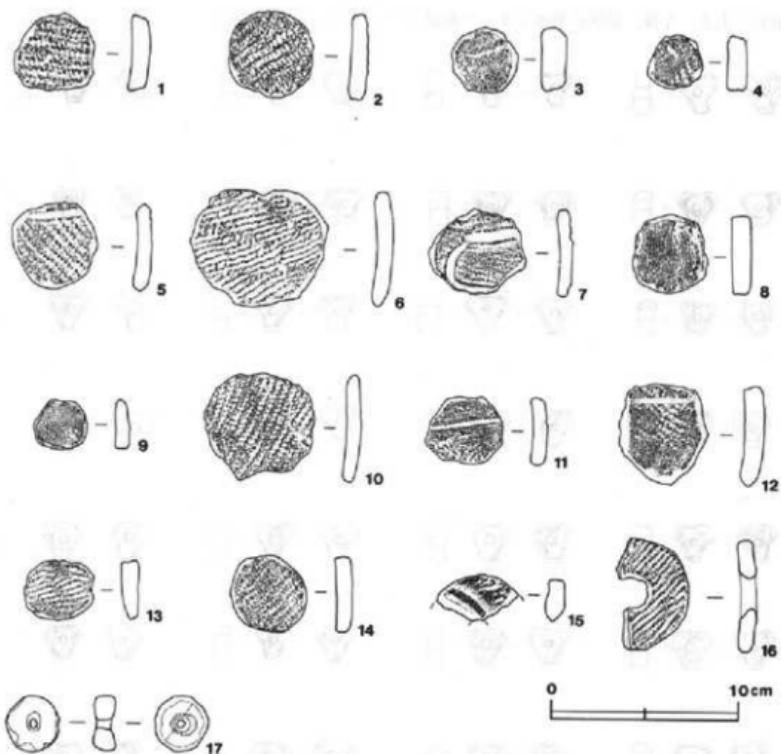
上製円板は、上器片を再加工して円形又はそれに近い形に作った土製品であるが、形状は必ずしも一定でない。円形のほかに楕円形、五角形、六角形のものもあるので、土器片の周縁を打ち欠くか、擦るかの加工をしてあるものを括した。

一覧表中からわかるように、14点のうち1点だけが縄文土器の口縁部片を利用し、他はすべて縄文土器の胸部片を利用している。重量別に分けてみると、10g未満1点、10g以上20g未満5点、20g以上30g未満5点、30g以上3点で、最も軽いものは5.5g、重いものは60gで、大半は15~25gのものである。材料となった土器片は、縄文時代中期後半と後期前半のものである。

円板の中でも、土器片を再加工して円板状にし、穿孔されているものを特に有孔円板として括した。

完存品1点、破損品2点の計3点が出土し、いずれも円形を呈し、中央の孔は貫通している。

孔は一方から穿たれ、孔や周縁ともよく磨かれている。この有孔円板も土製円板と同様、用途が判明しない。



第198図 土製円板・有孔円板実測図

ウ 装飾品（第199図）

3号住居跡の床面直上から、小型三脚土製品が31点ほどまとめて出土した。形状は二等辺三角形を呈し、各辺とも内側へ弧状を描き、そのうちの一辺の曲線はやや緩やかで、各角は八状を呈している。個々の大きさは20mm前後で、中央部には直径3mmほどの円孔が穿たれ、円孔の周辺はくばんでいる。出土した31点のうち24点には朱塗が施されているのが確認されたが、他の7点には朱を認めることはできなかった。おそらく、朱塗が施されていたものが消え失せてしまったものと考えられる。これらの土製品は、円孔に細い紐状のものを通して首飾り的なものに使用されたものと推察されるが、孔部に擦痕がそれほど認められず、さらに朱塗が施されていることな

を考え合わせると、當時身に付けていたものではなく、祭祀の要素が感じられる。縄文時代の遺物としてこの種の報告例は見当たらないが、当時の宗教的・呪術的文化を考察する上で貴重な資料である。今後、類例の増加をまって検討していきたいと考えている。



第199図 第3号住居跡出土土製品実測図

エ その他（第200図）

当遺跡から出土した3点の土玉は大小二つに類別でき、小型の土玉（第200図1・2）はいずれも5号住居跡から出土した。古墳時代の所産であろう。大型の土玉（第200図3）はグリッド発掘中に出土したものである。3点とも孔の大きさは直径5mm前後では同じである。その他に有孔

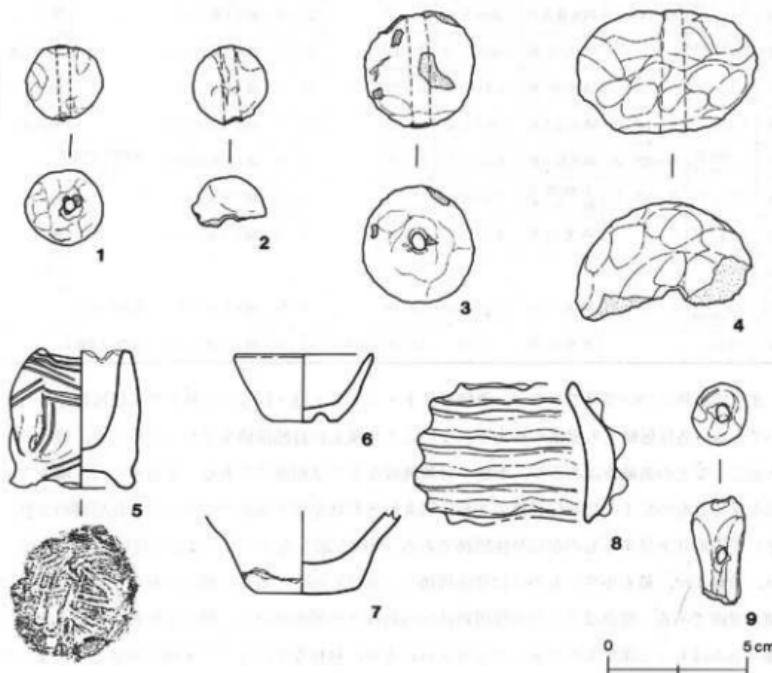
球形土製品（第200図4），手捏土器（第200図5～9）が出土した。

その他の土製品（第200図）

番号	類別	出土地点	大きさ(cm)			重(g)
			たて	よこ	孔径	
1	土玉	SI-5	2.65	2.8	0.45	19
2	"	"	2.75	2.6	0.55	10
3	"	A2 g ₁	4.0	3.9	0.5	55.5
4	有孔球形土製品	"	4.2	6.4	0.8	85.5

手捏土器（第200図）

番号	出土地点	口径(cm)	現高(cm)	底径(cm)	色調	胎土	焼成
5	SK-44	3.2	5.0	4.6	にほい黄橙色	砂粒・長石	普通
6	SI-5	4.9	2.4	2.3	にほい黄橙色	砂粒	普通
7	SI-5		4.0	3.0	暗灰黄色	砂粒	良好
8	A1 g ₂		5.15		橙色	砂粒	普通
9	SK-44		3.8		褐色	砂粒・長石・石英	普通



第200図 土製品実測図

第2節 町田遺跡

1 遺構

(1) 積穴住居跡及び積穴造様について

当遺跡で検出された積穴住居跡は5軒、積穴造構は6基で、いずれも縄文時代の遺構と考えられる。遺跡は東側から伸びている舌状台地の平坦地に位置し、三方は谷津に囲まれ、谷津頭に住居跡が構築されている。

個々の内容については次表のとおりである。

積穴住居跡及び積穴造構一覧表

番号	位 漢	接種方向	中面形 長径×短径(m)	積 高(m)	か じ ト番	土 質	出土 資物	時 期	
1	B2-h-i ₁	N 51°-E	不規則丸形 3.45×3.00	5~12	28 N	縄文土器片 233点 石器 2点	縄文時代前期 (後期)		
2	B2-j+i ₂ C2-a+i ₂	N-87°-E	隅丸長方形 5.3×4.0	12~25	35床付 17	N	縄文土器片 98点	縄文時代前期	
3	B2-h-i ₂ B3-h-i ₂	N-64°-E	隅丸長方形 2.80×2.35	9~17		21 N	縄文土器片 222点	積穴造構	
4	B3-h-i ₂ i ₂ -i ₃		隅丸長方形 2.65×2.85	7~12		16 N	縄文土器片 120点	積穴造構	
5	B3-g ₁		隅丸長形 3.4×2.9	10~23		4 N	縄文土器片 41点	積穴造構	
6	B3-i ₄	N-18°-W	隅丸長方形 2.90×2.45	15~20	26 N	縄文土器片 54点	積穴造構		
7	C2-d ₁ -d ₂ c ₁ -c ₂	N 42°-W	隅丸長方形 4.5×3.7	25~35		9 N	縄文土器片 96点	縄文時代中期 (後期)	
8	C2-o-p-f ₁	N 27° E	不規則 丸 長 方 形	3.4×2.8	12~22	6 N	縄文土器片 12点	積穴造構	
9	C2-p ₁ -e ₁		隅丸長形 4.9×3.8	18~27		5 N	縄文土器片 96点	積穴造構	
10								欠番	
11	C3-b ₁ -b ₂ c ₁ -c ₂	N 50° W	隅丸長形 3.52×3.00	25~38	8 N	縄文土器片 106点	縄文時代前期		
12	B4-i ₁		小整円形 3.35	12~20	35床付 11	N	縄文土器片 27点	縄文時代中期	

まず住居跡について見てみると、遺構番号1・2・7・11・12号の5軒を積穴住居跡としたものである。各住居跡とも壁溝が検出されないことや復土が自然堆積を呈していること、積穴式であることなどの共通点はあるが、形態や付属施設などでは相違点がある。平面形では、隅丸形状を呈するものが1・11号住居跡の2軒、隅丸長方形を呈するものが2・7号住居跡の2軒、そして円形状を呈するものが12号住居跡である。規模が最も大きいものは2号住居跡で、長軸5.3m、短軸4m、最も小さいものは12号住居跡で、直徑3.35mである。他の3軒の住居跡はその中間の規模である。壁高は7・11号住居跡は30cm前後と比較的高いが、他の住居跡は低い。実際の掘り込みはもっと深いものであったと考えられるが、耕作などによって上面が崩壊してしまったのではないかと思われる。床面は、2号住居跡の南東側が擾乱を受けて不明な部分があるが、他

の4軒の住居跡はほぼ平坦である。また、7号住居跡の床面は硬く締まっている。炉は2・12号住居跡に検出されたが幾十の堆積はほとんどなく、それほど使用されなかったものと考えられる。柱穴と考えられるビットは各住居跡ともはっきりしない。

以上のことから推察すると、わずか5軒の住居跡の検出では多くを語れないが、数多くの土壙群の存在とともに、縄文時代前期後半の短期間にこの台地上で集落が営まれていたことが考えられる。

次に、住居跡として調査したが、整理の段階で竪穴遺構とした遺構番号3・4・5・6・8・9号跡の6基について述べることにする。

一般的な土壙より規模が大きく、形状や規模が住居跡と近似しているが、炉や柱穴と考えられるビットが検出されず、床面も軟弱で居住施設として断定できない遺構を竪穴遺構とした。

当遺跡から検出された竪穴遺構6基の平面形は、隅丸長方形と隅丸台形に分類される。これらを住居跡と比較してみると、規模は9号跡を除いては住居跡より小さく、形状はほぼ同形で、柱穴は不明であり、床面が軟弱であるというような共通点がある。竪穴遺構から出土した遺物は縄文土器片のみで、住居跡から出土した縄文土器片と同じ時期のものである。このようなことから、6基の竪穴遺構は覆土の堆積状況や形状等も住居跡と近似していることから、住居跡と同様、縄文時代前期後半に属するものと推定される。

これらのものについては、位置、作業場、祭祀的な場等の小屋跡と考えられるが、その機能を知る資料は得られなかった。今後は、集落内におけるこの種の遺構と住居跡の配置関係、竪穴遺構自体の用途などを検討していくなければならないと考える。

(2) 上塙について

当遺跡から検出された土塙は244基であったが、その内2基は井戸跡と考えられる。これらの土塙群は主に台地縁辺部に位置し、南側の緩斜面と台地の中部には数が多い。遺物の出土が皆無のものが38%を占めているが、遺物の出土がみられる土塙でも出土数は非常に少ない。遺物の大半は縄文土器片で、前期後半の浮島式に比定されるものが大半である。

土塙群を形態分類してみると、次のようになる。

平面形

- A 円形（不整円形も含む）
- B 楕円形（不整椭円形、長楕円形、不整長楕円形も含む）
- C 長方形（隅丸長方形も含む）
- D 舟形
- E 不定形

規格 (長径・長軸)

- I 長径・長軸が1m未満
- II 長径・長軸が1m以上1.5m未満
- III 長径・長軸が1.5m以上2m未満
- IV 長径・長軸が2m以上

規模 (深さ)

- a 壁底面までの深さが25cm以下
- b 壁底面までの深さが26~50cm
- c 壁底面までの深さが51~75cm
- d 壁底面までの深さが76~100cm
- e 壁底面までの深さが101~125cm
- f 壁底面までの深さが126cm以上

断面形状

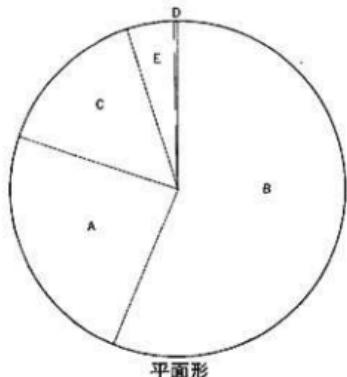
- | | | | |
|---|--|----------|-------|
| 1 | | 壁面一外傾・緩斜 | 底面一亘状 |
| 2 | | 壁面一垂直 | 底面一亘状 |
| 3 | | 壁面一垂直 | 底面一平坦 |
| 4 | | 壁面一外傾・緩斜 | 底面一平坦 |
| 5 | | 袋状 | |
| 6 | | V字状 | |
| 7 | | 壁面一外傾・緩斜 | 底面一凸凹 |

以上のような分類に基いて、当遺跡で検出された土壙群の形態上の特徴を考えてみることにする。

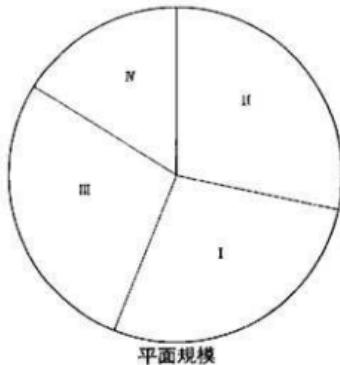
〈平面形〉 第201図に示したように、橢円形もしくは不整楕円形を呈するB類に属するものが56%と最も多く、次いで円形もしくは不整円形を呈するA類に属するものが24%、長方形もしくは隅丸長方形を呈するC類に属するものが15%で、舟形を呈するD類に属するものが1基あり、その他は不定形のものである。当遺跡で検出された上塙群の平面形は、橢円形状を呈しているものが主体を成しているといえる。

〈規模〉 まず、長径・長軸を見てみると、第201図に示したようにほぼ同じような検出数を示している。I類・II類・III類がそれぞれ約28%ではほぼ同数、IV類が16%とやや少ない。深さは第201図に示したように26cmから50cmまでのb類のものが44%、25cm以下のa類のものが39%で、このa・bの二類だけで83%を占めている。1m以上の深さを測るものは4基ほど検出されている。規模だけをみると、長径・長軸は0.8~1.9m、深さは20~50cmのものが主体を成しているといえる。

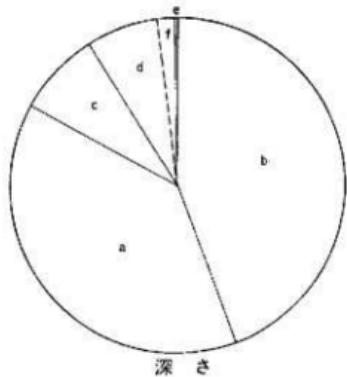
〈断面形状〉 第201図にみられるように、壁面はやや緩やかな傾斜をもって立ち上がり、底面は平坦を呈する4類に属するものが50%を占めて最も多く、次いで壁面はやや緩やかな傾斜をもって立ち上がり、底面は皿状を呈する1類に属するものが20%、円筒形状を呈する3類に属するものと底面が凸凹を呈する7類に属するものがそれぞれ14%と続く。断面形状だけをみると、主



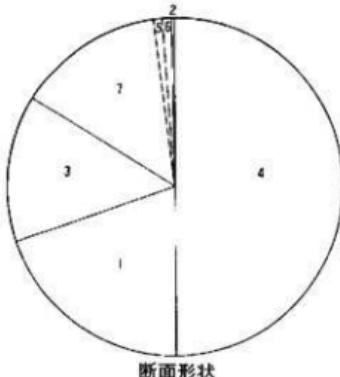
平面形



平面規模



深さ

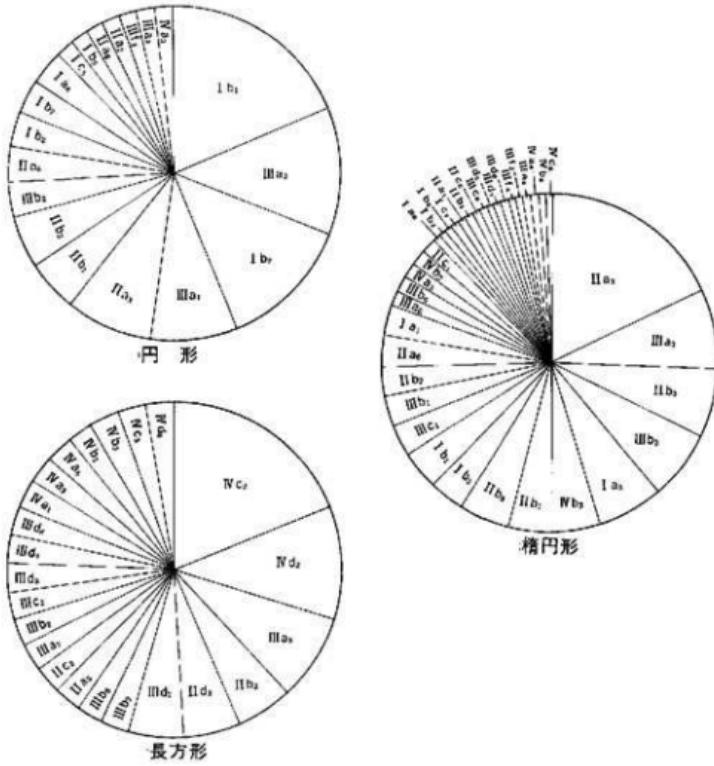


断面形状

第201図 土壌形態規格分類

体は「U」形を呈しているものである。

以上のことから土壌の形状・規模等を検討してみると、平面形は橢円形状を呈するものが主で、他に円形状と長方形形状を呈するものと三つに大別できる。長径・長軸は最小のものが0.54m、最大のものが9.13mと幅にはらつきがあるが、0.8mから2mまでのものが大半を占める。深さは最も浅いものが10cm、最も深いものが150cmとやはりはらつきがみられるが、主体は20~50cmのものである。さらに断面形状は壁面がやや緩やかに外傾して立ち上がり、底面が平坦を呈しているものが主体を成している。第203図は土壤群の長径・長軸と深さの関係を表したものであるが、長径・長軸が2m以下のものは、深さが40cm以下の浅いものが多い。深さが50cm以上のものは、長径・長軸が1.4m以上のものが大半を占めている。ところで、平面形、規模、断面形状の組み

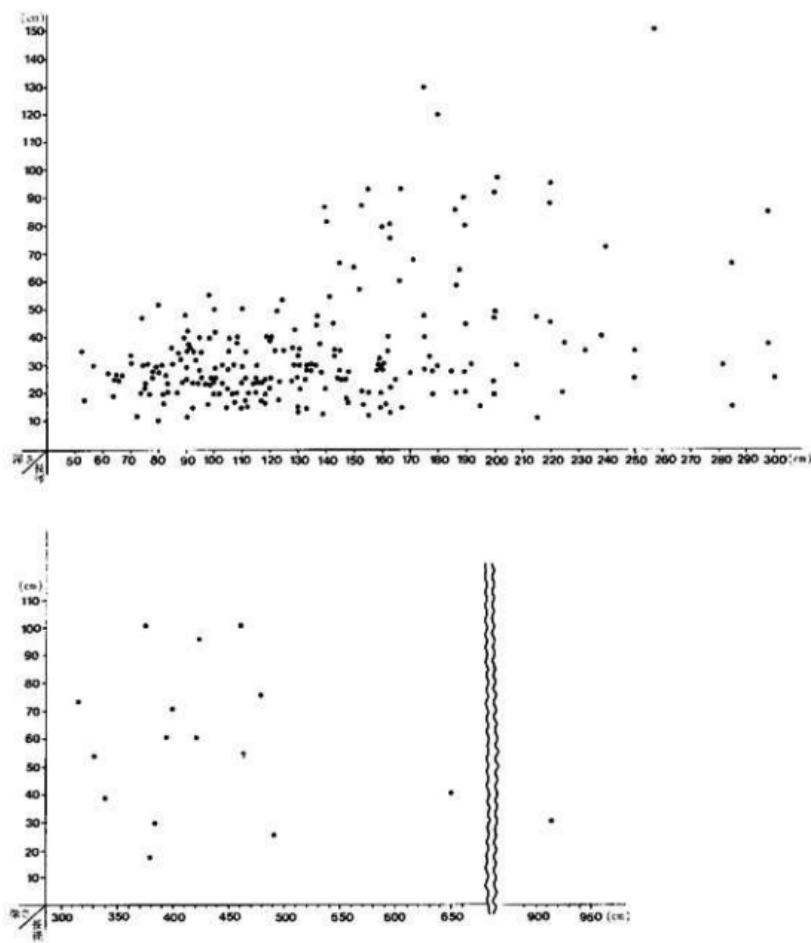


第202図 土壌の平面形からみた分類

合わせを見てみると、円形状を呈する土壌は、反径・長軸が0.5~1m、深さが50cm以下、壁面がやや緩やかに外傾して立ち上がり、底面が皿状か平坦を呈しているものが一般的といえる。楕円形状を呈する土壌は、長径・長軸が1~2m、深さが50cm以下、壁面がやや緩やかに外傾して立ち上がり、底面が水平を呈しているものが一般的といえる。

土壙からの出土遺物について考えてみると、242基の土壙のうち、十器が出上した上壙は150基である。いずれも新片で、しかも覆上巾からの出上で上壙の時期を決定し得るものではない。これらのほとんどは縄文時代前期後半の浮島式や興津式に比定されるものである。

当遺跡から検出された土壙群に関して、規模や形態についての分類。出土遺物を検討してきたが、上壙の機能を示す手觸りは得られなかった。



第203図 土壌の長径と深さの関係

ところで、当遺跡の土壤群の中では深さが比較的深い長方形状を呈した土壤については、覆土の堆積状況や地元の人たちの話を総合すると、近年の芋穴と考えられる。

222・238号土壤は井戸跡と考えられる。222号は開口部が長径2m、短径1.6mの梢円形を呈し、深さ2.6m以上である。断面は円筒形状を呈し、粘土層を掘り込んで構築している。238号は開口

部が直径2.7mの円形を呈し、深さ3m以上である。その断面は円筒形状を呈し、粘土層を掘り込んで構築している。どちらにも上屋の構造痕跡は見当らなかった。覆土は自然堆積で、遺物は縄文土器片が少量流れ込んだ状態で出土しただけで、本跡に関連する遺物の出土はなかった。時期は不明である。

(3) 溝について

長短7条の溝が検出され、北西～南東に斜走するものと、北東～南西に斜走するものとに分けられる。溝幅は50cm前後のものと、1m前後のものに分けられ、前者は1・3・4号溝であり、後者は2・5・6・7号溝である。深さはいずれも30cm以下と浅く、溝底面のレベルは同一ではないが、一般に台地平坦部においては傾斜はみられない。断面形は「U」形を呈しているものが多く、その他に「V」形を呈しているものもみられる。4号溝の底面は凸凹している。

溝の傾斜は台地平坦部にはみられず、わずかに池形の傾斜にしたがって溝底面のレベル差が認められる程度なので、排水溝とは考えられない。当遺跡から検出された溝はほとんどが直線的で、深さも比較的浅く、溝に関連すると思われる遺物の出土もみられず、掘り方や上層の堆積状況も同様の状態を示している。このようなことから、いずれの溝もほぼ同時期のもので、根切り溝ではないかと思われる。

(4) 堀について

当遺跡の東端部に北西～南東に斜走する1条の堀が検出された。堀の上幅は3m前後、底面幅は30cm前後、深さ1.5mほどで、断面が薬研状を呈する空堀である。虎口と考えられる堀の切れ目があり、覆土を観察すると、土壘が存在していたことがうかがえる流れ込みの上層が認められた。この堀は、当遺跡の北東方約300mのところに存在した貝原塙城の外堀と思われる。貝原塙城は南北朝時代に高井城と称し、宮方の城で、代々諸岡氏の居城となつた。また、戦国時代は小田氏の支城で、貝原鈴監氏が城主の時、江戸輪の土岐氏に滅ぼされたとされている。現在は山林や畠地として利用され、上堀と空堀が遺構として残存している。

2 遺 物

(1) 土器について

当遺跡から出土した土器は大半が縄文土器で、その他にごく少量の上層器や陶器がある。完形で出土した縄文土器ではなく、すべて破片で器形を推定できるものはなかった。遺跡全体からの遺物の出土量は少なく、もちろん遺構からの出土も少ない。

縄文土器のはとんどは前期後葉の浮島式、興津式、諸磯式に比定されるもので、中期や後期初頭に属するものも若干出土している。第4章第6節で述べたように12群に分類して、それぞれの



第204図 把手実測図

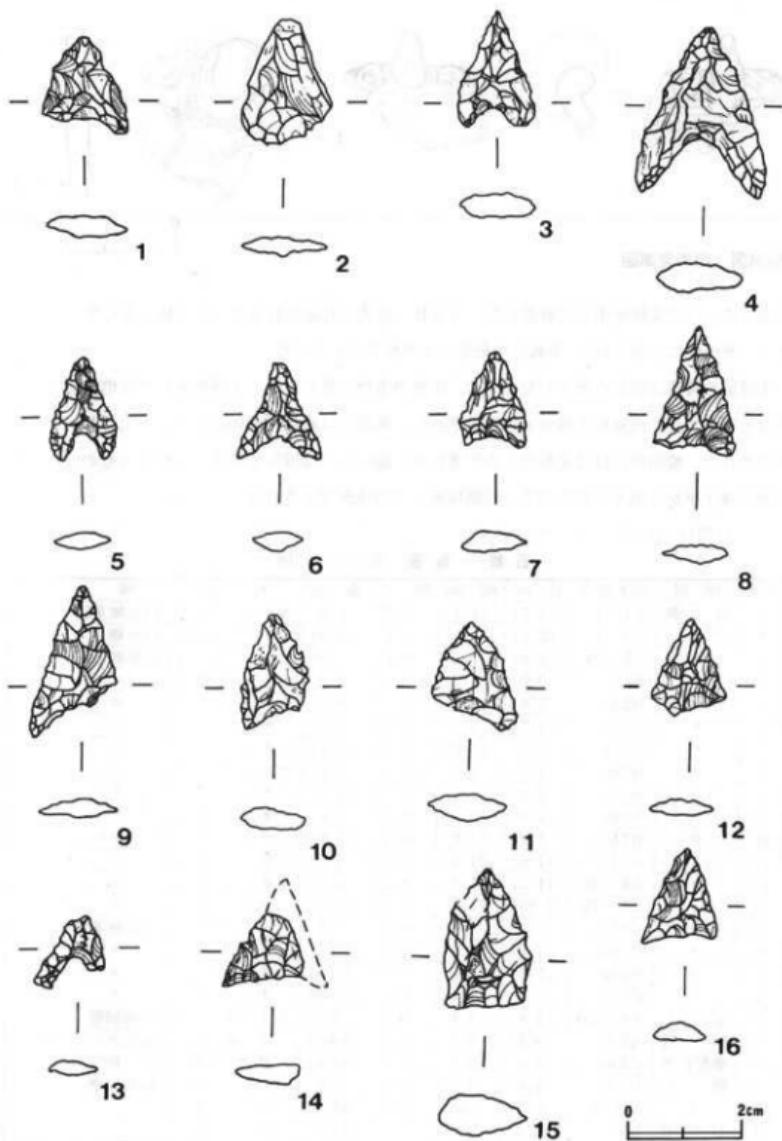
土器片について文様を中心に解説した。浮島II・III式に比定されるものが主体を成しているといえる。その他に、第204図に掲載した把手が2点検出されている。

土師器や陶器は堀から出土したもので、中世の遺物と思われる。土師器としては燈明皿が5点、内耳土器が2点、浅鉢形土器が1点検出された。陶器では瀬戸の浅鉢が1点、黒天目茶碗が1点検出された。燈明皿はほぼ完形のものが多いが、他のものは破片である。これらのものはいずれも堀の覆土中から出土したもので、貝原塚城との関連が想定される。

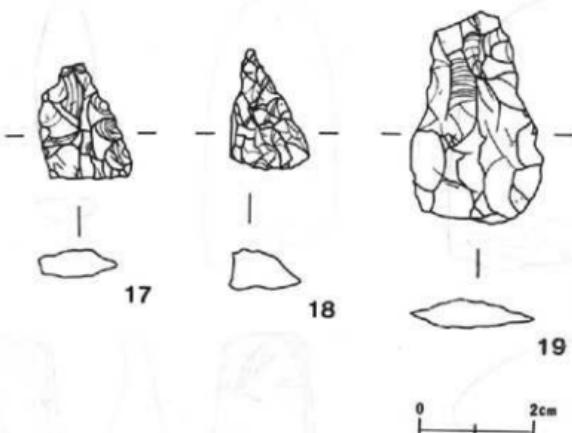
(2) 石器について

石器一覧表 (第205~207図)

番号	類別	出土地点	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石 材	備 考
1	石 錫	SI-1	(1.7)	(1.5)	0.35	0.8	ホルンフェルス	凹基無茎鐵
2	〃	SI-1	(2.2)	(1.6)	0.3	(1.0)	ホルンフェルス	円基鐵
3	〃	SK-24	(2.0)	(1.4)	0.4	(1.0)	ホルンフェルス	凹基無茎鐵
4	〃	B2 i _r	3.0	2.3	0.5	1.9	ホルンフェルス	〃
5	〃	B2 h _o	1.8	1.25	0.3	0.5	チャート	〃
6	〃	C2 a _s	(1.7)	1.5	0.3	(1.0)	チャート	〃
7	〃	C2 b _e	1.7	(1.2)	0.35	(0.6)	チャート	〃
8	〃	B2 h _s	2.3	1.4	0.3	1.0	ホルンフェルス	〃
9	〃	B2 h _g	2.2	(1.5)	0.3	(1.5)	チャート	〃
10	〃	B2 h _e	2.0	(1.2)	0.4	(1.0)	チャート	〃
11	〃	B2 h _r	1.9	(1.5)	0.5	(1.0)	チャート	〃
12	〃	A5 j _s	(1.6)	(1.3)	0.25	(1.0)	チャート	〃
13	〃	SK-25	(1.2)	(1.3)	0.25	(0.2)	チャート	〃
14	〃	SK-15	(1.25)	(1.4)	0.35	(0.9)	チャート	〃
15	〃	C2 b _e	2.5	1.5	0.7	2.5	チャート	平基無茎鐵
16	〃	C5 a _s	1.7	1.3	0.3	0.8	チャート	〃
17	〃	B2 g _e	(2.1)	(1.6)	0.5	(1.5)	チャート	〃
18	〃	C2 b _e	2.1	(1.4)	0.7	(1.2)	チャート	〃
19	ポイント	SK-220	(3.8)	2.4	0.5	(5.0)	ホルンフェルス	片面剥離
20	磨 石	A5 f _s	(9.5)	8.1	4.8	(534.0)	流 紋 岩	敲石としても利用
21	磨製石斧	C2 b _e	5.6	2.1	0.8	(14.0)	緑泥片岩	小 形
22	砥 石	B2 j _s	(4.8)	(3.3)	2.1	43.1	砂 岩	縁面研磨
23	石 刃	SD-8	(5.9)	(4.85)	(2.8)	(64.0)	砂 岩	
24	石 刃	B6 i ₁	7.4	2.8	0.9	24.9	頁 岩	
25	垂れ飾り	C2 a _s	1.6	1.4	1.1	3.0	ひ す い	



第205図 石器実測図 (1)

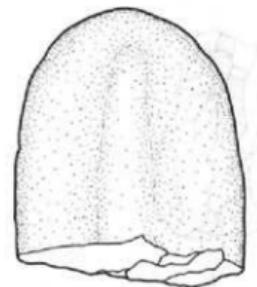


第206図 石器実測図 (2)

当遺跡から出土した石器は総数で25点と非常に少ない。出土状況をみると、遺構に伴って出土したもののは7点で、その他はグリッドからの出土である。従って若干の説明を加えてまとめとしたい。

種類と出土点数は第208図に示したように、石鎚18点、ポイント1点、磨製石斧1点、石刃1点、磨石1点、砥石2点、垂れ飾り1点である。時期は住居跡や土壙等の関連から、縄文時代前期後葉に属するものと思われる。検出された数少ない石器群の中では圧倒的に石鎚が多く、敲石、凹石、石皿等が検出されなかったことを考えると、当遺跡の生産活動は狩猟を中心としたものであろうかと思われるが、余りにも石器の出土点数が少ないので断定はできない。

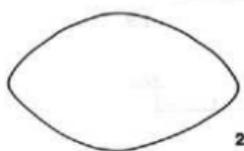
第209図は石材を表したもので、チャートとホルンフェルスが多い。これらはいずれも石鎚やポイントとして加工し使用されている。黒曜石を材料とした石鎚の出土はみられない。



—



21



20



—



22



—



23



—



24



25

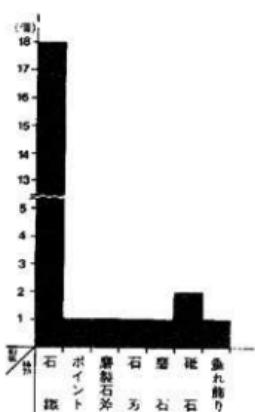
0

5 cm

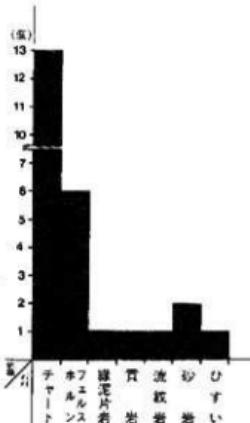
0

2 cm

第207図 石器実測図 (3)



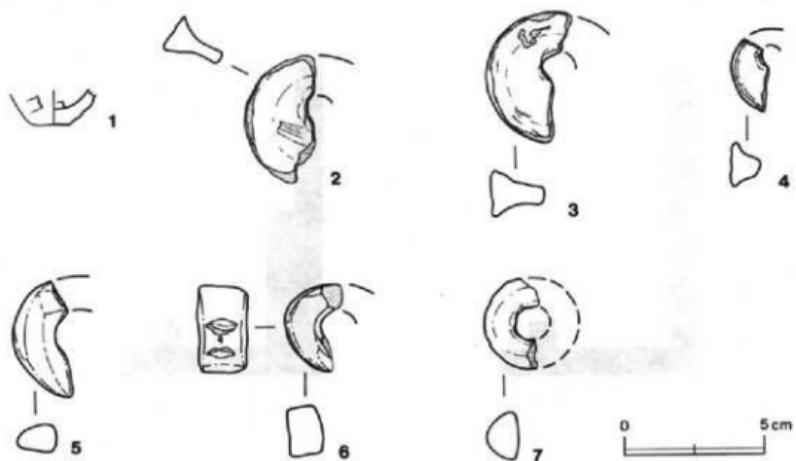
第208図 石器の種類と出土点数



第209図 石材による分類

(3) その他の遺物

その他の遺物として、土製品を一括して第210図に掲載した。1は25号土壙の覆土中から出土した手捏ねのミニチュア土器で、完存率は70%である。器高は1.2cm、外側はにぶい橙色、内側は橙色を呈し、胎土に砂粒や長石を含んでいる。2~5は上製の甲状耳飾りと思われるもので、2は134号土壙の覆土中から、3~5はグリッドの覆土中から出土したものである。いずれも約半分ほど欠損しているが、側面や縁辺は良く研磨されている。6は135号土壙の覆土中から出土した円柱で、約半分ほどを欠損している。中央は空洞になって槽車形を呈するので、推定される大きさは直径3cm、厚さ1.3cmである。空洞部の最小径は推定1.1cmである。器面は良く研磨されており、側面に2か所刺突が施されている。同じ土壙内から縄文時代前期後半の土器片が出土しているので、同時期の所産ではないかと思われる。7はB2 i.e. 調査区の覆土中から出土したもので、算盤玉状を呈する土製品である。約半分ほどを欠損しているが、直径3.3cm、孔径1.2cmを測る。祭祀的なものとして利用されたものか、それとも装飾品として利用されたものは不明である。



第210図 土製品実測図

終章 むすび

竜ヶ崎ニュータウン建設地域内における仲根台B遺跡と町田遺跡の調査結果は、これまで述べてきたように、縄文時代、古墳時代、歴史時代、中世、近世の遺構・遺物が検出された。

仲根台B遺跡からは、主として縄文時代中期後半～後期中葉に至る住居跡や土壙が検出され、さらに遺物の多くは縄文時代後期前半に属する壺之内式の土器である。当遺跡はこの期を中心にして生活が営まれた場所であるということができる。仲根台B遺跡は、四方を削平されており、3,200m²ほどの調査であるが、断定的ではないが、当遺跡の集落構成は北東側支谷を意識して営まれており、時代が新しくなるにつれてその傾向は薄れていき、さらに台地基部地域にまで延びていくものと考えられる。

町田遺跡は、住居跡や遺物は極めて少なく、定住的な生活が営まれた遺跡かどうかの確認には至らなかった。比較的多くの土壙が検出されたが、その土壙群の大半は台地平坦部に存在し、横円形もしくは円形の平面形状を呈するものが多く、長径もしくは直径は0.8～1.9m、深さは20～50cmの規模のものが多い。住居跡が遺跡の端部に検出されていることから、今回の調査対象地域は集落のはずれという観が強い。そのことから考えると、当遺跡の主体をなしている縄文時代の集落は、地形等から判断してむしろ台地北側の縁辺部地域で営まれていたのではないかと考えられる。

いずれにしても、今回の調査結果によって浮き出されたものは大きく、本地域における縄文時代前期・中期・後期のようですが、より多く解明されたものと思われる。

なお、この成果をまとめるにあたって、調査担当者はもちろん、関係各位の御指導や御協力があったことに対して、文末ではあるが、心から感謝の意を表したい。

写 真 図 版

仲根台 B 遺跡



発掘調査前の全景



発掘調査前の全景

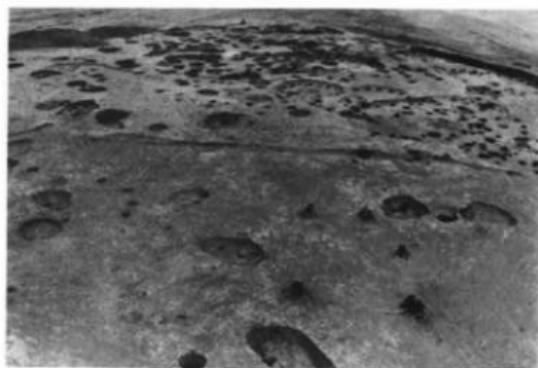


発掘調査風景

調査前全景・調査風景



発掘調査後全景

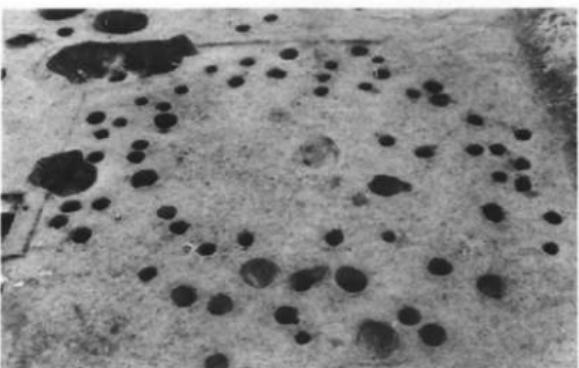


発掘調査後全景



第1号住居跡

調査後全景・住居跡全景



第3号住居跡

住居跡全景・遺物出土状況



第5号住居跡
遺物出土状況

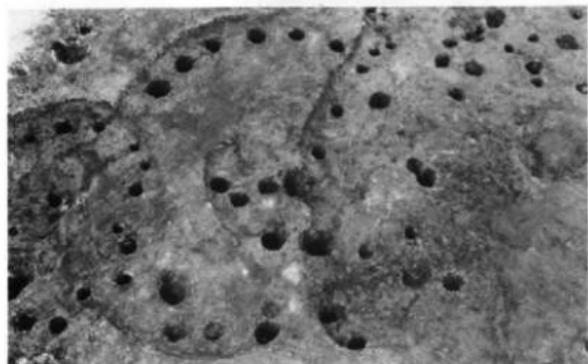
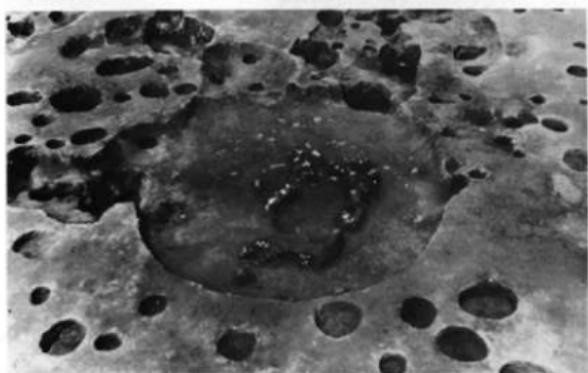
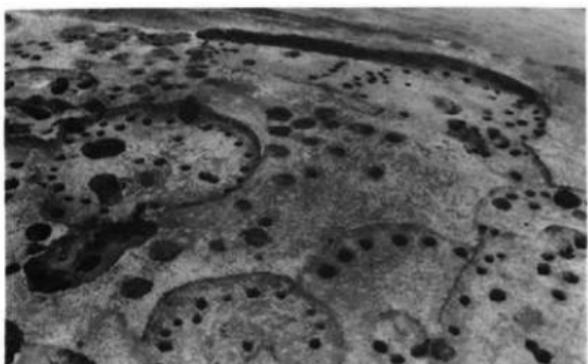


第5号住居跡
遺物出土状況



第5号住居跡

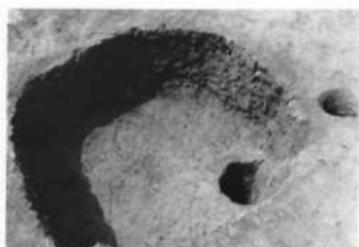
遺物出土状況・住居跡全景



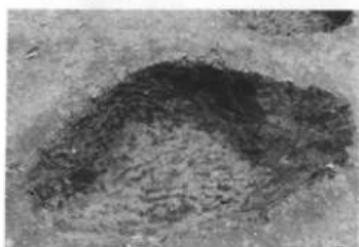
住居跡全景



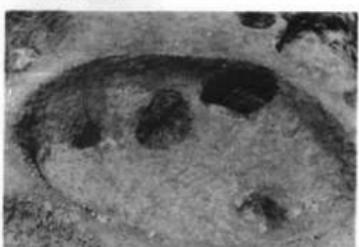
第1号土壤



第5号土壤



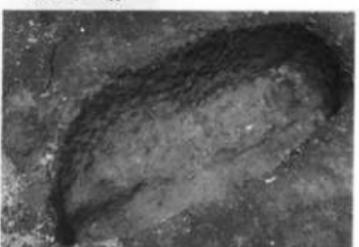
第2号土壤



第6号土壤



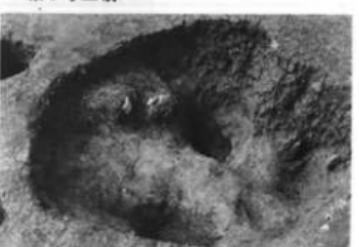
第3号土壤



第7号土壤

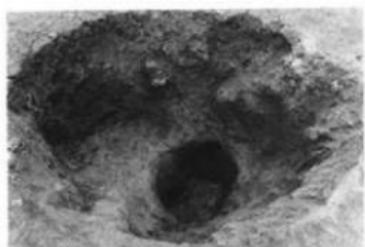


第4号土壤



第9号土壤

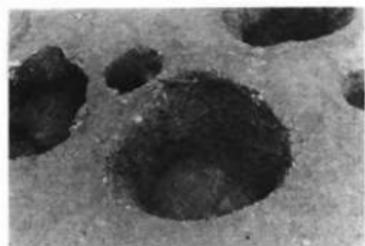
土壤全景



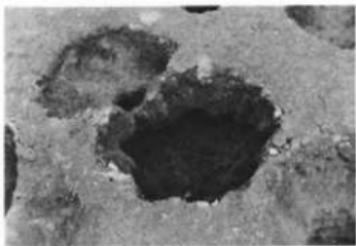
第10号土壤



第23号土壤



第15号土壤



第25号土壤



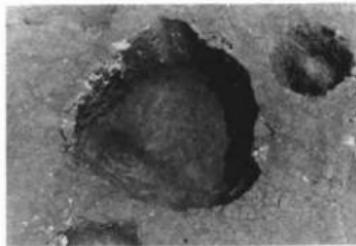
第16号土壤



第46号土壤

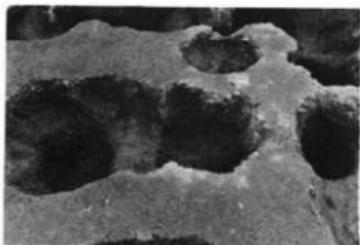


第20号土壤

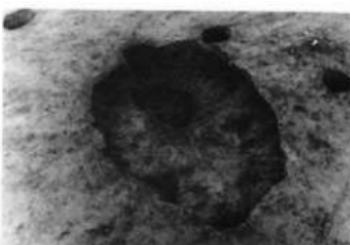


第54号土壤

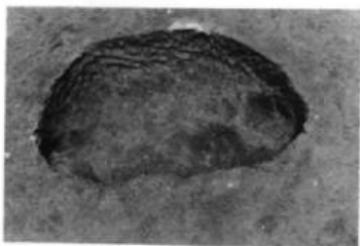
土壤全景



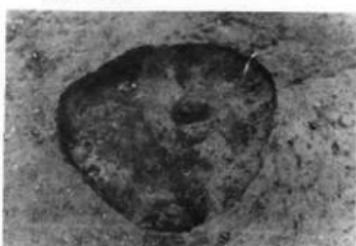
第58号土壤



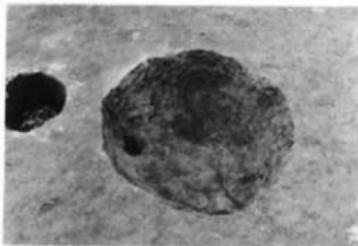
第76号土壤



第69号土壤



第77号土壤



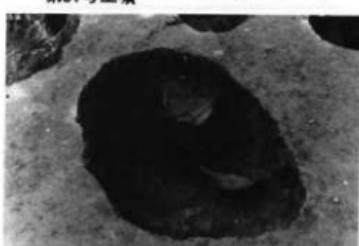
第71号土壤



第91号土壤

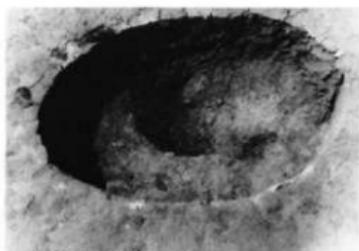


第75号土壤



第92号土壤

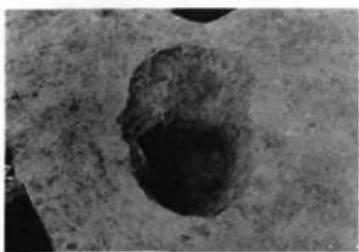
土壤全景



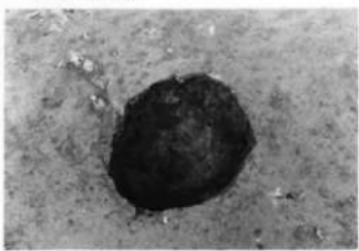
第103号土壤



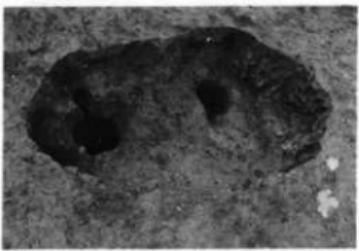
第3号沟



第105号土壤

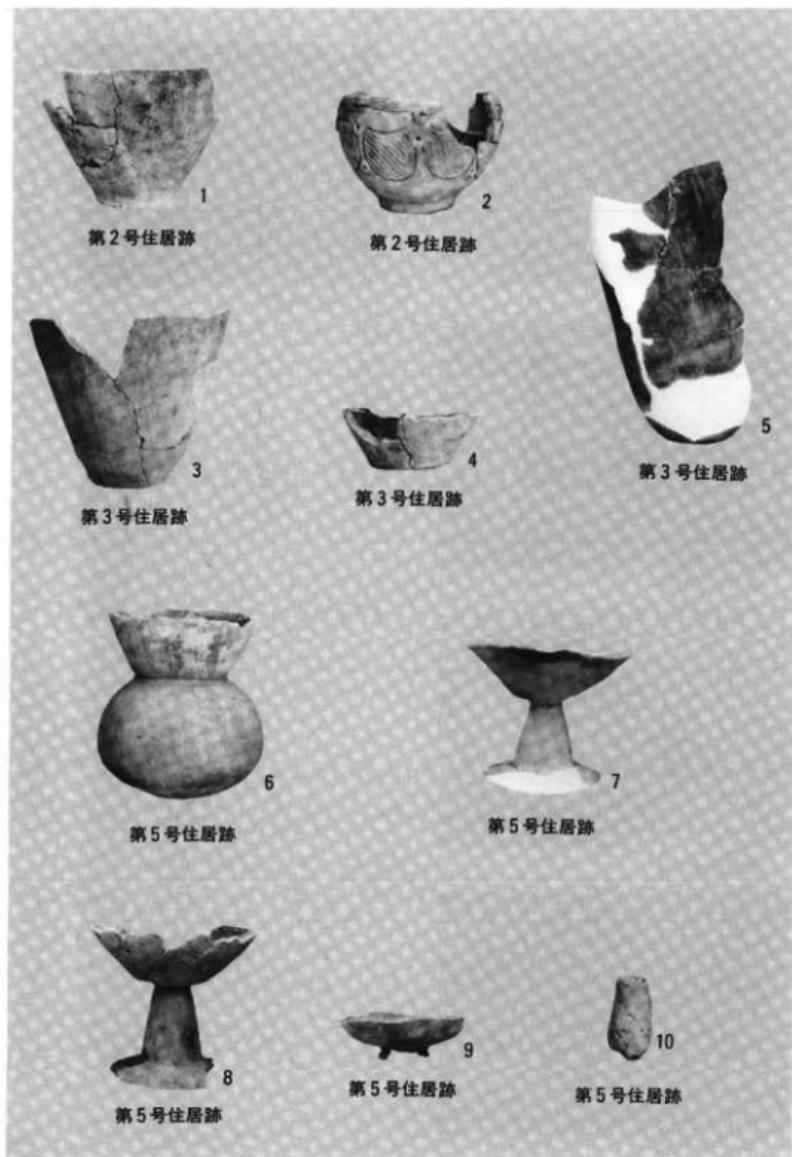


第108号土壤



第109号土壤

土壤全景·溝全景



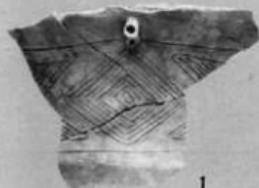
住居跡出土土器(1)

S = 1%



住居跡出土土器(2)

S = 1/6



第16号住居跡



第16号住居跡



第16号住居跡



第16号住居跡



第16号住居跡



第16号住居跡



第16号住居跡



第17号住居跡



第5号土壤



第7号土壤



第7号土壤



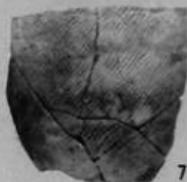
第10号土壤



第12号土壤



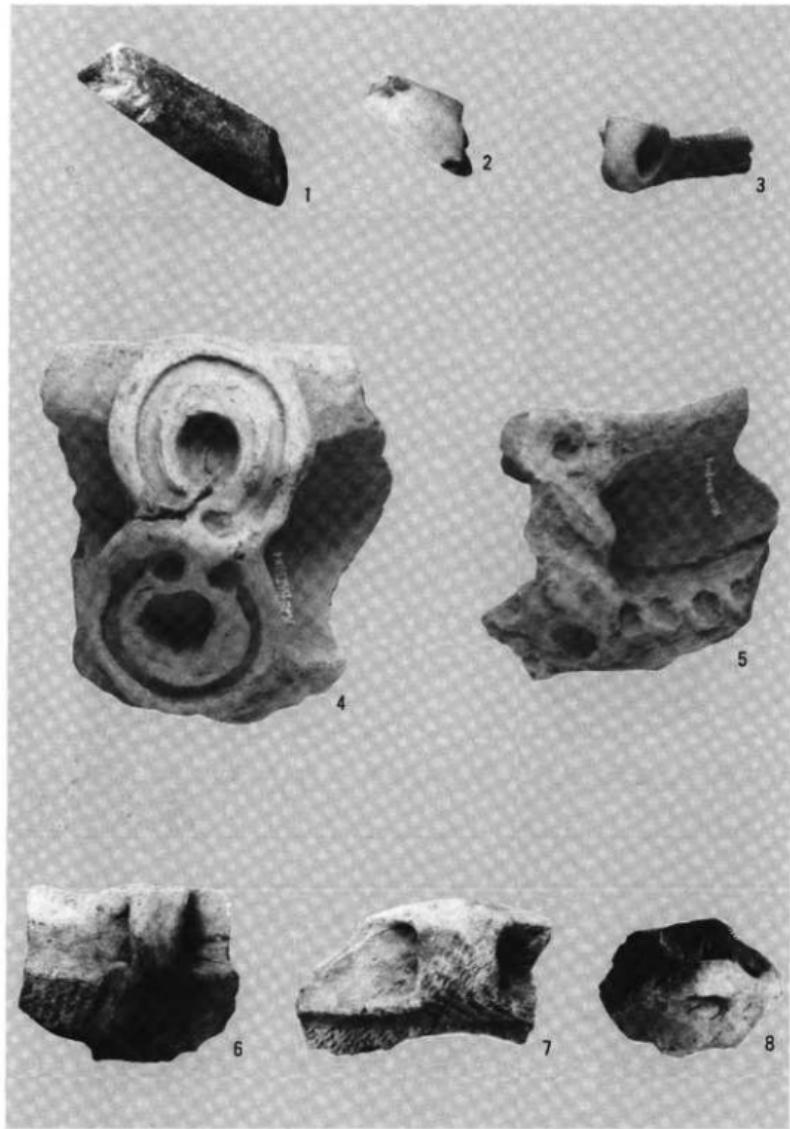
第45号土壤



第91号土壤

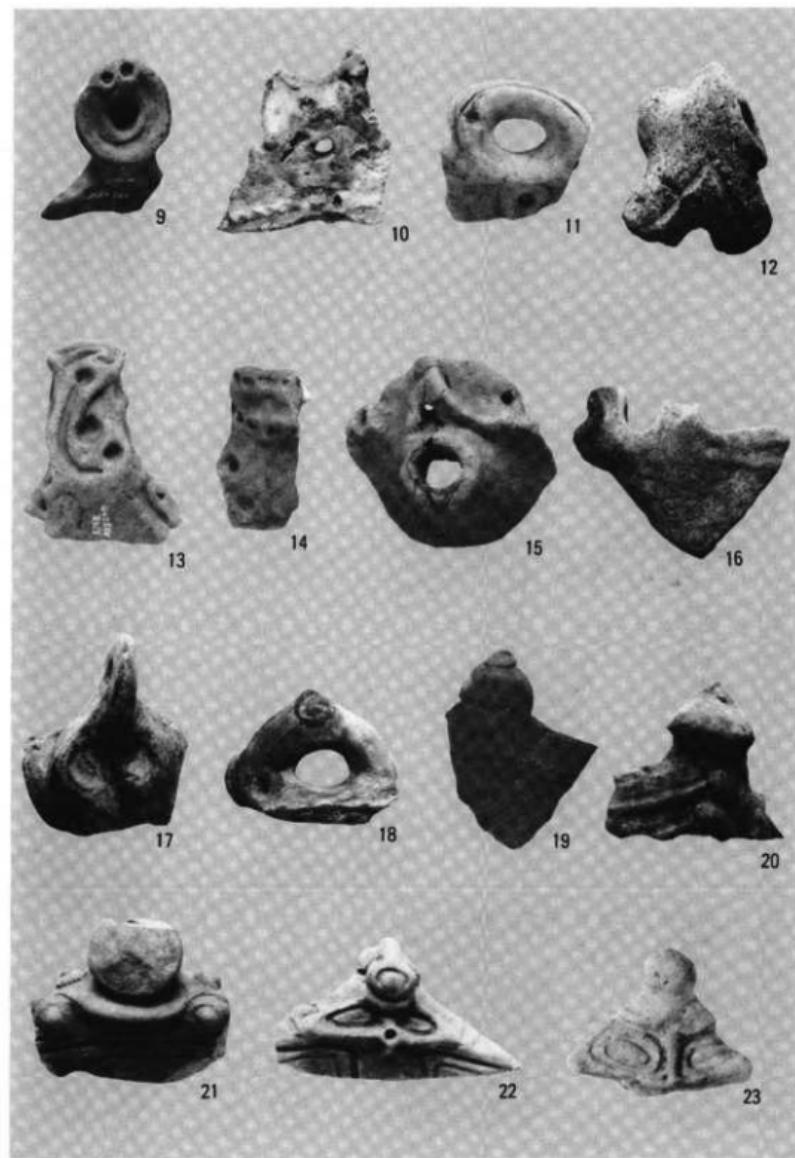
土壤出土土器

S = 1/6



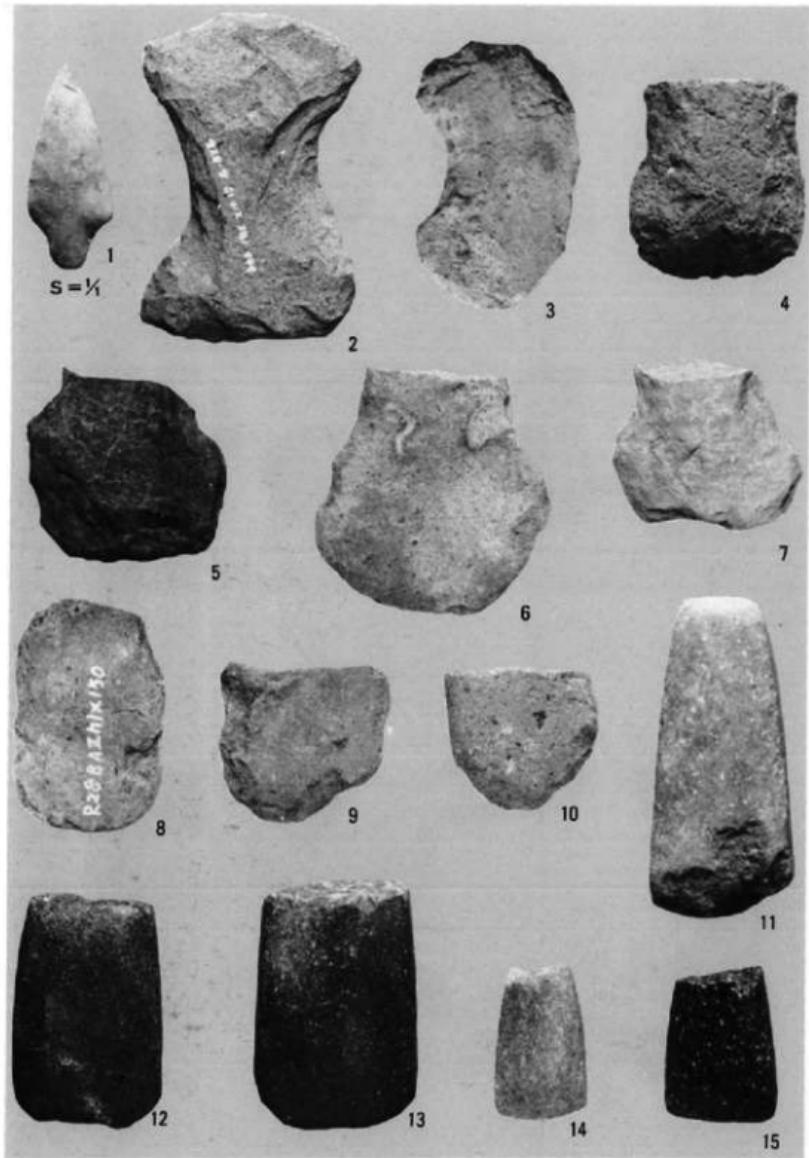
注口土器·把手部

S = $\frac{1}{2}$



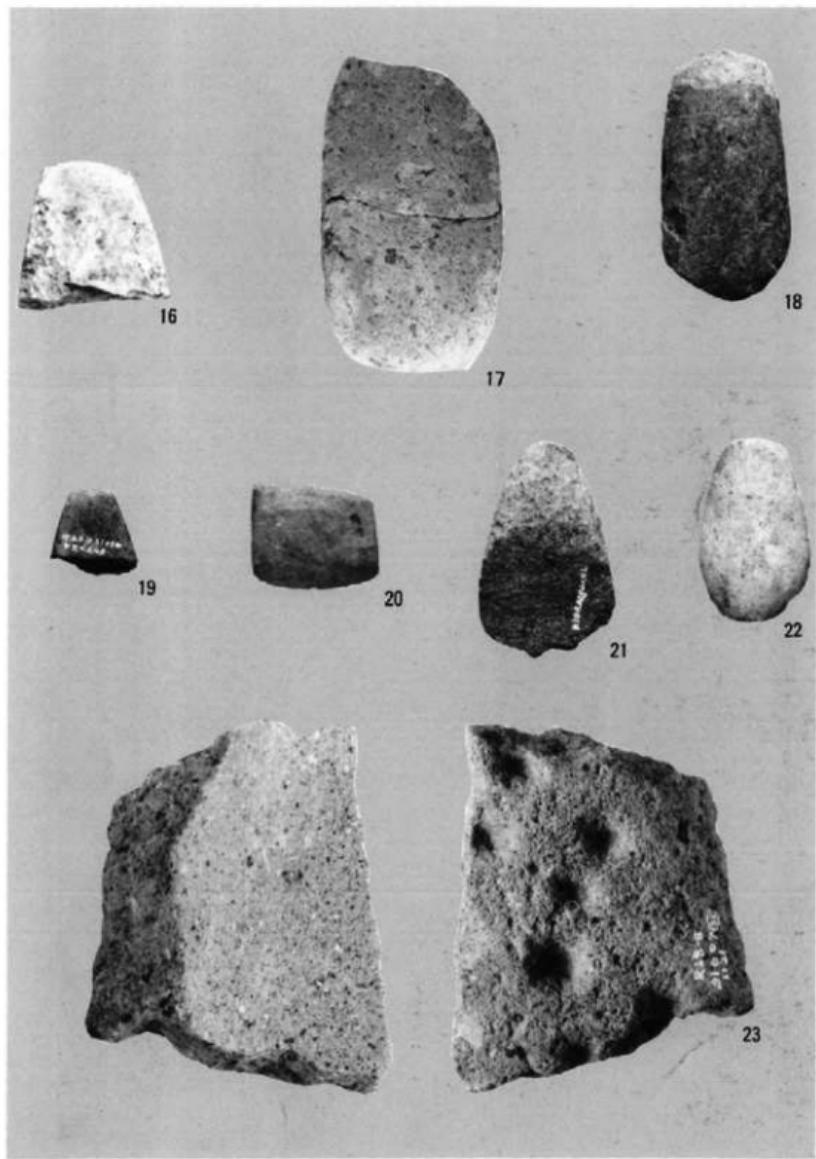
把手部

 $S = \frac{1}{2}$



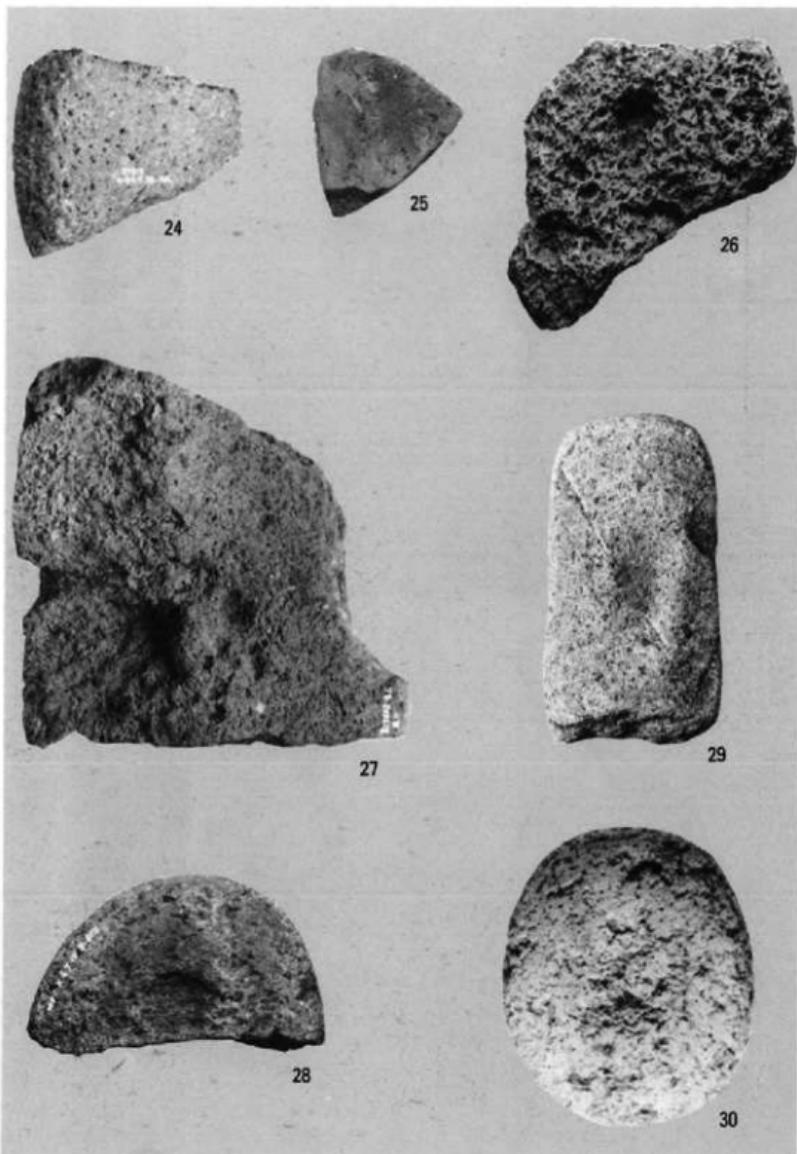
石器(1)

S = $\frac{1}{2}$



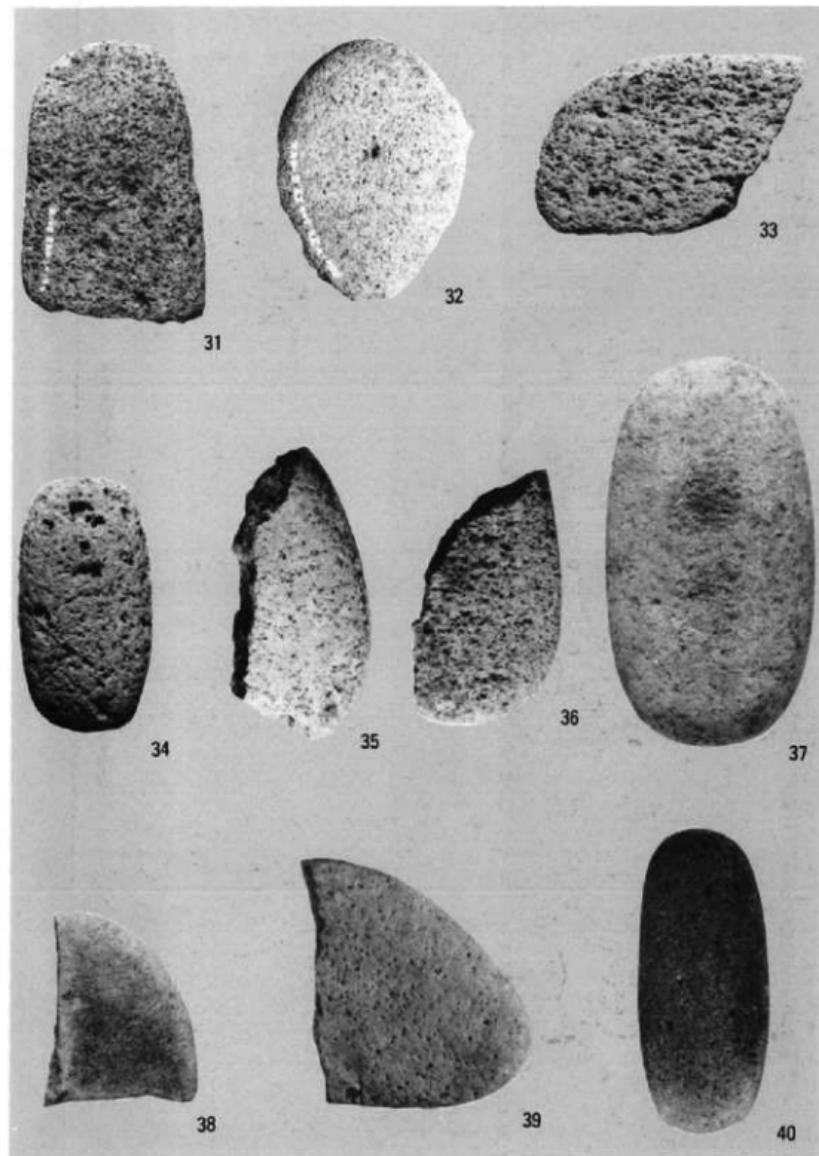
石器(2)

 $S = \frac{1}{2}$



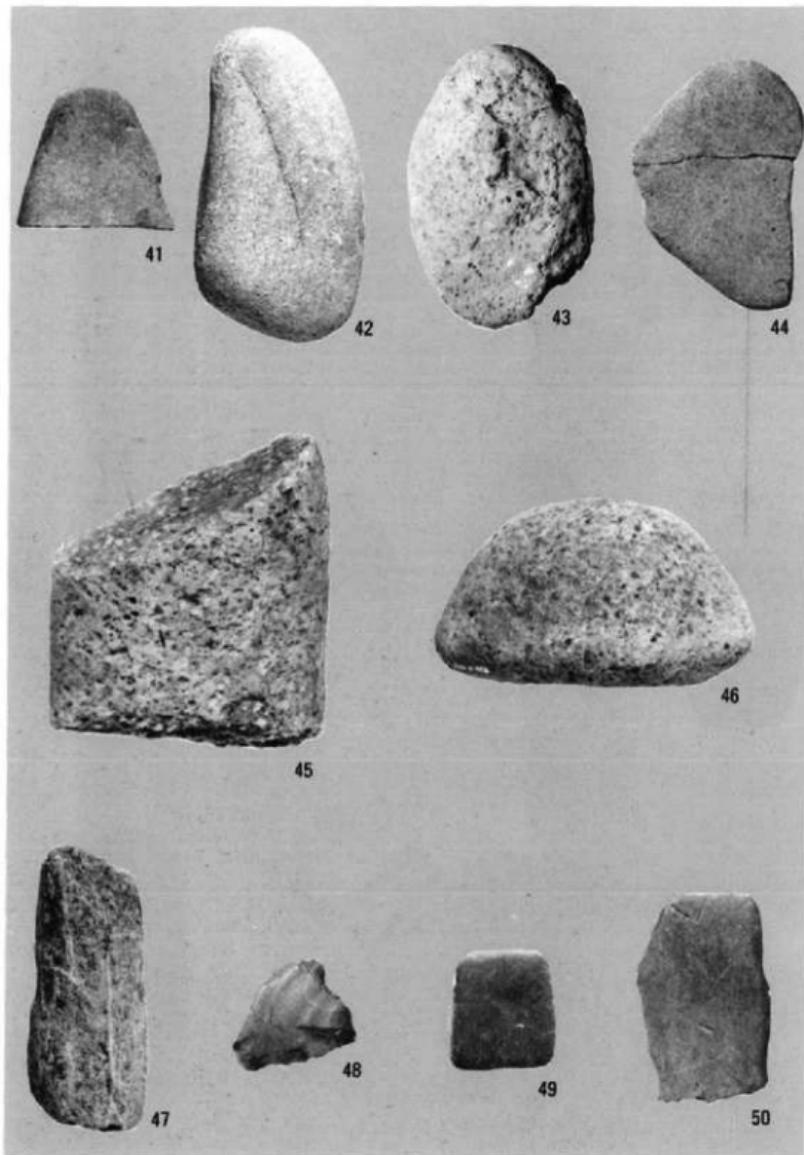
石器(3)

$S = \frac{1}{2}$



石器(4)

 $S = \frac{1}{2}$



石器(5)

S = $\frac{1}{2}$



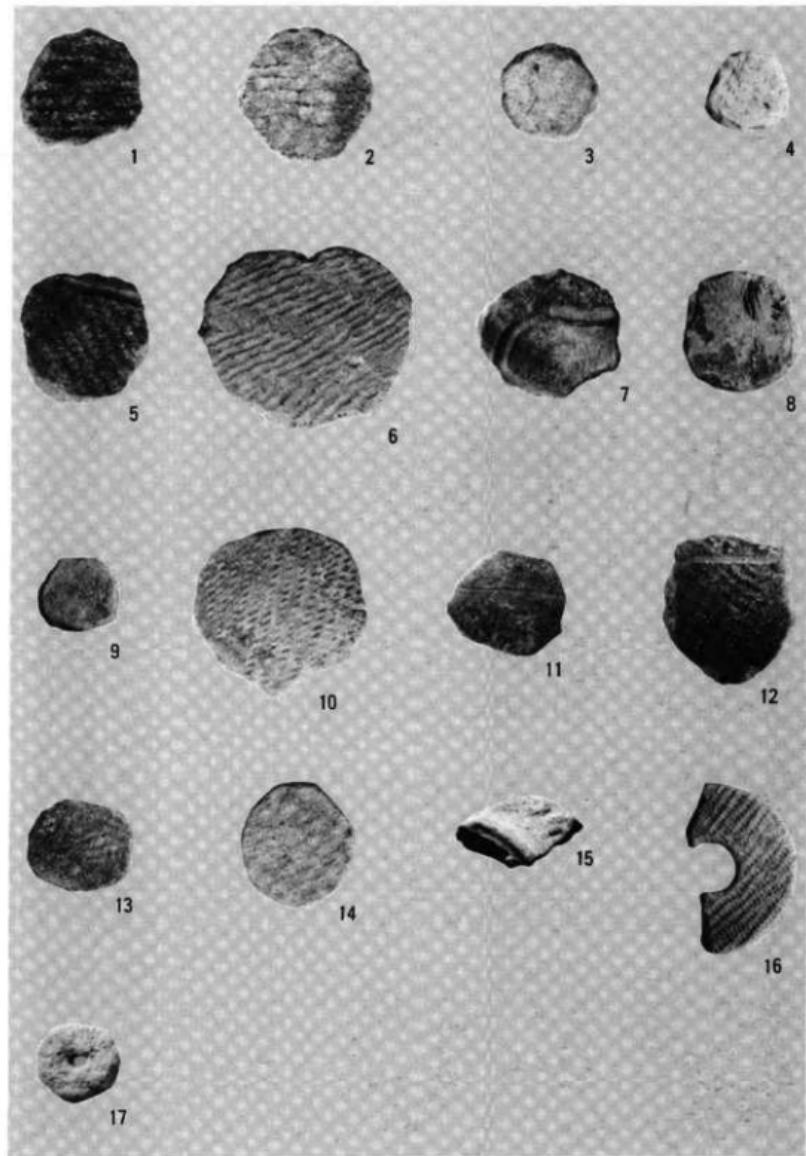
土器片鍾(1)

 $S = \frac{1}{3}$



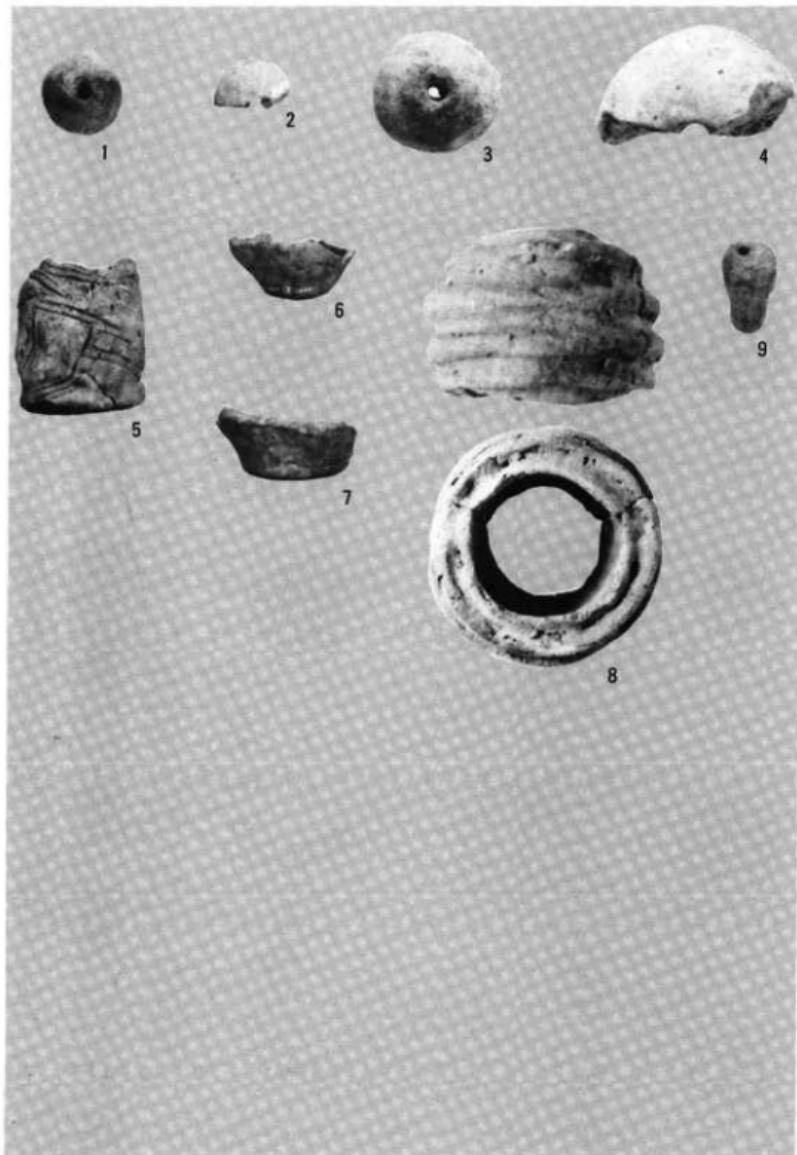
土器片錐(2)

S = $\frac{1}{3}$



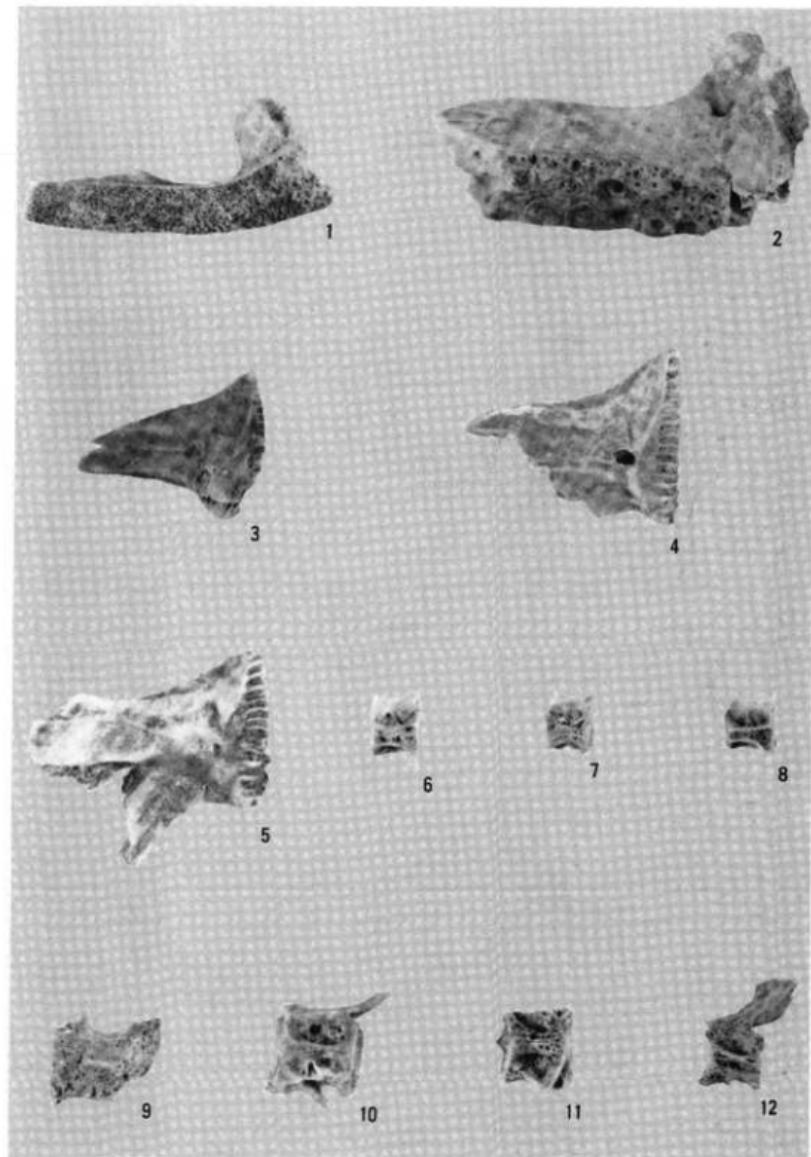
土製円板・有孔円板

 $S = \frac{1}{2}$

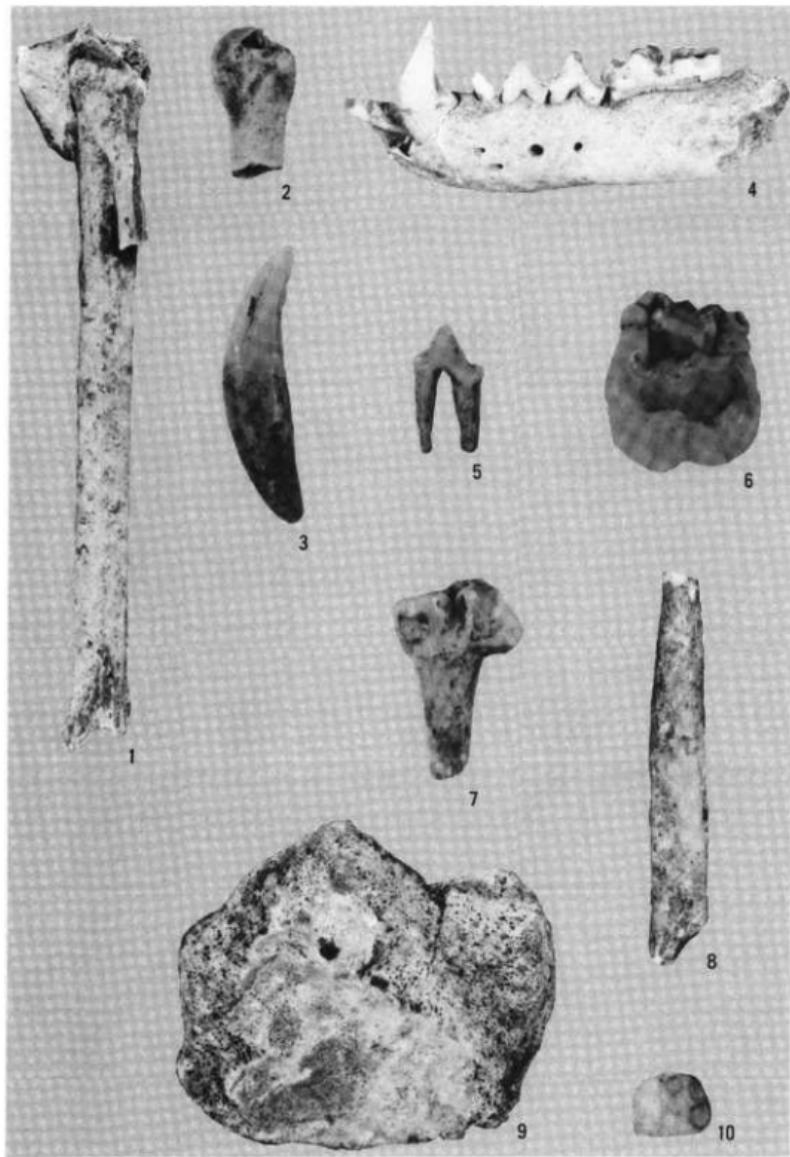


土玉·手捏土器

S = ½



魚類遺体



鳥類・哺乳類遺体

町田遺跡



伐開作業

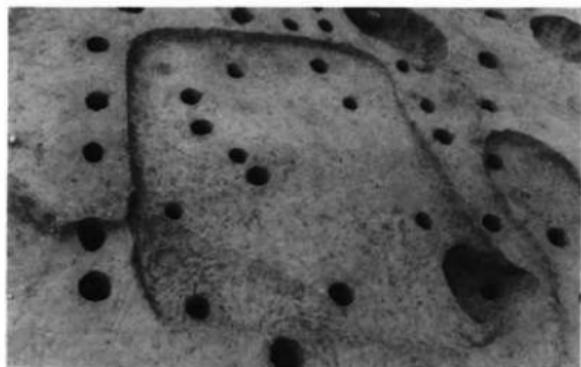


発掘調査前の全景

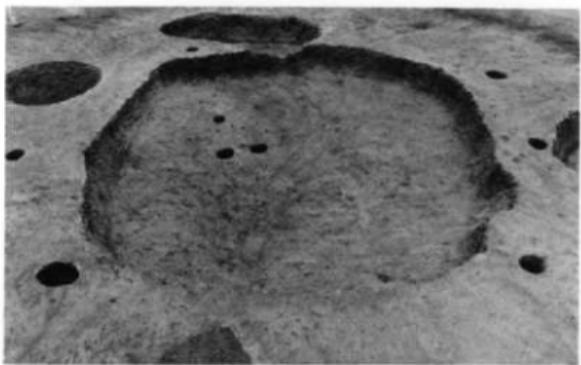


発掘調査風景

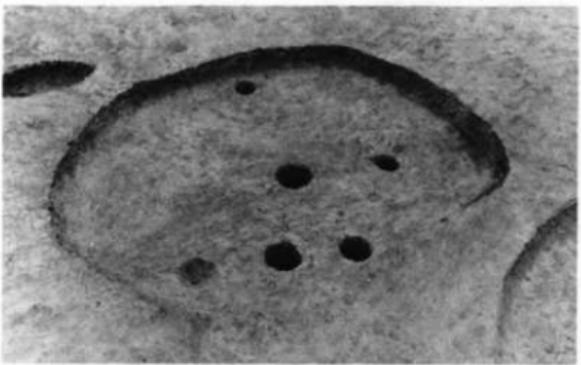
調査前全景・調査風景



第1号住居跡

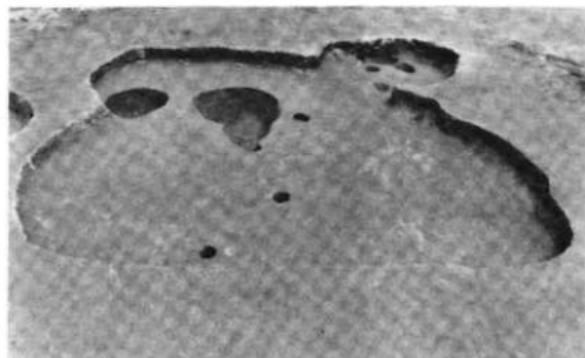


第7号住居跡

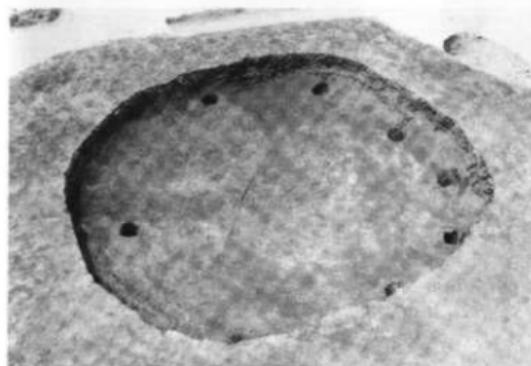


第8号住居跡

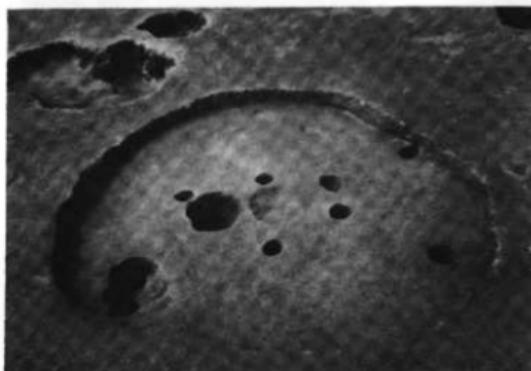
住居跡全景



第9号住居跡



第11号住居跡

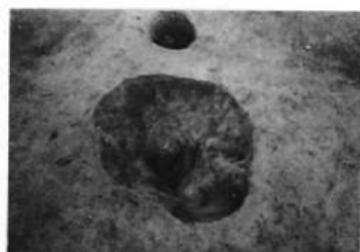


第12号住居跡

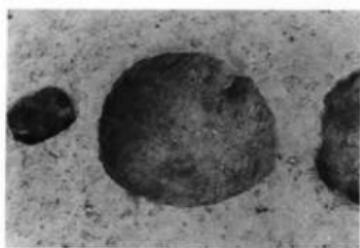
住居跡全景



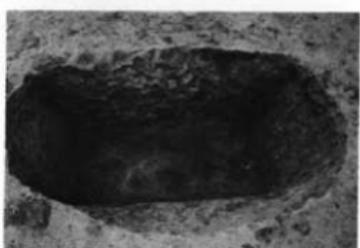
第4号土壤



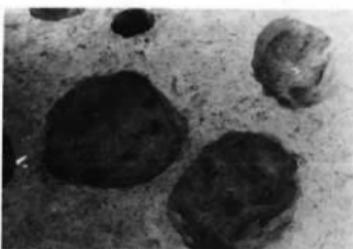
第43号土壤



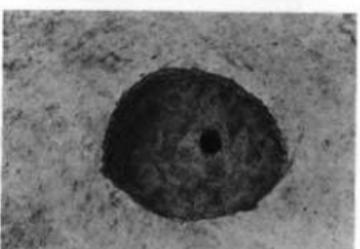
第7号土壤



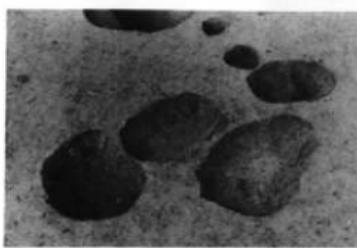
第46号土壤



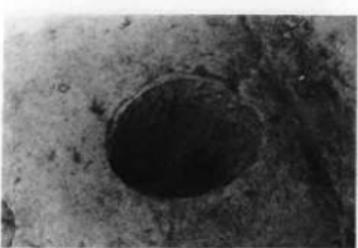
第8·9·10号土壤



第47号土壤

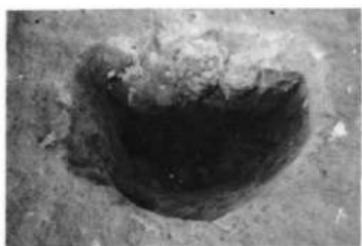


第20·21·22·28号土壤

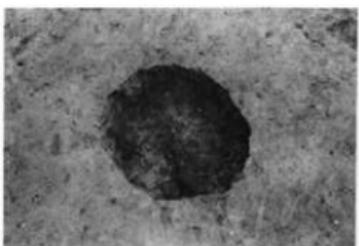


第50号土壤

土壤全景



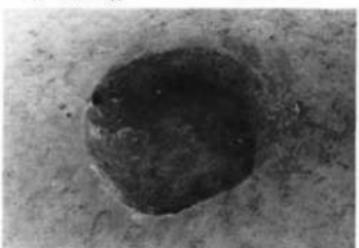
第52号土壤



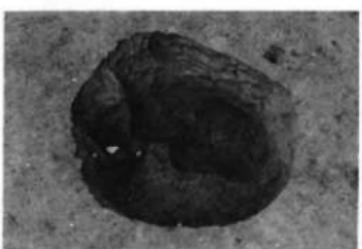
第75号土壤



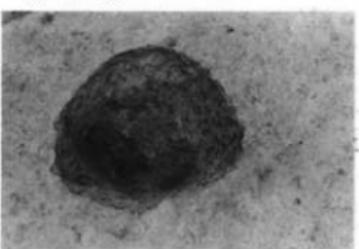
第64号土壤



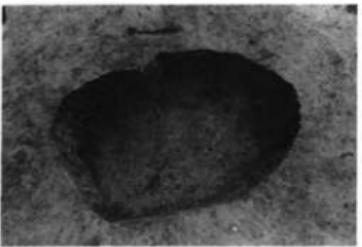
第77号土壤



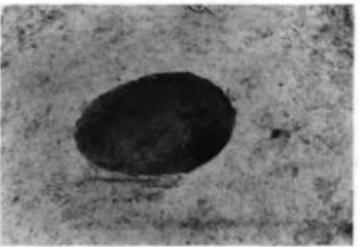
第68号土壤



第78号土壤



第72号土壤

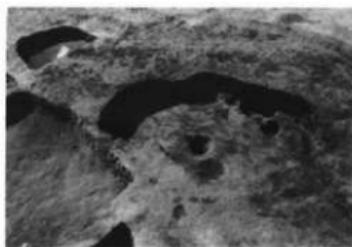


第88号土壤

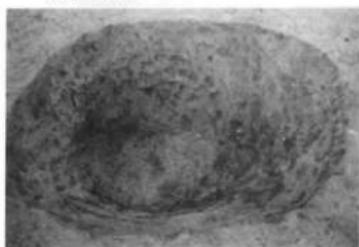
土壤全景



第99号土壤



第124号土壤



第101号土壤



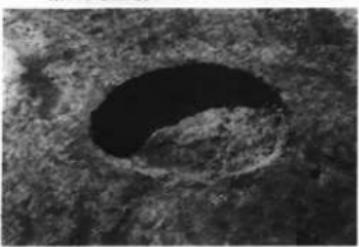
第125号土壤



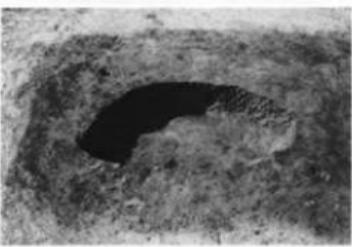
第115号土壤



第127号土壤

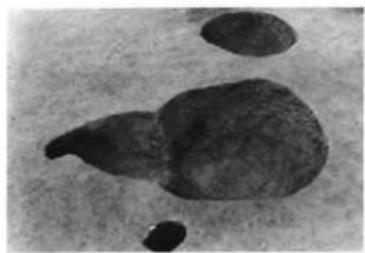


第122号土壤

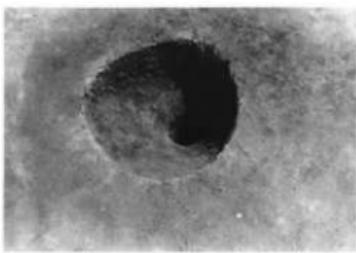


第129号土壤

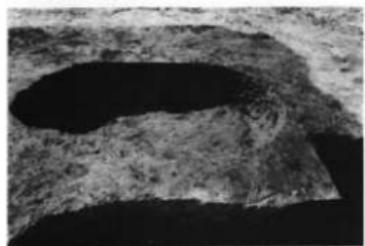
土壤全景



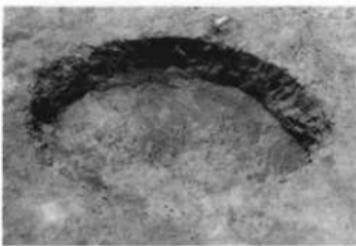
第130号土壤



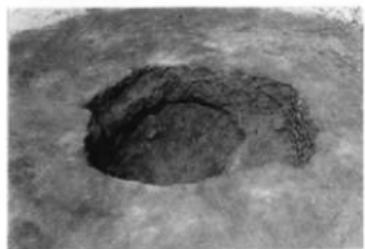
第155号土壤



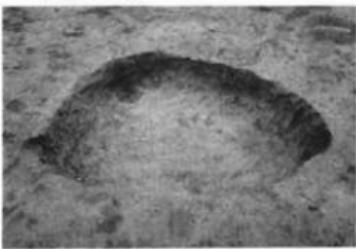
第132号土壤



第158号土壤



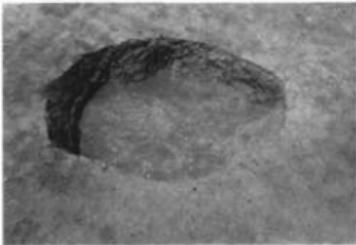
第133号土壤



第165号土壤

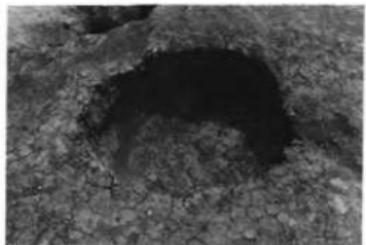


第140号土壤

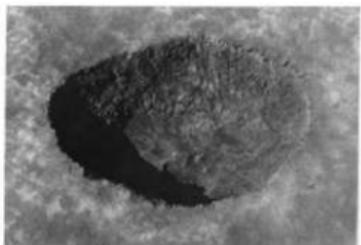


第166号土壤

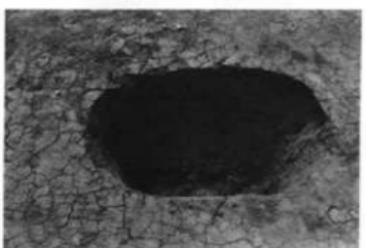
土壤全景



第197号土壤



第206号土壤



第198号土壤



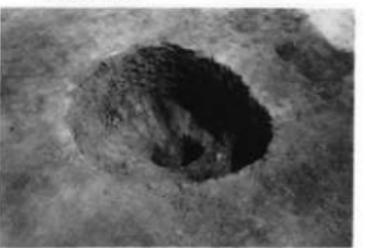
第217号土壤



第200号土壤



第220号土壤

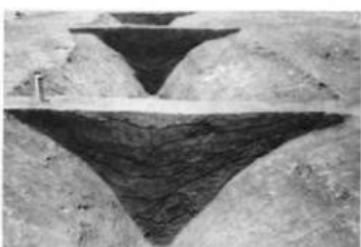


第203号土壤

土壤全景



第222号土壤



第1号堀土層断面



第229号土壤



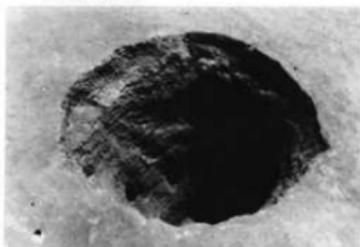
第1号堀



第236号土壤



発掘調査後全景

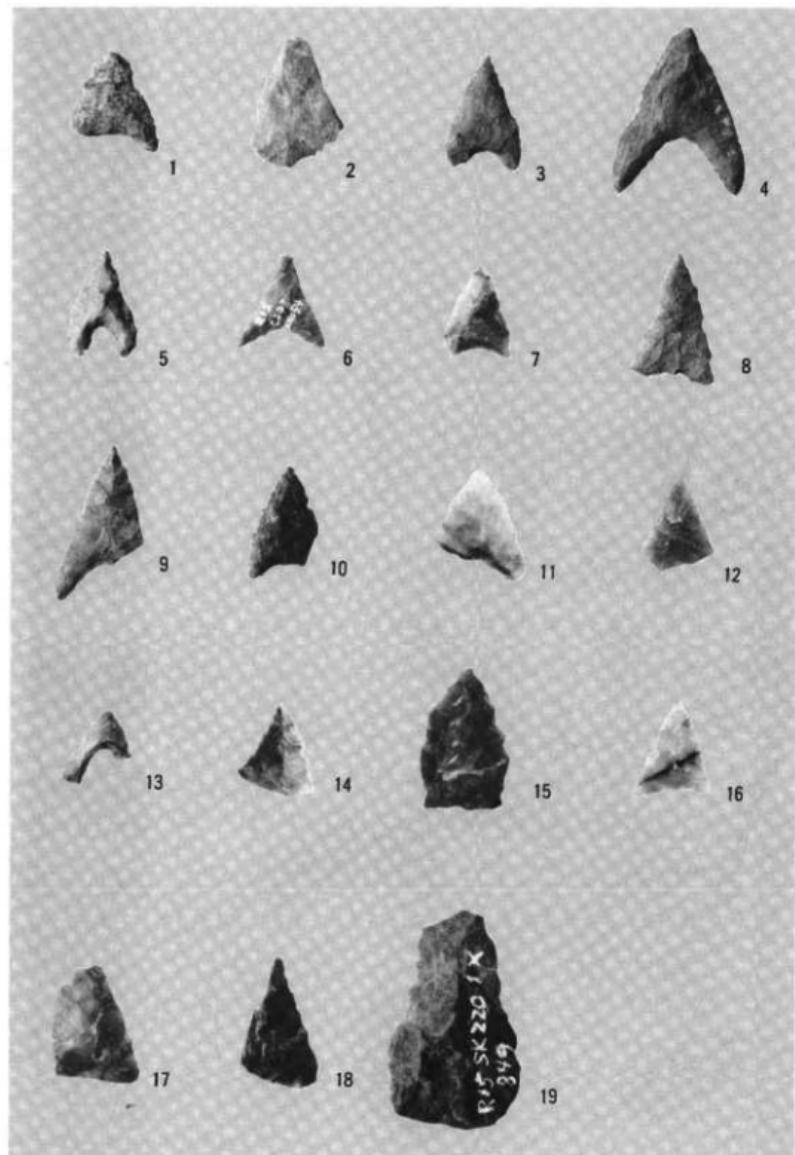


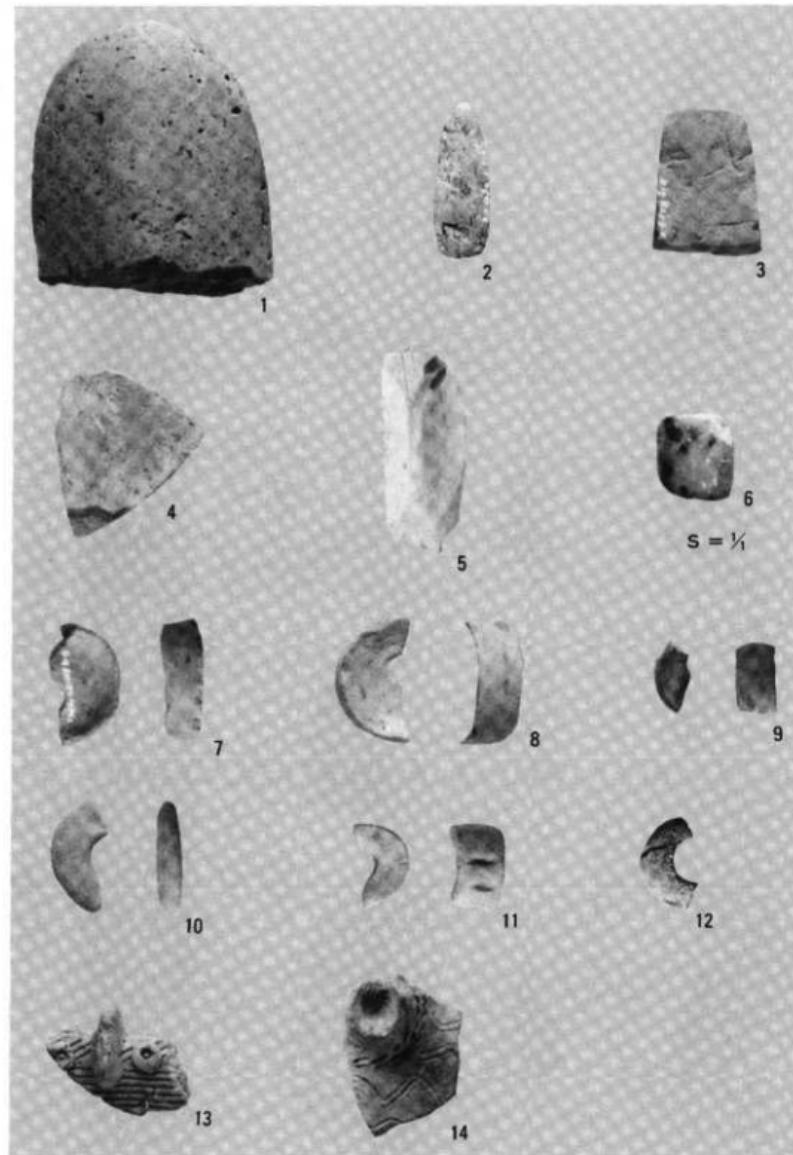
第238号土壤

土壤全景・堀全景・調査後全景



溝・堀出土土器 1・2・4は S = ¼ その他は S = ½





茨城県教育財団文化財調査報告第25集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財発掘調査報告書 9

仲根台B遺跡

町田遺跡

昭和59年3月24日印刷

昭和59年3月31日発行

発行 財團法人 茨城県教育財団

水戸市南町3丁目4番57号

印刷 富士オフセット印刷(株)

水戸市根本3丁目1534-2